
宝剣道中

紫神川悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝剣道中

【Nコード】

N4819I

【作者名】

紫神川悠

【あらすじ】

『妖かしを退治せし者、退治する品を広く募集する』ホウ王のおふれがホウ大国全土に広まる中、一人の鍛冶屋が刀を打った。師の刀『雪割り』を献上する為、鍛冶屋見習いタイコウの旅が今始まる。
『中華風幻想英雄譚』

前口上

今は昔……

と言ってみたが、群雄割拠の時代を駆け抜けた英雄達がホウ大国を築き上げるよりは後の話になる。

安寧と平穩の中にあつたホウ大国に、突如として現れた妖魔達が牙を剥き、爪を立てた。

時のホウ王は妖を討つ者、魔を祓う宝具を呼び集め迫り来る妖魔達に対抗しようと試みる。

その中の一人に、彼はいた。

妖魔達を相手に、一振りの刀を振りかざし勇敢に戦つた隻眼の英雄……。

> i 2 6 7 7 5 — 3 4 8 2 <

この物語はその英雄譚……

の元となつた、彼の仲間である一人の鍛冶屋の本当の御話。

> i 2 6 7 7 6 — 3 4 8 2 <

前口上（後書き）

月一ペースの連載になると思います。気長に読んでいただければ幸いです、楽しんでいただければ、尚幸いです。

あと、各章のあとがきを次章の予告に使わせていただきます。すみません、次回予告というのをやってみたかったので。

序章 宝剣誕生

今は昔、大陸の東半分を占めるホウ大国。その西方にそびえる大山の中腹を切り開いて作られた村、レイホウ。春を間近に控えた雪の残るこの山村に、金属を打ち鳴らす音が響き渡っていた。

一定の間隔をおいて鳴っていた金属音が止んだのは、太陽が顔を出して朝靄を消し始めた頃のこと。

音の出所である煉瓦造りの小屋の木戸が開き、中から一人の青年が姿を現す。

朝日を眩しそうに見る彼。その整った顔も、肩まで伸びた黒髪も、髪を隠す頭巾も、だぶついた作業着も、全てすすけていた。

青年の顔からは徹夜明けの疲労感が見て取れたが、その瞳は疲労を忘れていたかのような昂ぶりがあった。

「ほう、こいつは今日も良い天気になりそうじゃないか」

青年に続いて小屋からひよっこり顔を出した老人が、朝日に照らされる軒並みを眺めながら満足そうに頷く。

老いを感じさせない鋭い眼光。顔に深く刻まれた皺。青年の隣に立ち、朝日に堂々と向き合っているこの老人。一目見ただけで只者ではないと思わせる雰囲気を持つ彼も、青年と同じような服装で、青年と同じようにすすけていた。

「お疲れ様でした、先生」

そう言って穏やかな微笑を向ける青年に対し、老人はまだまだ元気そうな顔で力力と笑い返す。

「徹夜仕事は老いぼれには堪えるわい。すまんが茶を淹れてくれんか、タイコウ」

首をコキコキと鳴らしながら言う老人に、青年タイコウは頷いて小屋の隣にある一軒家に向かった。

タイコウが茶器を乗せた盆を持って戻った頃には朝靄も取り払われていた。

> i 2 8 4 3 8 — 3 4 8 2 <

暖かな日差しが射す中、地面にあぐらをかいて村の朝の情景を眺めていた老人。組んだ足の上には、彼の飼う鶏カンソが朝陽の中で心地良さそうに丸まっている。

「鶏は朝鳴くのが仕事だろうに……」

「主人が夜通し起きておったのだ。目覚めを知らせることも無いと思つとるんだろう」

一向に鳴く様子の無いカンソに呆れるタイコウ。彼から湯飲みを受け取った老人は、そう言い返すと茶を半分ほど飲んで息をついた。

「……雪割りて新芽吹き、桃花咲き溢れる」

「なんです？」

物思いにふけっていた老人が中空を見据えながら告げた言葉に、タイコウは意味がわからず問い返していた。

「いや、こいつに名を付けてやりたくなつてな」

そう言うと、老人は隣に置かれた布切れに視線を向けた。

布の上には一振りの刀があった。刀と言っても、鞘はおろか柄も無く刀身だけ。

これが小屋で金属音を発していた音の主。鍛冶屋の工房であるこの小屋で、一番長く音を奏でていたであろう代物である。

タイコウも老人ごしに今朝打ち上がったばかりの刀を覗き込む。

「それで、カチ割りて白目剥き豆腐湧き溢れるという名ですか。長くありません？」

「雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れる。なにもそのまま名前にしようってんじゃない。この刃が生み出された理由。そしてその先に何が生まれる事を望むか。それを口にしたまでだよ」

老人の言葉に、彼はその刀身を作り上げるに至ったきっかけを思い出す。

今、ホウ大国の首都コウランでは魑魅魍魎の類が出回り、コウランの人々は恐慌状態に陥る寸前だという。そこでホウ王は国土中から妖魔を討つ者、破邪の品々といったものをコウランに集めようとした。

しかし、残念ながら退魔士、破邪の品とは名ばかりのモノも多く、悪鬼羅刹を打ち滅ぼすには未だに数が足りない。

そこでタイコウの師、オウシユウも鍛冶屋として一肌脱ぐ事を決意したのだ。

「コウランの、ひいてはホウ大国に再び安寧を生み出す礎となるべき刃。ならば、コイツの名は『雪割り』だな」

鍛冶屋の老人オウシユウは、打ち上げた刀身に話しかけるかのように名を告げた。

確かに師匠オウシユウの作る包丁、鎌、鋏といったものは良く切れて使いやすいと評判で、他所からも買い求めにやってくることもある。

しかし、タイコウはオウシユウが武具の類を作ったところを一度も見たことが無い。

「はたして、この刀が破魔の一撃を放つのだろうか……」

知らず口に使っていたタイコウの言葉にオウシユウが力かと笑う。

「そうならなかった時は、このオウシユウ。名を捨て、槌も捨てて日を避けて生きていく事になるわ」

「そんな。槌を捨てるなどと、縁起でもない事を言わないで下さいよ、先生。先生は墓の中にまで槌を持っていくと言っておられたではないですか」

「ふむ、そうだったかな……」

「冗談半分の言葉に真面目に答える青年に、少し困ったような顔をするオウシュウ。」

「まあ、その儂が分身とも言える槌を捨てる覚悟で打ち上げた刀ということよ。この刃には儂の魂が込められている。魔を討ち払う意思を込めた代物。それで切れぬというなら、今まで揮っていた儂の技量はその程度のものということだ。そうなれば、恥をさらしてまで鍛冶屋など続けられやせんわい」

老人は刀身から自分の手へと視線を移す。長年槌を握ってきたその手はゴツゴツとして掌にはタコが出来ている。

「まあ、所詮刀は刀。使う者の腕によるところも大きいが……。さて、タイコウ。こいつを鞘に収めたら、おまえさんにはコウランまで行ってもらっぞ」

「へ？」

カンソを抱いて立ち上がったオウシュウの言葉にタイコウが問い返す。

「そりゃ、そうだろう。コウランの混乱を収めるために雪割りを作ったのだ。コウランに持っていかなでどうする」

呆れた顔をするオウシュウに、青年はそういつことではないと首を振った。

「僕だけですか？ 先生は？」

「おいおい、おまえはこの老体に長旅をさせる気か？ そもそも、うちには二人分の旅費などありやせんよ」

オウシユウを老人と呼ぶには元氣すぎる気もするが、旅費という面ではタイコウも納得がいく。いくら腕がいい鍛冶屋と言っても生活に余裕らしい余裕は無い。

「この雪割りが高く評価されれば、ホウ王も儂を放つてはおかぬだろつよ。そうすれば儂とカンソは従者付きでのんびりとコウランまで向かえるだろつさ。うむ、楽しみだわい。吉報を待っておるぞ、タイコウ」

そう言うつと高笑いしながらタイコウの背を張り飛ばした。その音に驚いたのか、師に抱かれたカンソが天を向いて高らかに鳴いた。

それが、タイコウの旅立ちの合図だった。

序章 宝剣誕生（後書き）

～次回予告、タイコウ語り～

雪割りを献上する為、首都のコウランへ。

旅慣れない僕は雨の降る森の中で、道に迷いました。

雨から逃げるように入った古寺にいたのはお爺さん。

お爺さんは鉄冠子と名乗り、僕に錫杖魯智を譲り何処かへと去りました。

そして、その夜。

古寺に忍び寄る音。

僕は初めて化け物と対峙する事になりました。

雪割り封印、魯智解禁。 人生初の退治劇。

生死をかけて只今出陣。 生きながらえれば万々歳。

負ければ必死の真剣勝負。

次回『一章 錫杖老師』にごつご期待。

第一章 錫杖老師 壺

故郷レイホウから旅立って三日。首都のコウランはまだまだ遠い。

タイコウは雨の雑木林の中で迷っていた。

「参ったな。日が暮れるまでには、どこか宿を見つけておきたかったのに……」

夕方になって勢いよく降り出した雨。それまで林道を歩いていたタイコウ。林の中の方が雨をしのげるかもしれないと、道を外れて鬱蒼と生い茂る木々の中に飛び込んだのが災いした。

小粒の雨に視界を遮られる事は無くなったが、木々の集めた雨粒が大粒になって振ってくるため、衣服の濡れ方は大差無い。おまけに見渡す限り続く雑木林に、自分が向いている方位も分からなくなる始末。

今日一日で次の村に辿り着く予定だったのだが、道の長さを見誤ったらしく未だに民家らしき影も無い。

一年の大半をレイホウで過ごしているタイコウは、お世辞にも旅慣れているとは言えなかった。

(このままだと野宿か……)

初めての野宿というのも興味が無いわけでは無かったが、雨の中、それも野犬、狼、熊に虎、果てには化け物までが出てきて人を襲う御時世。そんな危なっかしい場所で眠りこけたら、風邪を引くだけ

ではすまないかもしれない。

「なんとか一晩しのげる場所を探さないと、このままじゃ濡れ鼠だ」
肩にかけた荷袋を背負い直すと、袋に収まりきららずに顔を出している刀の柄が揺れる。

タイコウの師匠オウシユウの作った刀、雪割り。この刀を首都に届けるという事こそが旅の目的。タイコウはそれを思い出すと、ぐずぐずしていられないとばかりに元来た林道を探して走り出した。

振り出した雨は止む気配が無い。

(雨宿り……屋根のあるところ……屋根じゃなくても……雨がしのげる……大きな木なんかがあれば……)

走り続けて息が荒い。

周囲を見回しながらひたすら走るタイコウ。木々の緑、土の茶色が占領する視界の隅を、周りとは違う色がかすめた。

「何かある!」

木々の隙間から一瞬見えた何かを探るべく、走っていた足を止める。

急停止した拍子にぬかるみに足を取られて転びそうになったが、なんとか堪えて見付けた何かへと視線を向けた。

木々と雨の中に見え隠れするのは、黄土のレンガと朱色の屋根を

持つ建物。

タイコウはそこに向かって駆け出した。

「ふう……助かった」

軒先で立ち止まると、乱れた息と鼓動を落ち着かせていく。

「ここは、どこ、だ？」

一度大きく深呼吸し、荷袋を背負い直すと周りを見回した。

駆け込む際に見た建物の全体は平屋建て。壁は黄土のレンガ。艶の無い朱色の屋根。改めてよく見れば、壁や屋根からは草が生えている箇所がある。

腐りかけの軋む木戸を開け、暗い屋内を覗いてみた。

建物の中にはこれといった日用品は見当たらず、人の生活しているようには感じられない。

「廃屋、なのかな？」

あちこち眺めながら廃屋に入るタイコウ。踏み入るたびに足元で埃が舞う。

廃屋の中の暗さに目が慣れてくると、石畳の床には本当に何も転がっていないのが見て取れた。唯一、奥の壁に掛け軸らしき物が下がっている。

荷袋からランプを引っ張り出して火をともす。

「……紫龍」

ランプの光をかざした先、薄汚れた掛け軸には一体の龍が描かれていた。

この世界の創造主と呼ばれ、ホウ大国で一番崇拜されている神格の龍。

無論、タイコウも紫龍は知っている。もっとも信心の薄い彼が知っているのは、この紫龍と師匠オウシユウが崇める鍛冶の神、府玄だけなのだ。

「元は、社か何かだったのかな？」

ランプを掲げ、改めて部屋を見回す。

タイコウの濡れた靴が一本の道を作っている以外は、これといったものは無い。開けっ放しの木戸の外にはランプの光が届かず、すっかり暗くなつた漆黒の空間に雨音だけが響いていた。

「フェックシユ！」

雨音に包まれた廃屋の中で、不意に生まれたクシャミの声。

驚いて取り落としそうになったランプをかるうじて捕まえると、その明かりを声のした方へと向ける。

「な、な……」

照らした先にいたのは、一人の老人。

禿げ上がった頭と、それに反比例するかのように豊かな白髭。長く延びた白眉に目元は隠れ、顔に刻まれた皺はタイコウの師オウシユウと違って柔和な印象を与えていた。

誰もいなかったはずなのに。

驚きに声が出ないタイコウ。彼の持つランプに照らされた老人は、ズズツと鼻をすすり上げた。

「おお、驚かせてしまったようじゃのお」

取り乱すタイコウを見て、老人はフオッフオツと呑気に笑う。

「あ、いえ、こちらこそすみません。勝手に上がりこんでしまった。道中雨に降られて森の中に逃げたら、出られなくなってしまったのです。その時、ここを見つけたもので、ここには誰もいないものと勝手に思いこんでしまって……」

謝ろうとするタイコウを、老人は手をかざして制した。

「いや、気にせんでくれ。確かに、この廃寺には誰もおらぬよ。ワシもおまえさんと……」

「……あなたも僕と？」

老人の言葉をなぞり、話の続きを促すタイコウ。対する老人は…

…。

「フェックシュ！」

クシャミと同時に老人の白髭が揺れた。

タイコウは木戸を開けっ放しにしていたことを思い出し、慌てて閉めた。

「おお、すまんの。どうも雨に冷えたらしいわい。つまりところ、ワシもおまえさんと同じで雨に振られてここに逃げ込んだんじゃ」

「そうだったんですか。お爺さんは、この辺りの方で？」

「うんにゃ、ずっと遠くから来たんじゃよ。おお、名乗るのをすっかり忘れておったわ。ワシは鉄冠子と言う。いや、呼ばれておる」

言い直した意味を図りかね、タイコウは小首を傾げる。

「あだ名じゃよ。本名はどこかに置いてきてしまったのか、はたまた誰かが持って行ってしまったのか。ワシにも思い出せん」

言つとフオフオと笑う。

名乗りたくないのか、はたまた本気で忘れているのか。タイコウには呑気に笑うこの老人から、それを計り知ることにはできない。

「僕の名はタイコウといいます。ここより西方の山村レイホウで鍛冶屋を営んでいるオウシュウ先生の弟子です」

タイコウの名乗りに、鉄冠子と名乗る老人が白眉を上げた。細い

目が僅かに覗き、その瞳には興味の色が映っていた。

「ほう、鍛冶屋か……」

「はい。あ、いえ、僕自身はまだまだ見習の身で、鍛冶屋を名乗るほどの大した技量もあるわけじゃないんですけど」

タイコウは鉄冠子の興味の色を払い飛ばさんばかりに、パタパタと手を振って自分が見習であることを強調した。

もし、何か作ってくれと言われたら困る。

師匠の下で腕を磨いてきたのだ。全く自信が無いというわけではない。それに、師匠に並ぶほどの技量を持つとうと思えば、槌を振るい経験を積むより無い。

それを考えれば、槌を振るう場所にこだわる気は無い。必要な道具さえ揃えば、この場でやったって構わないぐらいだ。

だが、今はいけない。大事な旅の途中だ。時間を費やすべきではない。

「いやなに、おまえさんの持っていた袋から顔を出している物が気になっての……」

タイコウの胸中を知ってか知らずか、鉄冠子は衣から皺だらけの手を出すと、彼の荷袋から出ている刀を指差した。

「タイコウ、おまえさんは屈強とは言わんが体軀は悪くないようじやし、最初は旅の浪人か何かかと思っておった。しかし、おまえさ

んの刀なら帯刀しているだろうし、飾り物にしては随分と簡素な作りをしている。はて、この刀とおまえさんは如何な関係かと……」

「ああ、雪割りが気になっただんですか」

老人の興味の矛先に納得すると、タイコウは石畳の床に置きっぱなしにしていた荷袋を拾い上げる。

「雪割り……その刀の名か？」

問う老人に向かって頷いたタイコウ。ランプを挟んで老人の対面に座り込んだ。

「はい。雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れる。僕の師匠、オウシユウ先生がそう願って付けた名前です」

「カチ割りて白目剥き豆腐湧き溢れる？」

「雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れる」

どこか聞き覚えのある間違いに、苦笑いしつつ訂正。

「雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れる……ふむ、その雪というのは首都コウランに降り積もっているということかの」

「ええ、そういうことです。この刀は、コウランに出没する魑魅魍魎を倒すために献上します。僕はその旅の途中なんですよ」

言ってボンと雪割りの柄を軽く叩くタイコウ。鉄冠子は彼に叩かれていた刀を興味深げに眺めながら、豊かな白髭をじろいっている。

「なるほど、おまえさんの師オウシユウ殿と言ったか。大した御仁のようじゃな。これは立派な刀じゃわい」

「……あの、お爺さん。鞘から抜いてもいないのにわかるものなんですか？」

ひよっとして、この老人はボケているのではないだろうか。

訝しげに尋ねるタイコウの方を、鉄冠子は片眉を上げて見る。

「切れるかどうかは試してみねばわからぬよ。この刀がなにかしらの力を持っている事ならわかるがの。タイコウ、おまえさんは疑っておるようじゃが……」

タイコウは最後の言葉にドキリとした。

「な、な……」

「ふむ、凶星のようじゃのお」

タイコウの正直な反応にフオフオと笑う。

「鉄冠子。あなたはいつたい……」

タイコウのその問いかけには、明らかに警戒の色があった。

思えば、部屋に入った時にこの老人に気が付かなかったのは、気が付かなかったのではなく、やはり最初は部屋におらず湧いて出たのではないか。

自分自身は半信半疑ではあるが、雪割りを力のある特別な刀と言ったのけたのは、それが本当にわかるからではないか。

そして、なぜ雪割りの力を見抜き興味を持つか。それは自分が警戒すべきものだから。もしそうだとしたら、この老人は……。

雪割りの入った荷袋を庇うように抱える青年の様子に、鉄冠子はさらにフオフオと笑う。

「そんなに怯えんでもええ。ワシはただの勘のいい爺じゃ。歳を取るとのお。色々見えにくくなるモノがあるが、見えるようになるモノも少しはあるんじゃよ」

さらりと言うが、無論タイコウが警戒を解く事は無かった。

「まあ、見ず知らずの者に言われても、そうそうは信じられんじやろうが……」

困った顔で白髭をしごく鉄冠子。対するタイコウは、いざとなればいつでも逃げ出せるように少しずつ老人と距離を開け始めていた。

「そうじゃのお。どうすればおまえさんがワシを信じるようになるか……」

老人が考え込み首を捻る。視線がそれたその瞬間を見計らって、タイコウは荷袋を抱えて上げて腰を浮かせた。もちろん、この怪しげな老人から逃げるため。

だが、その試みは出口に向かって走り出す前に中断させられた。

タイコウの踏み出した足が何かを踏みつけたかと思うと、見事に足を滑らせ尻餅をついた。

> i29730 — 3482 <

「おお、そういうば杖を置いたままじゃったわい。すっかり忘れておった」

打ち付けた尻をさするタイコウを見て、またも鉄冠子がフオッフオツと笑う。

「杖？」

タイコウの手には老人の言う杖があった。転んだ時、床につこうとした手の下に滑り込んだらしい。

そんなバカな、だ。

タイコウがこの廃寺に入って中を見回した時には、壁に掛け軸がぶら下がっていただけで、他には何も転がっていないかつたはずだ。

(このお爺さん、怪しすぎる)

改めて逃げ出そうとするタイコウを鉄冠子が呼び止めた。

「タイコウ。ワシがおまえさんに何か悪事をするとしたら、当の昔にやっておったと思わぬか？ そうでなければ、おまえさんはそつやって逃げ出せるほどに元気でもおられぬのではないかの？」

その問いに対する答えを探すタイコウ。半開きにした木戸に手を
ついたまま膠着し、少しの間が流れた。

「フェックシユ！」

背後で再び聞こえたクシャミに、タイコウはもう一度木戸を閉め
なおした。

「いったいあなたは何者なんですか？」

「ワシは鉄冠子というあだ名の爺じゃ」

「それは、名乗る気は無いということですね……」

「鉄冠子と名乗っ取るじゃろうに」

疑いの姿勢を崩さないタイコウに困ったように言い返す。

「本当の名を名乗る気は無いのですね」

「本名はどこに置いてきたものか、はたまた誰かが持って行ってし
まったものか……」

「やっぱり言いたくないんですね」

「やれやれ、ここまで疑いを晴らさぬとは頑固なヤツじゃ。タイコ
ウ、頑固過ぎる男は嫌われるぞい」

「信じる要素が少ないと言いたいんです」

「本名を名乗ったとして、おまえさんはその名を信じるかね。もつとも、ワシ自身忘れておるがの。はてさてどこに置いてきたものか、はたまた誰かが持って行ったものか……」

「それはさつきも聞きました」

「もし本名を覚えていて名乗ったとしても、どのみちその様子じゃ信じぬじゃろ」

確かに。

「それにじゃ、タイコウ。さつき言ったが、ワシがおまえさんに悪意があればとうの昔に何かしておる。それこそ、つい今しがた名乗る名乗らないで話しておった間にでものお」

それも、そうかもしれない。

「まあ、確かに怪しいところがあるのは、ワシも認めるわい。じゃがの、タイコウ。おまえさんに害をなす者ではないことも、認めてもらいたいの」

老人の言う事も一理ある。確かにやる事なす事怪しい老人だが、タイコウが何か被害をこうむったわけでもない。

改めて老人とランプを挟んで座る。

「その雪割りも盗みやせんよ」

未だに雪割り入りの荷袋をしっかり抱えている青年を見て笑った。

第一章 錫杖老師 貳

「タイコウ。すまぬが杖を拾ってくれぬか」

言われたタイコウはさつき足を滑らせた杖を掴む。

よく見ればその杖は錫杖だった。錫杖を持ち上げると、先端についた金輪がシャランと軽やかな音を立てる。

「鉄冠子は僧侶でしたか……」

「当たらずとも遠からず、かの」

（どういふことだろう？）

疑問符を頭に浮かべつつ、鉄冠子にわたすべく錫杖を向けた。

しかし、老人はタイコウの持つその錫杖を受け取ろうとしない。

「そいつはおまえさんに譲ろう」

「はい？」

理解しかねて問い返す。

「杖をおまえさんにやると言ったんじゃ、タイコウ。おまえさんの事じゃから、それを貰ったからといって、ワシを信じようとはせんじやるうが……」

「かえって怪しみますよ」

言ってもう一度錫杖を受け取るよう鉄冠子に促すが、彼は首をゆっくり横に振った。

「目に見えぬ力が有るか無いか。それが見えただからとて人でないと決め付けるのは、いささか早計というものじゃ。人の中にも見えてしまう者はおるんじゃないよ。おまえさんにもそれを体験してもらおうと思ってる」

(どづいつことだろづ?)

新たな疑問符を頭に浮かべつつ、鉄冠子の錫杖に視線を向けた。

「試しに雪割りを見てみい」

言われるがまま、錫杖から雪割りへ視線を移していくと……。

「うわぁ!」

タイコウは悲鳴を上げて雪割りの入った荷袋を投げ出した。

雪割りから青白い煙が上がっているのだ。

「どづじゃ、少しは信じる気になったか?」

慌てふためく青年の様子に、さも愉快そうにフォツフォツと笑う老人。

ムツとした表情で鉄冠子を一瞥したタイコウは、改めて荷袋を見

た。

雪割りからは、さっきと変わらず青白い煙が立ち昇っている。刀の柄に手を近づけても熱は無い。思い切つて鞘ごと荷袋から引っぱり出すと、青煙は雪割り全体から上がっていた。

「……………鉄冠子、これは？」

「その刀、雪割りには何かしら力があると言つたじやろう。そして、おまえさんの持つておる錫杖自身も、力を持つておる。邪を討ち、闇を祓う覇気という力をの。蛇の道は蛇とでも言つのかのお。覇気を持つ錫杖は、同じ力を持つている雪割りの気を見抜いた。そして、おまえさんは手にした錫杖を通じて雪割りの覇気を目にする事が……………これ、聞いておるのか、タイコウ？」

鉄冠子のその問いかけさえも、満足に聞こえていないらしい。

タイコウは呆気に取られて雪割りと錫杖を見比べている。

「タイコウ。これ、タイコウ。いつまでも呆けておるでない」

何度か名を呼ばれて我に返る。だが、その表情からは、未だに驚きが消えていない。

「ワシの言つた事をちゃんと聞いておつたのか？」

「つまり、すごい杖とすごい刀つてことですか」

「……………まあ、根本的な部分はおおむね理解したようじゃな」

鉄冠子は一つ溜息をつく。

「さて、そろそろ迎えが来たようじゃ」

ドッコイシヨの掛け声と共に老人が腰を上げる。それに気付いたタイコウは、弾かれたように彼の方を向いた。

「え？ あ、ちょっと鉄冠子。錫杖を」

ヨタヨタと歩き出す鉄冠子に、慌てて手にしている錫杖を渡そうと立ち上がる。だが、鉄冠子は錫杖に見向きもせず木戸に向かって歩いていく。

「おまえさんに譲ると言つとるじゃろうに」

「そんな。見ず知らずの人から、おいそれと物を貰う気はありませんよ。僕は、オウシユウ先生が作ったこの雪割りに不思議な力があるとわかっただけで充分です。この杖はあなたにお返しします」

「やれやれ、しつこい男は嫌われるぞい」

木戸の前に立ったところで鉄冠子は立ち止まって振り向くと、困ったようにタイコウに言った。

「しかしですね。こんな大そうな物を受け取るのは、さすがに……」

タイコウの言葉はそこで詰まった。

鉄冠子が言っていた迎えの者が木戸を開けたのだ。

もちろん、それ自体に言葉の詰まる理由は無い。問題は開けた者の風貌だった。

「鉄冠子。お迎えに上がりました」

そう言ったのは迎えその一の人物。やたらと背が高く、細身の体を漆黒の装束で包んだ男だった。戸を越える上背の為、木戸の前に立つ老人に向かって片膝をついたその時まで彼の顔は見えなかった。淡々と話す口調、白い肌、細長い目、どれをとっても冷たい印象を受ける。彼の冷やかな雰囲気はタイコウの口がこわばったらしい。

「表に馬車の容易が出来ており……そちらの方は？」

鉄冠子に尋ねたのが迎えその二の人物。膝元まである長い黒髪を持つ女性だ。深紅の装束を着た彼女は、黒装束男と同様片膝をつきながら美しい顔をタイコウに向ける。彼女の美貌にタイコウの声が詰まったらしい。

「カンジユ、シェンリー、二人ともお迎え御苦労じゃったな。この者はタイコウという。ここで雨宿りする間に知り合ったんじゃよ。これがまあ、実に疑り深い男のお」

「鉄冠子。雨の中を、馬車で待っているシェンコウまで風邪がひきます。お早く」

タイコウの紹介もそこそこに、カンジユと呼ばれた男が鉄冠子を急かす。

「わかっておるわい」

カンジユとかいう人の話だとうやら迎えその三もいるらしいな、などとぼんやり考えているタイコウの注意を引くように鉄冠子が咳払いを一つ。

「タイコウ、悪鬼邪妖はおまえさんが向かうコウランだけに現れておるわけではないぞ。木陰、岩陰、人影と闇を渡ってこのホウ大国にどんどん広がり、それこそ今こうしてワシらが話しておるこの地にまで広がっておるのじゃ。おまえさんの持つ雪割りがそれらを断ち切り、再び平穩の世になることをワシも願っておるよ」

老人の言葉にただ無言で頷く。

「魯智はおまえさんが無事にコウランに辿り着くための、言わば餞別じゃな」

「鉄冠子……」

再度急かすカンジユの声に、老人が大げさに溜息をついて見せた。

「わかっておると言うに。やれやれ、せっかちな男は嫌われるぞい」

ブツブツと文句を言いながら歩き出す鉄冠子。迎えのカンジユとシェンリーも、タイコウに一礼すると老人に続いた。

この廃屋に雨宿りに駆け込んでからの急展開に頭が追いつかず、しばらくぼんやりとしていたタイコウ。我に返ると廃屋を飛び出し馬車に向かう老人を呼んだ。

「鉄冠子。魯智ってなんのことですか？」

雨の中立ち止まった老人は、振り返ってタイコウの手元を指差す。

「ワシの……いや、おまえさんの持つておる杖の……名……フェックシュ！ 名じゃよ」

「さあ馬車へ、お風邪をひかれますよ」

カンジユとシェンリーに促され、鉄冠子は再びヨタヨタと歩き出した。

「魯智……」

右手の中にある錫杖に視線を落とす。少し持ち上げた拍子に金輪が揺れ、シャランという軽い金属音が雨音の中に響き渡った。

なんの変哲も無さそうな錫杖と、左手には今もなお青白い煙を上げている雪割り。

しばしばんやりと左右の手の中の物を見比べていたが、ふと思いついた事を言おうと顔を上げた。

「鉄冠子、僕もその馬車に乗せてはもらえませんか。どこか民家のあるところまで構いませんから……」

言うてから、もう目の前には誰もいない事に気がついた。雨音に消されたのか馬車の走る音さえ聞こえない。

「遅かった……か。仕方がない。今日はこのままここに厄介になるか」

振り返って廃寺を眺めると一つ溜息。それから改めて雨から逃げるように、その中へと駆け込んだ。

老人がどこかへと行ってしまった今、寺の中は本当に誰もいない。置いてけぼりをくったタイコウのランプが、ただ黙々と周囲を照らすのみ。

「フェッククシユ！」

今度のクシャミは、間違い無くタイコウのものだった。

クシャミが出るのも無理は無い。鉄冠子との遭遇で、濡れた服を乾かす事もすっかり忘れたままだったのだ。

タイコウは魯智と雪割りを壁に立てかけると、濡れた上着を脱いで魯智にかける。服の下でガチャガチャと鳴る錫杖の金輪が、冷たいと文句を言っているような気がして妙におかしくなった。

「魯智、キミは風邪をひかないだろ。服が乾くまでの間だけ我慢してくれ」

上着越しにポフツと錫杖を叩きつつ言って聞かせ、自分も座り込んで壁に背を預けた。

鉄冠子という老人。知らないうちにそこにいたかと思えば、怪しげな供を連れてどこかに消えた。まったくもって不思議な人だ。

不思議と言えばこの錫杖もだ。鉄冠子が言うところの魯智。最初はドタバタして気が付かなかったが、持った時ほとんど重みを感じなかった。今は上着に隠れて見えないが、金輪の下がっている先端は、随分細かい細工がなされて立派なもの。ひよっとして高価なものではないだろうか。

「今日の雨は、随分と妙なものを振り落としてきたな……」

外では未だに止む事を忘れているかのように、雨が降りつづけている。留まることのない雨音を聞きながら、タイコウは目を閉じた。

不思議な老人との出会いに気が疲れていたのか、目を閉じていると自分が眠りに落ちていくのがよくわかる。

目が覚める頃には、この雨はもう止んでいるだろうか。

思考が途切れる寸前、考えていたのはそんな事だった。

眠りについてから大して時もたたぬうちにタイコウは目を覚める事になった。

全身を襲う寒気。体の内面から滲み出てくる吐き気にも似た不快感。

「……風邪ひいたかな」

そうは思ったがどうにもおかしい。

熱は無いようだし、クシャミ鼻水もなし、喉に痛みがあるわけもない。頭がぼんやりする事も無く、むしろ冴えてさっきまでの眠気もかき消すほどだ。

(風邪じゃない？ いや、むしろ自覚できないぐらい重態とか？)

ずり落ちそうになっている背中を、改めて壁にもたれさせて考える。

ズズツ…………。

不意にどこからともなく響いた音に、タイコウがビクリと体を震わせた。

（何の音だ？）

驚きに固まっている体はそのままに、何も見逃すまい何も聞き逃すまいと、意識を目と耳に集中させる。

目だけ動かして見回した部屋には何も変化は無い。ランプの灯が何も無い部屋を照らしているだけだ。

耳をそばだて周囲の音をかき集める。聞こえてくるのは廃寺の外で未だに止まず降り続けている雨の音、自分の動悸、体を動かした拍子に聞こえるかすかな衣擦れ。

「幻聴まで聞こえてきたとは、これはいよいよもって重態らしいな」
壁から背を離し、床に丸くなって眠り直す体勢に入った。

ズズツ…………ズズツ…………。

再び聞こえた音にタイコウが跳ね起きた。

空耳ではなかった。外から何か引きずるような音が聞こえている。

何か重い物を引きずっている。そんな音だ。心なしか近付いている。

（熊、虎……化け物とか？）

どれにしても襲われるのは勘弁だ。

タイコウはそそくさと魯智に引つ掛けた上着を着直すと、再び外の音に意識を集中させる。

引きずるような音が次第に大きくなる。やはり近付いている。

（どうしよう。何がいるかわからないけど、こんなところで襲われて命を落としている場合じゃないのに……。コウランまで雪割りを届けなきゃいけないんだ。化け物退治の刀を運ぶ僕が、こんなところで化け物にやられるわけには……）

そこまで考えると、弾かれるように視線を移した。

視線の先は荷袋から顔を出している雪割り。

（そうか。雪割りだ！）

謎の老人鉄冠子が言うには、この刀には間違い無く覇気と呼ばれる破邪の力があるのだ。それがどれほどの力なのかはわからないが、化け物にも通用するかもしれない。

外にしているのが化け物じゃなく熊か虎あたりでもこの刀は有効だ。

包丁、鋏の類を作らせたなら国内屈指と称される鍛冶屋オウシュウの

刃物は切れ味がいいのだ。試し切りに大根を切った時も、文句無しだった。

（この状況を乗り切れないようなら、雪割りも所詮その程度の刀。献上したとしても、ただホウ王を嘆かせるだけの、なまくら刀つてことになる）

魯智が見せた雪割りの不思議な青白い気を思い出し、刀の力を信じる事にする。

タイコウは荷袋から雪割りを引き出し、柄に手をかけた。

「……勝手に使ったらオウシュウ先生は怒るだろうか」

ふと迷いが生じたが、廃寺に迫っている音にすぐさまかき消された。

今を生き延びねば、コウランへの道はここで終わってしまう。

そう自分に言い聞かせると、柄を握る手に力を込めた。

「……あれ？」

緊迫した状況にタイコウの場違いに抜けた声が響いた。

気を取り直してもう一度柄を握り……。

「……抜けない」

その言葉とともに、タイコウの体中から冷たい汗が吹き出した。

言葉どおり、雪割りを鞘から引き抜くことができない。

鞘と柄とを握る手に、力を込め直して思い切り引っぱってみるが、彼の望む結果は引き出せない。

「嘘だろ！」

思わず叫んでいた。

いよいよもって引きずる音は近付いてきている。タイコウは渾身の力で柄を引く。

「なんで！ おい、ちょっと！ ホントに危ないんだよ！ 頼むから！」

やはり鞘から抜き出す事が出来ない。

力むうちに止めていた息を溜息に変えて吐き出した瞬間、轟音とともに入り口の木戸が突き破られた。

第一章 錫杖老師 参

「な……！」

木戸を突き破ったモノ。

ランプの薄明かりに照らされたソレを見たタイコウは、驚愕にまた息が止まる。

熊、虎といった猛獣ではない。化け物だとしても、タイコウは猛獣を元にイメージを膨らませていた。だが、目の前にあるのは……。

「木？」

雪割りを掴んだまま固まっていたタイコウは、そのモノの見た目そのものを口にした。

木戸を破壊し廃寺の入り口を塞ぐようにして立っているのは樹木だった。葉のほとんど落ちた一本の枯れ木。

ただ、枝は触手のようにうねり、根も大地に埋まる事無くジワジワと地面を這っているあたりは化け物の証だろう。

「なんてこった。クソ！ 抜けてくれよ！」

目の前にはつきりと出現した木の化け物にさらなる焦りを覚え、必死になって雪割りを抜こうとする。

化け物は木戸を突き破った枝先をタイコウに向けた。今にも飛び

かかろうとしている蛇のように枝が身を竦ませる。

「ちつくしよ……おおっ？」

込めつづけた力と焦りで湧き出た汗に、タイコウの手が滑って柄がすっぱ抜ける。

彼を襲わんと一直線に伸びた化け物の枝先が、バランスを崩したタイコウの頬を掠めて背後の壁に突き刺さった。

頬の切り口から流れ落ちる血の温かさを僅かに感じたが、タイコウには刺し貫かれず生き延びた事を安堵する余裕は無い。すぐに第二、第三の枝が迫ってきている。

「うわあああっ！」

タイコウは叫び声を上げると、滅茶苦茶に鞘ごと雪割りを振り回す。

先ほどまで考えていた雪割りが通用するか、ホウ王に雪割りを献上する云々は、すでにタイコウの頭の中から消え去っていた。今、彼の心にあるのはただ一念。

（まだ死にたくない！）

迫る触手のような枝を二本三本と払いのけるが、それも長くはもたなかった。

横殴りに振られた枝に打ち払われ、跳ね上がったタイコウの体が壁に叩きつけられる。

衝撃に手元の力が抜け、雪割りは宙を舞うと床に転がった。

床に伏したタイコウ。痛みに咳き込みながらも、抵抗すべく起き上がるうとする。

「…………え？」

起き上がるため床に手をついた彼のその指先に、何かが触れた。

そして、その瞬間目の前でうねる触手、いや木の化け物自体が赤みを帯びる。

「…………オクレ…………血ヲオクレ」

タイコウの意識に聞き覚えの無い声が響く。ここまで来て幻聴ではないだろう。

（これって…………）

指先に当たるソレを迷わず掴んだ。

（コイツの名は樹木子。触手のような枝で生物を捕らえ、枝先を突き立てて獲物の血を啜る妖魔）

まるで古くから知っていたかのように、タイコウの頭の中に目の前の化け物についての知識が湧いてきた。

もちろん、タイコウはこんな木の化け物は初めてだ。他の化け物でさえ話に聞いても見た事は無い。

魯智だ。

握り締めた錫杖が彼に教えてくれている。

「ソナタノ血ヲオクレ。温カイ、ソナタノ血ヲオクレ」

聞こえてくるこの声も目の前の化け物、樹木子のものだと魯智は言う。そして、樹木子を包む赤い気配は化け物が放つ邪気である、と。

(枝先は無視。幹に直接攻撃する)

「魯智め。簡単に言ってくれる」

錫杖で触手を払いながら呟いた。

言うのは楽だが実践するのは楽じゃない。タイコウの血を吸おうと、枝が次々に迫ってくるのだ。

「きりが無いな。この部屋の中では逃げ回る範囲だって知れてる。いずれ捕まる」

魯智を握ってから不思議と視界が広がった気がしていた。背後から迫る枝も五感ではない何かで認識できる。だが、それも限界がある。迫る敵がわかってても結局さばくのはタイコウ一人なのだから、手数が増えれば対処しきれない。

しかし、広い外に出ようにも唯一の出入り口は樹木子の巨体で塞がれている。魯智に言わせれば、塞いでいる幹こそが狙うべき目標

なのだが幹は枝を伸ばす本体。一番触手枝の攻撃の激しい部分だ。

(どうしよう？ 思い切って飛び込むか？)

迫る触手枝の一本を魯智で打ち払い目標である幹に視線を延ばす。

その思惑を知ってか知らずか、樹木子は幹が見えなくなるほどの無数の枝をタイコウに向けてくる。

迫る枝の束を舌打ちしながら振り払うタイコウ。その脳裏に危険を知らせる声が聞こえてくる。

(魯智？ …… 左か！)

錫杖から響いたのは金輪の跳ねる音か、その内に潜む何かの声か。タイコウが魯智の声に従うように錫杖を構え、横殴りに襲いかかる枝の一撃をしのぐ。

だが、その一撃は彼が予測した以上の力を持っていた。錫杖魯智を握る両手に堪えきれない衝撃が走り魯智を弾かれる。

幸い錫杖を手放しはしなかったが、止めきれなかった枝に横腹を張り飛ばされた。

「ガッ………!!」

一瞬呼吸が止まる。

床に倒れた彼は、枝に打ち据えられた勢いを借りて二転三転と転

がり、追い討ちとばかりに襲いかかる枝達の突きをかわす。

そこまでは悪くなかったが勢い余って壁に激突。新たな衝撃が背中に走った。

痛みにむせかえるタイコウの心の内。魯智は新たな異変が近いと警告してきた。

それは耳をすませなくても聞こえるほどの音から始まった。

タイコウの逃げ回っている部屋のどこからとも無く響く壁の軋む音。その音がなぜ生まれるか深く考える暇は無かったし、考える必要も無かった。

軋む音はすぐにレンガの壁を破る轟音に変わり、轟音とともに碎けたレンガの間から木の枝が顔を出す。

（枝に囲まれたか……逃げなきゃ。囲みを狭められたらお終いだ）

タイコウは近くに転がっていた鞆を肩にかけると部屋の中を駆け出した。

まず、最初の目標は雪割り。

走る彼の胴を、足を、頭を狙って突き出される枝を、払い、飛び越え、伏せて雪割りの元へ滑りつく。

雪割りを手にした。次の目標は……。

右手に魯智、左手に雪割りを持ち、再びうねる枝の中を走り出す。

「どいてえっ！」

両手を振り回して迫る枝達を牽制しながら向かうのは、枝に突き崩されてできた壁の割れ目。タイコウはその割れ目に飛び込む。

壁の割れ目から外に飛び出した途端、視界が暗くなった。ランプに照らされた部屋の中から鬱蒼と木の生い茂る森の中、ましてや雨雲に月も星も隠れている漆黒の空間に飛び出たのだから無理も無い。

部屋の中を走り回っていたせいもあり、湿気を含んだ外の空気は冷たい。

だが、タイコウに外気の冷たさに身を振るわせる暇は無い。暗さに目が慣れ始め、僅かながら周囲が見えてくると、飛び出したそのままの方向に向かって走った。

走りつくそこに何があるかなど考えてもいない。とにかく背後にいるであろう樹木子から少しでも遠くに逃げ出したかった。

いったいどれほど走ったのか。小枝が体のあちこちにぶつかるのも気にせず、とにかく無我夢中で走った。化け物の容姿からすればそれほど素早くは動けない。そろそろ大丈夫かと足を遅めて振り返った瞬間だった。

魯智からの危険信号と、頬に何かがかすめる感触はほぼ同時だった。

「……………ウソだろ？」

顔の真横に伸びている枝は、魯智が妖魔を知らせる赤い気配を持っている。

その枝一本がタイコウを追ってきたわけではない。タイコウの視線の先には動きが鈍そうだと思っていた樹木子の幹が立っている。

信じられない。タイコウの意識にあったのは、その一言だけだった。目の前で根をもたつかせてズズツと動いているその姿を見て、追いついてくるなどと誰が思うだろう。

(周辺の空気が歪んでいる。樹木子の力でこの一帯に見えない壁が作られていて、どれだけ外に向かって走ろうとも実際は進んでいない。僕は樹木子に閉じ込められた……)

「そういう事は先に言ってくれ……」

魯智からの情報をまとめると、目の前の化け枯れ木から逃げられないということ。樹木子が自分を餌と思っている以上、生き残るには樹木子を倒すしかない。

「ははは。まったく、なんだかともない旅になってきたな」

笑って言う。もつとも、空元気で無理矢理作った笑みだったが。

鞆と雪割りを下ろし、両手で錫杖を構えなおした。小雨振る夜の森に錫杖の鉄輪の音が響く。

タイコウの睨む先、樹木子はしぶとく逃げ回る獲物をどう料理するかという感じで、じわじわと触手枝をめぐらせている。

(向かい合ったはいいが、はてさてどうやって戦ったものか……)

錫杖をかまえたまま困り果てた。さっきと同じでは触手の数に圧倒されてしまう。

ふいに魯智が何か言ったような気がして樹木子からかまえている錫杖に視線をずらす。

「……だから、そういう事は先に言ってくれというのに」

深々と溜息をついてから錫杖の先を樹木子の幹に向ける。

魯智から聞いた言葉を思い出し、一つ大きな深呼吸をすると改めて樹木子を見据えた。

「天を駆けるもの。地を巡るもの。そのもの何処より湧き出で。何処へと流れ行かん。我が身、我が内流るるもの。集いてかの先に赴かん」

言葉を紡ぐうちに、タイコウの体の中で何か不思議な力が昂ぶってくるのがわかる。

見える者が見れば、タイコウが魯智を手にして雪割りを見た時のように、彼の体から青白い気が上っているのがわかるだろう。

力の昂ぶりは彼の身に収まりきらず周囲の大気を巻き込み旋風を起こし、タイコウの服をはためかせる。

タイコウは気の昂ぶりのままに魯智の教えてくれた最後の一節をなぞった。

「我が意思はかの地を指さん。砕破！」

> i 2 9 7 3 1 — 3 4 8 2 <

最後の一言が引き金となり、タイコウの中を駆け巡っていた力が両腕、両手、錫杖の先へと移り、力は青い光を纏った一本の矢と化して打ち出された。

なにやら凄い事が起こりそうな予感はしていたが、予想を上回る事になった。

「うわあっ!」

驚いて気が抜けた拍子に矢が打ち出された反動が両腕を襲い、タイコウはその場で尻餅をつく。

打ち出された青光の矢は樹木子めがけて一直線に飛び、その幹を打ち抜く。木の乾いた音が周囲に響き渡った次の瞬間、樹木子の体に異変が起きた。

矢が貫いてできた幹の穴を中心に枝へ、根へと無数の亀裂が走り、その隙間から青い光が見えたと思っただ途端、樹木子はパシッと木の爆ぜる音を立てて弾け飛んだ。

「……え？ お？ あれ？」

地面にへたり込んだまま、呆気に取られて見ていたタイコウ。彼が周囲の変化に気がつくには少し時間が必要だった。

さつきまで降っていたはずの雨は止み、雨雲の消えた空は真夜中のそれよりいくぶん明るく、東の空の色は朝が近いことを知らせている。

「随分長いこと呆けていたらしいな……」

否。

タイコウの独り言は手元の錫杖によって否定された。

魯智曰く、樹木子がタイコウを捕らえるために作った空間の中では時間の流れが狂っていたらしい。それが樹木子を倒した事で元の状態になったのだと。

「つまり……あいつに喰われずに生き延びられたんだな」

錫杖を地に立て立ち上がろうとする。

だが、彼の足に思うように力が入らず、また地面に尻餅をつくことになってしまった。

「はは……腰が抜けたか」

目の前まで迫った死の予感から開放されたのだから、力が抜けるのも当然と笑うタイコウ。

否。

だが、その意見は、またも錫杖によって否定された。

魯智曰く、樹木子に向けて放った光の矢はタイコウの気そのもの。加減も考えずに行使すれば体中の気が抜けるのは至極当然。

「だから……そういう大事な事は……もっと先に……言えっば」

錫杖でかろうじて支えていた上半身もついに力が抜け、タイコウは地面に倒れ伏すとそのまま気を失った。

第一章 錫杖老師 参（後書き）

〜次回予告、タイコウ語り〜

妖魔樹木子との戦いで、精根尽き果てた僕。

気を失っていたところを救ってくれたのが、行商人リブン一家。

恩返しとして一家の手伝いをする為、小都市カリユウへ向かう事になりました。

いざ、仕事を始めたのですが、リブンの娘リホウが手にしたものは……。

なんとか仕事をやり遂げた僕は、休憩に向かった飯店で喧嘩に巻き込まれます。

そして、そこで出会った一人の青年の背後には……。

飛び交う刃に、轟く悲鳴。安請け合いは御用心。

一難去つてまた一難。飯店揺るがす大喧嘩。

この道行きに安息無し。

次回『第二章 万事喧騒』に乞うご期待。

第二章 万事喧騒 壱

どれほど眠っていたのだろうか。タイコウは全身を揺する不規則な振動で目が覚めた。

目を開けた最初に彼の視界に入ったのは少女のあどけない顔。それ以外は何も目に入らなかった。それぐらい近くで少女がタイコウの顔を覗き込んでいるのだ。

じつとタイコウを見る少女の大きな瞳の中に狼狽する自分の顔が見えた。

どうしたものかわからず動けないタイコウをしばらく見ていた少女は、彼に向かって不意にニカツと笑う。

「おはよー」

「お、おはよ」

無邪気な声に思わず挨拶を返すと、少女は嬉しそうな笑みを浮かべてタイコウから視線を外して立ち上がった。

> i 3 3 5 7 4 — 3 4 8 2 <

「おトさん、おカさん。おニーちゃ、目え覚ましたよお！」

舌足らずな喋り方で少女が言いながら視界から離れる。

「これ。お兄ちゃんは起きたばかりなんだから、そんな大きな声

出したらビックリするだろう」

はしゃぎながらピョンピョンと跳ねる少女を女性が嗜めると、それさえも嬉しいようにエヘへと笑う。

無邪気な視線攻撃から開放されたタイコウは起き上ろうとしたが、力が入らない。仕方なく頭だけ動かして周囲を見回した。

周りは葛籠や木箱で囲まれ、自分が寝ているのは藁の上。荷物の隙間から見える木枠から察するに、どうやら馬車か何かの荷台に乗せられているらしい。

視線をさらに巡らせると、御者台に座る夫婦と彼等の間に身を乗り出して、双方を見比べる少女の後姿があった。

「すまないね。リホウが……ああ、この子の名だけど、リホウが驚かせちゃって」

振り返った母親が荷台のタイコウに謝る。

確かに驚きはした。だが、謝られるほどのことでも無い。

タイコウは「いえ」と否定しようとした。だが、その言葉は喉につっかえたように途切れる。

喉が渴ききってしまったっているようだ。

タイコウは返事する代わりに微笑んで首を振って見せた。

「ほれ、リホウ。ちゃんと謝んなさい」

「じめんなさい」

少女リホウの謝罪にも同様の返事をしてみせると、リホウはまた嬉しそうな笑顔を作ると両親の服を握りながらピョンピョンと跳ねた。

「こらこら、袖を引つ張んなよ、リホウ。そうだ、兄ちゃん。腹は減ってねえかい？」

御者台で手綱を持つ父親が少しタイコウを見て問いかける。

この返事もうまく声に出せず、今度は頷いて見せる。

「おトさんおトさん、お二ーちゃ、お腹空いてるんだって」

すでに手綱に視線を戻している父親に、リホウがタイコウの意思を伝えてくれた。

「だよなあ。あの倒れていた様子じゃあ、腹が減って野垂れ死にする寸前って感じだったものなあ」

「まったく縁起でもない事を言うもんじゃないよ、アンタは」

ガハハと笑う旦那の後ろ頭を、妻がペシツとはたく。

「冗談は置いといて、腹が減ってんなら何か食わなきゃな。リヨウ、確か籠の中に饅頭があっただろ」

「あるにはあるけど、この様子じゃ喉を通らないんじゃないかい？」

リホウ、そこから水飴をお出しよ」

「あい、お力さん」

元気良く返事をする、母親リヨウの指差す木箱へとトトと駆け
た。

木箱の前に立った少女は、自分の背丈ほどもある木箱を相手に苦
戦しつつも「ヨイシヨイシヨ」の掛け声と共になんとか蓋を開け
た。

そして、箱から壺を取り出し、慣れた手つきで棒に水飴を巻きつ
ける。

「おっと、その前に水だったかね」

母親の言葉に、隣に座る父親は周囲をゴソゴソと漁りながらリホ
ウを呼んだ。

父親から渡された竹細工の水筒と水飴をすくった棒を両手に、少
女はタイコウの元に駆け寄る。

「あい、おニーちゃ」

ニコニコと微笑みながら水筒を差し出すリホウ。タイコウは重い
腕を持ち上げると、それを受け取り自分の口元へと運ぶ。

口の中に一気に広がった水筒の水が、枯れていた渴きの記憶さえ
も潤したのか。タイコウの喉は水を欲し、流れ込む水を飲み干して
いく。ただ、彼の喉が砂漠のように渴いていたとは言っても、流れ

込む水量には限界がある。傾けすぎた水筒の水は勢い良く流れ込み、流れどころが悪かったらしくむせ返った。

咳きこむタイコウの様子を見て、父親が再びガハハと笑う。

「喉が渴いているのはわかるが、無茶な飲み方しちやいかんぞ、兄ちゃん」

「ハハハ、アンタに無茶な飲み方を注意されちゃあ、たまんないよ」

「バカ言え、水は水、酒は薬だ。俺は水の飲み方を説いたまでだ」

堂々と言い張る男の後ろ頭を、またもやリヨウがはたく。

「そういう屁理屈をこねるんじゃないよ」

「まったくポンポン叩くなってるんだ。バカになったらどうすんだ」

「叩いてるうちに、そのバカな頭も治るだろうよ」

どうも二人は終始こんな調子らしい。

リホウは二人の言い合いをさして気にも止めず、タイコウが返した水筒を受け取って今度は水飴を手渡す。

潤ったばかりの口の中に入れた水飴はとにかく甘かった。

「ありがとう。えーっと、リホウだったね」

お礼を言ったりリホウはまた嬉しそうに笑い、跳ねるように両親の

もとに駆けた。

「水と水飴、ご馳走様でした。えーっと……」

「俺がリブンでこっちの暴力女が……」

そこまで言いかけたリブンの後ろ頭をリヨウがはたく。

「私は、何の因果かこのバカ亭主の女房をやるはめになったリヨウってんだ」

「ありがとうございます、リブンさん、リヨウさん」

「どういたしまして兄ちゃん。それで、兄ちゃんの名は」

リホウから返してもらった水筒を呷りながら父親リブンが問いかけた。

「タイコウと言います。ああ、そうだ。倒れていたところを助けてもらったお礼も」

「それはリホウに言ってやってちょうだいな。森の中で倒れていたおまえさんを、この子が見つけたんだよ」

リヨウは言々と娘の頭を撫でた。

「助けてくれてありがとう、リホウ」

「どういたしまして」

礼を言うタイコウに、リホウも挨拶を返すとリヨウを見た。

「お力さん、ありがとうって」

「ああ、リホウはいい事したんだよ」

そう言って母親が微笑みリホウの頭を撫でると、リホウは嬉しさに感極まったのか母親にギョツとしがみ付いた。

「それにしても……あー、タイコウだったね。タイコウ、なんでまたあんな森の中に倒れていたんだい？」

「樹木子とかいう木の化け物に襲われてしまいました」

「化け物に？」

リヨウより先に驚いた声を上げたのは父親のリブン。

「化け物に襲われて、よくまあ大した怪我も無く逃げられたもんだ」

「いえ、逃げられなかったです」

「じゃあ、倒したってのかい？」

今度はリヨウが驚きの声を上げる。

「え、ええ」

「こいつは驚いたな。いやな。おまえさんがいたい何者なのかって、さっきまでみんなで悩んでたんだよ。行商人にしちゃあ、持つ

てる荷物が少ない。錫杖を持っているわりには僧侶にや見えない。刀を持っていても、浪人にしては握っている錫杖が不釣合いになるってな。化け物退治をやったのけるってことは、タイコウは道士様だったわけだ」

リブンの言葉に、タイコウは疲労感も忘れてガバツと起き上がった。

「雪割り！」

「ひゃっ！」

いきなりタイコウが大声を出し、リホウが驚いて母親の下に隠れようとした。

「あつと、驚かせてゴメンね、リホウ。リブンさん、雪割りを見ませんでしたか？」

「雪割り……雪割り草のことかい？」

「草はそこいらに生えちゃいるが、生憎と草の名前まではわからねえからなあ」

タイコウの慌てた様子に、リブンとリヨウは顔を見合わせ首を傾げた。

「えつと、そうじゃなくって。雪割りというのは師匠が、雪割りで新芽拭き桃花咲き溢れるという言葉から付けた名で……」

「カチ割りて白目剥き豆腐湧き溢れる？」

言葉をなぞり損ねるリブンに、タイコウは軽く溜息をついた。

「雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れるです。これぐらいの刀なんですけど」

「ああ、あの刀の事かい。その刀なら、あなたの荷物と一緒にそこに置いてあるよ」

リヨウが指差す方向にタイコウの鞆、雪割りと魯智も置かれている。

それを確認して安心したのか、安堵の息とともにタイコウの体の力が抜けて再び藁の中へ倒れこみそうになった。

「良かった」

「随分な心配のしようだね。あの刀はそんなに高価な物なのかい？」

「そりゃあ、大事だろう。化け物を切っちまうような代物なんだからよ」

リヨウの問いに、リブンはさもわかっていると言わんばかりにうんうんと頷く。

「うーん、値段はわかりません。それと、雪割りで切ったわけじゃないので、凄い刀なのかどうかもわかりません」

タイコウがそう答えると、リヨウはリブンの後ろ頭をはたく。

「タイコウはあの刀で化け物を切っちゃいないって言ってるじゃないか。まったく、何が化け物を切っちゃうような代物だい、知ったかぶりして。……切らなかつたのかい？」

信じられないという表情でタイコウに聞き直すりヨウ。

「ええ、はい」

「じゃあ、いったいどうやって化け物退治をしたんだい？」

「魯智の……錫杖の方で」

「こいつは驚いた」

信じられないと魯智の方を見るリヨウの隣でリブンが笑う。

「錫杖で殴り倒しちゃうとは、これはまた豪快だな」

「いえ、殴り倒したわけでもなく」

再びリブンの後ろ頭がペシッと音を立てた。

「早とちりしてんじゃないよ、アンタ。それにしても切ってもいない、殴ってもいない。タイコウ、あんたいったいどうやって化け物を倒したんだい？」

「その……錫杖の先から光る矢が飛んで、それが化け物に当たって」

「おお！ 法力ってヤツかい？ そんな力を使うとは、さっすが道士様だ」

「いや、僕は道士じゃないです」

「この知ったかぶりの早とちり！」

タイコウが目を覚ましてから何度目かのリヨウのビンタがリブンをはたく。

「でも、そんな不思議な力を使ったら道士だと思わなくもないわねえ」

「人の頭叩いてから納得するなよ」

後ろ頭をさするリブンの苦情を無視して、リヨウは話を続ける。

「それで、剣士でも道士でもないのに、化け物を倒しちまうタイコウは何者なんだい？」

「鍛冶屋です……いや、鍛冶屋見習です」

「鍛冶屋？」

「ええ。見習ですが」

「あの鍛冶屋かい？」

「たぶん、その鍛冶屋ですよ」

「お力さん、カジヤってなーに？」

三人のやり取りを聞いていたりホウが、母親に疑問をぶつけた。

「鍛冶屋ってのは、熱い鉄を槌で叩いて伸ばして包丁とか刃物を作る人のことだよ」

「そう、その鍛冶屋。ここから西に行つたレイホウという山村で、鍛冶屋を営んでいるオウシユウ先生の弟子をやっています」

頷く青年を見ながらリブンが首を傾げる。

「にしてもなんでまた、その鍛冶屋の見習いさんが森の中にいたんだ？ レイホウって言やあ、ここまで物見遊山で来るような距離じゃねえだろう？」

「そこはそれ、首都でやっている例のおふれが絡んでんじゃないかい？ 化け物退治しちまうような御仁なんだから」

「妖かしを退治せし者、退治する品を広く募集するってアレか？」

「確かにその募集ですが、退治屋募集じゃなく退治する品募集の方。僕は雪割り……あその刀を献上するためにコウランに向かっています。化け物を退治したのは偶然で、僕なんか退治屋をやるなんてとてもとても」

タイコウは首を横に振りつつ、手をパタパタと振りつつ否定する。彼のその素振りが面白かったのか、リホウも真似をして首と手をパタパタやりだした。

「あなた方に助けてもらわなければ、僕はあのままあの森で野垂れ死にでした。そうだ、何か御礼ができればいいんですけど」

その言葉にリブンとリヨウは顔を見合わせて、どちらからとも無く笑い出した。

「本当に気にすることは無いよ。困った時はお互い様っていうだろう」

「しかし……」

「お礼に何かよこせったって、お上に献上する刀なんぞ貰っちゃまうわけにやいかねえし。他の何かと言ったって、そんな高価な物はないだろうし。見たところ、タイコウも俺達と同じで裕福な生活は送ってねえだろ。タイコウが鍛冶なら、俺達は家計が火の車の火事だ。ワハハハッ！」

言って一人馬鹿笑いするリブンに、リホウは首を傾げて問う。

「おトさん。うちはカジヤじゃないよ？」

「あー、つまりだな……」

真面目に問いかける娘に困った顔になるリブンの後ろ頭がはたかれた。

「まったく、わけわかんないこと言っつて、リホウを混乱させるんじゃないよ。とにかく、タイコウ。無理に気を使わなくてもいいよ」

「でも……」

「まあ、命を助けられたんじゃ恩を返さないと気がすまないって気

持ちはわからなくもないか……。ふむ、それじゃあこうしよう。私達の仕事は行商で、今はカリユウって町に向かう途中だったんだ。だからカリユウにいる間の数日、うちの仕事を手伝っておくれ」

リヨウの申し出にリブンも頷いた。

「なるほど。それは助かるな」

「タイコウを助けた。なら、お礼はタイコウに助けてもらうことで返してもらおう。カリユウの町なら、首都に行く道からそれほど外れやしない。ね？ これならいいだろ？」

「おニーちゃ、お手伝いしてくれるの？」

リホウの期待に満ちた瞳がトドメとなり、タイコウは首を縦に振った。

「お手伝いさせてもらいます。でも、いったい何をすればいいのか……」

「まあ、手伝ってもらいたい事があつたらその時に頼むさ。とりあえずは、リホウの手伝いでもしてもらおうかね」

「リホウの……？」

タイコウの視線が母親から娘へと移る。

彼女はタイコウの視線を受けると、思い出したように手をパタパタやり出した。

「ありゃ？ リホウはタイコウ兄ちゃんに手伝ってもらいたくないのかい？」

母親からの問いに、自分の真似ていた素振りが否定の意味だと悟ったリホウは、今度こそ両手と首をパタパタと精一杯振って否定した。

「アタシ、おニーちゃとお仕事するー！」

「タイコウ。リホウからの御指名だ。引き受けてくれるかね」

カカと笑いながらリブンが問いかける。

「わかりました。でも、リホウと何をするんです？」

リホウは一体何をするのだろうか。華奢な子供の仕事を手伝うとなれば、力仕事ではないだろうが……。

「客引きだよ」

母親の一言で納得した。

なるほど、このリホウの愛嬌のある笑顔ならもってこいの仕事かもしれない。

「わかりました。お手伝いさせていただきます」

その一言が、後悔を生むとはタイコウは思いもしなかった。

第二章 万事喧騒 貳

カリユウに辿り着き、店を開く準備をするまでは良かった。そこまでは、大きな問題は無かったし、店の手伝いも結構できていたとタイコウは思った。

そこまでは、だ。リホウの手伝いをするまでは。

「うひゃあああつ！」

主要都市に比べれば幾分劣るとはいえ、なかなか栄えているカリユウの町。その町の一角に、青年の間の抜けた情けない悲鳴が響き渡った。

「おひよおおおつ！」

少し間を空けてまた一声。

声の主、タイコウは怯えきった顔で半泣きになっていた。

「あひいいいいつ！」

またもや一声。

タイコウも、何も好き好んでこんな悲鳴をあげているわけではない。あげずにいられるならあげたくはない。でも、悲鳴をあげずにはられない。

「もうダメ。許して、リホウ」

涙ながらに頼むタイコウだったが、そのリホウは……。

「ダメ！ まだ、あと二つ残ってるよお」

聞いてくれない。少女は無邪気に微笑んだままタイコウを開放しない。

ならばリホウの両親にと、懇願の表情を向けてみるが……。

「あーダメダメ、タイコウ。いきなり頭動かしちゃダメだよ」

「いい調子だ、タイコウ。いやー、おまえさんのおかげで客の集まりがいいぜ」

当然、聞いてくれない。

怖い目に合うというのなら逃げればよいではないかと言わないであげて欲しい。タイコウも逃げたいのだが、逃げられないのだ。

両手両足、それに胴を縛る荒縄。タイコウは十字に組まれた柱に磔にされていた。

「お褒めにあずかり光栄です、リブンさん。これだけお客さんが集まったんだし、これで終わりってことには……」

もう一度、ダメ元で聞いてみる。

「ならんよなあ」

「ですよねえ」

イタズラっぽい笑みを浮かべて返すリブンに、タイコウは諦めたように弱い笑みを浮かべた。

「おニーちゃ。おしゃべりダメだよー。動くとき刺さっちゃう」

抗議の声をあげる顔にもどこか愛嬌のあるリホウ。その可愛さとはかけ離れた冷たく鋭利なモノが、少女の手には握られている。

リホウの客寄せ方法。それは曲芸。特に得意なのが投擲。

タイコウの両手両肩、頭に乗せられた果実のうち、すでに三個がリホウの投げた匕首によって落とされてタイコウの足元に転がっている。

「とりやつー!」

「いひいひいひいっ!」

気合一閃。リホウの投げた匕首は、陽光に煌めきながら虚空を駆け抜け、タイコウの右肩に乗った果実を打ち落とした。それと同時に、周囲の見物客から拍手と歓声上がる。

「絶好調だよ、リホウ。その調子で最後まで頑張って」

「あい!」

母親リヨウに褒められて、満面の笑顔を浮かべるリホウ。

「よく我慢してるぞ、タイコウ。あと一個だから辛抱してくれ」

「はぁ……………」

父親リブンに励まされて、悲壮な顔で重い溜息をつくタイコウ。

（まあ、四つとも綺麗に命中させているわけだし、大丈夫だとは思
うんだけど）

ようやくリホウの投擲の腕前を信じかけてきた彼だったが、リホ
ウが持ち出してきた桶を見て信用は不信に変わった。

「リホウ…………それは？」

尋ねるタイコウの目の前で、リホウは桶を抱え上げると頭にすっ
ぽりとかぶる。

「目隠しだよ」

そうタイコウに答えるリホウ。その顔がタイコウのいる方向から
少しずつれているあたりが、不信感を膨れ上がらせる。

「リブンさん、これは辞めておいたほうがいいんじゃないかなー、
なんて」

「大丈夫だって。俺もよ局的役はやるが、間違っただたっちまった
事はほとんど無い」

「……………ほとんど？」

「……あ」

「あ、じゃないですよ！ リブンさんも刺された事あるんじゃないですか！ 僕、痛いのかは得意じゃないですよ！」

抗議の声を上げるタイコウの目の前では、リブンの後ろ頭をはたくリヨウといういいかげん見慣れてきた光景が展開している。

「タイコウを怯えさせるんじゃないよ。あれはアンタがクシャミしたり、アクビしたりして的確をずらしたからいけなかつたんでしようが！ リホウはちゃんとのむ的に向けて投げていたんだからね」

「おニーちゃ、大丈夫だよ。ここはアタシにどーんと任せて」

胸元をドンと叩きつつ頼もしい事を言ってくれるリホウだが、明後日の方角を向いて言われてはそれも半減というものである。

「リブンさん、リヨウさん、なんとかしてくださいよ。命を助けてもらった恩義はありますけど、その助けられた相手に刺し殺されたなんてことになったら……」

タイコウの泣き言は接客中の二人の耳には届かない。

「リホウ。やっぱりヤメにしない？」

「いっくよー、おニーちゃ」

タイコウの言葉に耳を貸さず、匕首を投げる構えをとるリホウ。

「三人とも、僕の話聞いてよ！」

叫びも虚しく響くだけだった。リホウは先ほど投げた時よりも大きく振りかぶると、タイコウめがけてヒ首を打ち出した。

「てやつ！」

「ひいああああっ！」

今度の悲鳴が、先程までのそれより大きく町に響き渡る。

（ああ、そうだ。僕は首都のコウランまでオウシユウ先生の作った雪割りを持っていかなければいけなかったんだ。それが、なんで少女の投げるヒ首の的になっているんだ？ ひよっとしたら、或いは僕の旅はここで終わってしまうのか。ああ、僕の人生ってこんな呆気ない幕引きなのか。これでいいのか、僕？）

反射的に目をつぶってしまったタイコウ。彼が目を閉じているいると考えているうちに、頭の上にあった重みが消えた。

リホウの投げたヒ首がタイコウの頭上の果実に命中し、勢い余って果実を跳ね飛ばしたのだ。

タイコウがそれに気がついたのは、彼の背後に果実が転がり周囲の観客から拍手と歓声が沸き起こってからのことだった。

「大成功だよ、おニーちゃ！」

桶を上げて満面の笑みを浮かべるリホウに対して、力無く笑って見せる。

「助…… かったー……」

置いた桶の上に乗って観客に手を振って答えている少女を見ながら、タイコウは深く安堵の息をついた。全身を脱力感が襲う。体を縛られていなかったら、そのまま地面にへたり込んでいるはずだ。

「よし、上出来だぞ、タイコウ」

「僕は突っ立っていただけですよ」

接客の合間を見計らってやってきたリブンにタイコウが答えると、リブンは大げさに首を横に振った。

「何言ってるんだ。おまえさんの迫真の演技のおかげで、大いに盛り上がったじゃないか」

リブンはそう言うと、青年の腕と柱を縛っていた荒縄を外しにかかった。

迫真の演技？ 悲鳴や泣き言のことを言っているのか？

（なにからなにまで本音だったんだけどなあ）

そう訂正する気力もなく溜息をつく。

「さて、もう一仕事。品出しの方を手伝……えそうにもないな」

縛り上げた両腕を開放され、その場に腰を落とすタイコウの様子を見てリブンが苦笑いした。

「少し休憩していてくれ、タイコウ。少し早いが昼飯にするといい」
「そうさせてもらいます」

リブンの提案に素直に返事を返すと、彼は店の方に戻っていった。

（こういう仕事は、もう少し内容を確認してからやるようにしよう）
反省しつつ立ち上がるうとしたタイコウだったが、異変に気がついてもう一度その場に座り込んだ。

情けないことだが膝が笑っているし、腰も抜けている。

リヨウたちのいる店先へノソノソと這うようにして進むと、店の端に置いていた魯智を掴む。

先ほどまでの緊張のせいか、はたまたこのカリユウの町の乾いた空気のせいか、タイコウは喉が渴いていた。

（何か飲み物を……）

錫杖にもたれるようにして立ち上がると、ヨタヨタと飲食店が立つ方向へ歩き出す。

飲食店はリブン達が店を開いている広場から、大通りに入って三軒目。大した距離では無いが、タイコウの重い足取りには随分遠く感じられた。

（リヨウさんに水飴でも貰っておけば、少しは喉の渇きもマシだったか）

店の前まで来てからふとそんな事も考えたが、ここまで来ておい
て今更水飴を貰いにリブン達の元に戻るのにはバカな考えだろう。

戸を開けて中に入る。昼食にはまだ早い時間だったおかげか、店
内の客はまばらだ。タイコウは適当な席について昼食を注文した。

(リブンさん達には悪いけど、明日にでもカリユウを発とう。コウ
ランまではまだまだ遠いし、先を急いだ方がいい)

出された水を飲み干して一息つくつと、中空を見据えて思った。

見据えた方角に、コウランがあったのかどうかという細かい詮索
はよそう。すぐにそれどころではなくなる。少なくとも、見据えた
先にガラの悪いお兄さん方が座っていたことだけ告げておく。

「何睨んでんだ、このガキやあ！」

そう、彼がその一人だ。

(カリユウ。ちょっと南に移動しちゃったけど、コウランへの道に
はすぐに戻れる)

「無視か、コラッ！」

全く無反応のタイコウをさらに怒鳴りつける。

(思い切って馬車なんか使うか。……いやいや、どう考えても旅
費が持たない)

「このガキ……！」

何の反応もないタイコウの様子に顔を引きつらせる男。その様子を眺めていた仲間内から下卑た笑いが響くと、「うるせえっ！」と一喝し、男は椅子を蹴って立ち上がる。

(そもそも、コウランまでは歩きでもかなり厳しいんだよなあ)

財布の中を思い出して溜息をついて俯いたタイコウ。その視線の先にあるシミだらけの机に、バンツと手が叩きつけられた。

驚いて顔を上げれば、叩きつけた手の持ち主である男が彼を睨みつけている。

「あ、あの……」

怒りの形相で黙って睨む男に恐る恐る声をかける。

「何か御用で？」

問いかけたタイコウの胸倉が掴まれ、彼はそのまま引っぱり上げられるようにして席を立たされた。

「な、な……」

「何か御用なあ？ そりゃあ、こっちのセリフだ。人のこと延々睨みやがって」

当然ながらタイコウは自分の視線の先に誰がいたかなど気にしていないし、睨んでいるつもりもなかった。

「え？ …… あー、そうか。すみません。少し考え事をしていただけで、別にあなたの事を見ていたわけでは……」

なんとなく検討がつき謝ってみるが、男は掴んだタイコウの胸倉を引き寄せて、なおもすごむ。

「考え事だあ？ それで、こっちは延々睨まれて不快な気分を味わってたんだ。ただ謝れば許してもらえりとも思つか？ やっぱ、出すもの出すのがスジじゃねえか！」

「そんな無茶苦茶な」

誰かに助けを求めるように周囲に視線を漂わせる。

しかし、視線の先には黙って俯く客達、薄ら笑いを浮かべて眺めている男の仲間、両手に料理を持ったまま怯えた表情で立ち尽くす店員。誰も力になってくれそうにない。

「キョロキョロしてんじゃねえよ。俺の面がそんなに見たくねえっ
てか？」

「あ、いや、決してそんなわけでは」

慌てて視線を男へと戻す。

（困った。こんな怖そうな人と喧嘩したって勝てっこないよ。きつとボコボコにされて路地裏のゴミ箱とかに放り込まれたりするんだろっなあ。顔も殴られて腫れ上がって……）

「とても見られた顔じゃない……」

タイコウの思考は、一番問題なところで溜息と共に口から漏れた。

第二章 万事喧騒 参

彼の一言は男を怒りの絶頂へ導くに十分な効果があった。

「このガキ、ぶっ殺す！」

胸倉を掴む手に一掃の力が込められて咳きこむタイコウに向けて、男が拳を振り上げる。

殴り飛ばされたタイコウが周囲の机を倒して乗っていた料理が舞う。続いて客達の間からどよめき、悲鳴。店内にいた者のほとんどがそれを予想し、その光景を見たくない反射的に目を閉じ、顔をそむける。

しかし、その惨事は起きなかった。

「なんだ？ 離せよ。こいつの知り合いか？」

胸倉を掴んでいる男の言葉を聞いて、タイコウは閉じていた目を恐る恐る開いてみる。

絡んできた男の拳はタイコウの目の前で止められている。無論、男の意思で止めたわけではなく、第三者の手によって、だ。

「いーんや、全くの初対面なんだけどな」

男の腕を掴んでいる青年は、威圧するように睨んでいる男に怯える事無く答えた。

身なりは軽装の鎧とでも例えればよいのだろうか。背はタイコウよりやや高め。下ろせば肩ほどまであるであろう黒髪を、後ろ頭で無造作に束ねている。右目に傷を持つ隻眼の青年の顔からは、不遜とも呼べそうな自信が溢れていた。

> i 3 3 5 7 6 — 3 4 8 2 <

「この兄さんもアンタの事睨んでたってわけじゃなし、不快にさせた事については謝ってもいるんだ。もし仮に睨んでたとしても、アンタだつてさつきからこの兄さん散々睨みつけてんだからアイコだろ？ それを殴るうつてのは、いただけないんじゃないかねえの？」

その言葉で男の視線に殺気が増す。

完全に男の注目が青年へと向けられ、ようやくタイコウは締め付けられていた手から開放された。いや、押しのけられたような形になり、そのままドサリと椅子に着く。

「あの、二人共、ここは穩便に……」

なんとかこの場の收拾を計ろうとするタイコウではあったが、目の前の二人は全く聞いていない。

「見ず知らずの男を助けた後は説教か。随分と立派なお兄さんじゃねえか」

「アンタと違って育ちがいいんでね」

直接睨まれていないタイコウの方が逃げたくなるほどの殺気に満ちた男。彼を前にして、隻眼の青年は涼しい顔で軽く言い返す。

「育ちがいいだあ？ ハツ、喧嘩の売り方も教育係に躰られましたってか？」

「アンタは買い方も教えてもらえなかったのか？ 可哀想な話だなあ」

明らかに挑発した口調、明らかに挑発するために作られた同情の表情。

タイコウはまた面倒に巻き込まれると、深々と溜息をついた。

「ガキが！ 喧嘩の代金だ。釣りはテメエにくれてやる！」

そう言いきるより早く、男は青年に向かって拳を突き出していた。

だが、男が殴りかかるのがわかっていたかのように、青年はその拳をヒョイとかわしつつ踏み込んだ男の足を軽く払う。

「なっ………！ うおっ！」

力任せに打ち出した拳。バランスを崩して上半身を支えきれなくなつた足。

男は勢い余って、近くのテーブルへと音を立てて突っ込んだ。

「そんなはした金で足りると思ってるのかねえ」

倒れる男に向かって高笑いしながら青年は尚も挑発する。

「このクソガキ！」

そう叫んで立ち上がったのは男の仲間達。そして、これからこの店で起きるであろう大喧嘩の巻き添えを食いたくない一般客が、ワンテンポ遅れて立ち上がる。

「あれまあ、ボンクラ供が揃いも揃って……」

「ちょ、ちょっとお兄さん。そうやって挑発しないでよ！」

男達に聞こえるような音量で独り言をいう青年。タイコウは慌てて立ち上がると彼を嗜める。

「助けてもらったことは感謝しています。感謝していますけど、これ以上状況を悪くしたら……」

「悪いね。もう充分状況悪くなってるから」

「あなたが悪くして……って、ウワワ！」

隻眼の青年は、タイコウの肩を軽くトンと押した。

軽い仕草にしては抗い難い力。タイコウが再び椅子に押し戻されるように座り込むと、男達の投げた酒瓶が彼の頭上を飛び越えた。

殴りかかってきた男二人の拳を、青年は無造作に捌きつつ一人を蹴り飛ばす。もう一人の男が放った蹴りは片腕で抱えるように捕まえて、軸足を払って倒す。

「おまえさんも、巻き添え食う前に逃げておいたらどうだ？」

男供のあしらいが一段落したところで、青年は逃げ惑う客がいる出入り口を指差してタイコウに言った。

確かにその体捌きを見れば、彼一人で男達の攻勢をしのぎきれそうだが……。

「そうしたいのは山々ですけど、元はと言えば僕が起こした騒ぎです。あなた一人置いて逃げられるわけないでしょ！」

青年の背後。男が両手に持った椅子を振り上げているのを見つくと、タイコウはその男に突進して腰元に組み付いた。

「ひゅー、勇敢だあね」

タイコウを感心したように眺める青年。目標をタイコウに変えて振り下ろされた椅子を青年は掴み、男の後頭部に鋭い蹴りを放つ。

青年の蹴りで気絶した男がその場に崩れ落ちると、男の腰に掴まっていたタイコウも一緒になって倒されて、そのまま男の下敷きになった。

「このガキ供、もう殺す！」

男達が自分の席に置いていた各々の武器を掴む。

「ちよいちよい。ただの喧嘩にそんな物騒な物を出してくるかよ」

これには隻眼の青年も少し慌てたらしく抗議の声を上げる。

だが、もちろんそんな抗議が聞き入れられはしない。男達は武器を振り上げて青年に襲い掛かってくる。

「チツ！ しょうがねえ。少し本気出すぜ！」

突き出された槍を手刀で打ち払い振り下ろされる剣をかわすと、もう一人攻勢に出ようとした男の懐に飛び込み肘打を入れる。

強い。

気絶した男の下から這い出たタイコウは、青年の体捌きに少し見入ってしまった。

「……つと、こうしちゃられない」

いくらこの青年が強いと言っても一人で、しかも素手で武器を持った多人数というのは不利だろう。

喧嘩は苦手だが、助けてもらっておいでしているだけというわけにもいかない。

タイコウは青年に加勢すべく謎の老人鉄冠子から受け取った錫杖、魯智を掴んだ。

「え？」

魯智を掴んだ瞬間、タイコウは自分の体を襲う悪寒に思わず驚きの声を上げた。

目の前で繰り広げられる光景。男達と青年の大乱闘の中に人では

ない者の姿が映る。

着ている衣装は、どこか隻眼の青年が着ている物に似た種類の鎧。その鎧を着ているのは虎。朱色の艶やかな毛並みを持つ人型の虎から、噴き出ている気配は……。

(妖気！ 樹木子が出していたやつだ！)

その虎が青年の背後で牙を剥き、爪を煌めかせている。

「危ない！」

タイコウは叫び、青年に迫る虎の化け物めがけて魯智を突き出した。

「のわっ！」

思わぬ人物からの攻撃に、青年は慌てて錫杖を払いのける。

「何すんだ！ 俺はテメエまで敵に回した憶えはねえぞ！」

「動かないで！ 襲われなくなったら！」

「だったらテメエが動くな！ 襲うな！」

「動かないで静観していたら、あなたが殺されてしまう！」

「テメエがその杖振り回してるほうが、よっぽど危ねえんだよ！」

袈裟懸けに振り下ろされる魯智の一撃を、手甲で受け止めた青年。

その隻眼でタイコウを睨みつけながら蹴りを放つと、タイコウは魯智の指示を受けて錫杖で蹴りを防ぐ。

「ガキ供が！」

「叩つ切つてやる！」

タイコウと隻眼の青年。双方の背後に立つて男達が武器を振り上げる。

「邪魔しないで！」

「すつこんでろ！」

怒鳴り声と同時にタイコウを襲った男は錫杖で突き飛ばされ、青年を襲った男は殴り飛ばされた。

「わけわかんねえが、そつちが売るってんなら、この喧嘩買つたろうじゃねえか！」

「違つよ、そうじゃないんだつて！」

タイコウの呼ぶ声は青年には届かない。その青年の背後で、虎が吼えるように大きく口を開けた。

「伏せて！」

タイコウは叫び、今にも青年に噛み付こうと口を開く虎に向かつて、もう一度錫杖を突き出す。だが、青年はその警告を聞き入れず突き出された錫杖を弾いた。

「これのどろが……」

青年は呟きつつ、タイコウが引くより早く錫杖を掴み取ると間合いを詰める。

「喧嘩売ってねえってんだ！」

怒声とともに繰り出された青年の拳はタイコウの胸を突き、勢い良く飛ばされたタイコウが椅子やテーブルを弾き飛ばす。

(聞いてくれない。飛び込めばあの人が邪魔をしてしまう)

衝撃に咳き込みつつ青年と朱色の虎を見据える。

(……やるか)

タイコウは、震える手で錫杖の先を真っ直ぐ虎に向けた。

「天を駆けるもの。地を巡るもの。そのもの何処より湧き出で。何処へと流れ行かん」

隻眼の青年はタイコウの口上を聞き、少し困惑の表情を浮かべる。だが、その言葉が持つ力に感付くとタイコウを止めにかかった。

「させるか!」

「我が身、我が内流るるもの。集いてかの先に赴かん。我が意思はかの地を指さん……」

後は最後の一言を言うだけ。

そう思った瞬間、タイコウの横腹を鈍い痛みが走った。

「え？」

横へ移動していく風景。その視界の中、青年もまたタイコウと同じように横へと動いている。唯一違うのは、青年はタイコウを見ておらず飛ぶ前にいた方を見て舌打ちしていることだ。

(僕のいた場所……？)

横を見た瞬間、タイコウの視界に鉄製の何かが映る。

その何かが警備隊の持つ刺股だと気が付いたのは、警備隊に押さえつけられた直後のことだった。

第二章 万事喧騒 参（後書き）

〜次回予告、リクスウ語り〜

ついてねえ。全く、まーったくついてねえ。

飯店での喧嘩の仲裁に入った俺はタイコウ共々役人に捕まって檻の中。

虎の相を持つ霊が見えるなんぞとぬかして、なんでアイツはコイツが見えるんだ？

お互いコウランへの旅の途中ってことで共に行こうと約束する俺達を妖魔が襲う。

次から次へと湧いて出る妖魔達に流石の俺も素手ではちよいとキツイな……。

何？ タイコウ、俺が使えるそうな武器があるって？

旅は道連れ世は情け。二人仲良く檻の中。

突如現る妖魔の群に、やる気は有るが武器は無し。

頼みの刀は今何処。

次回『第二章 隻眼道士』に乞うご期待！

第三章 隻眼道士 壺

「まったく。驚いちゃったよ、タイコウ」

開口一番。行商人リブンの妻、リヨウの言葉はそれだった。

ここはカリユウの町の警備隊詰め所。その一角に設けられた面会用の部屋だ。

「すみません。ごめんなさい、リヨウさん。ご迷惑をおかけしてしまってます」

対するタイコウは、慣れない周囲の雰囲気につきり萎縮している。面会に来たりヨウに対しても、ただひたすら平謝りする有り様。

飯店で大喧嘩をしたタイコウと隻眼の青年は駆けつけた警備隊に取り押さえられ、二人ともこの詰め所の牢屋の中で一晩反省させられることになったのだ。ちなみに、途中まで彼等の喧嘩の相手をしていた男達は、見事なまでの被害者面をして警備隊に開放されている。

「その言葉は、私じゃなくリホウに言ってあげとくれよ。あの子も相当心配してたんだから。それと飯店にも謝らないとねえ」

それを聞いて、タイコウはさらに落ち込む。

飯店での騒ぎで壊れた物の弁償。迷惑料。どうやって払ったものか……。

「それにしても、休憩から帰ってこないし、逃げたにしては大事な刀は置いたままだし、気になりだしたと思っただら飯店で騒ぎが起きたって言うじゃないか。私達はタイコウが巻き込まれたんじゃないかって心配してたんだよ。そしたら、騒ぎの当人がアンタだってんだから、そりゃあもう驚いたのなんの。あ、タイコウ。怪我とかはしてないかい？」

「それは大丈夫です。少し打ち身がありますけど、痛みもほとんど感じないし」

タイコウの様子に「そりゃ何よりだ」と安堵の表情を見せるリヨウ。

むしろ、タイコウ自身が心配なのは隻眼の青年の方だった。彼の背後にいた虎の化け物が只者ではないというのは、魯智も警告していた。

だが、その破邪の錫杖魯智も飯店での乱闘騒ぎの時に警備隊に取り上げられ、あの化け物を追い払うどころか、その姿を見ることがすら叶わない。

今は只、青年の無事を祈るばかり。

「どうしたい、タイコウ。やっぱりどこか痛めたかい？」

黙りこんでいたタイコウが声に顔を上げると、リヨウが心配そうにこちらを見ている。

(ここで悩んだところでどうにもならない。今は彼の無事を祈ろう)

タイコウはそう割り切ると、リヨウに軽く微笑んで首を振って見せた。

「本当に大丈夫ですよ。問題ありません。でも、今夜一晩はこの牢で大人しくするように言われてしまって……。だから、今日はもう店の手伝いはできそうもないんです」

「ああ、それは気にしなくていいよ。タイコウの客引きが良かったおかげで、今日はかなり稼げたしね。明日は少し場所を変えて店を開こうかと思っただけ……。明日には出てこれるんだろう?」

「え、ええ。何事も無ければ」

「知らない町だ。どこで店を開くか言ってもわからないだろうから、明日朝一番にタイコウを迎えに来てあげるよ。明日もアンタの名演技に期待してるからね」

よほど儲けが良かったのか、リヨウはニシシと笑みをこぼしている。

彼女の調子にタイコウはやや狼狽した。

助けてもらった恩はあるものの、タイコウには師匠オウシュウの刀、雪割りを首都に運ぶという役目がある。のんびりもしてられない。何より、あの客引きは寿命が縮まるので、明日はもう勘弁してほしい。

「いや、あの、実は……」

明日旅立つ旨を話そうと口を開くタイコウをよそに、リヨウは椅

子から腰を上げる。

「悪いけど、もう行くね。明日のためにいろいろとやっておく事もあるから」

「え？ あ、ちょっと」

「心配しなくてもあの刀……カチ割りだったかい？ カチ割りはちやーんと大事に置いてあるよ。盗まれるなんてへマはしないから安心おし。それじゃ、また明日ね」

彼女の勢いに押されて口をはさめないタイコウ。リヨウは言うだけ言つとさつさと部屋を出て行ってしまった。

「雪割りなんですけど……」

唯一やっと出てきたその一言が、リヨウの出て行った部屋でポツリと洩れた。

(明日迎えに来てくれた時に話すか……)

「さあ、戻れ」

溜息をつくタイコウ。監視役の兵士に連れられて再び牢屋へと歩きだした。

「だーかーら！ あいつらも共犯だって言ってるだろうが！ なんで俺とあいつだけ牢屋に放り込むんだよ！」

牢屋は詰め所の奥にいくつか据え付けられている。その一室から放たれる若く気迫に満ちた青年の声が、牢屋の通路に響いてきた。

歩みを緩めて声のした方に視線を向けると、そこにいるのは件の隻眼の青年。

「何を言うか。おまえらが暴れたせいで巻き添えを食っただけなんだろうが」

「なんであいつらの話を聞いて、俺の話を聞かねえんだよ！ 被害者面してたあの男が一番最初に喧嘩をふっかけたんだぞ！」

「わかったわかった。あとで聞いてやる」

「あ！ その、おざなりな返事。アンタ絶対聞く気無いだろ！ ヤだねえ、何食わぬ顔して平気でウソをつけるヤツってのは」

「はいはい、文句はそれぐらいにしておくように。あまり騒々しいと大人しくなるまで出してやらんぞ」

言って警備の兵士は彼のいる牢屋を離れる。

(良かった。まだ生きてる)

「おい、早く歩け」

知らず知らずのうちに、タイコウは足を止めてしまっていたらしい。監視役の兵士に背中を押されてタイコウは再び歩き出した。

(無事だったんだ……)

そう安堵する反面、タイコウの頭には疑問も浮かび上がっていた。

あの気迫に溢れた虎の化け物が得物を前に襲わないのはなぜだろうか？ 目標を彼から別の人物に変えたのだろうか？ そうだとしたら、警備隊になんらかの情報が入ってきてても不思議ではない。

今の状態で考えてみても何も結論は出ない。そう思いはしても疑問は留まらない。

「あの、僕の持っていた錫杖は……？」

たまらず兵士に尋ねる。

「あれは一晚牢の中で大人しく反省したら、ちゃんと返してやる」

いかにもな解答にタイコウは溜息をつき、魯智を取り上げられた時の話を思い出す。

錫杖を取り上げた警備兵の数名。鍛冶屋見習のタイコウと錫杖の共通点を見出せず、錫杖が価値の有る物ではないかと話し込んだ。

「本当に返してもらえるんですね」

「くどいぞ。余計な心配するな」

抑揚の無い兵士の言葉にタイコウの不安感はさらに増した。

見る事の出来ない虎の化け物の行方、魯智の安否、騒ぎを起こした飯店の弁償。タイコウの不安要素は溢れつづけ、溜息と一緒にこぼれていく。

「あれ？」

何度目かの溜息をついたタイコウが異変に気がついて立ち止まった。

「なんだ？」

続いてタイコウについていた兵士も足を止める。

リヨウとの面会前まで彼の入っていた牢屋の中に、別の者が入っているではないか。

(……………相部屋ってこと?)

「こつちだ」

首を傾げるタイコウの腕を引いて兵士は別の牢屋へと移動を始めた。

そして行き着いた先は……………。

「入れ」

淡々と言われて入った新たな牢屋。牢屋そのものは先ほどまでの所と大差無い。問題はその正面の牢。

その牢に入っている男は、こちらを見てあからさまに嫌な顔をした。

恐らく今、カリユウの町で一番タイコウを嫌っているであろう男。飯店で喧嘩をした隻眼の青年だ。

「あ、あの。この牢は……」

正直言つて、居心地の悪い視線だ。タイコウは兵士に救いを求めるように声をかけてみるが……。

「おまえは自分の要望が聞き入れられる状態だと思つているのか？ どうせ何も無ければ一晩の事だ。下手に騒ぎを起こさず大人しくしている」

そう釘を刺されると、タイコウのいた牢屋に別の罪人を入れた警備隊の失敗も問いただしにくい。

(苦行だ、これは……)

なおも痛い視線を飛ばしている青年と、なるべく目を合わさないように座る。

隻眼の青年はしばらくタイコウを見据えていたが、やがて溜息つきつつ寝転がる。

「あーあ、ついてねえ。全く、まーったく、ついてねえな」

壁といわず格子といわずガンガンと蹴りながら愚痴る。

「その……ごめんなさい」

しばらく黙っていたタイコウだが、彼の様子に耐えかねて口を開いた。

「謝って許してもらえるなら、こんなところに押し込まれねえってんだ」

青年はタイコウを見もせずばやく。

「その……樂觀的かもしれないけど、一晩大人しくしていれば出してもらえるわけだし。一晩だけ我慢しようよ」

タイコウが青年を宥めるように言っていると青年は彼を睨みつけた。

「まったく、呑気なもんだな。おまえが俺の事を襲ってきさえしなかつたら、あいつらとの喧嘩のドサクサで食い逃げする計画も潰れずに済んだんだ」

食い逃げはどうかと思うが絡まれたところを助けてもらい、目標こそ違えど青年に襲いかかった事は事実。タイコウは反論する事も無く「すみません」と頭を下げた。

「それにしても、無事で良かった」

安心したように微笑んで、牢屋の格子越しに青年を見るタイコウ。その穏やかな表情に青年は毒気を抜かれた気分になり、深く溜息をつく。

「おまえなあ。自分で襲いかかっというて無事で良かったは無いだろ

う」

「本当にすまないことをしたと思ってるよ。でも、キミを狙ったわけじゃないってことは信じてほしいんだ。キミの後ろに化け物がいたものだから、つい……」

「ハッ、何を言い出すかと思えば。首都のコウランじゃあるまいし、こんな町中に妖魔が出てくるわけないだろ？ もし妖魔が出てきたら、あの店は俺達が暴れた以上に混乱してたさ。違うかい？ だいたい、警備隊も妖魔を相手にしなくちゃならなくなる。俺達をこんなジメジメした所に放り込んでる暇だって当然無かつただらうよ」

青年はもつともな解答でタイコウの心配を笑い飛ばす。

「それは、そうなんだけど……でも、本当にいたんだよ。キミが着ているような鎧を身に付けた朱の毛色をした虎の化け物が」

タイコウを心底バカにした顔をしていた青年だったが、彼の言葉に表情を曇らせた。

「……誰から聞いた？」

「え？ どういうこと？」

先ほどの恨めしそうな視線とは異なる鋭い視線で、タイコウを睨みつける隻眼の青年。問いの意味がわからず、タイコウは問い返していた。

第三章 隻眼道士 貳

「……何が目的だ？」

「いや、だから何の事だかさっぱりわからないんだけど……」

「コウ八族の装束。朱の毛色の虎人。トウコウの事が他のヤツに見えるはずがねえ。おまえはこいつの事を誰から聞いた？ いったい何を企んでんだ？」

「トウコウって……キミ、さっきのあの化け物の事知ってたの？」

驚きの声を上げるタイコウに対し、青年は少し考え込むと溜息をつく。

「なんか、話が噛み合わねえな。ここからはお互い正直に話そうや。ひとまず、俺はリクスウって名前だ。キミって呼び方はやめてくれ」

「あ、ああ、わかったリクスウ。僕の名はタイコウ。よろしく」

「で、だ。タイコウ、おまえはトウコウの事が見えたんだな？」

「トウコウってのが、リクスウがさっき言っていた容姿なら……」

そう条件を付けてからタイコウは頷いてみせる。

「そうか。トウコウの姿が見えるのか……。ってことは、タイコウは妖怪退治とかやってる道士様ってわけだ。いやはや、こいつはホントに驚いたな。本物の道士に出くわすとは」

一人感心する青年リクスウ。

「すると、タイコウも首都のコウランへ向かう途中だったのか？」

「僕もつてことは、リクスウも？」

リクスウの言葉に、自分が道士では無い事を訂正するのも忘れて
問い返していた。

「これでも道士の真似事をやってるからな。せつかく稼ぐ機会だし
行かなきゃ損だろ。あくまで真似だけで本物の道士なんかじゃない
が、そこらへんの名前だけで何も出来ないニセ道士なんかと一緒に
するなよ。道士の真似事だと言ってもトウコウの力で妖魔は退治で
きるんだ。今、コウランで欲しているのは本物だろうと偽物だろう
と関係ねえ、妖魔を倒せる力だ。違うかい？」

「あの化け物の力で妖魔退治を？」

「まあ、はたから見れば化け物だよな」

カカと笑い飛ばしてから、リクスウは少し真面目な顔でタイコウ
を見る。

「なあ、タイコウ。サイハクって町は知ってるか？」

「いや、長くレイホウを出たことが無かったから、あまり他所のこ
とは……」

「それほど大きな町でもないし、知らないのは仕方がねえな。とに

かく、ホウ国の南西部にサイハクって名の小さな町がある。俺の生まれ故郷だ」

「はあ……」

リクスウの生まれ故郷とトウコウという化け物が、どう関係するのだろう……。

そんな疑問からか、どこか気の抜けた返事を返すタイコウ。

「ホウ国が今の領土に広がるより少し昔、サイハク付近はコウ八と呼ばれる部族が収めていたんだ。武勇に優れた者が多い部族でな。周辺にいた他の部族には、相当恐れられていたらしい」

だから、その部族とトウコウという化け物が、どう関係するのだろ……。

「そんな血気盛んな荒くれ者達を束ねていた男の名がトウコウ」

「あの化け物は、その人物から名を貰って名付けたということ？」

「話は最後まで聞いてくれよ、タイコウ」

彼の早とちりを軽く笑いつつ、リクスウは話を続ける。

「俺の背に憑いているのは、今言ったトウコウその人なんだよ」

「な？」

その一言にタイコウは驚いていた。

あのトウコウの顔は虎に似た人物ではなく虎そのものだ。体を覆っていた朱色の毛にしても、毛深いでは済まされない。いかにも獣という感じで、あれを人と呼ぶのはどうかと思うのだが……。

「虎が部族を収めていたということ？」

その問いに、リクスウは力カと笑う。

「生きていた時はちゃんとした人だったみたいだぞ。まあ、気性は獰猛な虎だったらしいがな。死んでからその気性が人相風体にまで出てきたってことなんじゃないか？」

「なるほどね。でも、どうしてまたその部族の長が……」

「化け物じみたなりをして俺に取り憑いているのか、か？」

リクスウが繋いだ言葉は、タイコウの疑問そのものだった。タイコウは頷いてみせると彼の答えを待つ。

「コウ八族は個々の腕っ節は凄かった。だが、悲しいかな、知恵が足りなかつたらしい。当時急速に勢力を広げていったホウ国によって、コウ八族は滅ぼされちまつたんだ」

タイコウはその話に心当たりがあった。

初代ホウ王に仕えた軍師コウタツが神算鬼謀の策略をもって周辺諸国を制圧し、今のホウ大国を作り上げる話。その数々の戦いが講談で取り上げられたり、中には半分以上神話化した昔話として子に聞かせたりと、ホウ大国の者なら誰しも耳にする話だろう。

「確かにホウ大国は大陸の半分を収めて、その後も繁栄しつつ現在に至っちやいるが、トウコウとしては滅ぼされた部族の長として恨み辛みがあるんだろうな。だから、黄泉路を辿ろうともせず、あんななりでこの世に留まってるわけだ」

「その話からすると、リクスウはその部族に何か関係がある人？」

彼がコウ八族の長に似た鎧を着ているのだし、納得の行く話だ。

「関係も何も、部族の生き残りさ。もっと詳しく言えばトウコウの血族の生き残りだ。だから取り憑きやすいのか別の理由があるのかは知らねえが、トウコウは俺に取り憑いていて離れない。別に害があるわけでもないし、いろいろと手を貸してくれるから俺も大して気にしてないんだが……」

「手を貸す……？」

「トウコウの力が妖魔に通じるからな」

トウコウの力という言葉にタイコウは首を傾げていると、リクスウが身を起こす。

「俺はコウ八族の血のせいか、小さい時から喧嘩には自信があった。だから、自分の腕を頼りに用心棒みたいな事をやって……。あの頃は負け知らずだったし、自分の力を過信してたんだよなあ。それで、腕を見込まれて頼まれた妖魔退治も、報酬が良かったんで二つ返事で引き受けた。その結果がこれだ」

言つと傷で塞がれている右目を指差してみせる。

「なんとか妖魔退治はしたものの、こつちも大怪我を負った。それからは妖魔退治なんぞ耳を貸さなかった。命がいくつあっても足りやしねえしな。そんで、ある日突然トウコウに取り憑かれた。最初は驚いたぜ。自分の背中に虎の化け物がいたんだからな。でも、しばらくしてトウコウの正体もわかって、こいつの持つてる力を自分の意のままに操る事ができるようになった。蛇の道は蛇って言うんだったか？ 怨霊と化したトウコウの爪や牙は妖魔を傷付ける力があつた。おかげで俺は妖魔と対等に戦える力を手に入れたってわけだ」

「それから道士の真似事を？」

「そういうこと。首都の騒ぎが起きるまではホウ大国を転々と……。そうだ、タイコウ。どうせ目的地は同じなんだ。首都まで一緒に行かねえか？」

まるで飲みにも行くかのように。とても妖魔退治に向かうとは思えない軽い調子で、リクスウが問いかける。

タイコウにとっても、彼の申し出はありがたい話だ。

リクスウの強さは飯店での乱闘騒ぎで充分わかった。魯智無しでは戦う事さえ満足にできないタイコウからすれば、彼が同行してくれるなら心強い限りである。

「ああ、そうしよう……」

リブン一家の店を手伝う話が脳裏を掠めたが、もともと明日旅立つつもりだったのだ。明日改めて謝ることに決める。

「僕は明日この町を発つつもりだったのだけど、それでいいかな？
何か用事とかは？」

「ああ、構わない。もともと偶然立ち寄っただけの町だからな」

そう言ってリクスウは再び横になり、眠りにつく体勢に入った。

「明日朝一番に出るとしても、次の町までは一日では辿り着けねえ。
とりあえず、今は充分休養を取っておこうや」

言うが早いか欠伸一つ。

タイコウもリクスウに習って横になると目を閉じ、体を休める事にした。

いったいどれほど眠っていたのだろうか。

格子窓からの射す夕日で牢の床に作られていた朱色の四角は、今は月明かりで淡く冷たい白に変わっている。

(夜か……鼓動がやけにデカく聞こえるな)

目覚めたりクスウは自分の昂ぶりに違和感を覚え、寝ていた身体を起こす。

起きると改めて感じる。自分が本能的に周囲の気配をうかがっている事に。

何かいる……そうでなければ、何か来る。

彼に憑いているトウコウと自分の六感が警告している。

「タイコウ、起きろ。おい、タイコウ！」

「んあ？ どうしたの、リクスウ」

向かいの牢屋から聞こえる寝ぼけた調子のタイコウの声。

「何か感じないか、タイコウ？」

「感じる……？」

まだ夢心地な声だ。

しばらくするとリクスウの目が闇に慣れだし、寝ぼけた調子で周囲を見回しているタイコウの様子が見て取れた。

「……ああ、そういえば牢屋に入れられていたんだ」

「起きろって、タイコウ。おまえさんも道士なら何か感じるだろう」

「道士？ 誰が？」

「タイコウがだ！ いい加減目を覚ませ」

「僕は鍛冶屋の見習だよ。道士じゃ……」

言葉が止まる。タイコウの視界が、夢の中から現実のそれを見つめるようになる。

「そつだ、リクスウの誤解を解いておかなくちゃいけなかつたんだ」

目のほつも暗闇に慣れてきていた。タイコウはリクスウのいる牢に向いて話し出す。

「誤解？」

「昼間言い忘れていたんだけど、僕は道士じゃないんだよ。西のレイホウという山村に住んでいる鍛冶屋の見習なんだ」

「まだ寝惚けてんのか？」

いいかげんにしろと言いたげな視線をタイコウに向けるリクスウ。

「もう起きたよ」

「昼間騒いでいた時、俺に殺気満載の変な術をかけようとしてたろ。知らないなんて言わせねえぞ。ただの鍛冶屋がそんな物騒な真似が出来るかよ」

「あれは僕の手じゃないんだよ。僕があの時持っていた魯智……あの錫杖の力なんだ」

「あの古ぼけたヤツの？」

正直な意見を言うリクスウに、タイコウは思わず苦笑いしていた。

「まあ、見た目は古ぼけてるかもしれないけど、あの錫杖には目に見えない不思議な力があってね。貰い物だから詳しい事は僕にもまだよくわからないけど、とにかく魯智のおかげで僕はトウコウの姿が見えたし、危うくトウコウを倒してしまつところだった」

タイコウの言葉にリクスウが笑う。

「なんてこつた。あんたも偽物の道士つてわけかい」

「僕は偽物の道士でもなく、ただの鍛冶屋見習だよ。僕が首都に向かっていている理由は師匠が作った雪……」

そこでタイコウは言葉を止める。いや、驚愕に言葉が詰まつたという方が正しい。

向かいの牢にいたリクスウがふいに目を見開いて右腕を振り上げたのだ。その目は殺気に溢れ、タイコウの体が竦む。

「頭下げろ、タイコウ！」

その言葉に、タイコウは弾かれたように頭を抱えて伏せる。

リクスウが腕を振り回したところで、こちらの牢に手が届くはずが無い。頭ではそう思っているのに、腕ではない何かが届いてくる危機感から本能的にそうしていた。

「ギィアアアアツ！」

リクスウが振り上げた腕を振るう音。その直後に牢に背後から響いてきた人外の者の苦悶の叫び。

「チツ、仕留め損ねたか……」

タイコウは伏せていた頭を上げ、舌打ちするリクスウを見る。

自分の背後、牢の外に何かいた。リクスウは何かを投げつけたのか？ そんなもの持っていたとしたら牢に入る前に取り上げられるでは、どうやって？

「タイコウ、牢を出るぞ。妖魔はあいつ一体だけじゃないらしい。とつと片付けねえと怪我人どころか死人が出ちまう」

「え？ でも、どうやって……」

問いかけようとしたタイコウだったが、その問いの答えは言葉無しで出された。

リクスウは先程より少し軽く腕を振り上げると、目の前の格子に向けて振るう。牢を閉ざしている格子は、刃物か何かで切りつけたかのような切り口を作って壊れ落ちた。

「言ったる？ トウコウの力を自分のものにしたって。トウコウの爪にかかりゃあ、こんな牢屋なんぞ……」

言いながらタイコウの牢に向けて、同じように腕を振るう。

目の前を殺気ある何かが通り過ぎ、腰を抜かしたタイコウ。その視界にあった格子はトウコウの牢と同様切り崩されていく。

「紙細工みたいなもんだ」

リクスウは彼に少し自慢げにニッと笑って見せた。

第三章 隻眼道士 参

「手っ取り早くそっちの壁砕くか。さっきの輩がまだうるついでるはずだ」

「その前に魯智を返してもらわないと」

「それもそうだな。戦力は多い方がいい」

「あいや、いやいやいや。僕は化け物と戦ったのは一回だけだし、その時だってボロボロにされちゃったし。戦力だなんて、あまりあてにされると困るけど……」

「そんなこと言っていられる状況じゃねえだろう？」

牢を出るタイコウとリクスウ。二人の耳に詰め所内からの悲鳴が響く。

「詰め所にも妖魔がいんのか。行くぞ、タイコウ！」

「あ、ちょっと、置いてかないでよ、リクスウ！」

リクスウに遅れ慌てて走り出す。

二人が詰め所に駆け込むと、そこは混乱の真っ最中だった。

詰め所の中にいた警備隊員はざっと見て十人弱。彼等に襲い掛かっている相手もまた、兵士に似た身なりをしている。違いは腕が無かったり首が無かったり、肌は土気色で半分以上腐食しているところ

るか。

「ヒッ！」

「びびるな、タイコウ。……死人帰りか」

そう呟くが早いか、タイコウの隣にいたリクスウが走り出し、兵士を襲う化け物の一体を容赦無く蹴り飛ばす。

「タイコウ、錫杖を探せ！ こいつらの好物は生きている奴等の血肉だ。ボサツとしてると食い殺されっぞ！」

怒鳴りながらも戦う事は忘れていない。リクスウは両腕を振るい、近くの死人帰りを切り飛ばしていく。

「魯智、魯智は……あつた！」

死人帰りに襲われる兵士の一人に向かって走り出す。錫杖を手にした彼は、怯えて半泣きになりながらも、死人帰りを近付かせまいと両手でその錫杖を振り回している。

「近寄るな！ 助けてくれ！」

泣き叫ぶ兵士の振った魯智に、タイコウの伸ばした片手に触れる。

次の瞬間、タイコウの中でドクンと大きな鼓動が聞こえた。

「月と太陽はただ巡り。大気と水はただ流れ。数多の草木は地に根付き、数多の獣は野を駆ける」

タイコウの意思に関係無く口が動き言葉を紡ぎ、タイコウの意思に関係無く魯智に触れた片手はしっかりとその柄を握り締める。

「巡る汝は今何処。流れる汝は今何処。我が言の葉に、応えよ、吼えよ……」

(この口上……魯智か！)

今、自分の見に起こっている事が魯智による仕業とわかった途端、以前樹木子を退治した時の脱力感を思い出す。この状況で気絶するのは危険だ。

そう思ったのと、最後の言葉を口にしたのはちょうど同じタイミングだった。

「活！」

何かが弾けたかのように魯智を中心にして衝撃が拡散する。

魯智とタイコウを残して死人帰りや兵士、その他周囲の雑貨類がその衝撃波に吹き飛ばされた。

「ヒュー。やるじゃねえか、タイコウ」

「……自分でも驚いてる」

リクスウの感嘆の言葉に対し、タイコウは周囲の状態をしばし呆然と眺めながらそう呟いた。

(術を使った……不味い。気を失っちゃ駄目だ。まだ戦いは終わっ

ていないんだ……)

魯智の術の副作用を思い出したタイコウ。これから自分の体を襲うであろう脱力感に対抗しようと気を集中させる。

(敵の数はあといくつだ？ どいつが近い？)

「ボサツとするなって、タイコウ！ 今の吹き飛ばしたヤツ、まだ動けるぞ！」

リクスウの叱咤に我に返る。

彼の言うように、魯智の放った一撃を受けた死人帰りが身を起こし始めている。

「うわぁっ！」

その叫びが悲鳴なのか雄叫びなのかはタイコウ自身にもわからなかったが、声を上げて振り上げた破魔の錫杖を死人帰りの頭上に打ち下ろす。

頭蓋が碎ける鈍い感触。それは、目標が沈黙したことを知らせてあまりある感覚だった。

(さっきの術は気を失うほど力を使わなくていいってことか？)

否。

すぐさま魯智の否定の声。

魯智曰く、気力の消費量は術の種類に関係は無い。いかなる術であろうと、使うと決めた気力の大きさに応じて威力は増減する。術を皿洗いに例えるなら、水が気力。一滴の水では小皿も洗えないが、大河の如く流せば大皿千枚も容易く洗う。皿何枚分の水を使うかは使う者のさじ加減一つ。

どうやら術を発動する瞬間、気を失う事を恐れたおかげで無意識に力の加減をしていたらしい。事実、術を使った時の脱力感はほとんど感じていない。

（力の加減ができるとしても、術を使わずに倒せるならそれにこしたことはないな）

そんな事を考えていたタイコウの脳裏に魯智の警告。

タイコウは後方から迫る死人帰りに、振り向きざま横薙ぎの一撃を打ち込む。

一体、二体と死人帰りを片付けていくタイコウとリクスウ。詰め所にいた大半の化け物を討ち払った二人は外に出て息を呑んだ。

「なんだ、これ……」

タイコウが啞然として周囲を見回す。

外にも妖魔が群れていた。それも死人帰りだけではなく、猪や狼の頭を持つ人型、見たことも無い獣、小鬼。ありがたいことに魯智が妖魔の種類を一体一体タイコウに教えてくれるのだが、正直言って聞く気になれない量だ。

「ひでえな……」

リクスウも彼の隣で呟いていた。

通りのそこかしこで暴れている魑魅魍魎。その中を逃げ惑う人々。この様子では、妖魔に襲われていたのは詰め所だけではない。このカリユウの町全体だ。

「こんなこと初めてだな。今まで一番多かったのでも十はいなかったぞ」

「た、助けなきゃ。戦える人が少な過ぎる」

「全く、まーったくついてねえ！ 兵隊にとっ捕まるわ、化け物は群れて出るわ。とんでもねえ町に来ちまった！」

どちらともなく妖魔に向かって通りを走り出した。

「ガアアアツ！」

リクスウが叫んだか、はたまた彼に憑いているトウコウが叫んだか。獣のような声を上げて妖魔に襲いかかる。

振り下ろされた腕の軌道に沿って空間が裂け、小鬼が血飛沫を上げて崩れ落ちる。

「天を駆けるもの。地を巡るもの。そのもの何処より湧き出で。何処へと流れ行かん。我が身、我が内流るもの。集いてかの先に赴かん。我が意思はかの地を指さん。砕破！」

タイコウの声を引き金に錫杖の先から光の矢が打ち出され、妖魔達を撃ち抜く。術に割く気力を抑えたせいで矢は細く光量も落ちて
いるが、うまく当てれば充分致命傷だ。

「それにしても、なんて数だ」

タイコウが撃ち洩らした妖魔に一撃入れながらばやく。

通り一つ通り抜けるのに、いったいどれだけの数の妖魔を相手に
しているのか。

(この調子じゃ、全部倒しきる前に僕の方が倒れるんじゃないか?)

肯。

溜息とともに洩れたタイコウの考えを魯智が肯定する。

「こんな時にイヤな事を言う」

恨めし気に破魔の錫杖を見ると、魯智は彼の意識に話しかけてき
た。

魯智曰く、妖魔大量発生は自然な事ではない。不自然には不自然
なりの理由がある。

「つまり？」

誰かが何らかの術を用いて、妖魔の世界とこの世界に通り道を作
った。

「その誰かの何らかの術を止めればいいって事なのか？」

肯。

今度の魯智の肯定はタイコウの気力を奮い起こさせた。

「リクスウ、聞いてくれ……って」

彼がいたであろう場所に振り向いたタイコウは青褪めた。

リクスウの姿は無く、彼がいたはずの場所に妖魔が群がっている。

「リ、リクスウ！」

名を叫び走り出そうとした瞬間、大気が震え、大地が揺れた。

「ガアアアアアアアアアアッ！」

群がる妖魔達の中心から雄叫びが響き渡り、彼を囲む妖魔達を旋風が包む。旋風は雄叫びに呼応するように、その勢いを増して妖魔達の体を螺旋状に切り刻んでいく。

「鬱陶しいってんだよ、テメエらは！」

リクスウの怒鳴り声とともに旋風は弾け飛び、吹き飛んだ妖魔の死体の中、リクスウだけが立っていた。

彼の体に付いているのは返り血だけではない。体のあちこちに爪や牙を立てられた跡から血が滲み出している。

「タイコウ、呼んだか？」

そう問いかけるリクスウは、派手に立ち回ったせいか、肩で息をしている。

「あ、ああ。その……大丈夫？」

「心配すんな。と言いたところだが、今はちょっとやられ過ぎたか」

どうやらトウコウの爪を使うにも、魯智の術と同様に気を消耗するらしい。

「やっぱり素手でこいつらを一度に相手するのはキツイな。せめて何か武器があれば、もう少し頑張れるんだが」

リクスウの言葉にタイコウが反応した。

「ある……かもしれない。今は無いけど」

「そりゃあ、行くトコ行きやあるだろうよ。首都じゃ妖魔退治の剣やら何やらを集めてんだからな。だからって、今から首都で武器を貰ったとしても、それまでにこの町は消えて無くなってる」

「雪割りて新芽拭き桃花咲き溢れる」

師匠オウシユウの言葉を思い出す。

破邪の刀である雪割りはこういう時のために作られたもの。今使わなくてどうする。

「力千割りて白目剥き豆腐湧き溢れる？　ここにきて頭がおかしくなったのか？」

「雪割りて新芽拭き桃花咲き溢れる。師匠のオウシユウ先生が、その言葉から雪割りと名付けられた退魔の刀。あるんだよ、それが。このカリユウの町に」

「それを、先に言えって！　どこだ？」

掴みかかりそうな勢いで尋ねてくるリクスウ。彼の勢いに押されて仰け反りながらタイコウは……。

「……どこに行ったかわからない」

こんなことならリヨウに移動場所を聞いておくべきだった。

第三章 隻眼道士 参（後書き）

（次回予告、タイコウ語り）

妖魔達に襲われるリブン一家を救うべく、雪割りはリクスウの手で抜き放たれました。

リホウに励まされて千人力のリクスウと共に、僕は妖魔大量発生の原因に迫ります。

でも、快進撃を続けたのも束の間。多勢に無勢で僕達は窮地に陥ります。

決死の覚悟で僕が切り開いた道を全力で駆け抜け、ついに妖魔の源泉に辿り着いたリクスウ。

そこで出会った者達を前にリクスウに異変が……。

幼女に焦がれる恋心。燃える思いが敵を焼く。

唸れ雪割り、貫け砕破。邪魔する妖魔は薙ぎ払え。

疾風怒濤の反撃開始。

次回『第四章 宝剣抜刀』に乞うご期待。

第四章 宝剣抜刀 壺

突如現れた妖魔の大群に、交易都市カリユウは混乱に包まれている。

その町の一角にある空き倉庫の中。その片隅に人影が三つ。

「……おトさん……おカさん」

行商人リブンの娘リホウは、心配そうに両親の名を呼ぶ。

心配をかけまいと泣き出す事こそ堪えているが、その声は涙に濡れている。

「大丈夫。大丈夫だよ、リホウ」

リホウの母リヨウは少女をしっかりと抱きしめると、出来る限り穏やかに声をかけた。

「何、心配すんな。あんな化け物達なんぞ、タイコウの兄ちゃんがチヨチヨイと退治してくれるさ」

父リブンも努めて陽気にリホウを励ます。

彼の手には、タイコウが首都に運ぼうとしていた雪割りが握られている。リブンでは刃を抜く事は叶わなかったが、破魔の力があるらしいこの刀を手に行っているせいも、これまで不思議と妖魔との遭遇は少なかった。

「でも、その刀。タイコウにわたしておいた方が良かったのかねえ」

心配そうな表情で呟くリヨウに、リブンが力かと笑って見せた。

「リヨウ、あいつの話をちゃんと聞いてなかったのか？ あいつはこの刀で妖魔を退治するわけじゃねえんだ。使えない刀を持っていても邪魔なだけだろ。無事にタイコウが務めを果たしたらわたせばいいんだ」

リブンがそう言ったものの、リヨウの憂い顔は晴れない。

「タイコウ。大丈夫だよね……」

「心配しすぎだって。あいつなら何かデカイ事やらかしてくれるって俺は確信してるね。そんな男がこんな所でくたばんねえさ」

そう言っているリブンも、内心は不安の塊ではあるのだが……。

それから少しも経たないうちに、親子三人が隠れる空き倉庫の扉が音を立てる。

「何？」

涙声で問うリホウに父親が笑いかけた。

「タイコウだ！ きつと外の化け物やつつけて俺達を助けに来てくれたんだ！」

「あれ？ でも、私はタイコウに明日店を開く場所は言っていないよ。それにこの騒ぎでその場所からも逃げてきてんだから……」

リヨウがそう言い切るのと同時に倉庫の扉が打ち砕かれた。

それは、外にいるモノが扉の開け方も知らないようなモノだとい
う証明。同時にタイコウでは無いという証明。

「この早とちり！ アンタ、あの化け猫のどこがタイコウだって言
うんだよ！」

倉庫に入ってきた人より大きな猫を指差し、リブンの後頭部を叩
くりヨウ。

「こんな状況でいちいち頭叩くなよ！」

「おトさん！ おカさん！」

こんな状況でも普段と変わらないやりとりをする二人に、リホウ
が力一杯しがみ付く。その声は、もういつ大泣きしてもおかしくな
いほど涙を含んでいた。

化け猫はじわじわ間合いを詰めてくる。

「クソ！ 寄るな、来るな！ 俺達食っても美味かないぞ！」

雪割りを鞘ごと振り回して追い払おうとするリブン。しかし、彼
の言葉を妖魔が聞き入れることも無い。

獲物である親子が射程距離に入った瞬間、化け猫は弾かれたよう
に三人に飛びかかる。

「……！」

その時。

少女は自分を抱きしめる母を呼んだのか。それとも娘と妻をかばおうとする父を呼んだのか。はたまた二人共呼んだのか。もしくは、ただの悲鳴だったのか。それは彼女自身も覚えてはいない。

そして、その声は別の場所から発せられた音によってかき消された。

「活！」

次の瞬間、三人の横の壁が砕け散り、一つの影が倉庫に飛び込んできた。

襲いかかる妖魔から隠すように両親に抱かれたリホウ。彼女がその二人の隙間から見たのは、空き倉庫に飛び込んでくる見慣れない部族の服を着た青年と朱の毛並みの虎。

タイコウではない彼は、妖魔とリホウ達の間に入るとリブンが持っている雪割りの柄に手をかけ……。

「おっしやあああッ！」

気合一閃。

青年リクスウの手によって鞘から飛び出した刀身は、青白い弧を描いて化け猫を両断した。

切り飛ばされ二つになった妖魔の亡骸は、青年とリブン一家の両脇へと墜落。リクスウは倉庫に侵入した妖魔達を瞬く間に切り捨てると、タイコウの師オウシュウの作った刀を感心したように眺める。

「いやはや、まったく。こいつはタイコウの師匠の爺様に感謝するぜ」

そう言っつて術で壁を破ったタイコウの方を向くリクスウ。

だが、そのタイコウからの返事は無い。彼は倉庫の中に入った途端降つてきた妖魔の亡骸に押しつぶされ、なんとか抜け出そうと悪戦苦闘の真つ最中だった。

「まさかとは思ったけど。まさかホントにリクスウが雪割りを抜けるなんて……」

リクスウとリブンに助け出されたタイコウは、隻眼の青年が持つ抜き身の雪割りを見てもまだ信じられないという表情。

「抜けると思つたから、俺にこの刀を託したんだろ？ もう少し俺を信じろっつて」

それは確かにそうなのだが、それでもタイコウは驚きを抑えられないでいる。

「危ないところを助けてくれてありがとよ。タイコウとえーっと……」

「俺はリクスウ。タイコウと同じく首都を目指して旅をしてんだ」

そつりヨウに名乗ると、彼女の背中からリホウがひょっこりと顔を出した。

「ありがとう！ タイコウおニーちゃ、リクスウおニーちゃ、虎のおいさん！」

さっきまでの涙声はどこへやら。リホウは満面の笑みを浮かべて言う。

しかし、その礼を言われた二人は少女に笑みを返すどころか、驚愕に顔を引きつらせてリホウを見た。

「……リホウ。今、虎のおじさんって言った？」

「うん」

タイコウの問いに素直に返すリホウ。両親の方は首を傾げている。

「リホウ。それはどなたさんだ？」

「え？ だって、リクスウおニーちゃの後ろに立ってるよ」

リホウは間違い無く虎の相を持つトウコウの姿が見えているらしい。

「まさか、リホウが見てる虎のおじさんってのは……」

「幽霊！」

再び娘を庇うようにして抱きしめるリヨウとリブン。二人に挟ま

れたりホウだったが、今回は妖魔を前にした時のように二人の不安が感染する事は無かった。

窮屈だと言わんばかりにリホウがもがく。

「おトさん、お力さん。この虎のおいさんは悪い人じゃないよ」

直感でそう感じたらしく、リホウは平然とした顔で言う。

(リクスウが雪割りを抜いたのもかなり驚いたけど、リホウにトウコウが見えるってのも相当驚きだ)

内心そう呟きつつ、タイコウも二人を落ち着かせるべく説明を始めた。

「リブンさんもリヨウさんも落ち着いて下さい。リホウが言うように虎のおじさん……トウコウと言うんですけど。彼は妖魔と違って僕達を襲うようなことはなくて、えーっと、リクスウ。説明を頼めるかな……リクスウ？」

そう言えばさっきから彼が一言も喋っていない。タイコウよりもリクスウの方が多弁なはずなのだが……。

不思議に思っただけでリクスウを見ると、彼は未だに呆けたように立ち尽くしていた。

「リクスウ。リホウにトウコウが見えるって驚くのはわかるけど、三人に説明を……」

「……可愛い」

「はい？」

リクスウが相変わらず呆けたまま呟く。その言葉の意味を図りかねて問いかけるタイコウ。

「リクスウ？」

持っていた魯智で彼の肩を叩き、もう一度名を呼ぶ。

耳元でシャランと鳴る錫杖の金輪に、ようやくリクスウは我に返った。

「あ、ああ。タイコウ。どうかしたか？」

「みんなにトウコウの説明を。妖魔が減っているうちに妖魔の世界とつながっている場所を探しに行きたいから、なるべく手短に」

「お、おう。俺にはトウコウって人の霊が憑いてるんだ。俺の先祖にあたる人で、今は無きコウ八族の族長をやった男だ。それで自分の部族を滅ぼされた恨みで、成仏できずに霊体になって現世に残ってる。このトウコウが取り憑いているおかげで、俺自身不思議な力を持ったんだ。それで俺は道士の真似事をするようになって、今度の首都の道士募集にも参加する事にしたってわけだ」

リブン一家に、というよりはリホウに集中して説明するリクスウ。

彼のその様子に、タイコウは一つ溜息をつくとりブン達に向き直る。

「魯智の……この錫杖が言うには今回の妖魔の大量発生は誰かが故意にやったもので、その誰かが使った術を止めれば妖魔の出現を止められるらしいんです。それで、これから僕とリクスウでその術者を探そうと……」

そこまで言うとりホウが両手を上げ、タイコウを注目させる。

「アタシも行く！」

「ダメだ！」

即答で返したのはリブンでもリヨウでもタイコウでもなく、少女になにやら熱い視線を送っていたリクスウその人。

「君みたいな可愛い子を危険に近付けるわけにはいかねえよ。術者をぶっ飛ばす勇姿を見せられねえのは残念だが、それ以上に君のことが心配でしようがないんだ」

リホウの上げた両手を、ギュツと握り締めて熱く語るリクスウ。

「……まあ、危険なのは確かだし。リホウは連れて行くわけにはいかないね」

隻眼の青年の行動に呆れつつ、タイコウもリホウに言い聞かせる。

「ここで待っていてくれ……。俺は必ず君の元に帰ってみせるから」

「とにかく、行ってきます。ほら、いつまでリホウの手を握ってるんだよ、リクスウ」

タイコウに背を突付かれ、リクスウは名残惜しそうにリホウの手を離れた。

「お父さん、お母さん。リホウちゃんをお願いします」

「言われんでも娘は守る」

真顔で言うリクスウに、リブンはいささか不機嫌な調子で言い返す。

「行つといで。無事に帰ってきなよ」

リヨウの方は、なにやら面白い発見をしたと言いたげな顔で二人を見送る。

リクスウが二人に深々と一礼して歩き出すと、彼等のやりとりを眺めていたタイコウもそれに続く。

入ってきた壁から出ようとする青年二人をリホウが呼び止めた。

「タイコウおニーちゃ、リクスウおニーちゃ、トウコウのおいさん。アタシ、ちゃんとして待ってるから絶対に帰ってきてね。絶対、ゼーッタイだよー！」

両手を振って見送る少女に、タイコウは軽く手を振り返す。リクスウは……。

「燃えてきたあ！ 行くぞタイコウ、とっとと悪党ぶちのめして凱旋だ！」

……感無量といったところか。雪割り片手に、怒涛の勢いで外へ駆け出していった。

（まあ、元気になってくれるのは結構なことだ。……恋は人を変えるなあ）

ぼんやりとそんな事を考えつつ、タイコウは魯智を手にリクスウを追う。

「いやー、リホウも随分とイイ男に惚れられたもんだねえ」

ニンマリと笑みを浮かべつつ言うリヨウ。

「何がイイ男だ。どこの馬の骨ともわからない輩に大事な娘を渡せるか！」

対するリブンは憮然としている。

「そうかい？ バカなところなんか誰かさんとそっくりだ。イイ男だよ」

「誰が誰に似てるって？」

「ま、アンタがどう言おうと、こればかりはリホウが決める事だからねえ」

「いいや、許さん！」

両親が話す間で、話題の中心である当のリホウは二人の会話の意味が読み取れず、右へ左へと首を傾げた。

第四章 宝剣抜刀 弐

「しかし、リクスウがそういう趣味だとは思わなかったなあ」

意外だという顔をしてタイコウが言うと、リクスウはムツと顔をしかめる。

「趣味とはなんだ趣味とは。そんな安っぽく言うんじゃないよ」

「あ、いや、ごめん」

抗議の声に素直に謝る。

リブン一家の隠れる空き倉庫を出た二人。最初こそリクスウが景気良く先行して走っていたが、それはこれからの行き先をタイコウの持つ錫杖が示すことを思い出すまで。今は二人並んで町の通りを走り抜けている。

「でも、リホウって確か七つだよ？ ちょっと年齢差があるような」

「たかだか十二の差だ。三桁も年が離れてるわけじゃあるまいし、どうってことない範囲だろうが」

「そりゃあ、三桁は無いけど……え？ リクスウって十九なの？」

「そうだ、よっと！」

通りに残っていた化け物を、リクスウが駆け抜け抜けざま雪割りで切り捨てた。

「僕の方が年上だったのか」

「そうなのか？」

「僕は二十」

「見えねえな」

「良く言われる、よつと！」

そう言いつつタイコウは襲い掛かってきた化け物の一撃を避けると、その喉元に魯智を突き立てる。

「なんにしても、十二歳程度の年の差なんて愛があれば関係無い！」

（言い切っちゃったよ……）

リホウとの遭遇でリクスウの気力が膨れ上がったのはいいが、この調子が続くと傍らにいるタイコウの方が彼の気に当てられて疲れてしまう。

タイコウはリクスウとの会話を中断し、意識を魯智に向ける。

（魯智……頼むぞ）

意識を集中し、魯智を通してカリユウの街を見渡していく。

破邪の錫杖、魯智の持つ力の一つ。前の持ち主から渡された時に見せられた力。それは目に見えない力の識別。

魯智や雪割りから放たれる青白い気。妖魔やトウコウが放つ赤黒い気。双方を聖魔、善悪と分けて良いのかはわからないが、とにかく力はその二種類に分けられる。

そこから先は一度雪割りを探す時に使った方法なので、コツのよ
うなものは掴んでいる。

雪割り探して雪割りの持つ青白い気を探したように、今度は赤黒い気を探すのだ。妖魔の数が減ってきたこの町で、なお赤黒い気の色濃く残している場所。そこが異世界から妖魔が湧いてくる道。

「北西に強い気……まずい、気が膨れてる。妖魔出現第二波が来る
！」

「おっしゃ、急ぐぞ！ リホウちゃんには妖魔の指一本たりと触れ
させねえ！」

雪割りという武器を手に入れた事もさることながら、少女リホウを慕う熱い思いが彼の気を満たしきっている。彼は宣言どおり、リホウ達の元へは一步も近づけさせない勢いで妖魔を切り倒していく。

(……愛の力は偉大だなあ)

リクスウの武器である雪割りとトウコウの爪。その射程から外れた妖魔を討ち取りながら、タイコウはしみじみそう感じていた。

タイコウが魯智を通して探ったとおり化け物達の数はまた増えてきたが、それを上回る勢い（おもにリクスウの鬼神の如き勢い）で進攻する二人は、ジワジワと妖魔の出現地点へ接近していく。

「リクスウ。その角を曲がったら直進。もうすぐ終着点だよ」

出力を抑えた光の矢、碎破で妖魔を撃ち抜きながら指示するタイ
コウ。

「なんだ、もう終いか？ 全く、まーったく、妖魔どももこんな弱
つちい集まりでよく首都を脅かせられたもんだな」

言いながらリクスウは群がる妖魔を、三体まとめて撃破。

「それはリクスウの強さが尋常じゃないから、そう見えてるだけだ
と思う……」

青白い軌跡を描く破魔の刀と白銀の弧を描く獣の爪を振るい、三
面六臂の乱れ舞を見せている隻眼の青年を横目に見ながら呟くタイ
コウ。その声は当人の耳に届いた。

「やっぱ、愛の力ってヤツか？ 待ってる、リホウちゃん！ もう
すぐ帰るかな！」

こいつの方が妖魔なのではないかと思わせる獣のような咆哮を上
げ、リクスウはさらに勢いを増す。

「オラオラ、どんどん行……！」

高笑いしつつ大ぶりに振った右腕。その先にいた妖魔達が、トウ
コウの爪に引き裂かれると同時に、リクスウの左から衝撃が走った。
彼の体が急に脱力を訴える。

「…………お？」

脱力から、リクスウの声も自然と気の抜けたものになってきた。

青年がその隻眼を衝撃の出所へ視線を向けると、そこには脇腹を刺し貫く化け物の爪。

「リクスウ！」

彼の異変に気付いたタイコウがその名を呼ぶ。その一瞬を妖魔達が見逃さない。

（後ろ？　しまっ……………！）

魯智が警告する声を聞きながら、それでも反応し切れなかったタイコウは、背後からの一撃を受け弾き飛ばされた。

宙を舞う彼の意識に、魯智の警告が再び届いてくる。

（妖魔第三波……………リクスウ、逃げて……………）

タイコウが地に落ちる音は、奇跡的に続いていた二人の快進撃の終わりを告げる合図。

「タイコウ！　クソがああっ！」

自分を刺し貫いた爪の持ち主を切り伏せたリクスウが、爪と刀を振り回しタイコウの元へと駆け寄る。

「しっかりしろ！　まだ終わってねえんだ！　寝てんじゃねえよ！」

倒れたままのタイコウと近寄る妖魔の間に割って入ると、雪割りを深々と突き立てる。

(しくじった！)

勢い良く飛び込んだ分、刀身の刺さり方が深い。さらに無理矢理引き抜こうとした拍子に血糊で濡れた手が滑り、雪割りを手放す形になってしまった。

「全く、ドジ踏んだっ！」

襲いかかる化け物の群れを、両手から放つトウコウの爪で引き裂く。

気力満載で動いていた彼も、疲労と出血で体捌きは悪くなっている。タイコウを庇いながら戦うリクスウの体は傷が増え、返り血と自分の血で彼の装束を赤黒く染めていく。

(ここまで来ておいて終いかよ！)

内心怒鳴るが口にはしない。口にしたら、そこで終わる気がする。

爪を振り奮闘する彼を、漆黒の狼のような化け物が大口を開け襲ってきた。

「その口、二度と閉じらんねえ程に掻っ捌いてやらあ！」

そう吼えてトウコウの爪を放とうとする。

放とうとする、だ。リクスウ自身、それが間に合わないことは見えている。

しかし、予想に反して、リクスウの腕を食いちぎるはずの鋭い牙を持つ顎は、彼に届く前に勢い良く閉ざされた。

「月と太陽はただ巡り。風と水はただ流れ。数多の草木は地に根付き、数多の獣は野を駆ける……」

聞き覚えのある口上にリクスウが足元へ視線を移すと、そこには半身だけなんとか起こしたタイコウ。妖魔の顎を力チ上げた姿勢そのままに、魯智をかまえて呪文詠唱に入っている。

「巡る汝は今何処。流れる汝は今何処。我が言の葉に、応えよ、吼えよ……活！」

血と共にタイコウの口から力持つ言葉が放たれ、錫杖の柄に止められた狼の顎が吹き飛ぶ。それと同時に周囲に衝撃波が走り、妖魔と二人の間に申し訳程度の間合いを作った。

「タイコウ、まだ生きてたか！」

助け起こそうとするリクスウを、タイコウが片手を上げて制止する。

「残り五十歩程度。リクスウならどれくらいかかる？」

タイコウの問いに一瞬戸惑いの顔を見せたリクスウ。だが、その意味を悟るとニヤリと笑みを浮かべてみせた。

「……五つ数える頃にはそこで昼寝してら」

「冗談めいた答えにタイコウは「上等だ」と笑みを返し、大きく息を吸い込んだ。

「天を駆けるもの。地を巡るもの。そのもの何処より湧き出で。何処へと流れ行かん」

「よっしゃ、頼んだぜ！ タイコウ！」

リクスウはタイコウに言い放つと、近くに寝そべる妖魔の亡骸に足をかけて雪割りを引き抜いた。

タイコウの問いの意味は、道を開いてみせるということ。

「我が身、我が内流るるもの。集いてかの先に赴かん。我が意思はかの地を指さん……」

タイコウは起こした上半身を震える片手で支え、もう一方の手に握む錫杖でリクスウが進むべき道を指し示した。

使う気力は有りつ丈。これを放てば気絶は絶対。次の目覚めはこの世かあの世。こいつで撃ち止め、最大出力。

彼を中心に巨大な旋風が生まれていく。

「砕破ッ！」

破邪の錫杖魯智の先が眩い光を放つ。

次の瞬間、轟音と共に魯智から撃ち出されたのは、光の矢とは例え難い巨大な鉄槌と化した光の塊。

光の塊は妖魔をかき消し、地をえぐりながらタイコウの示した異界の門があるその地まで、真っ直ぐ道を作り上げていく。

「……………走れ、リクスウ」

術の反動で吹き飛ばされるタイコウに駆け寄りかけたリクスウだったが、彼の口から漏れた声に弾かれたかのように駆け出した。

タイコウが突っ込んだのか、背後で納屋か何かが壊れる音がしたが今は振り返らない。

薄れ行く意識の中、タイコウはリクスウに前進する事を促した。自分がその意思を裏切るわけにもいかない。

「あんニヤロー、道が狭えんだよ！」

妖魔の群れの中に出て来た一本道を、文句を言いながらも全力疾走。

(……………五……………四……………三)

タイコウの術に怯んだ妖魔達が再び動き出す。それらの妖魔に向けてトウコウの爪を振るう。

(……………二……………一！)

爪の一振りです引に切り開いた道を駆け抜けると、リクスウは目標地点が存在する家屋へと飛び込んだ。

第四章 宝剣抜刀 参

入ってみれば、そこは昼間タイコウやガラの悪い連中と喧嘩していた飯店だ。

「へえ、これは驚いた」

飯店に飛び込んできたリクスウに向けられた、大して驚いてもない調子の女の声。

「な！」

リクスウが声をした方を見ると、テーブルの上に腰掛ける女が一人。いや、店の中にいたのは彼女一人ではない。

一人は兎の相を持つ小男。

もう一人はたくましい筋肉を見せ付けている緑の肌をした大男。

さらにもう一人、重厚な鎧をまとい鉄仮面で顔を隠す直立不動の武人。

最後の一人は、房のついた傘をかぶりボロボロの僧服を着た老人

「あの妖魔の群れの中を抜けるとは、なかなかどうして大したもんだね、坊や」

艶やかで長い黒髪の女。鬱蒼と垂らされた前髪で目元は見えず、そう言った口だけが妖艶な笑みを浮かべている。

「ハッ、どっかのバカが引きずり出した妖魔どもが頼りねえだけだろ？」

そう言ったのは、酒樽にあぐらをかく緑肌の大男。

彼の獣のような視線を受けて、兎男がビクリと身を振るわせる。

「どこぞのバカタレが術の途中でやいのやいのと騒ぎ立てねば、もう少し結果も変わったじゃろうがお」

フオフオと笑う老僧のすぐ上を椅子が飛び越えていく。

「用があるなら口で言え、バカタレ」

老僧はしゃがれた声で椅子を投げた緑肌の大男に抗議すると、男も老僧を睨みつけた。

「うるせえんだよ。……ああ、随分とこいつのこと庇うと思ったら、こいつに術を教えたのは爺イだったっけか。大バカの師匠が教えたんじゃ、弟子もバカだわなあ。バカな師匠持つとオメエも苦労すんなあ、エンガよお」

兎の小男に薄笑いを浮かべて話しかける緑肌の男に、老僧が持っていた杖を向ける。

杖の先につけられたいくつもの小さな頭蓋骨が、カラカラと乾いた音を立てた。

「術もろくに使えん若僧が調子に乗るなよ」

「やる気が、枯れ木爺イが」

「およしよ、二人共。まったく、大の男が小さい事でいがみ合って、みつともないっいたらありゃしない……」

女が呆れながら言う。

「おまえらか……この町に妖魔の群れをけしかけてんのは！」

一同の様子を伺っていたリクスウは、そう言うと殺気を込めた視線で彼等を見回した。

だが、彼と視線が合っても誰も怯む様子はない。

「ひゅー、怖え怖え」

緑肌の男はからかうような調子で答えながら薄ら笑いを浮かべ、老僧は「若僧が」と鼻で笑い、鎧に身を包んだ武人に至っては全くの無反応。

「心地良い気迫だね。血まみれの装束も素適だし。惚れちゃいそうよ、可愛い坊や」

足元の椅子を弄ぶように揺らしていた女が、口元に妖艶な笑みを浮かべる。

「ふざけてる、おまえら全員まとめてぶっ飛ばしてやらあ」

「そうそう。一つ訂正させてもらおうわね。坊やがさっき言った言葉

は半分不正解。おまえらじゃなくておまえ、ね。今回の騒動を起こしたのはこの子一人。私達はただの見物人なのよ。ぶっ飛ばすといふなら、その子だけにして頂戴な」

女はヒラヒラと漂わせていた扇子を閉じると、その先で兎の相の小男を指し示す。

「私が相手をしてあげてもいいけど、こちらはこちらで忙しいからねえ」

「そつちの都合なんぞを、いちいち俺が聞き入れると思ってんのか？」

雪割りを構えるリクスウを眺めながら、女がクスリと笑う。

「強引なお誘いね。そういうの嫌いじゃないわよ、坊や。でも、今日は残念だけど遊んであげられないの」

「……時間だ」

それまで沈黙を守っていた鎧の武人が口を開くと、周囲にそう告げる。

「あら？ もう、そんな時間なの？」

全く気がつかなかったと言いたげな女の口調に、武人は黙って少しだけ頷く。

「それじゃあ、この辺でお開きにしましょ。せっかく可愛い坊やに会えたけど、お相手してもらおうのはまた今度ね。もっとも、今度が

あればの話なんだけど……」

「その今度が今だってんだ。おまえらをこのまま逃がしやしねえ！」

その言葉にクスリとだけ笑った女が、腰掛けていたテーブルから下りた。女は兎の相の小男に向かって持っていた扇子を放り投げる。

「エンガ。そいつで坊やの相手をしてあげて頂戴な」

「は、はいな、フェイアン様」

エンガと呼ばれた兎男はアタフタと慌てた様子で扇子をキャッチすると、女に向かって返事をした。女、フェイアンは彼を見て意地の悪い笑みを浮かべる。

「でも、その子は気難しいから扱いを間違えるとアンタが食われちまうよ。せいぜい気を付けるんだね」

そう言われた兎男エンガは一度掴んだ扇子を落としそうになる。

その様子を見て馬鹿笑いする緑肌の男。その姿が一瞬歪む。

続いて武人と老僧も、まるで水面に落とした血の滴が揺らめき消えていくように、その姿を歪ませ、薄れて、やがて消えた。

「それじゃあ、ごきげんよう、坊や」

そう別れを告げた女の姿も同様に歪み、薄れる。

「逃がさねえって言ってんだろっが！」

叫んで飛びかかるリクスウだったが、振り下ろした刃を横から受け止める者がいた。

「させへんわ」

兎男エンガだ。

対峙する二人の視界から女の姿が消える。

女から借り受けた扇子で雪割りを止めた彼は、刀を捌いて扇子を横薙ぎに振る。

エンガの行動に身の危険を感じたりクスウが飛びのくと、扇子が通った軌道に沿って刃が通り過ぎたような戦慄を覚えた。

(妙な武器を使うヤツだな……)

リクスウがチラリと視線を下げると、服の腹の辺りに無数の切り傷が付いている。幸い腹自体には傷は無いようだが、もし退くのが遅れていたら……。

「感のイエヤツやな。大人しく死んどけば、これ以上痛がらんですんだやるつに」

そう言う兎男からは、さっきまでのオドオドした雰囲気が消え、リクスウに対して見下すような視線を向けている。

彼が再び扇子を振りかぶった途端、リクスウの脳裏に再び危険信号がよぎる。

「なっ？」

間合いをあけた分油断があったのか、少し反応が遅れた。

扇子を大きく振り仰ぐと、リクスウの足がいくつも切りつけられる。

「おまえが下手に頑張りよったおかげで、ワシは迷惑しとるんや。これは八つ当たりの一つもさせてもらわな気がすまんわなあ」

再び扇子を隻眼の青年に向かって大振りすると、リクスウが地に伏せるのはほぼ同じタイミングだ。もつとも、リクスウが伏せたのは力が抜けて崩れ落ちただけともとれる有り様だが……。

伏せるリクスウの耳元を、刃が風を切る音がいくつも届いてくる。

（振り方一つで飛んでくる距離が変わるってのか……なんだかトウコウの爪に似てるな）

そう思った途端リクスウは何かを思いつき、それを実行するべく立ち上がった。

「どないしたんや。このエンガ様にはかなわへんと諦めたんか？
今更気が付いても、もう遅いんやけどなあ。じっくりと甚振らせてもらうで」

雪割りを杖に立つ青年の満身創痍の様子に、ニタニタと笑うエンガ。彼に対し、リクスウも鼻で笑ってみせる。

「ハッ。さつきより随分態度がデカくなつたじゃねえか。そんなにあいつ等が怖かったのか？ 要するに、手前えはその程度の下っ端なわけだ。おまけに、今じゃ時間稼ぎの捨て駒にされて……全く、まーったく、テメエは哀れなヤツだなあ、おい」

「いやかましいわっ！」

リクスウの挑発に激昂するエンガ。

先程までの威力からすれば、今度の一撃はさらにその上。そう感じさせる程にエンガは扇子を振りかぶる。

そして、リクスウもまた、エンガと同じぐらいに片腕を振りかぶってみせた。

(トウコウ。ガツンとかましてやるうぜえ！)

「勝負だ、兎面アアアツ！」

同時に腕を振りぬくリクスウとエンガ。放たれたトウコウの爪と扇子の見えぬ刃は、空中で交錯してお互いを食いつぶしていく。

僅差。個々の威力は小さいものの、数で勝る扇子から放たれた刃がトウコウの爪の軌道を抜けてリクスウの体を襲う。

体中から血飛沫を上げふらつくリクスウ。それを勝機と見たエンガが高笑いを上げる。

「ヒヤハハハッ！ これで終いじゃ！ 形が無くなるまで刻んだらわ！」

もう一度振りかぶるエンガは見落としていた。出血し俯くリクスウが、ニヤリと笑みを浮かべた事に。

次の瞬間、カツと軽い音とともに扇子を持つエンガの手から、あ
るべき感覚が失せた。

「なっ？」

振り仰ぐ瞬間、手元から扇子を持つ感触が消えていた。視線を手
元に向けると、確かにそこにあるべき扇子は無い。

エンガが視線をめぐらせると足元に転がる一振りの刀。リクスウ
が持っていたはずの雪割り。彼の視界の隅を上から下へ、影が通り
過ぎる。影を追いかけるように視線を移すと、ちょうど落ちてきた
エンガの扇子が跳ねたところだった。

「どうした！ よそ見なんかしてよ！」

その声に慌てて振り向くエンガ。駆け込んできたリクスウが、そ
の側頭部に蹴りを入れる。

一撃で地に伏した兎相の小男を一瞥してから、リクスウはふら付
きながらも足元の雪割りを拾い上げた。

「血が出すぎたか。ちよいと走っただけでフラフラしやがる。それ
にしても……俺が扇子狙って雪割り投げた事に気が付かねえわ、扇
子一つ失せただけであるおるするわ。エンガとか言ったか？ やっ
ぱ、手前えは他の連中と比べりゃ各下ってわけだ」

形勢逆転。リクスウが立ち上がれないエンガにそう告げる。だが、今度はエンガが意味深な笑みを浮かべる番だった。

「一発くれただけで勝ったつもりなんか？ 笑わせるで、ガキが」
そう言っつてエンガは両手を組んで印を作り上げる。

(こいつが化け物と呼ぶ術ってことか……)

すぐさまエンガを中心として殺気が膨れ上がってきたが、リクスウは動じた様子も無く無造作に雪割りを振った。

「あ……あれ？」

殺気は急速にしばんでいき、エンガの気の抜けた声だけが漏れる。

扇子を弾かれた時と同じようにエンガの手元に衝撃が走り、視線を向ければ片腕が消え失せている。雪割りに斬り飛ばされた彼の片腕はベチャツと生々しい音を立てて落ち、リクスウに腕を落とされた事をエンガは再認識させられた。

「勝ったつもりじゃねえ、勝ったつもりだよ。手前えなんかと一緒にすんなってんだ」

「ヒイイッ！」

目の前に立つ隻眼の青年に恐怖したエンガは悲鳴を上げて後ずさる。

「こ、殺さんといってくれ。ワシはあの連中に言われたとおりになっ

ただけなんや」

エンガの言葉を見殺しリクスウが一步前が出る。

「そ、そや！ あいつらの居場所教えた。それで、ワシの事は目をつむるつちゆうことで、な、な、それやったらええやろ？」

「おまえが放った妖魔な。助けを請う者も平気で襲ってたぞ」

さらに一步。

「こんな傷だらけのヤツをアンタは斬る言っのんか？ 情けがあるなら助けてえな」

「傷だらけはお互い様だろうが。せめてもの情けだ、痛くないように一瞬で斬ってやる」

「そんな情けはいらんわ！」

叫びながら、なお後ずさるエンガの残っている手に、何かに触れる感触があった。

藁にもすがる思いで手に触れたそれを掴むと、彼の心に一筋の光明が射す。

「三つ数える。その間に懺悔を済ませろ」

リクスウは諦めたように俯いたエンガにそう告げると、ゆっくりと破魔の刃を構えた。

首を出すように体を前に倒すエンガ。しかし、それは生を諦めたゆえの行動ではない。

「おまえがな、坊主！」

これからの自分の逆転劇を想像したのか、喜々とした口調でエンガはそう言い返すと手にした扇子を……。

「全部見えてたから……」

そう呟くとリクスウはエンガの持つ扇子を、その手ごと容赦無く踏みつけた。

「全く、まーったく、手前あってヤツは、つくづく救いよしの無いバカだなあ」

足を上げてエンガの手を開放する。

「せつかく、こんなとんでもない得物を手にしたのに使うヤツが手前じゃ、こいつも可哀相だな」

エンガの手を離れた扇子を見ると、溜息を付きつつそれを拾い上げようと手を伸ばす。

リクスウの指と謎の女がエンガに預けた扇子。二つが触れ合った瞬間、それは起きた。

ドクンッ！

全身が震えるような鼓動に息を詰まらせ、リクスウの動きが止ま

る。

(なんだ……これ……)

彼の異常の原因を悟ったエンガが、今度こそ勝ちを確信して狂ったように笑い出す。

「アホウが！ 人の分際でその扇子を手にしようとするからじゃ！ そいつは扇子のナリしとるが立派な妖魔や。そのまま魂を食い尽くされてまうんやな！ ヒヤハハハハッ！」

だが、エンガの解釈は間違っていた。

リクスウに魂を食い尽くされるような喪失感は無く。むしろ、気が膨らんでいくような感覚を覚えている。

それはリクスウの外から染み込んでくるのか、それとも内から湧いてくるのか。出所のわからない気がリクスウを満たしていく。

(どうなったんだ……?)

溢れる力に鳥肌が立つ。抑えきれない力に体が震える。

「ヒヤハハハハッ……ハッ？ ヒイイッ！」

笑い続けていたエンガは今度こそ悟った。自分の考えが間違っていたことに。

「ば……化けもんや……」

彼がそう言うのもどうかと思うが、化け物であるエンガを怯えさせるような殺気が、リクスウにあったことは間違いない。

そして、体の内から響く声で、リクスウもようやく異変の原因に気が付く事になる。

(ホウ王恨メシ……コウタツ憎シ……)

リクスウの縁者であり、ホウ大国の王とその軍師に恨みを持つ者と言えば一人だ。

(トウコウ、アンタか！)

膨れ上がった気はトウコウのもの。リクスウの内にあり、リクスウのものではない気。それが以前から無かったかと問えば、答えは否だ。だが、リクスウ自身の靈感が鈍い事もあり、普段感じ取る事ができるトウコウの霊気は、有るか無いのかわからないと言いたくなる程度の微々たるものだった。

その靈感の鈍いリクスウが、はっきり感じ取れるほど気を満たした理由となると……。

(こいつ……扇子が持っていた妖気を食っちゃまいやがったってのか?)

彼の思考を肯定する言葉も否定する言葉もトウコウは発しない。

「ホウ王恨メシ……コウタツ憎シ……」

リクスウの口を使ってそう言ったただけだ。

(トウコウのヤツに乗っ取られる！)

そう気が付いたものの、もう遅い。リクスウの意識はトウコウの圧倒的な気に圧迫されて次第に薄れていく。

(まずい……これは桁が違いすぎる……)

ドクンッ！

青年の意識に諦めがよぎると、もう一度大きな鼓動が体を襲い、彼は意識を失った。

騒乱の発生地であつた飯店に残つたのは化け物二体。

「いやや、ワシはまだ、こんな所で……」

残つた一体であるエンガは心の奥底から来る恐怖に動く事も出来ず、片腕を失つた痛みも忘れて、ただ体を震えさせる。

「ホウ王恨メシ……コウタツ憎シ……」

残つたもう一体。取り憑いていたリクスウの体に乗っ取つた古の蛮族の長トウコウは、自分の部族を滅ぼした物達への思いを口にすると、大きく息を吸つた。

「ガアアアアアッ！」

復讐開始の合図ともとれる雄叫び。

「ヒイツ！ いやああああっ！」

エンガのその悲鳴は、やがて断末魔の声に変わった。

第四章 宝剣抜刀 肆

タイコウが目を覚ましたのは、妖魔大量発生から三日後の昼下がりに。

「やっと起きたか、タイコウ」

ちょうど見舞いにやってきたリクスウが、彼を見てニツと笑みを浮かべる。

「ああ、おはよう、リクスウ……って、なんて怪我してんだ！ 起きて大丈夫なのか？」

タイコウが心配するのも無理は無い。リクスウはいつもの民族衣装は着ておらず、衣装の代わりなのかと聞きたくなるほど体中包帯に包まれていた。

病室で寝ているタイコウと見舞いに来たリクスウ。見た目から判断すれば立ち位置が全く正反対だ。

もつとも、当人は全く問題無いと言いたげに力カと笑ってみせる。

「初めて化け物と戦った時に大怪我負わされたって言ったろ？ あの時に比べればこれぐらいどうってことねえさ。あの時は妖魔一匹に右目まで持っていかれたが、今回はあの数相手にこれぐらいで済んだってんだから、俺も腕を上げたなあ」

タイコウの心配そっちのけで自画自賛する始末。

「でも、よく生き残れたね、僕達」

「おまえさんは騒動の後、廃墟になった厩の藁の中に足だけ出して気絶してたところを発見されたい。気を失いながら上手いこと隠れたもんだな」

「術の余波で吹き飛ばされたただだよ」

そう言いながら、自分の悪運の強さに少し感心もする。

「僕が道を開いてからリクスウはどうなったの？ こうして話していられるわけだから、見事犯人を懲らしめて術を止められたってことだよ」

ベッドの近くにあった椅子に座ったリクスウは、タイコウの問いかけに苦い顔をする。

リクスウが意識を取り戻した時には飯店は瓦礫に変わり果て、周囲はエンガを含む大量の妖魔の亡骸が転がっていた。

「ああ、あの後な……まあ、なんだ。上手くやったさ」

彼らしくない歯切れの悪い物言いにタイコウは首を傾げた。

「あー！ リクスウおニーチャ！ ダメだよ、寝てなくっちゃ！」

幼い少女の声が聞こえた方へタイコウとリクスウは視線を移すと、そこにはリクスウに向かってムツと怒ってみせる少女、リホウの姿があった。

「リホウちゃん！」

つい今しがたの苦い顔はどこへやら。リクスウは満面の笑みを浮かべて彼女を迎える。

「……寝てなくっちゃって、やっぱりリクスウもまだ重症なんじゃないの？」

「いやー、ただ寝てるだけってのも退屈すぎて疲れちまうもんで、つい、ほら、ね？」

ボソリと呟くタイコウにか、大人しく寝ていないことを怒るリホウにか。おそらく後者にだが、リクスウは言い訳をする。

「ダメです！ 安静にしていなさい！」

リクスウを診る医師の仕草を真似て、リホウが再度リクスウを諷めた。

「リホウもそう言っているわけだし、やっぱり寝ていたほうがいいんじゃないかな」

タイコウに諭すように言われたからか、リホウに叱られたからか。おそらく後者だろうが、リクスウは大人しく椅子を立ち上がると、寂しそうにトボトボと歩き出した。

そんな彼をよそに、リホウがピョンとタイコウに飛びついてくる。

「タイコウおニーチャ！ お怪我は大丈夫？ アタシ、いっぱい、いっぱい心配してたんだよ！」

「あ、ああ、心配かけてゴメンね。僕はもう大丈夫だから……ら……」
ふいに室内に生まれた強烈な殺気に、タイコウは息を呑んだ。

部屋を出ようとしていたリクスウが、一瞬のうちにタイコウの隣まで戻ってきている。リクスウの視線は、三日前対峙したどの妖魔よりもおっかない。

「タイコウ。おまえは共に戦った戦友だが、それとこれとは別。今日からおまえを恋泥棒と呼ばせてもらう」

「いや、それは勘弁して欲しい……」

「無理な相談だ。俺の時は……そこまで心配してもらえなかったってのに！」

握り拳を震えさせるリクスウに睨まれて、タイコウはもう一度気絶したくなった。

「こらこら、抱きついたりしちゃダメじゃないの、リホウ。タイコウはたくさんの化け物を相手にして疲れてんだから」

タイコウにとっては助け舟。部屋に入ってきた母親リヨウの言葉に、娘はタイコウから離れて「ごめんなさい」と謝る。

「おお、ようやく目覚めたのか、タイコウ」

リヨウに続いて入ってきたリブンがタイコウに笑いかけると、彼も力無く笑い返した。

「なんか疲れた顔してるな。まあ、あのドタバタからまだ三日だもんな」

「いや、むしろ今の方が疲れてます」

そうばやいたタイコウの視線が、リブンの持ち物に向く。

「魯智！ 雪割りも！」

病室の中に二つが無かった事を思い出し、慌てたようにそれを掴もうと手を伸ばす。

「ハハハッ！ 慌てなくても持って逃げたりしやしないよ。いやー、危ないとこだったぜ。この混乱に乗じたバカがいてな。偶然拾ったこいつらを、二束三文で売り飛ばそうとしてやがったんだ」

病室の壁に立てかけながらリブンが言う。

「そいつに言っちゃったよ。これはこの町を救った英雄様のもんだ。下手な気を起こしたらただじゃすまねえぞ！ てな」

英雄という慣れない呼ばれ方に、タイコウはむず痒くなる。

「英雄だなんて、そんな……」

「何言ってるんだい。町中のみんながアンタ達のことをそう言ってるよ。町を救った礼つてことで治療代はもちろんだ。そうだ、傷が癒えたら役所にまで行ってきな。いくらかは知らないが報奨金を出すそうだよ」

リヨウの言葉にタイコウとリクスウは顔を見合わせた。

「やったな、戦友！」

リクスウはニツと笑い手を差し伸べる。

「うん！」

タイコウも笑ってリクスウの手を握った。

もつとも、続いて彼の口からボソリと出た「……恋泥棒」の呟きに笑みは引きつったのだが……。

「かー！ 今日もいい天気じゃねえか！」

リクスウが澄んだ青い空を見上げて、気持ち良さそうに伸びをした。

その隣でタイコウは鞆を背負い直す。片手にはだいぶ手に馴染んできた錫杖、魯智。

「この町には随分と長居しちゃったね。旅費も潤ったことだし、先を急がなくちゃ」

これはタイコウが病院で目覚めたさらに四日後、妖魔大量発生から一週間経過した交易都市カリユウの東門での様子。

「俺はさっさと出ようって言うてんのに、タイコウがそうしなかつたんだろ？」

「怪我は治しておかないとまずいでしょ。それに、リホウと離れたくないってごねたり、着る服もあの民族衣装じゃないとダメだーって仕立て直したりしたのは誰さ？」

タイコウの反論に口を閉ざしたリクスウの着ているものは、彼の先祖コウ八族の民族衣装。妖魔との戦闘で服は血だらけ傷だらけとなり、カリユウの町から報奨金を貰ったこともあって仕立て直したものだ。

この町で世話になったリブン一家とは、ついさっき別れを済ませた。

首都のある東に向かうタイコウ達に対し、リブン一家は西へ足を伸ばすらしい。タイコウは故郷の山村レイホウへも彼等が向かうと知り、師匠のオウシユウ宛の手紙を預けた。

手紙に書いたのは自分が首都に向かって旅を続けている事。不思議な老人や錫杖魯智との出会い。このカリユウの町での騒動。そして、雪割りの使い手が見つかった事……。

「ほら、とつとと行くぞ、恋泥棒」

タイコウを置いて先に歩き始めたリクスウが彼を呼ぶ。その腰に下げられているのは、師匠オウシユウが作った破魔の刀、雪割り。

「今行くよ。ところで、その恋泥棒っていうのはやめてよ。僕はリクスウの恋敵になった覚えはないし、むしろリクスウの事を応援し

てるんだよ」

早足でリクスウに追いつくと抗議の声を上げる。

「言葉ではなんとも言えるよな。裏ではリホウちゃんの事を口説いてんだ、きつと」

「そんなことないって。なんていうか。リホウは妹みたいな感じかなあ」

「そこから恋が始まる事だつてあるぞ」

「考えすぎだよ。だいたい、僕はリホウほどの年下と付き合う趣味は無いし」

「あ！ また趣味って言ったな！ タイコウは全く、まーったくわかってないんだ！ 趣味とかそんなもんじゃないんだよ、甘くて酸っぱいこの思いは！」

「リクスウがそうでも、僕は違うの！」

旅は道連れ。急に騒がしくなったタイコウの旅はまだ半ばである。

第四章 宝剣抜刀 肆（後書き）

〜次回予告、オウメイ語り〜

山越えの道中、病に倒れたりクスウと彼を庇ったタイコウは二人して谷底へ真つ逆さま。

近くの森にいたアタシは谷川に浮かぶ二人を助け、医者のカコ先生の元に駆け込みました。

翌日、二人の御見舞に向かったアタシは飛び出してきたタイコウと鉢合わせます。

錫杖を無くしたと大慌てのタイコウに対し、絶対安静を宣告するカコ先生。

そこに帰ってきた先生の弟子ハクタ君が妖魔に襲われお爺さんに助けられたと告げます。

病に倒れた旅仲間。落ちた谷間に華一輪。

九死に一生得たものの、頼みの杖は消え失せた。回り始める運命の輪。

次回『第五章 老師再来』に乞うご期待

第五章 老師再来 壺

「フアックシッ！」

雲一つ無い青空に隻眼の青年リクスウのクシャミが響いた。

「風邪でも引いたの？ リクスウ」

鼻をすする彼を見ながら、鍛冶屋の見習いタイコウが尋ねる。

「いやいや。誰かが俺の事を噂してんだらうよ。イックシッ！」

タイコウの旅は西方の山際にある故郷レイホウという村から始まり、終着はこのホウ大国の東部にある首都コウラン。その目的は師匠オウシュウが作り上げた破魔の刀、雪割りを魑魅魍魎がはびこる首都へ持って行き、ホウ王に献上する事。

リクスウの旅はホウ大国南西部にあるサイハクという町から始まり、終着はタイコウと同じ首都コウラン。その目的は自らに憑いた先祖トウコウの霊の力を用い、首都にはびこる魑魅魍魎を退治する事。

使い手を選ぶ刀、雪割りは運び手のタイコウを選ぶ事は無く、カリユウの町で出会ったこのリクスウを使い手に選んだ。

終着点は同じ。目的も大差無い。雪割りを運ぶ者と扱える者。そんなところから二人は一緒に旅を続ける事になったわけである。

そして、二人の旅はまだ半ばを過ぎた辺り。ホウ大国中央部の山

間部を越える最中。

「全く、まーったく。なんでこんな道を歩かにならんだ」

リクスウは疲労が伺える顔で愚痴りながら、忌々しげに山道を踏みしめた。

彼が愚痴りたくなるのもそのはず。この一帯の山々は西方から流れる川が長い歳月をかけて岩盤を削り続けたため、傾斜がきつく深い渓谷が多い。時に崖にへばりつき、時には谷を越えるその山道は決して旅に向いているとは言い難い。言い難いのだが……。

「何言ってるんだよ。南へ迂回してコウランに向かおうって言ったのに、真っ直ぐ行くのが一番の近道だとか言ってるリクスウが勝手に山に入っちゃったんじゃないか」

そう抗議するタイコウは大して疲れた様子も無い。

「タイコウ。これだけ山道歩いてるってのに元気そうだな」

「そう？ 僕は結構歩きやすいけど」

山村のレイホウで暮らしていたせいだろうかと考え始めた彼に、リクスウが一言。

「山猿が……」

「山育ちだからって馬鹿にしないでよ。レイホウは良い村なんだよ。リクスウの方こそ、用心棒とか体力勝負な事してる割にバテるの早すぎだよ」

「言ってくれるじゃねえか、タイコ……」

言い返そうとしたリクスウの言葉が止まる。

「リクスウ？」

「エックシッ！」

声をかけるタイコウに彼はクシャミで返事。

「やっぱり風邪なんじゃない？」

タイコウは改めてリクスウにそう尋ねながら肩からずれた鞆を背負い直す。その拍子に手にしていた破邪の錫杖、魯智の金輪が揺れシャランと軽い金属音を奏でた。

旅の道中、謎の老人鉄冠子から渡された錫杖。魍魎に関する知識を持ち、その類の知識が浅いタイコウにいろいと教えてくれる。また、妖気、霊気を見抜いたり、邪を破る術法も扱えるようになり、危険の多い旅でタイコウには最早欠かせない物になっている。

「バカ言うな。俺がそんなひ弱に見えるか？ 三回までは人の噂。俺はそう決めてんだ。そうだなあ、たぶんリホウちゃんが俺の事を心配してるんだろうなあ」

そう言っつて今まで来た道を振り返るリクスウ。

旅の途中、交易都市カリユウで出会った行商人の娘リホウの笑顔を思い出し、彼の顔がにやけた。

リホウ七歳。リクスウ十九歳。年の差十二歳の恋。正しくはリクスウの片思い。

「ホントにいい子だったよなあ……フェッ、フェッ……エックシッ！」

「これで四度目、ホントに風邪だね」

再び放たれたクシャミにタイコウは呆れ顔で呟いた。

「おかしいな……。俺が風邪なんぞ引くわきゃねえんだが……」

心なしか足元もふらついている。

そんなリクスウの様子を見てタイコウは足を止めた。

「ちょっと休もうか？」

「何言ってるんだ。早いところ次の宿に辿り着かにゃあ。こんなところで休んでられっか」

「そりゃあ、この山を越えないと次の宿は無いか……。でも、リクスウの様子じゃ厳しいんじゃないかなあ」

「俺はまだ大丈夫だ」

当人は強気でいるがタイコウから見れば十分に病気。

「今からでも遅くないよ、リクスウ。前の村まで引き返そうよ」

「同じ道を辿るなんぞ邪道だ。俺は断固としてこの山を越える」

どの辺りが邪道なのか気になったタイコウだが、その疑問はひとまず脇に置く。今はリクスウを休ませることが優先だ。

「小休憩くらいなら山越えに差し支え無いと思うよ」

「くどい。ほら、とっとと行くぞ」

「あとで泣き言を聞かされるのは僕なんだけどなあ」

「誰が泣き言なんぞ言うもんか。そうやってポケットと突っ立ってるなら俺は先に行くぞ」

そう言って歩き出す隻眼の青年。溜息をつきながらタイコウも彼に続く。

「本当に強情だなあ、リクスウは」

彼の背中に向けて放たれた決して小さくないボヤキは彼の耳に届いていない。正確にはちゃんと耳にまで届いているのだが、今のリクスウにはそれを声として認識する余裕が無くなっていた。

(畜生。やたらと寒いじゃねえか。足も力が入らねえし……)

全身を襲う悪寒と脱力。気を抜けば視界は焦点がずれ、体が前から後ろに倒れそうだ。

「それにしても細い道とは言え、これだけ硬い岩盤の崖をくりぬい

て道を作るなんて大した人がいたもんだね」

絶壁の中腹に作られた栈道。その壁を撫でながら感心したようにタイコウが言う。

「やっぱり作業中に一人二人は谷に落ちたりしたのかなあ。それでも作り上げたってんだから立派だよ、うん」

そんなタイコウの言葉を、やはりリクスウは聞いていない。

(クソツ。体が重てえ。トウコウが実体化したみてえだ)

彼の肩に憑いている先祖の霊トウコウに重さなど無いのだが、今のリクスウには人一人背負って歩いているような疲労感に襲われていた。

「リクスウ？ 話聞いている？」

先を歩くリクスウに問うが彼は黙々と前進を続ける。

(ヤバイな。なんか足の感覚が薄れて……いや、泣き言なんぞ言ってる場合じゃねえ。今は意地でもこの山を越えるんだ。クソ山が！
こんなところで足止めなんぞさせられてたまるか！)

「ド根性ッ！」

「へ？」

急に絶叫して速度を上げるリクスウ。呆気にとられて彼を見ていたタイコウだったが、異変に気づいて慌てて彼を追う。

「止まれ、リクスウ！」

悲しいかな、タイコウのその忠告も意識朦朧のリクスウには届かなかった。

ただ、届いていたとしても、それはもう遅かったかもしれない。

「およ？」

タイコウの目の前を歩くリクスウから間の抜けた声が漏れた。

リクスウの視界が傾いていく。

タイコウの視界の中、リクスウ自身が傾いていく。彼の左足は付くべき地に無い。もしも真っ直ぐ足を下ろしたなら、その先は崖下だ。

リクスウは道を踏み外した。

「リクスウ！」

タイコウは今まさに谷に落ちようとしている隻眼の青年の元に駆け寄り手を伸ばす。

間一髪。タイコウの左手はリクスウの右腕を掴んだ。

だが……。

「あれ？」

タイコウの視界が傾いていく。

リクスウの視界の中、タイコウの体が傾いていく。リクスウを助け上げるために踏ん張ろうとした左足は地に付いていなかった。もしも真っ直ぐ足を下ろしたなら、その先は崖下だ。

タイコウもまた踏み外した。

「うわぁっ!」

溺れる者はなんとやら。慌てて空いていた右手で崖の縁を掴む。

間一髪。などと安堵する暇は無かった。

「ウソだ……」

絶望するかのようなタイコウの呟き。彼が掴んだ縁が崩れた。

「ウソだ……」

もう一度、自由落下を始める中でタイコウは呟いた。

(まずい、落ちる! こんなところで転落死するなんて嫌だ! 誰か! 何か! 何とかして!)

落ちていく中で必死に自分を助ける者、助ける物を探す。

自分の右手。崩れた崖の石。即座に捨てる。

自分の左手。リクスウ。病状が悪化したのか、うわ言のように「リホウちゃん……」と唸り声を上げている。今は無視。

自分の足元。地面があるなら付いている。今はそれが無いから困っているのだ。

自分の周り。落下速度が上がる中で助けてくれる何かなど探しようも無い。

「誰か……」

あてもなく伸ばしたタイコウの右手。その手に何かに触れた途端、手は吸い付くように触れた何かを掴んでいた。そして、掴んだと同時に勝手に口が動き出す。

「天を駆けるもの。地を巡るもの。そのもの何処より湧き出で。何処へと流れ行かん」

（魯智？）

掴んだ何かは錫杖。魯智の持ち主タイコウの口はなおも術の呪文を続ける。

「我が身、我が内流るるもの。集いてかの先に赴かん。我が意思はかの地を指さん……」

（こんな時にどうして術なんて……下？）

彼の疑問に即答した魯智。その指示に従い下を向く。

川だ。だが、浅くはなくても深くもない。二階から飛び降りる程度ならまだしも、これだけ落下の勢いが付いたら川底に激突するだろう。

(ああ、それで)

魯智によって紡がれる術に納得した。以前、全力で術を打ち出した時に反動で自分が吹き飛ばされた事がある。その再現で落下の勢いを消そうというわけだ。

撃ち込む先は川の底。これを放てば気絶は必至。落ちる水面は眼下か三途。上手くいったら御喝采。反動覚悟の手加減無し。最大出力。

タイコウは気を失うリクスウを抱えながら錫杖を眼下の川へと真っ直ぐ向ける。

「砕破ッ！」

轟音と共に激しい水飛沫が上がった。

第五章 老師再来 貳

「オウメイさん。これだけ集まれば大丈夫だと思います。そろそろ帰りましょうか？」

少年の幼さの残る声に娘は周囲の草木から視線を上げた。

「え？ もういいの？」

「はい、欲張って必要以上に採ってはいけないと先生にも言われていますし」

その言葉にオウメイと呼ばれた娘は立ち上がり、少年の持つ籠を覗き込む。

籠の中には摘み取られた野草が八分目ほど。見る人が見れば、それがどれも薬になるとわかるだろう。少年の師匠にして二人が暮らす村の医者カコが使ったために集めた物だ。

「まあ、ハクタ君が言うなら、これぐらいにしておきますか」

地に生える野草を相手にして丸まった腰を伸ばしつつオウメイが告げると、少年は深々と頭を下げる。

「手伝って下さってありがとうございます」

少年の丁寧な口調にオウメイは慌てたようにパタパタと両手を振ってみせた。

「いいよいよ、アタシも仕事がお休みで暇だったから」

「でも、オウメイさんのおかげで早く片付きました。やっぱり感謝です」

言ってもう一度頭を下げる少年に娘は苦笑いを浮かべる。

ハクタ少年はいつもこんな調子だ。厳しいカコ医師の下で働いているせいか、育ちが良いのか終始穏やかな物腰で、話し方は他人行儀と取れるほどに丁寧。

「アタシには真似できそうもないわね」

「はい？」

「いやいや、こっちの話。ひとり言だから」

「それじゃあ僕は帰りますけど、オウメイさんも一緒に来ますか？よろしければ薬草茶をご馳走しますよ」

籠を抱えなおすハクタに対しオウメイはあからさまに嫌な顔をする。

ハクタと一緒に村に戻る事が嫌なのではない。問題はその後の提案だ。

(アタシって、好き嫌いは無い方だと思っているんだけど……)

以前ご馳走になった薬草茶の味を思い出す。舌に触れた瞬間、薬の苦味を濃縮したような強烈にえぐい味。あまりのインパクトに卒

倒しそうになったその味は忘れたくても脳裏に焼き付いている。思い出しただけで舌先が悲鳴を上げている気がする。

「せっかくだけど遠慮させてもらおうかな。ちょっと散歩してこようと思うんだ」

少年の薬草茶の一言で逃げ腰になっているのが自分でもわかる。

「そうですか。いい味を出してくれる野草も見つかったんですけど。残念です」

心底残念そうに言うハクタに対し、オウメイは少年が食い下がりなかつた事に心底安堵した。無論、顔には出せないが。

オウメイの記憶ではハクタは平然とした顔であの劇薬を飲んでい
た。ハクタの味覚がおかしいのか、自分の味覚がおかしいのか。

「とにかく、ちょっと川の方にでも足を伸ばしてみるわ。それじゃあね」

言うが早いオウメイはハクタから、というよりは薬草茶から逃げるようにその場を離れる。

「お気をつけて」

そんな言葉をかけてくる少年の姿はすでに藪の向こうだ。

「あれを飲むなら虎にでも襲われた方がマシだと思っわ」

実際虎に襲われたら「虎に襲われるぐらいなら……」と言葉を翻

すだろうが、そう言いたいぐらい抵抗のある飲み物だ。

少年と別れて森を進むオウメイ。

「さて、これからどうしたものかなあ」

川へ行くとはただ逃げるための口上だ。だが、これといってどこに行かなければならない用事も無い。久しぶりにもらった休みを返上してまで仕事に戻る気にもなれない。どうしたものかと考えながら、川へと足を進める。

「うーん、こんなことなら釣竿でも持ってこればよかったかな」

朝方偶然ハクタに出くわし暇つぶしがてら彼の手伝いをしていたが、これほど早く手伝いが終わるとは思っていなかった。

川に行ったところで水浴びするには季節的にまだ早い。今から引き返して釣竿を取ってこようか。

歩きながら迷うオウメイの耳に突如轟音が飛び込んできた。

「な、何事？」

静寂とは言わないまでも静かな森の中に不釣合いの音量に驚き立ち止まる。轟音の発生した方角は今から向かおうとしていた川。

「崖から岩でも落ちたのかしら？」

なんの予定も無い暇な時間。人並に野次馬精神も持っている。おまけに音はこれから向かおうとした川の方とくればオウメイの判断

は一つだった。

「行って確かめればわかるわよね」

彼女は音のした方へと走り出した。

もともと、向かっていた方角だ。それほど距離は離れておらず、ぐに目的地の川辺に到着した。

「つて、人？」

そう、彼女が辿り着いた川辺から見えるのは水面に浮かぶ二人の人。二人共浮かぶだけで泳いだり溺れたりする様子も無い。

「まさか、これって……」

オウメイは呟き川の上へと視線を向けた。

村人から聞いた話。稀にだが、旅人が崖から足を踏み外してこの谷川へと転落する事がある。さほど深くもない川に落ちた旅人達は頭を打ち大量出血で死亡。そのまま魚の餌になる。時には川の下流にある村の池にまで流れ着くことがあるらしい。

「うう、とんでもない所に出くわしちゃったなあ……」

そうは言っても見て見ぬ振りするわけにもいかない。今この場を逃げて、後で村に流れ着かれたら尚更滅入る。これも何かの縁だ。川から引き上げて弔ってあげねばなるまい。

「……あ！」

流され始めている死体を眺めて困りはてていた彼女だったが、二人の様子に気が付いた途端川に飛び込んでいた。

川底で頭なり打てば当然のように出血する。だが、二人共全く血が出ていなかった。

おまけに崖から落ちてきたからといっても先程のような轟音はないだろう。何が起きたのかは皆目見当がつかないが、ひよっとしたら二人は……。

(生きてるかもしれない！)

死んでいるかもしれない。

オウメイの考えに対し自身の内側から否定的な意見が出たが、今はその声に耳を貸すわけにはいかない。生きている可能性がある限り絶対助ける。

泳いで近寄ってみると、やはり外傷は無い。

急いで川岸に二人を引き上げると、オウメイは改めて二人の状態を調べた。

旅人の一方、落ち方が良かったのかどこかの民族衣装らしき服を着た隻眼の青年は呼吸もある。ただ、熱に浮かされた様子で目は開けない。

もう一方、作業服とも思える装束の青年はというと……。

(息してない！)

脈はある。まだ助けられる。

一瞬躊躇ったオウメイだったが、意を決して青年の口に唇を重ねた。

ハクタの師匠カコ医師から方法は聞いていたが、まさか自分が人工呼吸をすることになるとは思いもしなかった。

(死んじゃダメ！ 死んじゃダメ！ 死んじゃダメ！ 死んじゃダメ！)

それだけを念じて何度息を吹き込んだだろう。

やがて、オウメイの顔に青年が水を吐き出した。

「ゲホツ！ ゲホツゴホツ！」

しばらく咳き込んで涙目になりながら旅人はオウメイを見る。

「大丈夫。どこか痛い所とかは無い？」

「いえ……ええっと」

「アタシはオウメイ。この近くの村に住んでいるのよ」

まだぼんやりとした表情の青年に名乗る。

「僕はタイコウ……ここは？」

「ここはメンサイって村の近くの森。たまたま川からもの凄い音がしたから来てみたら人が浮いてんだから、ホント驚いたわ。それにしても、崖から落ちたんでしょうけど二人共良く生きていられたわね」

彼女の言葉にタイコウの目は次第に焦点を合わせ、不意に体を起こした。

「リクスウ！」

「ああ！ まだ動いちゃダメよ！」

慌てて起き上がる彼を、オウメイも慌てて寝かせる。

「大丈夫、タイコウさんのお仲間の……リクスウさんだっけ？ 彼ならそこにいるから」

彼女の指差すほうに視線を向けると確かに隻眼の青年リクスウが寝ている。

「良かった……」

「え？ あ、ちょっと」

再び目を閉じたタイコウ。慌てて声をかけるオウメイだったが、彼が穏やかに寝息を立て始めたと知ると、その場へたり込んだ。

「良かった……」

安堵の息を吐きながらオウメイが呟く。

(なんだかともんでもない休日になっちゃったわね)

その言葉が出る代わりに彼女の口からは溜息が出てきた。

「ひとまず落ち着いたか。火のような高熱と泥酔したような筋肉の弛緩。火酒と呼ばれるこの地域特有の風土病だ。火酒に効く薬草ならすぐ手に入る。それを煎じて飲ませ、安静にしていれば二、三日で完治するだろう。それまではこの村で休む事だな」

穏やかな寝息をたてるリクスウを見ながら医者と言った。

「ありがとうございます、先生」

タイコウはリクスウの容態を診る初老の医師に深々と頭を下げた。

彼もまた上半身こそ起こしているがベッドの上。

医者は憮然とした表情でタイコウを見る。顔を上げたタイコウは彼の視線がやけに痛く感じた。

「その礼は儂に言う前にオウメイに言うのだな。下手をすればお主はこの小僧の身を案じる事も無く死んでおったのだぞ」

「はい？」

聞き覚えの無い人名の登場に思わず間の抜けた返事を返すタイコ

ウ。

彼が目を覚ました時にはこの部屋のベッドの中。ここに運び込まれたのは昨日だというのだから一日近く眠っていたわけだ。目の前にいる人物がカコという名の医者であることは当人から聞いている。ここがメンサイという村の医者の家の一室だということも、このカコ医師から教えてもらった。だが、それ以外はリクスウを診てから話すとは話を打ち切られていた。

「オウメイ……さんですか？」

「左様。この村に住む娘だ。村長の家で下働きをしている。ふむ、粥なら食べられんこともないな。隣の部屋で薬を作っている。目を覚ましたら言ってくれ。ハクタに作らせる」

カコはリクスウを診終わると席を立った。

「あの……それで御代ですけど……」

言いかけたタイコウだったが、カコ医師の視線に言葉を詰まらせた。

「余計な心配をする暇があったら自分の体を案じる」

言い放つと部屋の扉に向かって歩き出す。

「いや、しかし……」

もう一度呼び止めようとしたタイコウの言葉も医者視線に止められる。

この医者、角ばった眼鏡の奥、細い目に宿る瞳には人の行動を押し留める何かしらの力がある気がする。

カコ医師は、言葉を詰まらせたまま止まっているタイコウと「リホウちゃん……」などと寝言を言っているリクスウを交互に見比べるとタイコウへと顔を向けた。

「旅の者か？」

「はい？」

「世間話だ」

世間話と言うよりは尋問でもしているような口調だ。

「あ、はい。そうです。首都のコウランまで向かうつもりで」

「コウランか。首都の状態がどのようなことになっているのか。噂程度には聞いているのだろうか？」

「ええ、噂程度には」

「それを知っても、首都に向かうとは物好きな話だな」

カコの抑揚の無い調子からは、感心されているのか呆れられているのか判断しにくい。

「その、首都に化け物が現れていると聞いているからこそ向かうんです。僕はそれを退治できる武器を持っているし、彼はその武器を

使って化け物を退治するので」

「神器の所有者と道士という組み合わせか。なら、なおさら養生して早いところ首都に向かわねばならん」

「それで、その養生する御代ですけど。お金なら持って……」

もう一度蒸し返そうとしたが、医者例の視線に言葉を止められる。

「そうだな。首都で成果を上げて来い。それで礼金にしておく」

「期待していただけるのはありがたいです。でも、その礼金を払える保証も無いし……」

言いかけて、またも視線で止められる。

「クドイ男だな。今はまず休め。無理に動かれて倒れられたとあつては余計な仕事が増えるだけだ」

そう言い残しカコ医師は部屋を出た。入れ違いになるように茶器を乗せた盆を持った少年が部屋の中に入ってくる。

「あつと、君は確か」

目覚めてすぐ少年の名も聞いたと思つたのだが、まだ頭が寝ていたのかタイコウの記憶に彼の名が見つからない。

「ハクタです。カコ先生の下で医術を学ばせてもらっています」

ハクタ少年は改めて名乗ると二人のベッドの間に置かれた小さなテーブルに盆を置く。

「でも、お二人とも無事で何よりです。オウメイさんが二人を担ぎこんできた時は本当に驚きましたよ」

また謎の娘の登場だ。

「オウメイさんって、この村の村長のところで下働きしている人？」

「あれ？ ご存知だったんですか？」

「いや、今聞いたところなのだけど」

大の男二人を担いでくるなんて相当の力持ち。下働きというものも薪割とか力仕事専門なのだろうか。

「あの細身のどこにお二人を担ぐ力があるのか、不思議です。それに聞けばお二人は崖から落ちてきたというから二度驚きましたよ」

どうやら細身らしい。

「谷に落ちてこられた方はまず落ちた時点で亡くなってしまわれます。それが大きな怪我も無し。お二人とも幸運な方です」

ハクタ少年の言葉に今更体が震える。もしも、もう一度同じ事をやっても上手く生き延びる自信は無い。

「でも、タイコウさんは呼吸が止まっていたそうですし、リクスウさんはご病気で動けなかった。そのままなら川を流れていたらお二

人とも危険だった。そこにオウメイさんが偶然出くわして助けられた。やはり、お二人は凄い幸運です」

なるほど、カコ医師が言うようにオウメイという女性は命の恩人というわけだ。

「ああ、すみません。怖がらせるような事ばかり言ってしまった……」

無言でハクタの話を聞いているタイコウの様子を怯えと捉えたのか。少年は慌ててタイコウに謝った。

「いや、実際に危ないところだったわけだから……。オウメイさんにはお礼を言わないといけないな」

「その前に安静、ですよ。オウメイさん、仕事が一段落したら様子を見に来ると言っておられましたから、その時でよろしいんじゃないですか？ ああ、そうでした。お茶を出そうとしていたんです」

二人の奇跡の生還劇を話すのに夢中で忘れていたらしい。ハクタはテーブルに置かれた盆から急須を取ると湯飲みに茶を注ぐ。何の茶かわからない独特の匂いが湯気と一緒に周囲に広がっていく。

「薬草茶です。どうぞ。落ち着きますし、体にも良いですよ」

「ああ……ありがとう」

タイコウの脳裏に不安がよぎる。本能がこのお茶は危険だと叫んでいる。でも、笑顔でお茶を勧めてくるハクタ少年を見ていると断りにくい。

「お茶、お嫌いですか？」

「え？ いや。そんなことはない。うん、好きだよ。いただきます」

僅かに寂しげな顔を見せた少年に対しタイコウは反射的にそう受け答え湯飲みを手にしてしまった。

ここまでできてやっぱりイヤとも言いにくい。

(……薬草茶だ。少々味が悪くても体に害は無いはずだ)

覚悟を決めて湯飲みを握り締めると口元へ……。

(臭いなんて気にするな。味なんて気にするな。体に良いはずだ)

近付けるとなおさら目の前の液体が危険に思えてくるが、必死に自分に言い聞かせて湯飲みを口をつけ……。

「ハクタ。ハクタはいるか？」

「あ、はい！ ただいま！」

少年の師、カコの声にハクタが部屋のドアに向き返事をする、タイコウはここぞとばかりに口から湯飲みを離す。

危機を回避し安堵の息をつくタイコウの様子に気付く事も無く、ハクタは慌てた足取りで部屋の戸を開けて出ていった。

熱心に勧めてくれたハクタには悪いが、あの液体を喉に通すのは

度胸がいる。

(まあ、また今度ということ……)

部屋の外でカコと何やら話しているハクタ少年に内心謝りつつ、薬草茶の入った湯飲みを盆に戻す。

後先考え無しでありったけの気力を術に使ったせいだろうか。大して疲労していないはずの体だが、ベッドで半身起こしていることさえ嫌がっている。

タイコウが気だるさの残る体を改めてベッドに横たえると、すぐに眠気が襲ってきた。

以前カリユウの町で妖魔の大群に襲われた時に同じような事をしたが、あの時寝込んだのは丸三日間。それを思えば約一日の睡眠で目覚めたのは症状が軽いとも言える。旅の道中、何度と無く術を使い慣れてきたという事なのか。

寝しなのまどろみの中そんな事を考えていたタイコウだったが、やがて考える気力さえ失っていたはずの頭はまどろみを押しのけ、急加速で回転し始める。

彼の眠気を打ち消していった存在。それは……。

「雪割り！」

叫び慌てて跳ね起き、可能な限り体を右へ左へとねじり部屋中を見回す。

リクスウの眠るベッドの向こうに見覚えのある、忘れるはずも無いその刀は立てかけてあった。

…それを確認したタイコウは安堵の息とともにもう一度ベッドへ…
…寝付く前にまたも跳ね起きた。

「魯智！」

雪割りを探していた時と変わらない勢いで部屋を見回してみるものの彼の望む答えは部屋の中には無かった。

第五章 老師再来 参

(無い！ いったいどこで……)

魯智を手放したのか。

記憶を辿るといっほどに時間はかからなかった。最後に錫杖を持っていた時から今まではほとんど眠り続けていたのだから。その間に無くしたとしたら……。

いてもたってもいられずベッドから降りると脇に畳んであった上着を掴み、急ぎ足で部屋を出た。

(加減無しに碎破を撃った時だ)

廊下と呼べる長さも無い空間を歩みながら上着を羽織る。焦る気持ちに速まる足を落ち着かせる事も無く、玄関の戸を突き破りそんな勢いで開けた。

「キヤッ！」

戸を開けたと同時に向かい側から放たれた女性の声。

それが悲鳴だったのかなんだったのか。声を発したのが誰なのか。

魯智探し一色に染まっていたタイコウの心中にそんな疑問が浮かんだ時には、すでに答えが視界に入っていた。

彼女の澄んだ黒い瞳の中に映ったタイコウの顔が呆けているのは、

その瞳の持ち主の顔が整っていて綺麗だったから。それと、彼女の後ろ頭で束ねられた腰元まである黒髪が、風になびいて綺麗だったから。加えて、陽光に照らされた彼女の黒い瞳と黒髪が、僅かに紫色をおびて綺麗だったから。

見惚れていたところではあつたが、危険を感じたタイコウの意識がそれを許さない。

勢い良く外に飛び出てしまったタイコウは止まれない。戸の前に立っていた娘は驚いたまま動けない。一瞬判断が遅れるだけで……。

(ぶつかる！)

慌てて体をひねり彼女との衝突を避ける事に成功したタイコウ。だが、その後の体勢まで考える余裕は無かった。

「うわっ！ あわわっ！」

無理な姿勢で踏み出した足はもう一方を蹴りつける形になり、バランスを失った彼は勢いに乗っていた体を地に打ち付け、滑り、転がった。

「え？ ちょっと！ 大丈夫！」

目の前の惨事に急ぎ駆けつける黒髪の娘に対し、タイコウは大丈夫だと片手で制した。

(うう、思いつきりぶつけたなあ)

内心溜息を付きつつ打ち付けた箇所を見やると、肩から肘にかけ

て擦り剥けて血が垂れ始めていた。我慢できるとはいえ、痛いものは痛い。

「……って、タイコウさんじゃないの。まだ休んでると思ってたのに、なんでまた先生のところから飛び出してきたの？」

驚きの声を上げる彼女にタイコウも驚いた顔を向けた。

「どうして僕の名を？」

「え？ だって、あの時自己紹介したし。アタシの事覚えてない？」

あの時？

彼女と会っている？

首を傾げるタイコウの様子に娘は「まあ、覚えてないか」と早々に諦め、改めて彼の元に歩み寄る。

「すみません。どうにも思い出せなくて、そのあなたは……」

謝り改めて彼女について問おうとしたタイコウだったが、傷口に手を出そうとしてきた娘に対して慌てて半身を引く。

「あ。ごめんなさい。別に触るわけじゃないから。心配しないで」

タイコウを安心させようとして作ったものが、タイコウの慌てた様子が可笑しかったのか娘は彼に微笑んだ。その笑みが前者だとしたら、その目論見は成功と言える。

「ちょっとだけ、動かないで」

何が起きるのか不安顔ではあるものの、タイコウは彼女の言葉に従い大人しくする。

改めて傷口を見た娘は自分が傷ついたかのように顔をしかめたが、それも数秒の事。意を決して一つ大きく息を吐くと目を閉じて傷に手をかざす。

「子の手をあなたは握り、子の手はあなたを握る。子の目にあなたは映り、子の目はあなたを映す。子をあなたは知っていて、子はあなたを知っている」

娘の口から紡ぎだされる謎かけのような口上。

タイコウが言葉の意味を理解しかねて首を傾げるより早く、異変は起きた。

擦り傷が発していたはずのヒリヒリとした痛みが和らぎ、薄れ、消えていく。オウメイがかざしていた手をどけると、そこには傷一つ無い肌と僅かに残る血の跡。

「えーっと、その、ありがとう。これって？」

「うちの家系にずっと昔から伝わるおまじない。タイコウさん、痛そうだったから久しぶりに使ってみました」

目の前の出来事が信じられない様子のタイコウに娘はおどけた調子で言い立ち上がる。

「改めまして、アタシの名はオウメイ。いろいろとあって今はこの村の村長さんの家で下働きをしているの」

差し出されるオウメイの細い手。握手のつもりで軽く握り返したタイコウの手は強く握られ、彼女の「よいしょっ！」の一言でそのまま体を引き起こされた。

「ところで、そんな薄着で地べたに座り込んでたら風邪ひいちゃうわよ」

クスクスと笑うオウメイに言われて、タイコウは自分が羽織っていた上着が転んだ拍子に脱げて地面に広がっている事にようやく気が付いた。

「重ね重ねお気遣いありがとう。えーっと、僕の名はタイコウ……は知ってるんだよね。先生の作った刀を届ける為に首都コウランへ向かっていたところなんだ」

「先生？ 刀？」

拾い上げた上着を着込んだタイコウがオウメイの問いに頷く。

「僕は鍛冶屋の見習いでね。ここからずっと西にあるレイホウって村で鍛冶屋をやっているオウシュウ先生が僕の師匠。先生が作った雪割りを届けるのが旅の目的」

「雪割りってというのが刀の名前なんだ」

「うん。雪割りて新芽吹き、桃花咲き溢れる。首都にはびこる妖魔を退け、コウランの、ひいてはホウ大国に再び安寧を生み出す礎と

なるべき刃。そういう意味で雪割りって名付けたそうだよ」

「その雪割りを運ぶ途中に崖から落ちた？」

オウメイの言葉にタイコウはようやく思い出した。

崖から落ちた二人を助けた娘の名はオウメイ。目の前にいるその人だ。

「ああ！ そうだ！ あの時は助けってくれて本当にありがとう。それに今も怪我を治してくれて、なんとお礼を言っただけ……」

「いや、その、そんな……」

深々と頭を下げる彼にオウメイは崖下での救出劇を思い出し、顔を赤らめた。

人命救助とは言え目の前の男と唇を重ねたのだと思うと、なんとも居心地が悪い。

「カコ先生から聞いたよ」

タイコウのその言葉にオウメイがドキリとする。

礼を言ってくれるのは嬉しいが、あの時の状況をわざわざ口にするつもりか。

「下手をすれば死んでいたって。あの時も今みたいにおまじないで治してくれたんだね」

「え？」

続けて出されたタイコウの言葉にオウメイは思わず問い返していた。

「え？ って？」

「いや、おまじないって……ううん、なんでもない」

わざわざ自分から訂正して恥ずかしい思いをする必要も無い。

「タイコウさんも、もう一人の……リクスウさんだっけ？ 無事で何よりだったわね」

「リクスウの分もありがとう。それにしても凄いよね、さっきのおまじない」

褒めたつもりで口にした彼の言葉だったのだが、オウメイは複雑な表情を浮かべる。

「確かに、オウメイの力は素晴らしいものだと思うがな」

彼女の変化が気になり問いただそとしたタイコウだったが、不意に背後から響いた男の声に顔が引きつり口が止まる。

「タイコウ。安静にしておくように言っておいたはずだったが……。これはいったい何の真似だ？」

タイコウが振り返った先。声の主であるカコ医師が玄関で仁王立ちしながら彼を見据えている。

修行中に師匠オウシユウに叱られる事は多々あった。その時はオウシユウの怒気に熱を感じたものだ。それに対し目の前の医者から感じる怒気は氷の矢尻のように鋭く冷たい。

「すみません。でも、どうしても探しに行かないといけないものが……」

背中を走る悪寒に耐えながらの必死の言い訳もカコのひとつ睨みで滞る。

「あ、アタシ、お使いの途中だったんで、それじゃこれで……」

どうやらオウメイもカコの冷気は苦手らしい。自分に飛び火する前にと急ぎ足で去ろうとする。

「待ちなさい、オウメイ」

「はい！」

カコ的一声でその場に硬直した。

（アタシ、何かしたっけ？ いや、カコ先生に怒られるような事は断じて……まさか。いや待て。それで先生が怒るのはお門違い……でも、先生はそういう理屈が通じないし）

立ち止まったそのままで、呼び止められた原因について、主に怒られそうな方向で考え込むオウメイ。

「シヨウセン殿に頼まれていた薬ができています。使いのついでに持

って行ってくれんか」

「ああ、村長の胃薬ですか。そういうことでしたら」

怒られるわけではなかったのだと安堵するオウメイだったが、再びカコの凍てつくような怒気を肌で感じてまた体が強張る。

「どこに行くつもりだ、タイコウ」

怒りの矛先はオウメイでは無くタイコウ。

見ればタイコウはカコがオウメイの方を向いている間に忍び足で逃げようとしていた。

「いや、本当に大事な物を無くしてしまって……」

「おおかた崖から落ちた時にだろう。ならばすでに龍神の池にでも流れ着いている」

「でしたら、龍神の池へ探しに……」

「体調を診てからでも遅くは無い。池にはハクタが薬草を採りに行っている。案外、ハクタが見つ付けてくるかもしれない」

「でも……」

「安静だ」

それが食い下がるタイコウを黙らせるトドメだった。

怒鳴るわけでもないただの一言。それでもカコ医師の鋭い眼光が伴うと決して抗えないと思わせるような力を持つらしい。

「あの、カコ先生？」

それまでタイコウとカコの問答を傍観していたオウメイが口を挟む。

「何かね」

「そのハクタ君が……」

言い淀みながらカコの診療所から伸びる道の先を指し示した。

オウメイの指の先。カコとタイコウが目を向けるとその先には慌てて走ってくるハクタ少年の姿。

「た、大変ですー！」

三人の元まで残り僅かで蹴躓きバランスを崩した。

慌てて彼を抱きとめたタイコウに対し、ハクタは肩で息をしながら早口で話し始める。

「あ！ タイコウさん！ た、大変なんです！ 僕、この先の池に薬草を採りに行って……そしたらすっごく大きな……あの薬草は水辺にしか生えていないヤツだから……それで僕、慌てて逃げ出して……化け物が出てきたもんだから……桶が……」

「桶？」

支離滅裂とはこういうことか。

「ちょ、ちょっとハクタ君。落ち着いて」

「あ！ オウメイさん！ た、大変なんです！ 大きい化け物が……あれは水辺にしか生えてないから……僕、慌てて……薬草採りに行ってたんですけど……桶が……」

「大きい化け物が水辺に生えていて、ハクタ君が慌てて薬草採りに行った？ ああ、ダメだ。これだと桶が余るわね」

今度は声をかけたオウメイに対してもう一度説明しようとする。無論、タイコウにした説明以上に支離滅裂ぶりを発揮したその情報は、彼女を混乱させるだけで全く通じていないが。

「落ち着かんか、ハクタ。いったい何があったのだ？」

そのカコ医師の声に一旦は落ち着いたようだったが、またすぐに興奮した声で三人に話し始める。

「僕、先生に言われてこの先の池に生えている薬草を採りに行っただんです。そしたら、その池の近くに凄く大きな化け物がいて、それで慌てて逃げて……」

今度はまともにも聞ける説明である。でも、桶はどこに行った？

「化け物って……」

「それでおまえは襲われたりしなかったのか？ 大事無いか？」

さすがに自分の弟子が危機に直面した事は心配なのだろう。やや狼狽した様子でカコ医師が問う。

「その化け物が追いかけてきましたが、怪我はしませんでした」

「追いかけてきたって……ハクタ君、良く逃げ切れたね」

ハクタの言葉にタイコウが驚きの声を上げる。旅の道中、妖魔に出くわして逃げられたためしのないタイコウにとっては信じられない話なのだ。もっとも、リクスウと同道してからは逃げる事も無かつたのだが……。

「とても逃げ切れるものじゃないですよ！ その化け物がもの凄く足が速くて、もう少しで捕まっちゃうところだったんですから！」

その時の事を思い出したのか、身震いしながらタイコウに抗議するハクタ。

ここまで逃げてきたハクタの口から出た、逃げ切れないという言葉。矛盾するそれにオウメイが首を傾げた。

「え？　じゃあ、どうやってここまで逃げてきたの？」

「仙人様が助けて下さったんです」

そう言って来た道を指差すハクタ。三人が向けた視線の先には一人の老人がのろのろと歩いてこちらに向かっていた。

(あれって……まさか……)

ゆっくりと近づく姿。やがて姿がはつきりと見えてくると、その
覚えのある容姿にタイコウが声を上げた。

「鉄冠子！」

タイコウに錫杖魯智を譲った謎の老人。その人だった。

第五章 老師再来 参(後書き)

〜次回予告、タイコウ語り〜

鉄冠子の来訪から一夜明け、魯智を探しに森の中へ。

一向に見つからず途方に暮れていた僕は、龍神池で祈りを捧げる才ウメイさんに会います。

彼女は別の村から祭りの為にやってきた巫女だと、その素性を明かしてくれました。

オウメイさんと別れた僕が次に出会ったのは鉄冠子。

彼はリクスウに興味を持ち見舞いにやって来ました。

青年の顔を見て、意味深な笑みを浮かべる鉄冠子……。

錫杖魯智は見当たらず。巫女の悩みは尽きやせぬ。

悩みの多き若人を、老師は一人嘲笑う。

秘かに芽吹く裏切りの種。

次回『第六章 人身御供』に乞うご期待。

第六章 人身御供 壺

「それにしても、昨日は散々だったね」

池を眺めつつタイコウは傍らのハクタ少年に話しかけた。

「あの時は、もう本当に死ぬかと思いましたよ」

対するハクタは水辺にしゃがみこんで野草を選び分けながら答える。

龍神の池でカコ医師の弟子ハクタが妖魔と出くわした翌日。少年とタイコウはその龍神の池にいた。

何も妖魔騒動の次の日に現場に赴く事もなかるうにと言いたいところだが、二人ともそうする理由がある。

ハクタの理由は、タイコウの仲間リクスウの病気を治す薬草を採ってこねばならないという事。妖魔が出るかもしれないと採取を遅らせればリクスウの病状は悪化する。

タイコウの理由は、彼が無くした魯智がこの龍神の池に流れ着いている可能性が高いという事。首都だけでなく道中でも妖魔が出てくるご時勢だ。旅を続けるためにもタイコウは魯智を手放したくない。

「何せ生まれて初めてだったんですよ。妖魔と出くわすなんて」

言いながらハクタは体を起こして背後へ視線を向ける。つられる

ようにタイコウも振り返って……後悔した。

二人が背中越しに見た情景。水辺の木々はそこだけ嵐に見舞われたかのように打ち倒され、池を中心に鬱蒼と茂る森の中に広場を作り出していた。倒れた木の幹に付けられた深い爪痕にハクタは襲われた時の事を思い出し身震いする。

「なんとというか。よく生き延びたね」

タイコウもまた妖魔の脅威の爪痕に背筋を凍らせていた。

錫杖魯智が手元に無い今、この瓦礫を作り上げた者を前にしたら無事ではすまない。

「昨日も今日みたいにこの辺りで薬草を探ってたんですよ。それで後ろで唸り声が聞こえたから振り向いたら白い毛の大きな猿の化け物がいて……仙人様がいなかったらと思うとゾツとします」

「確かに危ないところだったね。……それにしてもあの鉄冠子が仙人だとは、只者じゃないとは思っていたけど」

「鉄冠子様とお知り合いなんですか？」

驚いた顔で見上げる少年にタイコウは頷く。

「うん。旅の途中でたまたま出会ってね。それで魯智……ああ、今探している錫杖。あれを貰ったんだ。その時はそんな有名な人だとは全然知らなかったんだけど」

「鉄冠子仙人が村々を襲った妖魔を封じる昔話はこの地方では有名

なんです。何を隠そう救われた村がこのメンサイですから、この地に生まれた子は大国演技より先に鉄冠子の物語を覚えるくらいですよ」

妖魔を相手にした仙人の勇姿を思い出したのか、ハクタ少年は虚空に描いた鉄冠子を見つめ感嘆の溜息をつく。

山間の村メンサイに伝わる伝承。

遙か昔、ホウ大国が誕生するよりもずっと前。まだメンサイの名を持たなかったその村を、龍神の池の名を持たなかった池から溢れた妖魔が襲った。

村の者は妖魔達に抗う術を持たず、ただ死を恐れて逃げ惑う。

一人、また一人と妖魔の牙にかかって命を落とす中、ふらりと現れた旅の老人。

その老人のかざした杖に妖魔達は村人がそうしていたように逃げ惑い、滅していく。

いつしか妖魔達は溢れ出てきた池の底へと競うように逃げ込んでいった。

そして……。

「鉄冠子は、池の底に開いた異界につながる門を龍神に封じさせた。それがこの龍神の住まう池、か」

穏やかな水面を眺めながらタイコウが呟いた。

「昔話だからどこまでが本当なのかはわかりませんよ。ただ、今も尚この池の底には龍神がいて、異界の門を封じていると皆に信じられています」

それはタイコウもこの池に辿り着くまでの道中、村の中を通った時に感じた。

農村であるメンサイは他の農村なら当然のように祀っている農耕の神の社が無く、代わりにあったのは池のほとりに作られた龍の像が住まう祠。

門を封じる龍神がその責務に飽きてしまわぬようにと年に二回、祠を中心に祭りが行われるという話。

かつて村を救い、今また村人を救った鉄冠子を前に、今日のメンサイがあるのはあなたのおかげだと村長が何度も礼を言っていた。

ただ、少年が最後に口にした微妙な言い回しがタイコウの気にかかる。

「ハクタ君は？」

「僕はホウリヨウという村の生まれでこの村の生まれじゃないんです。だから、龍神様の話は村の人ほど信じているわけでは……本音を言えば、ただの作り話だと思っと思っています。でも、昨日の仙人様を見てしまったら納得するしかないですね」

未だ信じられないと言いたげに苦笑いを浮かべつつハクタが答え

「この村にはいつから？」

「二年前の事です。故郷で流行り病があつて、それで父も母も弟も死んでしまつて……」

少年に辛い事を思い出させたとタイコウは後悔。とっさに謝ろうとしたが、ハクタが気にしないでほしいと首を横に振って見せた。

「流行り病は旅の途中偶然村に訪れたカコ先生が治してくれました。それから、先生は一人ぼっちになっている僕を引き取って下さったんです……さて、と」

最後の一言は自分の昔話を終える合図であり、自分の用事を片付けた合図でもあつた。

ハクタ少年は薬草を摘みいれた籠を抱えて立ち上がる。

「この薬草を煎じて飲めばリクスウさんの火酒は治りますよ。僕は先生の所に戻りますけど、タイコウさんはどうされますか？」

「僕は……どうするかなあ」

水辺を調べまわっていたタイコウの方は成果無し。

早く魯智を見つけない。しかし、妖魔が出没した場所に一人残るというのも心細い。一旦引き上げて出直したほうが良いか。

思案するタイコウの横顔に疲れを見て取ったハクタ少年は一つ提案を思いついた。

「お疲れのようですし、一緒に戻りませんか？ 疲れに良く効く薬草茶も淹れますよ」

「あいや、せっかくだけどももう少し探してみるよ」

タイコウに決断させたのは『薬草茶』の一言。

妖魔が恐くないわけじゃない。でも、出てこないかもしれない。

対する薬草茶も恐くないわけじゃない。こっちは今戻れば確実に振舞われる。

タイコウは薬草茶を回避しつつ、妖魔にも遭わない事を祈る事を選んだ。

「そうですか。それじゃあ、僕は戻って先生の手伝いをしますから、暗くならないうちに帰ってきて下さいね」

少し残念そうな顔で帰路に着くハクタ少年を心中で謝りながら見送ると、タイコウは再び龍神の池を見渡して溜息をつく。

この広い池から杖一本見つけるといのは簡単ではない。まして、谷に落ちたモノがこの池に流れ着くと言っても可能性が高いというだけで、流れ着く途中で引っかかっている事だって考えられる。或いは、何の事情も知らない誰か、もしくは何かが拾ってしまったかもしれない。

どこにあるのか。見つけられるのか。タイコウは錫杖探しに身体的というより精神的な疲れを感じ始めていた。

「龍神の住まう祠……か」

彼の視線は池のほとりにある小さな社を捉えた。

気の疲れを紛れさせるに、龍神伝承に湧いた好奇心は丁度良い材料。タイコウの足は龍神が祀られた祠に向いて動き出す。

（龍神というと、紫龍？ ……なわけないか）

タイコウの頭に一瞬浮かび即座に否定された紫龍はホウ国どころか大陸ができる以前から生きている龍の王の名であり、一説では大陸は紫龍からはがれた鱗の一片だとも言われている。神に等しい存在である紫龍が祀られてもなんら不思議は無く、実際に祀っている村があると聞いたこともあるが、この村の伝承から察するに紫龍は規模が大きすぎる。

おそらくこの村で祀られているのは紫龍以外の龍だろうが、生憎と博識という言葉から程遠いタイコウには龍の名というと大陸一有名な紫龍だけ。

「偶像か何かが置いてあるのか……な？」

祠の前に辿り着いた彼は見覚えのある女性に気付き足を止めた。

彼女は手を組み、両膝を付き、頭を垂れて祠に囁くように言葉を紡いでいる。おそらく祈りを捧げているのだろう。

その紫がかつた豊かな黒髪と整った横顔は忘れるはずもない。

「オウメイさん？」

名を呼ばれたオウメイは驚いたらしく小さく悲鳴を上げて振り返ると、タイコウを見て笑いかけた。

「ああ驚いた。いつのまにそこにいたの？」

「つい今しがた。それにしても、随分と熱心に祈っていたみたいだけど」

「まあ、これが仕事みたいなものだから」

彼女の答えにタイコウは腑に落ちないという顔で首をひねらせる。

「仕事？」

カコ医師やハクタ少年から、オウメイは村長の家で下働きをしている女性だと聞いていたが……。

「アタシの実家は代々紫龍様を祀る宮の守でね。アタシも宮に仕える巫女なんだよ」

「そのオウメイさんが祈りを捧げるってことは、この祠も紫龍を？」

「ううん、この池を封じているのは葉鱗后樂葉という龍。紫龍様の鱗から生まれた御息女よ。その縁でアタシの家は龍神の池のお祭りに毎回呼ばれて奉納の舞を舞うの」

「奉納の舞か……見てみたいなあ」

雅な衣装に身を包み舞い踊るオウメイの姿はさぞや綺麗だろう。

「舞はあまり得意じゃないから期待されると緊張するなあ。あ、お祭りは再来月ね」

照れながら答える彼女の最後の言葉にタイコウは落胆した。

全てはリクスウの回復次第だが、病を治す薬草が手に入ったからには村を出るのに二週間と無いだろう。首都コウランへ向かうという目的がある以上長居はできない。

「うーん、再来月なのか。残念だけどさすがにそこまではのんびりしてられないんだ。リクスウの病気が治ったら出立すると思う」

「そっか、首都の妖魔を倒す旅だもん。再来月までこの村でのんびりってわけにはいかないわよね」

「あいや、リクスウはそうだけど僕は刀を届けるだけだから……」

タイコウの脳が急加速。

コウランまでの距離、タイコウとリクスウの進む速度、必要となる日数。計算の上ではレイホウへの帰路でなんとか間に合うかもしれない。

（そうなるならリクスウには一刻も早く病気を治してもらって……治す？）

「そっか！ オウメイさんだ！」

「へ？ え？ はい？」

急に名を呼ばれた当のオウメイは驚くばかり。

「あのおまじない！ 僕を治したヤツ！ あれをリクスウに使えば……」

「あ、それ無理」

即答だった。

「アタシが昨日使ったのは怪我には効くけど病気は治せない。病気を治すおまじないは、アタシ使えないんだ」

「そうかあ。病気を治すつてのは難しいのか」

再び落胆する彼にオウメイはそうでもないと言いつつ首を振る。

「病気を治すおまじないは怪我を治すおまじないの次に使えるようになるものなの。効果の程は人それぞれだけど全く使えなかった人は一人もいなかった。先祖代々そうだったように両親や兄様、姉様も当然のように使うわ。でも、アタシだけはダメ。今まで何度も挑戦したけど一度もおまじないが機能したことは無かった。アタシはうちの家系始まって以来最初の落第者つてわけ」

オウメイは力無く笑った。

親の期待に応えられず、兄や姉に対し劣等感を感じていたのだと。出来の悪い自分を親兄弟がどう思っているかはわからない。ただ、皆が気にしていなかったとしても自分自身が許せないでいた。

「家にいるのも居心地が悪くつてさ。本当は奉納の舞は姉様がやることになっていたんだけど、頼んでアタシが舞う事にしてもらったの」

祭りまで二ヶ月以上あるうちからこの村に来たのも家にいたくなかったから。

ただ居候になるのも心苦しくて村長の家で下働きをすることにしたのだと付け加える。

「祭りの後はそのまま村に居座るか、でなきゃどこかへ旅に出よっかなあ」

「だったら……」

僕達と行かないか？

タイコウはそう言いかけて口を慌てて口をつぐんだ。

旅が楽なものではない事はタイコウ自身知っている。ましてや、自分達の行き先は危険多き首都への道。軽い気持ちで提案して彼女を危険にさらすわけにはいかない。

自らを語るオウメイにかける言葉を探すタイコウ。その様子に困ったように笑いながら彼女は立ち上がって膝に付いた土埃をはいた。

「その様子だと例の杖は見つからなかったみたいね、タイコウさん」

「えっ？ ああ、魯智ね。うん、まだ見つかってないんだ。もう少し範囲を広げて探してみようかと思うんだけど」

「でも、もうすぐ日が暮れるわよ。明日はアタシも手伝うから今日のところは帰って休んだ方がいいんじゃない？」

「うーん、でも……」

早く錫杖を見つけたのが本音だ。多少は無理をしても……。

「まだ病み上がりなんだから無理するときつとカコ先生が怒るわよ」「うぐ……」

痛いところをつかれて返す言葉を失った。

昨日、ハクタ少年の妖魔遭遇の騒ぎが落ち着いた後で、タイコウのカコ邸脱出未遂の話が蒸し返された。

錫杖魯智の重要性を必死に説明してなんとかカコを納得させたものの、その後の彼の不機嫌さはなかなかのもので無言の重圧にタイコウは押し潰されそうになったものだ。願わくば、これ以上機嫌を損ねないでほしい。

「……帰るか」

オウメイが言うように日は傾いて暮れようとしている。今ならまだ怒られる心配は無いだろう。

タイコウの言葉にオウメイは同意するように頷くと祠に向き直っ

た。

「オウメイさんは？」

帰らないのかという問いに彼女は首を振る。

「お祈りの途中だったから」

「ああ、それは悪い事をした。ごめんなさい」

「気にしないで。それより早く帰らないとカコ先生が……」

オウメイは意地の悪い笑みを浮かべてもう一度タイコウを見る。彼女の笑みの意味を察してタイコウはすぐさま急ぎ帰路に着いた。

第六章 人身御供 貳

タイコウの背をしばらく見送ってからオウメイは再び祠に向かい祈り始めたが、ふいに名を呼ばれたような気がして顔を上げた。

(……誰?)

見回してみるが祠の前に座する自分以外の誰も見当たらない。

(気のせい……じゃない)

気まぐれにふいたそよ風に彼女の髪がなびく。何故か、それさえも誰かに髪を触られたような錯覚を思える。

ただ、それは決して不快なものではない。かと言って心地良いと思うものでもない。五感で表現できない何かがある彼女の中にある。

オウメイは今まで感じた事のない感覚に戸惑いながら立ち上がった。

(紫龍様の声? 違うと思う。では、樂葉様の? でも無いと思う)

もちろん、紫龍の声も樂葉の声も聞いたことがあるわけではない。それでも、自分の中の何かが違うと言う。聞いたことが無いはずの声なのに何故か懐かしくもある不思議な響きだ。

(……悪意は感じない)

意を決して声を感じる方に向かって歩き出す。

無造作に茂る草をかき分け、遮る小枝をくぐり、真っ直ぐ。真っ直ぐ。声に呼ばれて歩みを進める。

無意識に近い状態で歩いてきたオウメイには把握しきれてはいなかった。改めて図れば結構な距離を歩いてきている事に気付いただろうが、今の彼女の意識は声に向き、歩いた事への疲れを感じる事も無い。

「ここは……」

辿り着いたのは馴染み深い川原。タイコウとリクスウが浮かんでいた場所だった。

タイコウを助けた時の光景を思い出し、無事であった事への安堵と助ける為に行った行為に照れくささを感じたオウメイ。立ち止まり沈黙していた彼女だったが、もう一度響いた呼び声に我に返る。

呼ばれた方へ振り向いたオウメイの視線の先に、それは居た。

「鉄冠子！」

夕暮れの帰路。タイコウは村の中にかかる橋の上に見覚えのある老人を見つけて呼びかけた。

「おまえさんは……誰じゃったかの？」

駆け寄るタイコウが蹴躓く。

「いや、まあ、忙しい身の上でしょうから忘れても仕方ないか。廃寺でお会いしたタイコウです。鍛冶屋見習いの」

思わぬ返答だったが、なんとか自分を納得させると改めて名乗る。

「むう、どうじゃったかの……」

「ここまで言っても思い出されないか……」。

「鉄冠子が持っていた錫杖。魯智を譲り受けたタイコウです。これでもダメですか？」

これでさすがに思い出したのか、鉄冠子はポンと手を打ってみせる。

「おうおう、あの時の小僧か。いやはや、しばらく見ぬうちに大きくなったものじゃ、見違えてしもうたわい」

「いや、あれから一月と経っていませんけど……」

「細かいことを言うでないわい。神経質な男は嫌われるぞい」

聞き覚えのある台詞にタイコウから笑みがこぼれた。

「それにしても鉄冠子が仙人だとは思いませんでした。どうして言ってくれなかつたんですか？」

「いやなに、様を付けられて祀り上げられるのはどうにも好かんでの」

禿げ上がった頭とは反比例に豊かな白髭をしごきながら答える。

彼の言葉に思い当たる節があったタイコウは思わず苦笑いしていた。カリユウの町で妖魔を退治した後、周囲から受けた賛美の声は褒められ慣れていないタイコウは悪い気こそしなかったが辟易した。

「でも、そんなに凄い人なら初めて会った時もう少し引き止めておくべきでした。あの後で大変だったんですよ」

「ふむ？」

小首を傾げて話の続きを促す鉄冠子にタイコウは彼と別れてから樹木子なる妖魔に襲われた事を話した。

樹木の形をした妖魔樹木子との遭遇。魯智の助言を受けながらの戦い、そして撃破。

静かにタイコウの話聞いていた鉄冠子は、事の顛末を聞き終えるとフオフオと愉快そうに笑った。

「そうかそうか。あの錫杖が役に立ってなによりじゃったわい」

「ええ、魯智が無ければ今ここでこうして歩いている事は無かったです。カリユウでの戦いもあの錫杖にどれだけ救われた事か……」

「カリユウでの……妖魔が大量に湧いて出たという噂は耳にしたが、お主もそこにおったのか？」

驚いた様子で問う鉄冠子にタイコウが頷いてみせる。

「真っ只中でした」

「廃寺の一件どころでは無いの。それこそ良くぞ生きていられたものじゃ」

「あの時は本当に死ぬかと思いましたがよ。魯智とリクスウのおかげでなんとか生き延びたというのが本音です」

カリユウで大量の妖魔を相手にした事を思い出し力無く言うタイコウ。錫杖魯智の助力とリクスウという仲間。それと幾重にも重なった幸運あつての結末だ。もう一度やれと言われてもやりとげる自信は無い。

「リクスウ？」

鉄冠子がまたもや小首を傾げてみせる。

「あつと、言い忘れていましたね。カリユウでいろいろあつて知り合った仲間です。彼もコウランに向かう途中だったらしくて。何より雪割りが自分の持ち主に選んだ事もあつて一緒にここまで旅してきましたんですよ」

こうで三度首を傾げる鉄冠子。

「……ひょっとして雪割りも覚えていませんか？」

(仙人でも歳は取るだろうし、やっぱり鉄冠子って……)

「ボケたわけではないぞい。ただ物忘れがはげしいだけじゃ」

それをボケたと言うのではないだろうかとも思ったが、それを言えば鉄冠子の機嫌を損ねるのは間違いないだろう。

タイコウは改めて雪割りの説明をする事にした。

「雪割りは僕の師匠オウシユウがうった一振りの刀です。鉄冠子が不可視の力を持つと言われた刀。雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れるという願いを込めてオウシユウ先生が雪割りと名付けたんですよ。思い出しました？」

「おう。カチ割りて白目剥き豆腐湧き溢れる。あのカチ割りのことじゃったか」

「……雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れる。ユ・キ・ワ・リです」

「おうおう、その雪割り。使い手を選ぶとは随分と妙な話だのう」

「僕も雪割りが鞘から抜けなかった時は驚きましたが、リクスウが抜いてみせた時に鉄冠子が言った力を持つ刀というのがわかった気がしました。あの刀はただ切れるだけじゃない。なんとというか、使い手を選ぶ意思があるんです。刃に合った鞘があるように、あの刀の柄はそれを握るに見合った手でないと許さない。カリユウでリクスウが雪割りを手にした瞬間、あの刀はリクスウが自分の使い手に足りると見抜き鞘から抜かれた。実際に数知れない妖魔を屠ったのだから大した目利きです」

言いながら、タイコウは使い手や作り手の意思が物に宿るという話をオウシユウ自身から聞いた事を思い出した。

「雪割りが破邪の力を持つのも持ち主を選ぶのも先生の意思が成した事……か。うーん、自分の師匠ながらとんでもない人だなあ」

自分の意思を刀に吹き込むとは……。オウシユウが腕利きの鍛冶屋だという認識はタイコウにもあったが、師の技量はその認識を上回っている。

「その雪割りを扱うリクスウもとんでもない奴ですけどね」

初めて出会った飯店でのチンピラ相手の喧嘩に始まり、詰め所脱獄、リホウ達行商一家救出劇、そして、たった二人のカリュウ防衛戦。

仲間と共に戦った話を興奮した様子で話し続けるタイコウ。鉄冠子は終始黙して彼の話の話を聞き続けた。

「結局、妖魔が出てきていた場所の直前で僕は気を失って、目覚めた時にはリクスウが一人で終わらせちゃったんです」

「ふむ、虎の相を持つ先祖の霊か」

リクスウに憑くトウコウの事だ。

「トウコウの力はそんなじょそこの道士よりよっぽど強いってリクスウは自慢げに言っていましたよ」

「そのトウコウとやら、コウタツに率いられたホウ国の軍に滅ぼされたと言ったな……。世に留まり子孫に憑き今尚それだけの力を揮うか。さぞ恨みが深いのであるう」

「……鉄冠子？」

いつにない真剣な表情に当惑するタイコウ。彼の心配顔を仙人は気にするなとばかりにフオフオと笑い飛ばした。

「そんな辛気臭い顔をした男は嫌われるぞい。いやなに、儂も霊だのなんだのを相手にするのが生業じゃからの。つい気にし過ぎてしまったわい。それで……リクスウといったか？ その旅の仲間はどうしておるんじゃ？」

「リクスウなら火酒という病気にかかってこの村の医者のところまで寝込んでますよ」

第六章 人身御供 参

「…………フェックシッ！」

長い眠りからリクスウを目覚めさせたのは彼自身のクシャミの音だった。

目を開けてすぐに入ってきたのは見知らぬ天井。視線を移せば、これもまた見覚えの無い部屋。

半身を起こして辺りを見回してみるが、それも長くは続かなかつた。

「うう、だりい…………」

体を動かすたびに悪い酒に酔ったような気分の悪さに襲われ、彼の体は寝そべる事を欲してくる。それは抗い難い欲求であり、抗うだけの理屈を並べられるほどリクスウの脳も機能していない。それが当然というように、もう一度横になる。

（何がどうなったんだ？）

記憶を手繰ろうとするがどうにも上手くいかない。記憶にあるのはタイコウと棧道を歩いていた事ぐらいだ。

「…………タイコウ？」

旅の連れの名を呼ぶが返事は無い。先ほど起きて見回した空間にその姿も無かった。

リクスウは嫌がる体を無理矢理起こし改めて部屋を見回してみる。

(……いねえな)

部屋には自分一人。ベッドの脇にはタイコウから渡された雪割りが立てかけてある。隣にベッドがもう一つあるが、綺麗に整えられて使われていたようには見えない。部屋の雰囲気からすれば族の類に捕まったわけでは無いようだが、タイコウの安否はわからない。

「こうしちゃいられねえ」

リクスウは傍らの雪割りを掴みタイコウを探すべく寝台から起き上がり……。

「お？ あら？ うおわっ！」

起き上がろうとする意思とは裏腹に彼の体は起き上がることを拒み、結果顔から床に墜落した。本当ならば痛む顔を抑えて悶絶するところだが、動く事を拒否し続ける体はずるとベッドからずり落ちていく。

「む、ぐう……」

成すすべなく床にずり落ちたリクスウの耳に響くノックの音。

「失礼しま……リクスウさん！」

器を載せた盆を持って入ってきた少年が彼の惨状に驚き駆け寄ってくる。

「起きちゃダメですよ！ まだ動けないんですから安静にしてください！」

「ぐ、むう……」

動けないでいるリクスウを助け起こしたのはハクタ少年。

「おい！ タイコウを……！」

もしタイコウを知っているなら脅してでも居所を聞こうと声を荒げかけてやめる。

目の前にいるのは純朴そうな少年で悪意は感じられない。加えて、大声を出しかけて強烈な頭痛に襲われた。今、自分にとって大声は危険なものだと痛む頭で悟る。

「……俺以外に誰かいなかったか？」

リクスウは改めて、なるべく少年に対しても自分の痛む頭に対しても傷つけないよう配慮した穏やかな声で問う。

「タイコウさんなら仙人様からいただいた杖を捜しに行っていますよ。えーっと、なんて名前でしたか……無知？」

「魯智か……」

「そう、それです」

ハクタは頷きながら彼をベッドへと押し上げた。

「魯智を探しに、ねえ……仙人様の頂き物だつて？」

リクスウも魯智についてはタイコウから聞いている。曰く、鉄冠子という謎の老人から受け取った錫杖だと。そして、只ならぬ力持つ物だということはこの目で見ている。

「それじゃあ、何か？ 鉄冠子つて爺さんは仙人だったと？ つーか、そんな大層なものをなんで無くすかな、あいつも」

「それは、リクスウさんにも関係が……」

「俺がか？」

棧道から落ちた一件以来眠り続けていたリクスウにしてみれば、わかるはずもない事の成り行きだ。

ハクタ少年は彼にこれまでの経緯をかいつまんで説明する。彼の病氣、それが元で起きた棧道転落、瀕死の二人を助けた娘、ハクタ自身が体験した妖魔遭遇、そして仙人鉄冠子の登場。

「まったく、まーったく、我ながら情けねえ話だ。坊主にも迷惑かけたな」

素直に頭を下げて礼を言いたいところだが生憎体が思うように動かない。そんなリクスウの内心を知ってか知らずかハクタは気にしないでほしいと首を振って見せた。

「それで、リクスウさんの火酒を治す薬ができたのでお持ちしたんです」

「おお、ホントか！」

「ああ、慌てないで！ 落ち着いて！」

ハクタが押し留めるが遅かった。歓声を上げかけたリクスウは再び頭痛に襲われて悶絶する。

リクスウの頭痛が治まるのを待ってから、少年は手にした盆をリクスウに差し出した。

「……あー、ハクタ君と言ったかな？」

「はい。なんでしょう？」

「これは？」

リクスウは聞かすにはいられなかった。

もちろん、今までの会話を忘れたわけではないし、この場面で自分の目の前に出されるものが何かは察しがつく。

自分の病気、火酒に効く薬。それが答えだ。

それでもリクスウは聞かすにいられなかった。

目の前の盆に載せられた湯飲み。その中で湯気を立てているソレは毒だと彼の直感が告げるのだ。

「いやだなあ、冗談は無いですよ。もちろん火酒に効く薬草を煎じ

た飲み薬です。ささ、病気を治すためにちゃんと飲んでください」

笑顔で毒の載った盆を差し出してくるハクタからは何も悪意は感じられない。おそらく少年は嘘などついていない。これは薬に違いない。でも……。

(ええい！ 良薬口に苦しだ！ 病気を治すためだ！ 南無三！)

精一杯自分を鼓舞して決意を固めると、湯飲みを掴み一気に飲み干した。

「ああ！ まだ熱いですから、そんな一気に飲んじゃ！」

ハクタが慌てているがもう遅い。リクスウは空になった湯飲みを手を息をついた。

そして、数秒の沈黙。

「あの……リクスウさん？」

ハクタの声にリクスウの反応が無い。気になった少年は彼の顔を覗き込んでみる。

リクスウは湯飲みを持った姿勢そのまま気絶していた。

「ただいま、ハクタ君……って、リクスウ！ 目が覚めたの？」

間をおかず戻ってきたタイコウがベッドに座している彼を見て駆け寄ってきた。

「……リクスウ？」

返事は無い。彼は湯飲み片手に虚空を見据えたまま瞬き一つせず
に静止している。

(湯飲み……リクスウ、まさかあの薬草茶を)

「薬の副作用だ」

「ひゃっ！」

背後からの声に驚いたタイコウが、悲鳴をあげつつ振り返る。

タイコウの後ろに立っていたのはカコ医師。

「この薬は些か強いものでな。服用したものは必ずこうなる。命に
別状は無い。一晩安静にさせておけば完治する」

カコは相変わらずの無愛想な調子で言いながら、不動のリクスウ
から湯飲みを取り上げて床に就かせる。

そして一連の動作を終えたカコは改めてタイコウに向き直った。

その眼光はそう簡単に見慣れるものではない。見られた瞬間タイ
コウの体は凍りついたように強張り動く事を忘れた。

「あ、あの……」

「日が暮れるまでに帰るように言っておいたはずだったが？」

ちらりと視線をそらせば外は既に暗い。

「あ、いや、その……帰りに鉄冠子に会いまして」

「鉄冠子仙人に？」

「は、はい！」

「タイコウさんが捜しておられる錫杖は仙人様から頂いたそうです」

カコから渡された湯飲みを盆に乗せながらハクタが補足する。

「ふむ、仙人と知り合いだったのか」

「は、はい！ あ、それで！ あとでリクスウのお見舞いに来るそうなんですけど」

その言葉にカコが黙る。沈黙はしているが視線はタイコウに向けられたままだ。

（リクスウの状態を考えると面会は控えてもらうべきだったか？ それを勝手に面会の約束をしてきた事をカコ先生は怒るだろうか？ しかし、昼に部屋を出た時点ではリクスウの今の状態を想像するのは無理があつたわけで……。あ、いや、それはそれとして日暮れまでに帰れなかった事を根に持たれている？）

時間にして一秒あるなし。カコの視界の中央で、タイコウはあれこれと思考を巡りに巡らせる。対するカコは。

「そうか」

頷くとタイコウから視線を外し扉に向かって歩き出した。

「カ、カコ先生？」

「なんだ？」

呆気無く素っ気無く終わった会話に戸惑い、タイコウは思わず医師を呼び止める。

「その、どちらへ？」

「来客の用意だ。鉄冠子はハクタの恩人だからな。ハクタ、とっておきの薬草茶が残ってあったな？ アレをお出ししよう」

「あ、はい！ とびきりのお茶を淹れますよ！」

意気揚々と部屋を後にする二人。

(それは止めたほうが良いと思います)

彼らにそう言う勇氣は溜息と共に流れた。

「明日には治るとして……出発は明後日か明々後日になるかな」

今は静かに眠りにについている仲間リクスウを見ながら、タイコウは一人呟いた。

錫杖魯智が見つからないのは困ったものだが、そもその旅の目的は師匠の作った刀、雪割りをホウ王に献上する事だ。リクスウが

回復したら早々に旅立たねば。

「少し、名残惜しいな……」

その言葉の先にあるのは見つからない錫杖と、一人の娘……。

しかし、タイコウがそのまま物思いにふける事は無かった。

「ふむ、そやつがリクスウか……」

「ひょえっ！」

不意に背後から発された声にタイコウは慌てて振り返る。

声の主はタイコウの知っている者。彼が来訪する事は自分自身が約束していた事。それでも、この登場はあまりにも不意打ち。

「て、鉄冠子！ どうしてここに？」

タイコウはそう問わずにいらなかった。

「どうしても何も、おまえさんがそやつを紹介すると言ったじゃろうに」

確かにタイコウは鉄冠子にリクスウを紹介すると別れ際に話した。話はしたが……。

「まさか、こんなに早く来られるとは思いませんでした」

それも、来た事さえ気付かせないで。

「いやなに、どうにもそやつのが気になったのでな。一刻も早く顔を見てみたくなったのじゃ。……寝ておるのか？」

「まあ、そんなところで。カコ先生の話では一晩で目を覚ますらしいんですが、今晚中は気絶しっぱなしみたいで……」

「そうかそうか、それは重畳。都合が良いわい」

「え？」

鉄冠子の言葉にタイコウが問うが、老人は応える様子が無い。リクスウの寝顔をまじまじと見たあとニタリと笑みを浮かべた。

「おうおう、確かにあの時の小僧じゃ。あやつの助力もあれば、なるほど確かにあの数の妖魔を相手に引けを取らなんだ理由も納得がいくわい」

「鉄冠子？ いったい何……を？」

その問いは鉄冠子の杖の一振りで留められる。

「タイコウ……であったな。この村の伝承は聞いたかの？」

改めて老人の振った杖がリクスウの鼻先に突きつけられ、解答を迫ってくる。

「伝承って……龍神の池の話ですか？」

「その様子だと聞いたようじゃな」

問い返したタイコウの言葉は、鉄冠子の問いに対する答えとして足りたらしい。

「遙か昔、池の底が開き妖魔が溢れ出た。その妖魔を追い払い龍の力によって開いた池の底を封じた。……遙か昔か、忌々しい事であったが今となつては懐かしくもあるわい」

急に何を言い出すのだろう。

そんなタイコウの疑問を知ってか知らずか、鉄冠子は話を続ける。

「龍は今尚律儀に封を守つておる。それは堅牢なものだが、人の歴史にあるように難攻不落の要塞も時には容易く崩されてしまうものじゃ。龍の守りとして例外では無い」

「……鉄冠子？」

否。

老人の名を呼んだ途端、タイコウの中でありもしない魯智から否定の言葉があげられたような気がした。

(違う……こいつは違う。鉄冠子じゃない)

魯智の声が空耳であったとしても、自分の感覚もまた今更ながら目の前の老人を否定し始めている。

鉄冠子は先ほどまで話していた時と雰囲気が変わっている。温和な気配は霞のように消え失せ、代わりに滲み出ているのは瘴気。そ

れも魯智も無しで、戦いに疎いタイコウでさえ感じ取れるほどに禍々しい代物だ。

「おまえは何者なんだ？」

「おまえ？ 何者？ 口を慎め若造が！」

老人はタイコウを睨みつけダンと杖で床を打ち鳴らし叫ぶ。それを合図にしたかのように、タイコウの両腕に何者かが組み付いた。

左右に組み付いた相手を見てタイコウは驚愕する。

「え？ って、カコ先生？ ハクタ君？」

二人の名を呼んだが返事は無い。

カコもハクタもタイコウに顔を向けているものの、二人ともどこか朦朧とした様子で焦点が合っていない。その様子に危機感を感じ振り払おうとしたが、腕を掴む力は双方共に尋常ではない。

「おまえ！ 二人に何を！」

鉄冠子を名乗っていた老人を睨みつけるが、当人は悪びれる様子も無く鼻で笑う。

「口の利き方がなっておらぬな。まあ良い。寐なんぞする必要も無し」

老人は言いながら懐から小さな香炉を取り出した。

「離して！ 二人とも、離してくださいって！」

身をよじるタイコウの声は彼を抑える二人に聞こえる様子も無い。暴れる彼を他所に老人は香炉を差し出してくる。

目の前の香炉はいったい何なのか。この香炉で何をしようというのか。タイコウが問いたただす前に変化は起きた。

いつの間にか香炉からは薄桃色の煙が僅かに立ち上っている。

(まづいー！)

そう思ったが遅かった。

タイコウの口から鼻から入った微量の煙に一瞬気を失いそうになる。気絶寸前で辛うじて堪えた。

「頑張るじゃないか」

「……五月蠅い」

目の前のニタリと笑みを浮かべる老人に思わず口答えして、また後悔。

また吸ってしまった。

改めて吸い込んだ煙は決して不快なものではない。むしろ……。

(この香は……桃源の夢を見るようだ)

そう、心地良い。

桃源郷に咲く桃花はこの世のものとは思えない馨しさをもつと言われているが、この香りもそれに劣らないのではないか。或いは、この香こそが桃源の香そのものではないかとさえ思わせる。

だが、それ故にタイコウの心の警鐘が鳴る。この香りに溺れた先に何があるのか……。それはきつと危険な場所だろう。これ以上の香を吸ってはいけないのだ。何とかして抵抗すべきなのだ。

しかし、警鐘を鳴らしていたはずの心がすでに逆転して香の快楽を欲している。

それからタイコウが動きを止めるまで、さほどの時間はかからなかった。

すっかり気の抜けたタイコウの顔を見て、老人はもう一度ニタリと笑みを浮かべる。

「砂楼香。お気に召したようじゃな、タイコウ。もつとも、儂としてはこの香を焚くのはフェイアンに借りを作るようで気が進まなんだが……。まあ、先ほども使ったんじゃ。これ一つで貸し一つならば、せいぜいこの香は利用させてもらうとするかの」

決して小さくなかったその鉄冠子の言葉も、今のタイコウには聞こえた様子は無い。

「先ほど少し話していた龍の封印じゃがな。儂一人では封を破る事は難しいが、協力する者がいれば案外容易く破れるんじゃよ。この

村には紫龍を祭る巫女が来ていると聞いた。当初はその娘にしようかと思っておったんじゃが……気が変わった」

香の立ち込める香炉・砂楼香を待った老人は、そのままタイコウに近づき耳元で囁く。

「タイコウよ。今宵そのリクスウを抱えて龍神の池に来い。お前達が龍への生贄じゃ」

第六章 人身御供 参（後書き）

（次回予告、オウメイ語り）

姿無き声の先にあつた一本の杖、魯智との出会い。

そして、その夜。月下の龍神の池。

鉄冠子はタイコウとリクスウを生贄とし、異界の門を封じる龍神の解放を試みます。

鉄冠子の計画を妨害すべく乱入したアタシでしたが振り返りにあい、傷を負って龍神の池に没しました。

力尽き、消えつつある命の火は走馬灯となりアタシを夢の中へといたしません。

そして、夢の終着点。故郷の桃園の夢の中で、アタシは一人の女性に出会いました。

瘴気渦巻く外法の儀式。娘一人に止められぬ。

今際の夢に出会った姫は、池の龍神、名は樂葉。

桃園の巫女、只今覚醒。

次回『第七章 龍神巫女』に乞うご期待

第七章 竜神巫女 壱

オウメイはビクリと体を震わせた。

誰かに呼ばれた。呼ばれはしたがここには誰もいない。夕暮れを過ぎて闇に支配されつつある川原にいるのは彼女ただ一人。聞こえるのは川のせせらぎと風で打ち合う草木の音だけ。自分以外、誰もいない。それでも……。

「あなたが呼んだの？」

思わずそう尋ねた。誰でもない。目の前のその杖に。

断崖の下を流れる川の端。夜ともなれば月の光も満足に射さない暗い中で、オウメイの目にはその錫杖がやけにはっきりと見てとれた。

川に半身を浸しながら砂利に寝そべる一本の錫杖。小波に揺れた拍子に杖の先の金輪が小さくシャランと音を立てる。

オウメイの問いに錫杖が返した答えは、言葉という形ではなかった。

耳に聞こえる音ではない。目に見える変化でもない。肌に感じる鼓動でもない。だが、不思議と杖が肯定している意思だけは認識できる。

続けて杖から飛んできた意思是、助力を求めるものだった。自分の話を聞いて欲しいと、自分の行動に協力して欲しいと、とにもか

くにもまずは自分をこの冷たい川から拾い上げて欲しいと。

形を持たない漠然とした意思だけに杖の意思の解釈はオウメイ次第。どこまで意思の解釈が当たっているかはわからないが、彼女の目には春先の川は冷たかろうと思える。少なくとも、自分を拾って欲しい事だけは間違えていないだろう。

「あ。あなたってひよっとして魯智って名前じゃないかしら？」

その問いに返ってきた肯定の意思。

タイコウがこの魯智を探していたように、魯智もまた持ち主であるタイコウを探していたのだ。

「まさか、落ちた所から動いていなかったなんてね。道理でタイコウさんが探しても見付からないわけだ」

そう言いつつ川辺から錫杖を拾い上げ、ドキリとした。

手にした瞬間、先程までより遙かに鮮明な意思が魯智から流れてきた。その途端、自分の感覚が研ぎ澄まされ、自分の背後にある禍々しい瘴気に気付かされたのだ。

(嫌ッ！ 怖い！)

慌てて振り返るがそこに誰がいるわけでもない。それでも安堵の息をつく気にはなれない。今尚、彼女の感覚は瘴気を感じ続けている。

「な……なんなのよ、魯智！ あなたの仕業？」

文字通り魯智に掴みかかる。

否。

オウメイの剣幕に慌てるように、錫杖はすぐさま否定してきた。自分を手にした事でオウメイ自身が持つ感覚が鋭敏になっただけで、感じ取っている瘴気の類はまやかしではなく実在するものだ。

魯智の言う事が正しいとするなら、この瘴気はどこから流れ出たものなのか。彼女の疑問に従い鋭さを増す感覚が瘴気を探るが、余りの気配の濃さに出所が掴めない。

錫杖を手にしたまま、じっと辺りを窺うオウメイの体に次第に鳥肌が立っていく。

(き……気持ち、悪い)

瘴気の毒気に当てられたのか、体に悪寒が走り息苦しさに胸を押さえる。

目を瞑ろうと、耳を塞ごうと、口を閉じようと、肌を覆おうと、鼻を摘もうと、魯智によって高められた感覚は瘴気を認識し、認識すればするほど体は不快感に蝕まれていく。

いつそのこと気を失ってしまえばと思ったが、心に響いてきた魯智の叱咤の意思にオウメイは気持ちを立て直す。

(瘴気も気の内。紫龍様の神気に触れる事が仕事の家系にあるアタシが、この程度の気に屈していたら皆に笑われちゃうわ！)

錫杖の叩きつけるような意思是決して優しくはないが、頼もしくはあった。

質の違いに戸惑ったが、よくよく考えれば瘴気も神気も気だと言うなら、あとは紫龍に祈る時の心得をなぞるのみだ。

一人の気など神格を持つ紫龍と比べ物にならないほどに弱小。無理に紫龍の気に抗えば容易く潰れてしまう。ならば……。

「心鎮め、己を知る。気に抗わず、己が脇へ通す」

一度大きく深呼吸してから家に伝わる心得を声に出してなぞる。

まず大地に根を張る樹木のように己の位置を保つ。保たねば、気の流れに吞まれて自分を見失う。

そして、風に揺らぐ枝葉のように気を受け流していく。抗えば、気の流れに負けて自分が折れる。

「やれやれ、紫龍様のような品格が無いせいか随分勝手が違うわね。手間のかかる……」

数分の精神統一の後、オウメイは苦笑いしつつばやいた。

落ち着いたところで改めて周囲を窺う。

瘴気は未だに健在。だが、先ほどまでのような苦しさは無い。瘴気に毒されていた頭もすっきりしており、これなら瘴気の出所を探る事も不可能ではない。

(森の中……あれ？ 瘴気の源泉の近くに誰がいる？)

毒持つ気をいなししている今なら、魯智に高められた感覚が離れた気配も探ってくれる。さすがに誰なのかまでは知れないが……。

「な？ 近寄れって？」

瘴気の源泉を探り当てたオウメイに、今度はそこに接近しよう魯智が指示してきた。

集中力が途切れれば再び瘴気の渦の中へ逆戻りという状態で、瘴気の源泉に近寄るのは自殺行為とも思えた。

「冗談言わないでよ！ 一刻も早く逃げ……」

魯智に食ってかかるオウメイだったが、大声を出すなどという新たな指示に口を閉ざす。

(わけわかんないわよ。どうして危なっかしい森の中に入れて言うかなあ。遠回りだけど森を迂回して村に戻れば、こんな気持ち悪い思いしなくてすむじゃないの)

彼女の抗議に対して魯智の返答は簡単だった。

そこに戦うべき相手が存在するからだ、と。

(言っておきますけど、アタシはこんな尋常じゃない瘴気の中にいる何者かと争う気はありませんから。アタシには戦う手段が無いの
ゆ)

できることと言ったら、簡単な怪我を治せるぐらいなのだから。

しかし、それでも魯智は指示を覆さない。

しばし問答を続けたものの相手は杖だ。こちらの行動を抑制できるものでもない。オウメイは魯智の抗議を無視して、森を迂回するべく歩き出す。

(ホントに強情だなあ。どうしてそこまで拘るのかしら)

タイコウと合流した時に、如何に戦うか策を練りたいから。

魯智の答えに彼女は足を止めた。

無論、そこまで鮮明な解答があったわけではないが、魯智の意思を自分なりに解釈すればそうなる。

今、自分が感じている瘴気が村に害成すとしたら、村の住人で退けるものではない。実力は未知数だが、妖魔の類と一戦交えた事があるタイコウならば、或いは……。

決心と呼べるほどの心構えは無い。見つければ無事ではすまない予感もある。でも、ここで逃げても後でこの瘴気が村を襲えば同じ事。この瘴気に抵抗するきっかけが今ここにあると言っのなら、タイコウと魯智に協力するべきではないか。

(うーん。でも、偵察と言ってもアタシにできるかしら)

揺らぎ始めた彼女を後押しするように、魯智が誘導すると告げる。

その途端、頭の中に浮かんだのが、森に入り始めるオウメイ自身の姿。

（な、何？ 魯智の仕業？）

当惑するオウメイに魯智から肯定の意思が飛んできた。頭に浮かんだ自分と同じように動けば、瘴気の源泉に近付けると。

（まだやるとは言っていないじゃない）

文句を言いながらも、オウメイは魯智に従い歩き出した。

足の踏み場。支える手の位置。姿勢。頭に浮かぶ自分の所作を真似ていく。

（自分を追いかけているみたいで奇妙なものね）

魯智を手にしてから混乱続きで感覚が麻痺してきたのか、その程度の違和感は気にならなくなっているようだ。

右の木陰、左の草むらと、少しずつ瘴気の源泉へ近付いていく。

（そういえば、随分と大人しいわね。魯智）

オウメイに自分の姿を見せ始めてから、錫杖自体の声は響いてこなくなっていた。響かないと言えば、錫杖の先に下がる金輪さえ音を立てない。

（それだけ慎重に行けってことか……あれ？）

彼女は視線を前に向けて足を止めた。

さっきまで頭の中にいたもう一人の自分が、いなくなっている。

(ちよつと、魯智。あなた、まさかここまで誘導しておいて、後は自力で何とか進めって言うんじゃないでしょうね)

否。錫杖から返ってくる否定の意思。

どうやら、これ以上進むと相手に感づかれるらしい。

(とは言っても、瘴気が濃い場所まではまだ少し離れているんだけどなあ)

困ったように森の奥へ視線を向け、オウメイは思わず驚いて声を出しそうになった。

木々の隙間から僅かに見える瘴気の源泉。その傍らに立っていた一人は、オウメイの見覚えのある人物だった。

第七章 竜神巫女 貳

(仙人様！)

はつきりと見えなかったが、顎にあれだけ豊かな白髭を蓄えている者は、村の者の中にはいない。

否。

(え？)

魯智からの返答に、またもや声に出しそうになる。

手にした錫杖は言う。アレは鉄冠子では無い。異界の者であると。

(いや、でも……あの姿は鉄冠子仙人にしか見えないじゃない)

オウメイの抗議に魯智は再び言う。杖であるが故にその者の姿は見えない。だが、見えないからこそ、観えるモノもあると。

言われてオウメイも合点がいった。

鉄冠子から魯智を渡された話は、タイコウから聞いている。五感ではない感覚、気を感じることに特化しているこの錫杖なら、前の持ち主である鉄冠子の気配も覚えているというもの。それが彼の地に立つ者の気配と合致しないのだろう。

(じゃあ、いったい何者なんだろう……)

瘴気の間近にいて、それに抗う様子も無い事を考えれば危険な存在。村に何らかの災いをもたらしかねない何かだ。

(鉄冠子の偽者と……まだ誰かの声がする)

気配を探りなおすが、色濃い瘴気に邪魔されて感知しきれない。だが、森は漂う瘴気にあてられたのか、周囲に鳥や獣といった生き物の気配が無く、澱んだ空気を薙ぎ払う風も無い。全神経を聞く事に集中させれば、なんとか会話は聞き取れそうだ。

オウメイは軽く深呼吸すると、目を閉じて微かに耳に入る声達に意識を集中させた。

「へえ、そりゃあ驚きだ。あのカリユウで暴れた坊やと鉄冠子に縁のある子ねえ」

まず聞こえたのは、さして驚いてもいない調子の女の声。

「せっかくじゃ、奴等を使う事にした。お前の香を使わせてもらうぞ、フェイアン」

老人の言葉に女はフツツと笑みをこぼす。

「好きに使ってかまやしないよ。砂楼香はアンタに進呈した物だからね」

「ふん、恩着せがましいことを……」

「恩だなんて思う事はないさ。あの御方のお役に立つと思えばこそ一手なんだから。たまたま、その布石の先にアンタがいたってだ

けのことよ」

そのやりとりを聞いていた男が、苛立たしげに溜息をつく。

「ったく、お前等のやり方にはついていけねえな。村を丸ごと叩いちまえば、それでお終いだろうが」

男の台詞を、老人は鼻で笑う。

「単細胞が。異界から妖魔共を呼び寄せろのぞ。餌の一つも用意しておかねば集まりも悪いわい」

「そうやってまどろっこしい事をしてやがるから、クソ爺イの間抜けな弟子はくたばっちまったんだろうが」

「暇つぶしの戯れに呪詛を二つ三つ教えてやっただけじゃ。あんな小物を人の弟子扱いするでないわ、バカモノ」

「およしよ、二人共。今はつまらない口喧嘩なんぞしてる場合じゃないだろう」

女が呆れながら二人を諫める。

「さあ、あの籠を黙らせる二人の生贄。妖魔達を呼び寄せる餌。お膳立てではできたんだ。せいぜい盛大にやっつくれよ、モウエン」

「ったく、枯れ木爺イに仕事を譲るつてのは気乗りしねえな」

「文句があるなら術の一つも使ってみるんじやの、若僧が」

「んだと、コラアッ！」

「あーもう、ホラ、とっとと帰るよ、ドウマ」

女の声と共に曖昧だった気配が消え、瘴気の渦の中に残ったのは鉄冠子の偽者一人。

オウメイは一步も動けないでいた。

(龍を黙らせる二人の生贄。妖魔を呼び寄せる餌……)

ゆっくりと目を開け、女の言葉を頭の中で思い返す。

会話からすると、偽の鉄冠子はモウエンという名の老人。彼が行おうとしているのは、龍神の池の封印を解除し、異界との道を開いて妖魔を呼び出すという計画。実行されれば村の者は皆殺し、生贄となるタイコウとリクスウはもちろん……。

(死ぬ……)

一瞬。ほんの一瞬。苦悶するタイコウを思い浮かべ、その途端に気が散じた。その気の乱れを待ちわびていたかのように、瘴気がオウメイの気を蝕む。

圧倒的な圧力で押しつぶそうとしてくる瘴気に悲鳴を上げそうになるが、ギリギリで食い止める。

だが、声を上げない事だけが彼女にできた最後の抵抗。体勢を崩したオウメイは立て直す間も無くその場に倒れた。

動くもののない静寂の森の中で、その音ははつきりと偽鉄冠子の耳にも届いた。

「誰じゃ！」

偽鉄冠子の怒鳴り声が森に響き、オウメイは内心舌打ちする。

「盗み聞きとは悪趣味な輩がいたものじゃな。それ相応の罰を受けてもらっぞ」

落ち葉を踏み、茂る枝を押し分けながら進むその音は確実にオウメイに向かってきている。

（落ち着け、アタシ！ もう一度気を保つんだ）

もう一度、目を閉じて気を静めるようと試みる。だが……。

「ほう、巫女の小娘か」

間近で響く老人の声に、それは中断させられた。目を開けてみれば、眼前に立ち塞がる偽鉄冠子モウエン。発狂して奇声の一つも上げなくなつたオウメイだが、ギリギリで押し留める。

「この瘴気深い森の中に踏み込むとは、巫女の血は伊達ではないと言ったところか」

褒められているようだが、老人の表情からはそうは見えない。むしろ邪魔者扱いである。事実、計画を聞いてしまったオウメイは偽鉄冠子からすればその通りなのだろう。

対するオウメイに言葉を返す余裕など無かった。

瘴気の具現とも言える老人を前にしたオウメイは、頬をゆっくりと伝う脂汗を拭うどころか、恐怖に指一本動かすことさえ考えられない。目は瞬きを忘れたように見開かれ、正しい呼吸を忘れたように浅く荒い息を吐いている。

「じゃが、それも限界が近いらしいの。この場で殺してやろうと思わんでもないが、儂も儀式の準備で忙しい。おまえはこのまま捨て置こう。残り数刻、この瘴気にせいぜいもがき苦しんで死ね、小娘」

地に這いつくばったまま動けないオウメイの姿を嘲笑いながら、偽鉄冠子が告げる。

このまま死を迎えるなんて御免だ。そう思いはするが、体中に絡みついた瘴気に蝕まれたオウメイには、抗う事も逃げる事も許されない。悔しさに涙する事さえも。

(タイ……コウ……)

胸の内に、その名を呼ぶ。

例え口に出して呼んだとしても、届くはずも無い者の名。

その一言を最後に、オウメイの意識はゆっくりと暗転していく。

刹那。

誰かが微笑みかけたような気がして、オウメイは閉じかけた目を見開く。

視界に入るのは、静寂の闇に包まれた森の木々と草むら。

しかし、確かに誰かが自分を見た。一瞬だけだったが、何かが目の前にあった。

その笑みは、瘴気にあてられて苦しむオウメイを嘲笑う老人のそれではない。まるで、オウメイを心配ないと励ますようにそれは暖かかった。

(魯智……じゃないか)

敵か味方かはわからない。ただ、その笑顔に元気付けられたのは間違いない。それを証明するように、オウメイの心は瘴気の渦を受け流す程に立ち直っている。顔もろくに覚えていない相手だが、オウメイは心から感謝した。

文字通り気を取り直した彼女は、偽鉄冠子の様子を窺う。

老人はオウメイの変化に気付いた様子も無く、静寂の森の上に乗る満月へ視線を向けていた。

「ふむ、近いな。もうすぐ時が満ちる……」

ククと笑う。

ニタリと口元を歪ませたその笑顔は、誰かの微笑とは対極。オウメイを不快にさせる。

時が満ちる。それは先ほど話していた儀式の始まりの時だろう。

(なんとかならないかしらね)

ここでの偽鉄冠子ことモウエンを抑えてしまえば事は終わるだろうが、一人ではあまりに力不足。苦も無く返り討ちにされるだろう。

だが、手元の魯智の持ち主タイコウならば。彼の仲間リクスウならば、或いは……。

このまま留まっているわけにはいかないが、下手に動くわけにもいかない。成す術を思いつかない。魯智からも良い提案が出てこない。今はあの老人をやり過ぎすしかない。

そんなオウメイの焦燥の念が通じたのか、モウエンは踵を返し歩き出した。足の向く先からすれば龍神の池。

(儀式の準備に行く気だ)

すぐにも村に戻りたい気分だが動かない。ただじっとモウエンが離れるのを待つ。

やがて老人の姿がオウメイの視界から消え、静寂に響いたその足音も消えた。

不意に駆け抜けた一陣の風に森を漂う瘴気が揺らぎ、薄れ、消えていく。

風に揺れる枝葉。虫の音。鳥の声。まるで、静止していた時間が動き出したかのように森の息吹が蘇っていく。それらの音色に、オ

ウメイはようやく張り詰めていた気を緩めて安堵の息を吐いた。

「つつかれたー」

それがオウメイの正直な気持ちだ。

いつその事このまま寝転がり、四肢を伸ばして眠りにつけたらとさえ思うが、魯智が許しはしない。もちろん、自分自身そんな事をしている場合ではない事は承知している。穏やかな眠りにつけるのは、村の窮地を乗り切ってからだ。

「ここからが反撃。そうでしょ、魯智？」

応。

魯智の答えは力強く思えた。

まずは、あの旅人二人と合流する。タイコウにはこの魯智を渡す。無事ならばリクスウにも戦ってもらわねばならない。眠っていた彼の傍らにあったあの刀を手に。

「雪割りて新芽吹き、桃花咲き溢れる……か」

口に出た言葉に、刀の由来を熱心に話すタイコウの姿を思い出す。

オウメイはクスリと笑い、村に向かって走り出した。

第七章 竜神巫女 参

メンサイの村に隣接する森の中。鬱蒼と茂る木々の中にあつて、唯一開けた場所にある池。村の者は、言い伝えからその池を龍神の池と呼ぶ。

龍神の池の傍らには小さな祠があり、その中には龍を模したこれまた小さな像が祭られている。

その祠の前では年に二回、祭りが開かれる。池の底に開いた異界の門を封じている龍がその責務に飽きてしまわぬようと。

今宵。村の者達は皆、祠の周囲に集っていた。

だが、祭りの時期にはまだ早い。

そして、この集いの理由は祭りとは全く逆の意味を持っている。

龍を責務から開放する。それは異界の門の封印を開放するという事でもある。

祭りを賑やかに彩る囃子も笑い声もここには無い。甘い匂いの香の煙の中がほのかに漂う中、あるのは沈黙と、村人達の虚ろな眼、眼、眼。

皆、呆けて焦点が合っていない。何をするわけでもなく佇んでいる。

そんな中にあつて、己の意思を持って歩く者がいた。

「……そろそろかの」

龍神の池の手前で立ち止まったのは一人の老人。鉄冠子を自称する彼は、薄雲の中で淡い光を放つ月を見上げながらそう呟くとニタリと笑みを浮かべた。

「葉鱗后樂葉。長きに渡り封印を守っていた忌々しき龍め。今から貴様をその責から解いてやるわい」

天上の月から、池の水面に映る月へと視線を落とす。正確には、水面で揺れている月のさらに下。池の底に眠る龍を見据えているのだらう。

「タイコウ。リクスウを連れて付いて来い」

老人は傍らに跪くタイコウを一瞥して言うと、祠の前に作られた祭壇へと歩き始めた。

タイコウからの返事はない。彼の隣で気絶して寝転がっているリクスウの片足を無造作に掴むと、遠慮無しで引きずりながら老人の後を追った。

彼も村人達と同様に虚ろな目をしている。

「心は未だ桃源の夢の中、か。げに恐ろしきは魔女の媚薬じゃわい」

老人は従順に動く青年の様子を鼻で笑った。

目の前の祭壇に手をかざすと、祭壇に置かれた無数の燭台に火が

ともる。

彼の瘴気に反応するように揺らぐ燭台の火に満足げに一度頷くと、続いて両手で印を結び声にならない言葉を口ずさむ。

虚ろな村人達が見守る中、老人は時折印を結び変えながら一心不乱に呪詛を紡いだ。

「……！」

老人の声が可聴範囲にあるならば、その呪詛の意味が解けるのならば、その術が完成に近付いていることがわかるだろう。それを証明するように祭壇での火が勢いを増し、炎と化したそれは、生きているかのように不自然に揺れ踊る。

狂い踊る蛇のような燭台の火焰を前に、鉄冠子はニタリと笑みを浮かべる。その炎に向けて己の右手をかざした。

炎の蛇達は目の前に寄ってくる獲物を見逃しはしない。老人ごと丸呑みにする勢いで炎達が一斉に飛びかかる。

刹那。

「ぬるいわ！」

あろう事か、鉄冠子は大喝するとその炎達を右手一本で掴み取った。

その手から逃れようとのた打ち回る紅蓮の蛇を真っ向から見据え、老人は空いていた左手で印を結ぶと新たな呪詛を紡ぐ。

暴れていた炎はやがて老人の右手へと集まり、凝縮されていく。

「……！」

ニタリ。改めて浮かべたその笑みは、老人の術の完成を意味した。彼の手に残ったものは炎と呼ぶには小さな火。ただ、その火がまともなモノではない事は一目で察しがつくだろう。

その火は黒かった。火そのものの影とでも例えたものが。それが夜の闇の中で尚暗く揺らめいていた。

「久しぶりにしては上出来じゃな」

手の中の黒い炎は徹底的に凝縮された瘴気の塊。結晶と呼んで差し支えないその高密度の瘴気の塊は、生き物の気を掻き乱す猛毒であり、それは人知を超えた力を持つ龍であろうとも気の流れる生き物である以上は例外ではない。

鉄冠子は棒立ちしているタイコウに視線を向ける。

「タイコウ。ここに跪け」

言われるがまま、老人の目の前まで歩み寄ったタイコウはその場に両膝をつく。

「上を向き、口を開ける」

これもまた言われるがまま。跪き上を向いた青年の虚ろな瞳は、

目前の老人を映す。

後は、タイコウの中にこの瘴気を落とし込んで池に投げ込むだけだ。

「実に長かった。いったいどれほどこの時を待ちわびていた事か……」

口を開けて上を向くタイコウの口元へ、そっと手を近付ける。

そして、漆黒の火種は老人の手に刻まれた皺をつたうように滑り、今まさにタイコウの口へと……。

「ダメエエエエツ！」

物言わぬ虚ろな村人達の中から響く女の叫び。

それと同時に飛来した何かが鉄冠子の頭に直撃した。

「ぐぬっ！」

思わぬ襲撃の思わぬ強烈な一撃に、老人はバランスを崩して祭壇に倒れこむ。

その途端、彼の制御下を離れた黒い火は、本来の炎の色を取り戻すと爆発的に燃え上がり霧散した。

「……間に……あつた？」

足がもつれ倒れそうになる体を錫杖で支えながら、オウメイは息

を荒げながら呟く。

肯。

魯智から響いてくる答えに安堵すると、深呼吸もかねて深い溜息をついた。

だが、そうそう落ち着いてもいられない。封印解放の事態を遠ざけたが、その元凶が消えたわけではないのだから。

「タイコウ！」

黒い火の爆発に吹き飛ばされて目を回している青年に向かって走り出す。

「ぐっ……！ おおおのおおれええつ、小娘があつ！ 貴様等、あの娘を止める！」

未だに痛む頭を抑えながら鉄冠子が発した怒声に、村人達は返事をする事も無く一斉にオウメイに群がる。

「みんな、どうしちゃったの？ お願ひ、邪魔しないで！ って、どこ触ってんのよ！」

足を捕らえようとする子をかわし、肩を掴む婦人を振り払い、腰元に抱きついた村長を容赦なく張り倒し、なんとかタイコウの元に辿り着く。

「タイコウ！ タイコウってば！ 目を覚ましてよ！」

彼女の声に応えるように彼は閉じていた目を開いた。

だが、それは正しい意味での目覚めでは無かった。

眼前にオウメイの姿を認めたタイコウは、表情一つ変えず彼女のその細い首を両手で掴み上げた。

「な？ ……タイ……コウ？」

締め上げる手に躊躇いが無い。

タイコウもまたあの老人の言葉に従って動いている。老人は『娘を止める』と言った。手段はおるか生死も問うてはいなかった。ならば、この青年の行動も間違いではない。

（そんな……助けようとしたタイコウに殺されるというの？）

タイコウの手を掴み、引き剥がそうとするがビクともしない。引き剥がしたところで、村人達に組み付かれれば逃げ場は無い。たった一つの仲間だった錫杖魯智は、タイコウに締め上げられた拍子に手放し地に落ちた。

オウメイを助けるモノは何一つ無い。

（もう少し頑張れると思ったんだけどな）

彼女の胸中に湧いた諦めは、一つの決断を下す。

（ただ死を迎えるだけなんてしない。せめて、最後に……）

せめて、最後に自分にできる一手を打っておこう。

「子の手を……あなたは……握り……子の……手は……あなたを……握る」

オウメイはタイコウの腕を掴んでいた手を離し、彼の顔を撫でる。

タイコウの顔は、先ほどの黒い炎を浴びて焼けただれていた。

「……子の……目に……あなたは……映り」

もし、タイコウが正気を取り戻せたらなら、この怪我は彼の妨げになるだろう。

この怪我があったところで状況を打破するかもしれない。この怪我を癒したところでどうにもならないかもしれない。それでも。

「子……の……目は……あな……た……を……映す……」

オウメイの家に伝わるまじないの一つ、神子唄と呼ばれる癒しの言葉。

結局、この神子唄だけしか自分には使う事ができず、そこに劣等感を感じていた。それでも今は、この神子唄を歌えるだけで満足だ。この神子唄で彼を癒せる事が嬉しい。

神子舞の最後の一節を口ずさもうとした時、どこからかドンと鈍い破裂音がした。

その音と共に飛来した闇色の矢尻がオウメイの脇腹を撃ち抜き、

その衝撃によつて彼女はタイコウの手元から弾き飛ばされた。

首元の圧迫から解放されたオウメイの喉は一気に大気をかき集めると、それを言葉として再び解き放つ。

「子をあなたは知っていて、子はあなたを知っている」

言葉を紡ぎきつた。

これまでで一番会心の出来だった気がして、つい笑みがこぼれる。

大きく弧を描いて飛んだオウメイの体は、そのまま龍神の池に落ち水飛沫をあげた。

「ええい、忌々しい小娘め！ 何もかも台無しにしおつて！ こんな事になるなら、あの森で殺しておくべきじゃったわ！」

その小娘を撃ち抜いた凶弾を撃つた当人。鉄冠子の姿をした老人は苛立たしげに杖で大地を打った。

「クソツ！ おかげで一からやり直しじゃ！ こちらに來い、タイコウ！ さっさと祭壇を元に戻せ！」

中空を握り締めるようにして静止していたタイコウが、その怒鳴り声に動き出す。

だが、一本の杖が視界に入った途端、彼はまた静止した。

「何を呆けておるんじゃ、この木偶の坊が！」

静寂の中に再び怒鳴り声が響いたが、それでもタイコウは動かない。

やがて、彼はそれが当然であるかのように、その杖を拾い上げようとしゃがみこむ。

タイコウの手が錫杖に触れた瞬間、悪夢は覚めた。鉄冠子の偽者に香を嗅がされてから今まで、彼の意識を埋めていた濃く深い甘美な霧が消え失せる。

そして、魯智から流れてくる意識喪失から今までの錫杖の記憶。

オウメイとの邂逅。

邪悪な瘴気の森と、その中に佇む者達。

カコ邸で回収した雪割りを手に目指した龍神の池。

そして、オウメイの首を締め上げる見慣れた手……。

「あああああああつー！」

止め処ない後悔の念は、叫びとなってタイコウの口から溢れ出た。

今、この時こそが悪夢であって欲しい。いつそのこと、桃源の香りが見せた偽りの夢の中に戻ってしまいたい。

だが、手にした魯智はそれを許さない。今も漂う甘い香の中にあつて、タイコウは魯智の持つ力によって夢に落ちず正気を保っている。いや、もはや魯智を手放したところで、今の彼の胸中を占める

怒りは香の魅惑程度では揺るがない。

「貴様、その杖は……もしか!」

タイコウの持つ錫杖の正体に気付いた老人の目が険しくなる。

だが、その彼を見返すタイコウの目も負けてはいない。

「よくも、オウメイを!」

地を蹴ったタイコウは、かざした錫杖を偽鉄冠子の脳天に向けて振り下ろす。

「ふん、久しいじゃないか。魯智よ」

彼の一撃を杖で受け止めた老人は、憎悪を込めて錫杖の名を呼ぶ。

タイコウもまた、魯智の意識から垣間見た老人の本当の名を叫んだ。

「モウエン、おまえは許さない!」

第七章 龍神巫女 肆

オウメイは龍神の池の中へと落ちていく。樂葉という名の龍が封じる異界の門がある池の底へと。それは彼女の死を確定させる事にならぬが、オウメイにはその現実には抗うだけの体力が残っていなかった。そして、抗おうという気力も乏しい。幸か不幸か、腹部からの出血が彼女の意識を薄れられ、水中の息苦しさも遠いものを感じさせている。

(タイコウ、無事かなあ……)

意識の薄れていくなかで、目を閉じて青年の顔を思い出す。

カコ医師の玄関を開けて飛び出してきた時は本当に驚いた。

黒ずくめの作業着を着た優しげな顔の青年。その驚いて見開いた黒の瞳の中に、同じように驚いた顔の自分が映っていた。つい今しがた自分の首を絞めていた青年は、あの鉄冠子の偽者の術で操られていたようだが、魯智が彼の手には渡ればその術も破れるだろう。上手く切り抜けて、生き延びてくれれば良いが……。

続いて思い描いたのはメンサイの村人達。

実家を離れたくて願い出たこの村の奉納の舞だったが、優しくしてくれる皆の為に舞える事は嬉しかった。それが叶わなくなった事は残念だ。

あとになって思えば、これは走馬灯のように浮かんで消える彼女の記憶。出会った人達の顔、目にした風景。浮かんでは消え、消え

ては浮かびの繰り返し。

最後に出てきたのは故郷ワンシユウの桃園。

甲壁と呼ばれる岩を中心に、一面桃園が広がるその風景は幼い頃からお気に入り場所だった。もう、あの桃園を見ることができないと思うと心残りではある。

ただ、記憶に浮かんだワンシユウの桃園には違和感があった。

(……?)

桃花に囲まれた甲壁に誰かが佇んでいる。甲壁の頂に座しているのは薄緑の髪の美しい女性だ。

彼女は誰だろう。見覚えは無いが、初めて会った気がしない。

穏やかな顔で周りの桃花を眺めていた彼女は、ふいにこちらへと視線を向けた。

「綺麗な桃園やね」

微笑みかけられてオウメイは目を見開いた。目に入ってきたのは龍神の池の水ではなく、故郷ワンシユウの桃園の風景。座り込んでいるのは、池の底ではなく甲壁の麓。先ほど視線を合わせた女性は、今は甲壁の上で桃園を眺めている。

「にしても、こないな所がこの辺にあつたかなあ……。ここって嬢ちゃんの生まれ育つた場所なん？」

「……はい」

思い出の地に現れた闖入者に当惑するオウメイには、一言返すだけで精一杯だった。

「そっかー。うん、眼福眼福。まさに絶景や。惜しむらくは、本物が見れへん事かね」

改めて桃園に視線を戻した彼女が軽く溜息をついた。

彼女は何者だろう。どこから出てきたのだろう。その疑問がオウメイの中でひたすら繰り返されていた。

桃園に見惚れる麗人と、当惑するオウメイの間をしばしの沈黙の時間が流れ、やがて思い出したように麗人が再びオウメイを見た。

「あっと、ごめんごめん。挨拶がまだやったね」

立ち上がった女性は、甲壁を軽く蹴るようにして跳躍した。

「わ、危っ……！」

甲壁は三メートルほどの岩。好き好んで飛び降りる高さではない。彼女の行動に慌てたオウメイだったが、それはすぐに杞憂に終わる。

浮かぶようにゆっくりと宙を舞った麗人は、ふわりと着地して何事も無かったようにオウメイに歩み寄ってきた。

「初めまして……でええのかな？　ウチの名前は樂葉。貴女のお名前は？」

「樂……！」

驚き言葉を詰まらせる。目の前の女性が祠に祭られ、祭事で舞を奉納する相手だとは思いつきもなかった。

「ガク？ なんや男の子みたいな名前やねえ」

彼女の驚きに気付いた様子も無く、樂葉は呑気な感想を告げる。

「あ、いえ、アタシ、オウメイです！ 初めまして樂葉様！ この池を守る龍神様とお会いできるなんて、ホントに光栄です」

「ははは。龍神やなんて恐れ多い。それを名乗るんは母様の紫龍ぐらいやわ。ウチは紫龍の娘やけど、ただの龍なんよ」

様を付けられるのは恥ずかしいと照れ笑いを浮かべながら、彼女はオウメイに向けて片手を出す。握手のつもりで握り返したオウメイだったが、樂葉の「ほいつ」の掛け声とともに引っ張られて立ち上がった。

「それにしても、オウメイも難儀なもんやね。一日で二度も死にかけるんやから」

「え？ ……あ」

彼女に言われて思い出す。

「そっか。アタシ、脇腹を撃たれて……って、二度？」

「そや、二度や。宵の口に森で物騒な気にあてられて、いつペン死にかけとったやないの」

溜息混じりに樂葉が答える。

「オウメイは祭りで舞を奉納しに来た巫女さんやる？　ウチは舞を楽しみにしとったし、上手い事ウチと気が合ったから、こりや助けたるかいと思て手を貸したったんよ」

言われたオウメイも心当たりがあった。森の瘴気に押し潰されそうになった時、誰かに後押しされて辛うじて持ち直した。その時、誰かが微笑みかけた気がしたが、どうやらそれこそが樂葉だったようだ。

「そしたら、今度は大怪我して池に落ちてきよったからホンマに驚いたわ。何か？　やけに池の上は陰気が強い思うたら、今回の祭りからは人身御供でも送る事になったいうんか？　ウチはほんなもん頼んどらんわ。こりや説教の一つもしたらなあかん。そう思うてオウメイの心の中に入って切れかけた命を繋ぎ止めたんよ。オウメイ、帰って村の皆に伝えい。こんな辛気臭い事するなて。それと、長年やってきた祭りの時期を間違えるなて。えらい早過ぎやわ」

そこまで早口でまくし立てると、呆れるわあと首を横に振る樂葉。彼女の言葉にオウメイは首を横に振る。

「違うんです。樂葉様をこの異界の門の守から開放しようとしている者がいて……」

「ほう、それはそれは。異界の門を永遠に塞ぐ手立てでもできたん？」

驚いた顔で尋ねる樂葉に向けて、もう一度首を横に振った。

「いえ、全然」

「って、アカンやん。異界の門が開いたらどないなると思てんのよ。化け物がわらわら、うじゃうじゃ、これでもかー！　って程に出てきよるで」

「それが目的でしょうけど……」

「どこのアホやの。オウメイ、ウチが許したるからシバいたりなさい」

「そのつもりではいたんですけど。失敗してこうして死にかけたわけ……」

オウメイの答えに樂葉は整った顔をしかめて思案する。

「それで、その……ごめんなさい、樂葉様。せつかく助けてくださった命ですが、また捨てる事になるかもしれません」

「……」

「タイコウ……池に落ちる間に助けた者がいます。きっとタイコウは今、池に仇成す者と戦っています。村の皆も術で操られているけど、誰一人として門を開く事を望んでいる者はいません。戻ってタイコウや皆を助けたいんです」

オウメイの言葉を聞きながら思案顔を続けていた樂葉が、結んで

いた口を開く。

「……オウメイ。ウチは長くここで門の守をしていたおかげで、この地に根が生えた。早い話が、ウチが出張ってなんとかするいう事が出来へん」

そう言うと、樂葉はオウメイの両肩を掴み向かい合った。

龍の深緑の相貌がオウメイをジッと見据える。まるで彼女の心中の真贋を確かめるかのように。

しばしの沈黙。やがて、樂葉はニヤリと笑みを浮かべた。

「綺麗な眼やな。気に入ったわ」

「え？」

「力を貸したる。その代わりに、一つ約束してえな。事が上手く運んだら、ウチにオウメイの故郷の桃園を見せてほしい」

「え？ ええ、それはいいけど」

当惑しつつも頷くオウメイ。返事を聞いた樂葉が不意に抱きつき、オウメイはさらに混乱する。

「え？ えー！」

「じつとときいや。動いたらアカンで」

途惑いながらも大人しくしている彼女に、樂葉は満足げに頷き目

を閉じた。

「土集い山を紡ぎ、水流れ河を紡ぎ、風巻き雲を紡ぎ。汝のその手は何を紡ぐか。我のこの手は何を紡ぐか。汝の桃花、我が碧玉、契り紡ぐは盟友の証」

「……！」

樂葉の体から発せられた仄かな薄緑の光。それは徐々にその輝きを増し、樂葉の輪郭が失われていく。

「が、樂葉様？」

「樂葉や」

問いかけたオウメイに、樂葉が即座に返す。

「ウチは力を貸す。オウメイはウチに故郷の桃園を見せる。これでウチとオウメイは持ちつ持たれつの協力関係や。樂葉様なんて、かしまった呼び方なんかせんでええ。呼び捨て上等、遠慮は無用やで、オウメイ」

光のシルエットと化した樂葉の表情は窺えない。それでもオウメイには彼女がニカツと笑ってくれたような気がして、つられて笑ってしまった。

「……うん、わかった。あなたの力を貸して、樂葉」

「よっしゃ、まかしときー！」

その言葉を合図に薄緑の光が弾ける。思わず閉じた目を開けてみると、そこには樂葉の姿は無い。慌てて周囲を見回そうとした途端、視界を薄桃色の布がよぎった。

（ウチの力がオウメイに触れることで具現化したのがこの羽衣。そやなあ、簡単に樂葉布とでも呼んどこか）

オウメイの心の中に響く樂葉の声に促され、自分の肩へ視線を向ける。

薄桃色の羽衣を止めているのは、龍の眼を思わせる碧玉の装飾。その装飾からオウメイの肩を掴むように伸びた止め具は、龍の爪のようだ。

しかし、オウメイは樂葉布に見惚れることは無かった。

彼女の心を占めたのは樂葉布の外見の美しさではなく、その内面にあるもの。樂葉布を通じて彼女の内側から満ち溢れてくる龍の気による昂ぶり。

「凄い……今なら空でも飛べそう」

（ハハハ、それエエなあ。ウチとオウメイの初陣やし、それぐらい派手に行こか）

「え？」

どういつことかと聞き返しかけたが、その前に彼女の意思は伝わってきた。その樂葉の提案に異存は無い。オウメイは樂葉布を翻すと天を仰ぐ。

「よーしっ！ 行くよ、 樂葉！」

叫ぶオウメイの体を、 桃園を吹き抜ける桃花の風が包み込んだ。

第七章 龍神巫女 肆（後書き）

〜次回予告、リクスウ語り〜

主役は最後に登場する、ってね！

いやー、良く寝た。全く、まーったく、良く寝た。

で、起きたはいいけど、なんなんだこの事態は。タイコウは見知らぬ女と一緒に村人に捕まってるし、目の前の爺さんは……てめえ、あん時の！

俺の参戦で形勢逆転したかに見えた戦いだったが、俺ともあるうものが敵の術にはまっちゃまって状況はさらに悪化しやがった。その香炉……まずい！ アイツが目を醒ましやがる！

ついに三役揃ったものの、月に叢雲、花に風。

魅惑の香に誘われて、猛虎が再び目を覚ます。

虚偽の老師に悪戦苦闘。

次回『第八章 月下咆哮』に乞うご期待！

第八章 月下咆哮 壱

「巡る汝は今何処。流れる汝は今何処。我が言の葉に、応えよ、吼えよ。活！」

タイコウは何度目かの衝撃波を解き放ち、群がる村人達を吹き飛ばす。弾かれた村人達の先に見えるは、彼の怒りの根源。

「モウエン！」

鉄冠子の姿をした老人の元へ駆け込みざま横薙ぎの一閃。

しかし、モウエンは半身をそらして容易く避ける。タイコウは間髪入れず魯智を振り下ろし、突き出し、薙ぎ払うがどれも老人の杖に受け流されていく。

「どうしたどうした。威勢は良いが、その程度で儂が参るとでも思うつてるのか、小僧？」

「五月蠅い！」

吼えるタイコウの攻勢を、余裕の笑みを浮かべ難無く凌ぐモウエン。

「儂が憎いか、小僧？ せいぜい憎むがええ。それはそのまま龍の供物にしてやるう」

そう言いながら突き出された魯智を払い、タイコウの腹へ蹴りを入れる。

その枯れ枝のような細い身体のどこに力が隠されているのか。蹴りを受けたタイコウの身体は弾かれたように宙を舞い、数秒の間をおいて地に叩きつけられ砂塵が舞う。

「哀れじゃなあ、魯智。いかに貴様が相手と言えども、持ち主がこのような小僧では恐るるに足らんわい」

身体を襲う激痛に咽る青年、正しくは青年の持つ錫杖を冷ややかな眼で見据えて呟く。

対するタイコウに言い返す言葉が無かった。

彼の憤りは確かにモウエンに対してもあつたが、むしろ老人の術中に堕ちた自分の不甲斐無さに向けられていた。

(僕がオウメイを殺してしまつたんだ……)

その悔恨の重さからすれば、モウエンへの憎しみは八つ当たりにさえ近い。

「少々予定は狂つたが、まだ直しは効くかの。小僧、貴様は先程の娘共々龍の元に行つてもらつとしようか。その為にも、その錫杖は取り上げさせてもらおう」

言つと老人は手にした香炉を掲げる。周囲に新たな香が立ち上り、魯智の術に伏していた村人達は立ち上がつてタイコウを取り押さえようと進み出す。

タイコウもまた、それを迎え撃つように魯智を構える。その表情

からは怒りで生じた歪みが和らぎ、幾分穏やかなものになっていた。

池に墮ちた娘、オウメイ。皮肉にも憎むべきモウエンのその言葉によって、タイコウは憤怒から解放された。

（オウメイは、僕を怒らせる為に助けくれたんじゃない。僕に託してくれたんだ）

自分への悔恨の重さ。モウエンの憎しみ。そのどちらも今は捨て置こう。自分はオウメイに生かされたのだ。その命をもって彼女の望みに応えてみせよう。

（モウエンの企みは、僕が絶対阻止してみせる）

「小僧じゃない、タイコウだ」

「なんだと？」

決意の意思を秘めた瞳でモウエンを見据え、吼える。

「僕の名はタイコウだ！」

その叫びに呼応するように彼の周りを風が舞う。

「天を駆けるもの。地を巡るもの。そのもの何処より湧き出で。何処へと流れ行かん」

両手でしっかりと掴んだ魯智をモウエンに向ける。

「小賢しい！」

対するモウエンもまた手にした杖をタイコウに向ける。その先には、夜の中にあつて尚黒い瘴気の塊が渦を巻く。

「我が身、我が内流るるもの。集いてかの先に赴かん。我が意思はかの地を指さん……」

タイコウを包む風は逆巻き、荒れ狂い、迫る村人を押し返す。

討つべき者はそこにいる。撃つべき術はここにある。彼女が拾つた己の力。放つ機会は今より無し。全開発動、出し惜しみ無し。後の事など知るものか！

「碎……！」

言いかけたその言葉が突如響いた轟音に途切れる。

それはタイコウの碎破が放った破壊の旋律ではなく、モウエンの瘴気が喚いた呪言でもない。龍神の池に突如生まれた逆向きの瀑布が響かせたもの。

「オウメイ！」

タイコウは、豪快な水飛沫の中に見知った娘を見つけ、その名を呼ぶ。

「その気配は……おのれ、樂葉か！」

モウエンは、オウメイが翻す薄桃色の羽衣を忌々しげに見据える。

樂葉布をはためかせ宙を舞うオウメイも、同時に二人の姿を見つけていた。

驚きと言びが混ざった顔をしている鍛冶屋見習いの青年、タイコウ。そして、もう一人の姿を見た瞬間、樂葉布を介して樂葉の記憶が流れ込んでくる。姿こそ鉄冠子仙人のそれだが、内面から滲み出る邪気を見抜けない樂葉ではない。それも、過去に因縁のあるものならば尚のこと。

「モウエン！ 古に鉄冠子と樂葉に敗れた老妖よ！ 性懲りもなくこの地を狙うなんてバカな真似は止しなさい！ 今度は怪我だけでは済まさないわよ！」

メンサイの伝承でこの池の底を異界と繋ぎ妖魔を呼んだのは、このモウエンだ。

「吼えるな小娘！ その減らず口、塞いでくれる！」

彼女の大喝に、モウエンは過去飲まされた敗北の苦汁を思い出したのか、激昂し手にした杖をオウメイに差し向けた。杖の標に導かれ、瘴気の塊は彼女を狙う。

慌ててタイコウがモウエンに妨害を試みるが、間に合わない。瘴気の塊はオウメイの四肢を食い散らさんと飛び掛った。

「オウメイ、逃げて！」

悲鳴のようなタイコウの声を耳にしながらも、オウメイは臆した様子は無い。澱み無い所作で樂葉布をひらりと翻し、瘴気と対峙する。

「疾ッ！」

彼女の掛け声と共に樂葉布が揺らぐと、それに合わせたかのように迫り来る瘴気が軌道を変え、オウメイの脇をすり抜けるようにして彼方へと飛び去った。

「チッ、小癩な！」

舌打ちしつつ杖を振るうモウエン。それに反応して再び瘴気が集積していくが、今度は一つでは無い。ゆらゆらと蠢く不快の塊の数は、大小合わせて十を超える。同時に放たれれば、そのいくつかはオウメイに届くだろう。

だが、それを抗う事無く黙って待つはずもない。

「碎破ッ！」

先に動いたのはタイコウ。彼のかざした錫杖から打ち出された閃光に、モウエンは弾き飛ばされ祭壇に叩きつけられた。

詠唱から術の発動までに間が開いたおかげで、全力で放つ事はできなかったが手応えはあった。まともに食らえば無事では済まない。

「……………終わった？」

肩で息をしながらタイコウが誰とも無く問う。

否。

「まだ油断しちゃダメ！」

安堵と術の反動で腰砕けになるタイコウに、魯智とオウメイの叱咤が飛ぶ。

（モウエンが村の者にしよった小細工が解けてへん。術をかけた当人が健在な証拠や）

オウメイは内側から響く樂葉の声につられて周囲を見回しながら、タイコウの元に降り立つ。

なるほど、確かに。龍の姫が言うように、村人達は未だに虚ろな相貌を虚空に漂わせて佇んでいた。再びモウエンが動けば、彼等も再び障害と化すだろう。

「なんとか呪縛から解放しないと……」

（あるやん）

「何が？」

間髪入れず返ってきた樂葉の言葉に、思わず問い返すオウメイ。隣で魯智を構えなおしていたタイコウが「何がって、何が？」という困惑顔を向けている。

（教えて、樂葉。みんなを助ける方法ってことなの？）

（言うまでもあれへん。オウメイ自身答えを知ってるやないの）

「え？」

言われたオウメイは、自分の持ち得る知識を片っ端から調べ上げていく。

解く鍵は『自分が知っている手段』。

手段。自分に何ができる？ ……傷を癒すおまじない。ダメだ、外傷は治せても病や呪いに通じるものではない。病を治すおまじないは知っているが自分には使えない。正しくは、使っても今まで一度も成功した試しが無い。……知ってはいるが？

「えー！ 無理だって！」

一つの結論に達すると戸惑いの声を上げた。その隣では、その声に途惑うタイコウ。

「あの……オウメイ？」

心配になって尋ねる青年に、彼女は困惑の表情を向ける。

「ああ、ごめん、タイコウ。村の皆を正気に戻す方法があるにはあるんだけど……」

「それは有難い。どうすればいいの？」

思いついた病を治す術は、タイコウの傷を癒した術『神子唄』と並びオウメイの家系に伝えられる『神子舞』という術。

人の治癒能力を活性化させて外傷を癒す効果がある神子唄に対し、神子舞は人の心気を奮い立たせ体内に巣食う病を消し去る効果があ

る。心奮わば、或いは術の魅了を振り払い正気を取り戻すことも…。

問題はオウメイにこの術の成功例が無いということ。失敗した数は術を試した数に等しく、それは三桁に達しており、先日リクスウに試したことで一つ増えていた。

「アタシが術を使う。その……」

成功する自信は無い。そう告げようとしたオウメイの表情が強張る。同時に、タイコウの顔も険しいものへと一変した。

魯智と樂葉から、各々の持ち主に発した警告。

彼等に言われるがままに、各々の持ち主であるタイコウとオウメイはその場から飛び退く。今まで二人がいたその場所に、轟音と共に黒煙の如き瘴気の渦が爆ぜた。

第八章 月下咆哮 貳

「どこまでも邪魔をしてくれおつて、二人揃って池に沈めてやろうじゃないか」

瓦礫と化した祭壇に仁王立ちしたモウエンが二人を睨みつける。

老人のその容姿は最早、鉄冠子のソレではない。

破れた漆黒の僧衣を纏い、顔が隠れるほどの大きな編み笠。手にする杖の先に下がる無数の小さな頭蓋骨が、モウエンが杖を振るうとカラカラと乾いた音を立てた。

（もー。悠長に話し込んでるから、モウエン復活してもうたやないの）

抗議の声を上げる樂葉に内心謝りつつ、それでも自分の導き出した一手を躊躇うオウメイ。そんな彼女の葛藤を知ってか知らずか、タイコウが声をかけてくる。

「僕はオウメイの策に乗るよ。術の完成までの時間稼ぎは引き受けた！」

言うのが早いのか、タイコウは魯智を構え直す。対峙するはモウエン。

「者共、この小僧達をひっ捕らえろ！」

号令は放たれた。何をするでもなく呆けていた村人達の瞳が、一斉にタイコウとオウメイに向く。

最早、悩む余地無し。逃げる間も無し。心中有るは不安ばかり。

「いいわよ、やるわよ。失敗したところで失敗の数が増えるだけよ。一度だって成功した事なんて無かったんだから！」

その言葉は自棄っぱちの叫びであると同時に、不安を吐き出してしまふ為の儀式。

やるからには真剣に。一度大きく深呼吸。

成功、失敗など考える事もしない。目を閉じて心を静める。

彼等の中に有る病巣を振り払う。それだけに意識を集中させる。

「子の腕をあなたはくぐり、あなたの腕を子がくぐる」

言葉を紡ぎ出すオウメイを庇うように、タイコウが魯智を振るい村人を押しのける。

神子舞の口上は計三節。残るは、あと二節。

「子の歩みにあなたが合わせ、あなたの歩みに子が合わす」

村人ごと二人を滅ぼさんと、瘴気の塊を練りこむモウエン。飛び掛ったタイコウの牽制で、モウエンの術は霧散する。

あと一節。タイコウという壁を失ったオウメイに村人が迫る。

「子の拍子にあなたが踊り、あなたの拍子に子が踊る」

神子舞、発動。術が成功していれば、村人はこれで……。

（オウメイ！）

樂葉の声に無意識に樂葉布を握り締め、眼を見開いた。そして、溜息。

（ああ、やっぱり……）

彼女の眼前に迫るのは村人の手。

「疾ッ！」

オウメイは樂葉布をはためかせ、円を描くように舞いながら村人達の腕をかわす。

成功するとは思っていなかった。それでも、心のどこかでこの土壇場だからこそ、万が一の奇跡が起きるかもという期待があった。だが、万が一に及ぶには数百の失敗では足りないらしい。

（アタシじゃ神子舞は使い切れない。なら、術者のモウエンを倒して術を使えなくさせなきゃ。タイコウと二人でなんとかアイツを……）

そのタイコウが彼女の視界に飛び込んできた。文字通り、飛んできた。

「タイコウ！」

村人数名を巻き添えにして地に落ちた青年は、ぐったりとしたまま動かずオウメイの呼びかけにも応じる様子がない。

（あかん、目エ回しとる。派手に術も使ったししばらく使い物にならへんわー……って、オウメイ、この阿呆ッ！ 周りを見んかい！）

彼を助け起こそうと駆け寄るオウメイに、再び樂葉の音が響く。

「え？ わきゃっ！」

周囲を見回す暇も無し。群がる亡者と化した村人達が彼女に覆いかぶさる。

「そらそら、どうした小僧共！ せつかくの得物が泣いておるぞ！」

今が好機。そう感じ取ったのか、モウエンは高らかに杖をかざし瘴気の塊を生み出していく。

絶体絶命。気を失ったタイコウはもちろん、オウメイも村人に捕らわれて身動き一つままならない。

「これで仕舞いじゃ。失せろ、餓鬼ども！」

勝利を確信し、敗者を嘲笑うかのような笑みと共に、最後の一手が今打たれ……。

「ふあ……くあー、良く寝た」

ふいに響いた声に、その場にいた皆の動きが止まった。

その声はあまりにも場違いな呑気なものだった。オウメイが窮地を忘れ、モウエンも呆気にとられ、森を包む瘴気までも一瞬薄れた気がする程に。

「イテテ、なんだここは？」

寝惚けた声の主は、祭壇だった瓦礫を押しつけながら半身を起す。

「なに？」

モウエンは、己の傍らから湧いて出た男を見下ろす。

「ん？」

リクスウは、寝ぼけ眼で隣に立つ黒衣の老人を見上げる。

「火酒……治ったの？」

オウメイは、隻眼の青年に疑問が湧く。治したのは彼女の術か、カコ医師の薬か。

寝惚け眼のリクスウは、傍らに立つ黒衣の老人と目が合わせた。

静寂。沈黙。

（まずい！）

オウメイの焦燥が加速する。モウエンは狙いをリクスウに付ける

だろう。だが、対する彼は一番危険な位置にしながら、状況が全く掴めていない。

「リクスウ！ 逃げ……」

オウメイの杞憂は無駄に終わった。

「おまえ！ あん時のクソ爺イ！」

オウメイの声を遮るようにリクスウが怒鳴り、起き上がりざま拳を振るう。

その拳を、正しくは拳の軌道に沿って迫る虎霊の鋭利な爪を避けるように、モウエンが後方へと大跳躍。

「逃がすか……って、うおっ！」

追い討ちに走りかけたリクスウに向けて、瘴気の塊が撃ち出された。彼もまたそれを回避すべく後方へ跳んだが、黒塊が着弾したと同時に大地を揺らす轟音と衝撃波が周囲を襲い、リクスウは回避の跳躍に勝る飛距離を飛ばされる。

その一撃の余波は当然のようにタイコウ達を抑えていた村人達をも巻き込み、激流にさらわれるかの如く衝撃に押し流される。

（好機や。払いのけい！）

「疾ッ！」

村人の拘束が怯んだと知るや、オウメイが樂葉布を振るう。彼女

の声と共に生まれた突風は村人達を押しつけ、活路を生み出した。

(リクスウと合流して体勢を立て直すんや！)

(わかってるって！)

樂葉の言葉に返事をする前にオウメイは動いていた。

オウメイはタイコウを抱えて立ち上がり、再び彼女を捕らえんと迫る村人に対峙する。

そして、リクスウは地に伏したまま動かない。

「リクスウ！」

異変に気が付いたオウメイが、倒れているリクスウに声をかける。
反応が無い。

(ここから反撃って時なのに……)

「目を覚まして、リクスウ！ このままじゃアイツに……」

近付いてくる村人達を前に、少しづつ後退するオウメイ。リクスウを呼び起こそうと叫んでいたが、その言葉が途切れた。

(何？ この気配？)

リクスウから生気を感じない。否。火酒の病に倒れても尚その身から発していた彼の覇気が、今は全く感じられない。代わりに感じ取れたのは、人の発する気には無い不自然に澱んだ気。それはまる

で、妖魔が放つような……。

村人を警戒するオウメイ。ようやく半身を起こしたリクスウを視界の隅に捉えながら、オウメイは一つの説に辿り着いた。

モウエンが手にした砂楼香。嗅いだ者を傀儡にする芳香の漂うこの龍神池のほitori。タイコウは魯智の助力で、オウメイは巫女の理で抗った。では、リクスウはどうか。

(そんな……まさか！)

リクスウの目は、今尚オウメイが対峙している村人達と同じ。ならば、目を覚ました彼が村人達と同じ行動に移るのも道理。

「疾ッ！」

オウメイが反射的に樂葉布を振りかざし、それと同時に起き上がったリクスウがその腕を振るう。

リクスウの放った不可視の刃を受け流しきれず、衝撃でタイコウごと弾き飛ばされた。

「疾ッ！」

彼女の思いに呼応するかのように、翻った樂葉布が羽根の如く羽ばたき地面への激突を免れる。

(えらいこっちゃ！ あのバカチン。モウエンの御香吸って、おかしゅうなっとる！)

樂葉の言葉は、オウメイを一気に絶望に追い込んだ。

リクスウを敵に回し、タイコウは戦線離脱。オウメイに味方するのは樂葉だけで、樂葉自身は池の底から動けない。樂葉布は防ぐに長けているが、攻める手は持たない。その優れた防衛で防ぎ続けるとしても、敵陣に一人ではオウメイの心が最後には折れてしまうだろう。

(諦めたらあかんで、オウメイ！　ウチに故郷の桃園見せてくれる約束を、もう忘れてしもたんか？　それとも、ウチには夢の桃園で我慢せいつて言うんか？)

樂葉の言葉に、オウメイはハツとして顔を上げる。

(あ。そうだ。忘れてた)

(なんやてー！)

(ごめんね、樂葉。お詫びに一番満開な季節に帰るから)

それならば良しと納得する龍の姫に、オウメイは感謝した。緊張に押し潰されそうな自分の心が、彼女の励ましに支えられている。

まだ諦めない。何か打つ手は残っている。どこかに開く活路があるはずだ。

ジリジリと距離を詰める村人やリクスウを見る彼女の様に、モウエスが鼻で笑った。

「これで終焉じゃな、小娘」

オウメイがキツと睨みつけた先には嘲笑する黒衣の老僧。モウエンは手にしている香炉と生気の無いリクスウを見比べ、ニタリと笑みを浮かべる。

「よもや、カリユウの妖魔共を葬った力を手にするとはのお。こいつを使わぬ手は無いわい。さあ、リクスウ。貴様の力でこの小僧と小娘を血祭りにあげてやるんじゃ」

そう言うと、老僧は砂楼香をリクスウに向けた。

リクスウは二人に向けて無言で腕を振りかざす。彼の手元から放たれるのは名工の剣にも勝る靈気の刃。

(……刃?)

浮かんだ言葉に、思わずオウメイは視線を一点に集中させた。

「疾ッ！」

撃ち出されたリクスウの虎爪を樂葉布で受け流す。その間も視線は固定している。

再び構えに入るリクスウの背後。瓦礫と化した祭壇の中に、それはある。この龍神の池に辿り着いた時に、モウエンに投げつけた物。頭の中で描いた急ごしらえの一計。

(雪割りて新芽拭き、桃花咲き溢れる……か)

その名を覚えてくれたのはタイコウ。腕の中に抱いている彼の顔を覗き込む。龍神の池に落ちる前に一度癒しをかけた彼の顔は、その後の戦いで血と砂埃にまみれている。

消耗しきって眠りこけているタイコウの寝顔はどこかあどけなく、場違いだと思いつつながら微笑んでしまった。

「ちょっと待ってて。上手くやるから」

そう囁いて軽く唇を交わらせると、彼をそっと腕から降ろして立ち上がる。樂葉布の端を掴み、隻眼の青年と対峙する。

彼が次にその腕を振ったら開始の合図だ。練習無しの一発勝負。これが最後の反撃の機会かもしれない。

オウメイは静かに呼吸を整えながら、彼の所作を観察する。

（好機！）

リクスウの右腕が振り下ろされる瞬間、樂葉が叫んだ。

「疾ッ！」

樂葉布の描いた薄桃色の軌跡に虎爪の軌道がそれる。オウメイは、さらに樂葉布を翻し大地を蹴った。

大きな弧を描いて飛翔。リクスウを飛び越えて祭壇に降り立つ。目当ての物を探そうと瓦礫に視線を下ろしたところに、樂葉の警告が飛ぶ。

(右後方、袈裟懸けや！)

「疾ッ！」

着地を狙ったのか、続けてリクスウの左手から放たれた一撃を払い退ける。弾かれた衝撃が、足元に瓦礫を吹き飛ばす。これは彼女にとって思わぬ幸運とも言えた。

(雪割り！)

跳ね上がった瓦礫の中に目的の刀を見つけて掴み取る。これで計画半分達成。次の行動に備えて足に力を込める。

「疾ッ！」

今日何回目かの跳躍。今度の目標はモウエンだ。

対するモウエンは、彼女の行動に驚きこそしたが焦りは無かった。砂楼香の操作に集中していた為に瘴気の塊を打ち出すことはできないが、娘一人をあしらす程度の体捌きにはなんら支障は無い。

「子供の浅知恵じゃな」

頭蓋骨の下がった杖を構えて迎撃の姿勢をとる。

オウメイにしても老僧の反撃は覚悟の上。

だが、いかなる一撃を食らおうとも、あの香炉には一太刀入れてみせる。香炉が破壊されれば、自分に向けられている虎の爪は再びモウエンに向く。

モウエンに向かって一直線に飛びながら、雪割りの柄に手をかけ
……。

「え？」

（アホな……）

樂葉の声が響く。彼女の顔が見えたなら、きっと愕然としているに違いないだろう。だが、今はそんな事を気にしている場合でもない。

抜けない。雪割りは鞘が固定されているかのように抜けてはくれない。

（アタシって、馬鹿だ……）

そうだ、抜けない。雪割りはリクスウを使い手に選び、他の者には鞘から抜かせもしない。

目の前の青年が、そう言っていたではないか。

「え？」

突如視界に飛び込んできたタイコウの姿に、驚きの声を上げる。

気を失って動けないはずの彼が、老僧に向けて錫杖を振りかざしている。

「なにつ！」

驚愕はモウエンも同じ。いや、オウメイ以上だった。

「ハアアアアッ！」

気合一閃。タイコウの振りぬいた魯智がモウエンの持つ香炉を打ち払い、振り返した杖の石突で老僧の顎をかち上げる。

（やった！）

その歓喜の声はオウメイのものか、樂葉のものか。オウメイのものであったとしても、その声が実際に発せられる間も無し。口から出たのは……。

「えっ？」

驚愕というよりは困惑。

モウエンを押し退けたタイコウは、飛翔の勢い止まらぬオウメイを避けることも無く、その両手を広げて彼女を抱きとめた。

「えええええっ！」

抱きつかれたタイコウによって、彼女の飛行軌道は無理やりそらされる。

刹那。オウメイを狙って放たれたリクスウの第三撃が、彼女の脇を駆け抜ける。

虎爪はその目標を見失い虚空を駆け抜けて、宙を舞う砂楼香を切

り裂き、立ち尽くすモウエンを弾き飛ばした。

一方、危機を脱したタイコウとオウメイは……。

「ひああああっ！」

突如タイコウという重石を吊り下げることになったオウメイに、まともな飛行制御などできるはずもなく墜落。飛翔した勢いはそれだけでは留まらず、二人は抱き合ったまま二転三転と跳ねるように地を転がり、木の幹に激突して停止した。

第八章 月下咆哮 参

「痛たたた。タイコウ、無事？」

両腕で体を支えつつ半身を起こすオウメイに、タイコウは咳き込みながら片手を挙げて見せた。

「これで……ゲホッ！」

「……終わったの？」

否。

(残念やけど、まだみたいやね)

魯智と樂葉が各々の持ち主に答えると、二人はうんざりとした顔をする。

「やるしか、ないのか」

錫杖を支えに起き上がるタイコウ。

満身創痍だが、砂楼香の幻惑から開放されたリクスウと合流すれば、戦闘も幾分有利にもなるだろう。

起き上がったタイコウの視線の先、当のリクスウは地に伏して動く様子が無い。村人達も同様に倒れているところを見ると、モウエンの砂楼香から解放された影響で気を失っているらしい。

「リクスウ。目を覚まして」

声をかけると、返事をしたのか僅かながら呻き声が返ってきた。

リクスウの傍らにまで歩み寄ったタイコウは、彼を起こそうと手を伸ばす。

その時だった。

「触るな！」

急にカツと目を見開いたリクスウが叫び、同時に魯智からも近寄らぬよう警告が飛ぶ。思わぬ反応に、タイコウは弾かれたように伸ばしかけた手を引いた。

「え？ リ、リクスウ、どうしたの？」

困惑するタイコウに、リクスウは苦悶の表情を浮かべながら告げる。

「……逃げる、タイコウ」

「え？」

「どこでもいい……とにかく俺から離れる」

リクスウは、自らの体を抑え込むように両腕で抱え込んだ。

「でも……」

いいかけて言葉に詰まる。

(この気はトウコウなのか?)

目の前の青年が放つのは虎霊トウコウの赤黒い妖気。しかし、その気はいつにも増して膨れ上がり、リクスウ自身を覆うほどに溢れ出している。

「いいから早くしろっつってんだ！ もう抑えがきかねんだよ！」

「うわっ！」

怒声と共に振るわれたリクスウの腕。それはタイコウに届く距離では無かったが、腕から放たれた力によって、タイコウは押し退けられる。

「タイコウ！」

(氣い付けいや、オウメイ。あの坊に憑いとるバケモンはハンパやないで)

よろめくタイコウを受け止めたオウメイの脳裏に、樂葉の言葉が響く。

言われるまでもない。樂葉の助力で高められたオウメイの感覚は、リクスウの気配が尋常ではないと感じさせてくれる。

目の前の青年が放つのは虎霊トウコウの赤黒い妖気。

「タイコウ。あの香炉……」

オウメイが促した先には破壊された香炉が転がっていた。香炉の残骸から飛散した灰はゆらゆらと地表を漂い、リクスウの足元までつながっている。

(持ち主も無しに、あの香炉はリクスウを操るといふのか……?)

構えた魯智に対処法を問おうとしたタイコウ。だが、問いかけるより前に魯智から警告され、慌てて背後に目を向けた。

「よもや、ここまで押し込まれるとは思わなんだわい」

振り向いた先にいたのはモウエン。

老僧は破れた黒衣を気にする様子も無くゆらりと立ち上がり、編み笠の隙間から覗き込むように二人を見据えている。

状況は悪化した。動く気配がないが今のリクスウは敵と見ていいだろう。モウエンは怒りが激昂を通り越したのか、冷淡としている。さながら、嵐の前の静けさ。爆発寸前の火山が二つ眼前にあるような気分だ。

「少々遊びが過ぎた。真面目に狩らせていただくとしよう」

その声は今の今まで戦っていた昂ぶりを忘れたかのような。老いた火山ことモウエンは冷たい口調で言い放ち、杖にぶら下がる無数の頭蓋骨に皺だらけの手をかざす。

モウエンの所作が何を意味するのか、タイコウにはまだわからない。少なくとも、こちらに都合の良い事は起きないだろう。タイコ

ウは老人の動きを警戒しながら錫杖を構えた。

その錫杖魯智からの新たな警告。それは背後のリクスウに対してではなく、もちろん目の前のモウエンに対してでもない。

「おや？ どうやら、まだ門は開いていないみたいだねえ」

場違いとも言える穏やかな女の口調に、タイコウは視線を巡らせる。

瓦礫と化した祭壇の中であって、唯一倒れずにあった支柱。声の主はその頂点に腰掛けていた。

「刻限はとうに過ぎたっていうのに、どうしちまったんだい、モウエン？」

艶やかで長い黒髪の女。鬱蒼と垂らされた前髪の隙間から覗き込むように、モウエンを見据えていた。

女に名を呼ばれ、タイコウ達と向き合っていたモウエンも彼女へと視線を向ける。

「心配するな、フェイアン。直に終わらせる」

「馬鹿言っちゃあいけないよ。今言っただろう？ 刻限は過ぎたつて。直にも何も、儀式は既に間に合っついていやしないのさ」

フェイアンと呼ばれた女のその視線も口調も穏やかではあったが、明らかにモウエンを糾弾していた。

「ならば尚の事、せめてこの者共を血祭りに……」

「過去の因縁もあるだろうからと、この一件をモウエンに任せただよ。それがこの有り様とは泣かせてくれるじゃないか。それでもね、あの御方はアンタを買って下さってんだよ。万が一モウエンの身に何かあれば、あの御方はもう一度計画を組みなおさなきゃならない。迷惑をこうむる身にもなつてごらんよ」

畳み掛けるように並べられたフェイアンの口上に、モウエンは反論できず齒噛みする。フェイアンは押し黙る老人からタイコウ達へと視線を移した。

彼女の視線を押し返すように睨むタイコウとオウメイ。

突然出現したフェイアンがタイコウ達にとって、敵になっても味方にはなりえない。それはタイコウもオウメイも、口に出さないまでも無く同意見。だが、モウエンとリクスウ兩名を前後に置いた状況で、実力未知数の相手に対し攻勢に出る余裕も無し。

（あいつの話の感じ、退散する気や。これ以上敵作ってもシンドイだけやし。ここはやり過ぎすんが吉やな）

オウメイの意識を読み取ったのか、樂葉もそう伝えてくる。

それぞれが様子を見る張り詰めた空気の中、リクスウがのそりと身を起こした。

「……リクスウ？」

「違うわ、タイコウ。やっぱり彼は正気じゃない……」

モウエンに視線を向けたままのタイコウ。その彼の背後を守るように背中を合わせたオウメイがリクスウを見据えた。

(この瘴気の膨れよう……ようやく読めたわ。あの坊、御香に操られとるわけやない。御香の力を食い潰したんや)

溜息混じりの樂葉の声がオウメイの意識に響く。オウメイは樂葉布を握り締めて、立ち上がったリクスウに対峙する。

「ホウ王恨メシ……コウタツ憎シ……」

リクスウの口から漏れた言葉が瘴気の風を生み、その風を受けたタイコウとオウメイは不快感に顔を歪ませた。

「見たところ、その万が一ってのも無い話じゃない。懸命なアンタだって気付いている筈さ。ここいらが引き際じゃないのかい？」

瘴気の風に逆巻く黒髪を撫でながら、フェイアンは改めてモウエンを諭す。その言葉が引き金となったのか、モウエンが不愉快そうに鼻を鳴らす。そして、構えた杖から下がる頭蓋骨を数個筆取り取った。

「モウエン？」

「案ずるな。確かに引き際じゃ。ただ、儂とここまで渡り合ったこの小童共に、褒美をくれてやろうと思つてな」

モウエンが手にした頭蓋骨を見ながら、フェイアンはクスクスと笑みをこぼす。

「やれやれ、負けず嫌いだねえ。どっちが子供なんだか……」

「一言多いぞ、フエイアン」

もう一度鼻を鳴らすモウエンの姿が陽炎のように歪む。

「それじゃ、邪魔したね、坊や達。縁があつたらまた会いましょう。もつとも、生き残れたとしたらだけど」

別れを告げるフエイアンもまたその姿を大きく歪ませ、日を浴びた朝霧のように薄れていく。

「さあ、駄賃じゃ。受け取れ小僧共」

モウエンが消え去りざまに頭蓋骨を放り投げた。その瞬間、魯智と樂葉から持ち主へ新たな警鐘が鳴る。

「こんなもの……！」

打ち払おうと錫杖を振りかぶったタイコウは、見据えていた頭蓋骨の変化に息を呑んだ。

虚空をゆっくり自転していた小さな頭蓋骨達が、急速に膨れ上がる。

それだけではない。頭蓋の下に背骨が生まれ肋骨が生まれ、腰骨、続いて四肢。骨格が組みあがったかと思えば、そこに肉が付いていく。さながら死骸の白骨化を逆回しに見ているようだ。

月下の龍神池のほとりに降り立つ、真っ白な毛並みの大猿が三体。モウエンとフェイアンが消え去った事を安堵する暇も無い。

(白猿候……猿の化け物。恐れるべきは腕力ではなく、その敏捷性)

魯智から伝えられる情報に耳を傾け、改めて錫杖を構えるタイコウ。その背後でオウメイが悲鳴を上げた。

「タイコウ!」

「わかってる!」

オウメイの感じた異変は、彼女に言われるまでもなくタイコウも気付いていた。全方位に感覚を張り巡らせる魯智は伊達ではない。

(リクスウ……いや、虎霊トウコウが動いた。全く、まーったく、次から次へと……)

リクスウの口癖をなぞりつつ、タイコウは今日何度目かの死を覚悟した。軽く息を吐き、杖に意識を集中する。

「月と太陽はただ巡り。風と水はただ流れ。数多の草木は地に根付き、数多の獣は野を駆ける……」

術を放つ為の向上。その最中、タイコウの意識の中で依然と鳴り続けていた魯智の警鐘が弾けるようにその音を増す。

「ガアアアアアアッ!」

虎の如きリクスウの咆哮が、月下の森を突き抜けた。

第八章 月下咆哮 参（後書き）

（次回予告、タイコウ語り）

偽鉄冠子モウエンの置き土産にした妖魔達を、覚醒したトウコウは瞬く間に打ち倒しました。

しかし、喜んでいるわけではありません。

復讐心に乾く虎霊の狂気の爪は、満身創痍の僕とオウメイに迫ります。

そして、間一髪脅威の爪を逃れたオウメイは、決意を胸に秘めて静かにトウコウと対峙したのです。

怨み辛みは時を越え、蛮勇の長が天に吼え。

かの悲しみを鎮めんと、二人の巫女は祈り舞う。

月下の狂宴、ここに終幕。

次回『第九章 鎮魂舞踏』に乞うご期待。

第九章 鎮魂舞踏 壱

「ガアアアアアアッ！」

龍神の池に波が立つほどの、池を囲む木々が震えるほど。トウコウの内なる思いが具現化したような雄叫びが響き渡る。猛虎の雄叫びは、死を覚悟したはずのタイコウの身をすくませる。

タイコウの気が、視線がそれ、その瞬間を待っていたかのように大猿白猿候が動いた。

(しまっ……！)

タイコウの内心の舌打ちをよそに、白猿候達は地を蹴った。ただ、その行く先は満身創痍のタイコウではなく、彼と同じく身をすくませたオウメイでもない。大猿の六つの目が捉えていた者は……。

「リクスウツ！」

妖魔達の目標を悟り、声を上げるタイコウ。

タイコウ、オウメイ、村人達。数ある獲物の中で、大猿達はリクスウを選んだのだ。いや、リクスウの内にあるトウコウを仕留めなければ、安心して他の獲物に手をつけられないと感じたのかもしれない。

事実、その考えは間違いないだろう。攻勢に出た白猿候の内一体の首を、すれ違いざまに素手で引き千切るような化け物がいるのだ。それに背を向けて獲物をむさぼるような真似は危険と言える。

リクスウに切られた白猿候は着地姿勢をとることも無く地面に落ちた。その様を尻目に、リクスウは何事も無かったように千切った大猿の首を投げ捨てる。

「悪鬼……」

青褪めたオウメイの口から自然とそんな言葉が洩れる。

ずっとリクスウと対峙し、白猿候との攻防を見ていた。ともすればオウメイ自身の首がリクスウの手元にあってもおかしくない。全身から血の気が引く思いだ。

（ビビってな、オウメイ！ 自分の成すべき事を考えんかい！）

「オウメイ、村のみんなの元へ！」

樂葉の叱咤とタイコウの指示に、オウメイは我に返り視線を巡らせる。

再び衝突を始めた白猿候とリクスウを挟んだ対角。そこには砂楼香の破壊から未だに目覚めない村人達が倒れたままだ。

（みんなを逃がさなきゃ！）

「疾ッ！」

オウメイは樂葉布を翻し眠れる村人達へ向けて大跳躍。その眼下、血塗れの攻防を繰り広げているリクスウ達へ視線を向け、目を見開いた。

隙を生み出そうとリクスウの周りを飛び回る白猿候に対し、リクスウがとった構えは不可視の刃の発射姿勢。構えからの振りを考えれば、村人達が巻き添えを食う。

「リクスウツ！ ダメ、やめてーッ！」

悲鳴にも似たオウメイの懇願。しかし、怒れるトウコウに支配されたリクスウの両腕は、その所作を留めようとはしない。

「吼えよ……活！」

リクスウの双腕から靈気の爪が放たれる間際、術を完成させたタイコウを中心に衝撃波が広がりリクスウと白猿候を襲う。

間近にいた白猿候は衝撃をまともに受けて龍神の池にまで吹き飛ばされ、豪快に水飛沫を上げた。僅かに離れていたとはいえ、残るリクスウともう一体の白猿候も突如発生した突風に抗う事もできず大きく体勢を崩す。

「ガアアアアツ！」

虎霊トウコウは雄叫びをあげ、崩れた体勢などお構い無しに両腕を振り回す。放たれた虎霊の右爪は大地を深く削り取り、左爪は白猿候を薙いでその巨体を分断し、眠る村人達の頭上を掠めた。

「みんな！」

着地したオウメイが急ぎ村人達の様子を窺う。村の者達は依然気を失ってはいるが、虎霊の爪の餌食にはならずにすんだようだ。

(良かった。みんな無事ね……)

(ああ、村のモンはな……)

安堵するオウメイに対し、意味深な言葉を返す樂葉。

龍の姫の言葉の意味を悟ったオウメイは、弾かれたように振り返った。振り乱された樂葉布が揺らめき、オウメイの視線を一点へと誘う。

「タイ……コウ……？」

彼女の視線の先、タイコウが錫杖を支えにして俯いていた。

術の発動直後、肩を揺るようにして荒げていたタイコウの呼吸が急速に落ちている。ただ、それは本来の落ち着きを取り戻したためではなく、息を荒げる元気さえ失ったため。

生気を失ったかのような蒼白の顔をしたタイコウは、自身の身体を支えきれずに膝を付く。錫杖を掴んでいた両手はそれを維持する気力さえも失せたのか、ずるずると滑り落ちていく。

(まあ、無理も無いわな……)

樂葉の声を聞くまでも無い。タイコウの気力の枯渇はオウメイにもはっきりと伝わっていた。確かに無理も無い。モウエンとの戦いで満身創痍の状態で、あれだけの衝撃波を撃ち出しておいて元気なわけが無い。

「タイコウ……」

青年の崩れゆく身体を支えてやりたいと思う。無理を押しして戦い続ける意思を労ってもやりたい。それでも、今のオウメイにはその前に対峙しなければならぬ者がいた。

古の蛮勇トウコウの霊。己の末裔であるリクスウの身に宿った彼は、白猿候という明白な敵を見失い、次に滅する相手を探し周囲を見回していた。否、己に刃を向けたのは白猿候以外にも、もう一人見逃しはしない。

「憎シヤ……恨メシヤ……」

暗く淀んだ隻眼でタイコウを捕捉するトウコウ。その口から重く冷たい声が洩れる。

（思い通りにはさせないわよ！）

「疾ッ！」

樂葉布を翻したオウメイが跳ねた。その跳躍に慌てる樂葉。

（ちよつ、オウメイ！）

力を貸すと言った以上、オウメイが樂葉布を行使するのは構わない。だが、刹那的に発する龍の気をもって跳躍したオウメイの向く先には……。

（あの化け物に何する気やねん！）

(時間稼ぎよ！)

狼狽する樂葉に胸中で返す。

樂葉布は盾として防ぐに向き、剣として攻めるには向かない。さりとして、他に武器があるわけでもない。ならば、自らを武器とする。

オウメイはリクスウの目前に降り立ちその懐に飛び込んだ。

そして、リクスウの、トウコウの目が彼女へ焦点を合わせる前に……。

「疾ッ！」

オウメイは目の前のリクスウめがけてもう一度跳ね、リクスウの胸板に激突する。

華奢な娘一人が大の男に当たったところで、娘が弾き返されるのが道理。しかし、樂葉布が生み出す爆発的な脚力が今のオウメイを砲弾に変えていた。

リクスウはその衝撃に耐える間も無く跳ね飛ばされ、瓦礫化した祭壇へと叩きつけられた。対するオウメイも激突の反動で跳ね返り、二転三転と地を転がる。

(オウメイ！ しっかりせえ！)

砂塵を上げながら散々大地を転がり、ようやく止まったオウメイ。全身を痛みに襲われてどこを打ちつけたのかわからないオウメイの心に、樂葉の声だけがやけにはっきりと響いてくる。

(ホンマにアンタは……なんちゅう無茶をするんや、アンタは！)

声からして樂葉は本当に怒っている様子。オウメイも自分のした事を思い返すと、反論できない。できたとしても、その余裕が無い。

「う……あぁっ！」

思い出したかのようにオウメイの身体を痛みが走り、彼女は身体を掻き抱いて悲鳴を上げた。

(安心せえ、痛いのは生きてる証拠や。あんな真似してからに。それだけですんだだけマシヤと思っとき！)

再び心中で怒鳴りつけられ、オウメイは落ち込みもしたが嬉しくもあった。痛みが生きている証というなら、自分の無茶をこうして叱りつけてくれる事もまた証。

「アタシも……これほどとは……思わなかったわ」

身体を襲う痛みに脂汗を浮かべつつ苦笑いする。

(ホンマ、会って数刻でお別れなんて勘弁やで)

ぶちぶちと小言を続ける樂葉に何度も謝りながら、オウメイは痛みを堪えて立ち上がった。そのままふらふらとタイコウの元へ歩み寄る。

「でもね、彼がいなくなったら終わってしまう気がしたから……」

大地に座り込みながら、それでも伏せることだけは拒否するように手をつき俯いているタイコウ。そんな彼の姿を見ながら、樂葉に、自分に言い聞かせるように呟いた。

微動だにしないタイコウの隣へ座り込み、その顔を覗き込む。生気に乏しい青白い顔をしているが、気絶しているだけで死んだわけではない。しばらく安静にしていれば元氣を取り戻すだろう。

だが……。

「ごめん。ごめんね、タイコウ。もう少し……ほんの少しだけでもいいの。もう一度、あなたの力を貸して」

リクスウの中から溢れ出るトウコウの気は、未だに衰えていない。すぐに瓦礫の中から起き上がってくるだろう。そうなれば、戦えるものはオウメイだけ。彼女一人ではトウコウは抑えきれず、そうなれば村人もオウメイもタイコウも犠牲になる。わずかでも生き残る機会を得ようとするなら、タイコウの助力は重要だ。

オウメイはタイコウの両肩に両手を添えると、目を閉じて小さく息を吸った。

(傷は大した事無いけど、気が足りない。傷癒しの神子唄じゃダメ……なら)

「子の腕をあなたはくぐり、あなたの腕を子がくぐる」

意を決してオウメイが紡ぎ始めたのは、気を奮い起こす神子舞のまじない言葉。

「子の歩みにあなたが合わせ、あなたの歩みに子が合わす」

今まで一度も成功したことのない言葉。そして、今成功させなければ後は無い。

「子の拍子にあなたが踊り、あなたの拍子に子が踊る」

言葉を紡ぎ終えたオウメイは、もう一度タイコウの顔を見る。しかし、期待を込めた彼女の視線に、彼が応える様子は無い。

オウメイはタイコウの背に手を回し彼を抱き寄せると、互いの額をすり合わせる。

失敗したのならもう一度。タイコウを見つめるオウメイの目から諦めが消えた。

「子の腕をあなたはぐり、あなたの腕を子がぐる」

ただ一心に念じる。タイコウの復帰を。

「子の歩みにあなたが合わせ、あなたの歩みに子が合わす」

その背後で瓦礫を振り払い、リクスウが立ち上がる。

「子の拍子にあなたが踊り、あなたの拍子に子が踊る」

それでも彼女は止まらない。ただただ一心に祈る。何度も、何度も。

(魯智、アンタ……)

オウメイが祈り始めてからずっと沈黙を守っていた樂葉が、驚いて声を上げた。額を突き合わせて祈り続けるオウメイにも、樂葉の驚いた理由はなんとなく理解できた。

タイコウの顔で占められた彼女の視界。その片隅に淡い光が生まれていた。錫杖魯智が金色の光を煌々と放ち出したのだ。

「子の腕をあなたはくぐり、あなたの腕を子がくぐる」

もう一度オウメイは言葉を紡ぐ。魯智がそれに呼応するかのよう
に光を強める。

「子の歩みにあなたが合わせ、あなたの歩みに子が合やす」

魯智の放つ光は穏やかで暖かく、オウメイの心を落ち着かせる。

その背後では、リクスウに憑くトウコウが疎ましそうにその光を睨みつけていた。

「子の拍子にあなたが踊り、あなたの拍子に子が踊る」

（オウメイ、後ろや！）

紡ぎ終わると同時に樂葉からの警告。

一心に祈るオウメイの後ろで、トウコウに操られたリクスウが腕を振り上げていた。

樂葉の警告からオウメイの対処まで、それまでにリクスウは虎霊の爪を振り下ろせただろう。ただ、その爪に勝る一手がそれを封じ

た。

シャラン

錫杖魯智が僅かに傾き、穂先に下がる金輪が打ち鳴らされる。その音を耳にした途端、リクスウはビクリと身を震わせて一歩退いた。

(……なんや?)

猛進のみの攻めの態勢だったリクスウが、間合いをとり警戒するようにオウメイ達の様子を見ている。その思わぬ反応に樂葉が困惑の声を上げた。

憤怒と憎悪の権化であったトウコウが新たに見せた感情、怯え。

(あの化け物、ひょっとしたら魯智が苦手なんと違うか……? つて、ウチの話聞いてるか、オウメイ?)

そんな樂葉の問いもオウメイには聞こえていない。いや、聞こえてはいるが、聞き流してしまっていた。彼女にとっては、背後の虎霊への警戒よりも目の前で起きた事への歡喜が勝っていた。

オウメイのまさに目の前。タイコウの蒼白だった顔に色が戻っていく。それは、オウメイが初めて神子舞を成功させた証。

「アタシにも……出来たんだ」

閉ざされていたタイコウの目がゆっくりと開かれ、涙をこらえる娘の顔が映る。タイコウは、目を開けた途端視界いっぱいに映った彼女の顔に驚き慌てる。

「オ、オウメイ？」

「……うん！」

タイコウに名を呼ばれ、オウメイは微笑み頷いて見せた。

そんな二人を現実へ引き戻すように。或いは、再び動き出したりクスウをもう一度押し留めるように、魯智が金輪を鳴らす。

シャラン

(アンタら、イチヤイチャするなら後にせえっ！)

樂葉も怒鳴る。

樂葉の言葉にオウメイは赤面し、魯智から状況を伝えられたタイコウが青褪めた。

「オウメイ！ トウコウが……！」

「う、うん。だ、大丈夫。わかってるから……」

慌ててタイコウから顔を離れたオウメイは、立ち上がりリクスウへと向き直った。

(わかってるで、何がやの！ 早いトコ魯智に音を鳴ら……)

(わかってるってば！)

神子舞の時の精神集中はどこに消え失せたのか。

オウメイは無様に高鳴る鼓動を深呼吸で落ち着かせ、タイコウへ目を向けた。

「タイコウ、手伝って欲しいの」

「手伝いたいののは山々だけど、僕には立ち上がる力さえ残っていない……」

悔しげに答えるタイコウに、オウメイは首を振って微笑んでみせた。

「魯智を振ってくれるだけでいいよ。拍子は、たぶん魯智が知っているから」

そう伝えて改めてリクスウへ、未だに憎悪に満ちたままのトウコウへ向き直る。

(今度はどんな無茶をする気や、この無茶娘……)

(今度のは無茶じゃないわよ。これはアタシの本来の役目なのだから)

疑いの声をかける樂葉に、オウメイは少しムツとして言い返す。

オウメイには、タイコウに神子舞を使っうちに気付いたことがあった。

オウメイに流れる血は代々巫女として継がれてきた血。巫女は龍

神と民を繋ぐ架け橋だ。民を救う神子唄や神子舞。龍神への祈祷。
総じて扱うのは気脈。

なれば目の前の虎霊にも気をもって通じ合うことは出来る。トウ
コウが猛り暴れていた先程までならいざ知らず、魯智がその機会を
与えてくれた今ならば……。

オウメイは躊躇う事無く一歩踏み出した。

第九章 鎮魂舞踏 貳

「魯智を振る？ ……拍子？」

タイコウが戸惑い尋ねるが、オウメイは背を向けたまま答える様子は無い。困り顔で魯智へと視線を移したタイコウは、そこで初めて魯智が輝いている事に気がついた。

「これは……！」

驚く彼の手が独りでに動き、光を放つ錫杖を振り上げる。

シャラン

枝葉が風に揺れ、たわわに実った果実を振り落とすように。魯智の放つ金色の光が金輪の音と共に虚空へ舞い飛ぶ。

シャラン

一定の拍子で振り鳴らされる魯智の音に次々と光の粒が舞い、龍神の池を包んでいた瘴気を押し出していく。

薄れていく瘴気に代わって周囲を包む暖かい光の中、オウメイは心地良さそうに微笑み、トウコウはその表情を怯えから苦悶へと変えていく。

錫杖の金輪が音を立てるたびに、光の粒が舞ったたびに、一歩二歩と後ずさりするリクスウ。

「勇猛なる虎よ。恐れることはありません。これはあなたの内にもあつたものです。大きな悲しみと怒りに忘れてしまっているだけ……」

オウメイは苦しむトウコウに向けて、穏やかに微笑みかける。

「時として悲しむ事も怒る事もあるでしょう。でも、時には笑い、喜べる事もあります。あなたが忘れているのなら、アタシが糸を紡ぎましょう。歓喜の記憶へと繋がる糸を……」

怯え恐れて身を屈めるトウコウを、誘い助け上げるようにオウメイはそっと手を出した。

「どうか、思い出して下さい……」

心より願って頭を垂れたオウメイの背後で、タイコウが魯智に促されるまま錫杖で円を描くように振り、金輪が一際大きく音を立てる。

音を合図にするように、オウメイの両足が地を蹴った。それは樂葉布による跳躍ではなく、ただ跳ねただけ。しかし、それこそが始まり。

再び地に降り立ち身を捻り、樂葉布を翻す。両腕はしなやかに揺れ動き、両足も一所に留まらず。タイコウの鳴らす錫杖の音に合わせて、オウメイは軽やかに舞い踊る。

円を描く様は一滴の雫に揺れる水面のように、弧を描く様は悪戯な微風のように。

「綺麗だ……」

惚けたタイコウの口からそんな言葉が零れ落ちる。飾り気の無い稚拙な賛辞だが、彼の本心そのままの言葉。

金色の光が浮かぶ中で、黒髪をなびかせ一心に舞うオウメイの姿は美しかった。

その思いはタイコウだけではなく、間近で見ていた樂葉も同じ。

(これが、オウメイが奉納してくれるはずだった舞なんやね……)

オウメイの耳元にそんな囁き声が響き、樂葉布が薄緑の光を放った。光は樂葉布から離れ、虚空に麗人の輪郭を描き出す。

(樂葉……!)

夢の中で出会った龍の姫の姿に、目を見開いて驚くオウメイ。樂葉は踊りを止めてくれると言わんばかりに、自らも舞い始めた。

「今宵は奉納の祭事に非ず。ほんなら、ウチが舞う側に回るうちゅうのも、一興やと思わへんか？」

そう言ってニカツと悪戯っぽく笑いかける樂葉に、オウメイは笑みを湛えて頷いた。

揺れ動く樂葉の両手が一陣の風を生み、気を失っていた村人達の頬を撫でていく。

「ほれ、皆の衆！ 美女二人の華麗なる舞や！ 寝惚けて見逃した

ら損するで！」

未だ怯えの色を見せるトウコウに、目覚めを迎えた村人達に、陽気な宴の始まりを伝える樂葉の言葉。

その声に応えたか、それとも錫杖の音に促されたか、村人達は一人また一人と身を起こす。そして、オウメイと樂葉の舞を目の当たりにして息を呑む。

時に歩調を合わせ、時に天と地の如き個々の所作で。絶え間無く振り鳴らされるタイコウの錫杖から舞い散る金色の光の中、楽しげに舞う二人の姿はさながら天女の姉妹。

オウメイと樂葉の舞に見惚れる村人達の誰が始めたものか。錫杖の音に合わせて手拍子が生まれ、小さな手拍子が新たな手拍子足拍子呼び起こしていく。

龍神の池のほとりが光に満たされ、陽気に手を打ち鳴らす村人達。

(なんだろう。とても温かい……)

タイコウは、つい先程までの戦いを忘れて口元をほころばせた。

錫杖の放つ光に熱は無い。村人の手拍子にも、舞う二人にも。

それでも、タイコウは暖かな日差しに包まれているかのように感じられずにはいられない。穏やかにして、冬を越えた雪を溶かしつくすほどに力強い春の日差し。

それは、タイコウの視線の先にいるトウコウも同じと見える。

タイコウの錫杖が鳴るたびに、オウメイが弧を描くたびに、樂葉が跳ねるたびに、村人達が手を叩くたびに、トウコウの顔から怯えの色が薄れる。それどころか、内から満ち溢れていた殺気そのものさえ解きほぐされていく。

皆が歡喜の宴に湧き上がる中、オウメイと樂葉は示し合わせたように輪を描くように舞い始めた。

ぐるりぐるりと、双方の軌跡を追うように。

ぐるりぐるりと、己のいた位置に戻るように。

次第に早まる二人の歩調に、錫杖の音と村人達の手拍子が早まる。

二人の生み出す薄緑の旋風に誘われて、金色に輝く光の粒達は大きく渦巻き始めた。風に押されるように動き出した光は、やがて薄緑の風に追いつき、さらには自らが風となって二人を包み込んでいく。

「これは……」

タイコウが異変に気付いて呟いた。手を止める事無く振り鳴らしていた魯智から伝わってくる感覚が変わっている。

(森の瘴気が消えていく……)

オウメイ達を中心に巡る金色の風が、トウコウの邪気も森の瘴気も吸い上げている。

「悲しみの雨は永久には続かず……」

金色の旋風の中、最初にそう呟いたのは樂葉。

その言葉が意味するものが何か。オウメイがそれに気付けたのは、樂葉を盟友としたからなのか、巫女の血筋だからなのか、はたまた魂の記憶か。

「憤怒の雲も永久には続かず……」

樂葉の一声に続く言葉が、オウメイの口から自然と漏れる。

オウメイと樂葉は微笑みあい、どちらからともなく口を開いた。

「終宴の刻は来たれり……」

「雨よ……」

「雲よ……」

「風に逆巻き、月天へ還れ！」

二人の声が揃い、各々の手を天へとかざす。その所作に合わせるように、魯智が一際大きく振り鳴らされた。

盛大に鳴り響いた金輪の音を合図に、渦巻いていた金色の光は一陣の風となって月夜の天に向かって吹き上がる。

森の澱んだ瘴気を飲み下しても尚輝きを損なわないその姿は、昇天する黄金の龍。

タイコウや村人達の見守る中、龍は輝く身をうねらせながら空高く舞い上がる。雄大な姿に圧倒されるように誰しもが息を呑み、星屑の中へと消えていくまで龍を見上げ続けていた。

黄金の龍が消えて再び静寂に包まれた龍神の池ほとり。龍の飛び立った地に残ったオウメイの隣に樂葉の幻影は無く、彼女が纏っていた樂葉布も消えている。彼女はただ一人、その身に月光を浴びて静かに佇んでいた。

一心に踊り続けたせいか鼓動が早い。高揚に朱を帯びて火照った彼女の頬を冷やすように、一陣の風が通り過ぎていく。

オウメイは高鳴る鼓動を抑えるように胸に手を当て、舞踏の余韻に浸るように小さく溜息をついた。

それから僅かに遅れて村人達が喝采の声が上がる。爆ぜるような歓声にオウメイは驚いて我に返り、村人達を見た。

時期外れの奉納の舞に、崇めていた龍神の姫の登場に、甘美なる悪夢からの目覚めに、村人の皆が拍手し歓喜している。

喝采を一心に浴びたオウメイは、村人達に一礼するとタイコウの元へ駆け出した。彼女を迎えようと、魯智を支えに立ち上がったタイコウがバランスを崩し、慌ててオウメイが彼を抱き支える。

「ごめん！ 無理させちゃったわね、タイコウ」

「大丈夫。舞のおかげで元気が出たよ」

オウメイの心からの謝罪に笑って答えるタイコウ。とても元気とは言えない足取りではあるが、その言葉に偽りは無い。それほどにタイコウの心は清々しさに満たされていた。

(リクスウは……トウコウは、どうなったのだろうか……)

胸の内に湧いたタイコウの疑問に、錫杖魯智が答えるように金輪を小さく鳴らす。

舞踏の間、終始光を放ち続けていた魯智だったが、既に光は失せている。もちろん、金輪が鳴ったところで金色の光が舞う事も無い。いつもの錫杖に戻っている。そんな魯智から伝わるリクスウとトウコウの気配もまた、いつもどおり。

魯智に促されるように視線を移し、行き着いた先には大の字になって眠るリクスウの姿があった。

(リクスウ、元に戻ったのかな……)

肯。

度重なる戦いの最中鳴り続けていた警告の声とは違う。穏やかな答えが魯智から返ってくる。

「う、ううん……」

魯智の答えに間違いが無い事を示すように、リクスウが目覚めて半身を起す。

「あ、リクスウ……」

タイコウの声にオウメイも振り返った。

リクスウの方はまだ寝惚けているようで、後ろ頭をかきながら辺りを見回している。

「全く、まーったく、何が何やら……」

拍手喝采が続いている村人達を五月蠅そうに見るリクスウと、その後ろで大人しくしているトウコウ。その姿に彼が元に戻った事を悟り、タイコウとオウメイは安堵の息をついた。

「タイコウ、歩ける？」

オウメイの問いにタイコウは疲れの残る顔に笑みを作ってみせた。

「うん、大丈夫……ッ！」

タイコウの言葉は最後まで発する事は無く、彼の表情が急激に曇る。

「リクスウ！ 池だ！」

そう叫んだタイコウはオウメイを振り払った。

「あ？ タイコウ、何を……ッ！」

気だるそうな返事をしかけたリクスウの表情もまた、一瞬にして険しくなった。

大人しくなつたとは言えトウコウの力が全て消えたわけではない。その力が、リクスウの背後、龍神の池に残る殺気を感じ取っていた。

そして、その殺気存在を証明するかのよう池の水面が飛沫を上げた。そこから飛び出した妖魔白猿候の姿に、村人達の歓声が悲鳴に変わる。

消えていった同族の弔い合戦か、はたまた未だに残るトウコウへの恐れからか。半狂乱になった白猿候が、背を向けるリクスウへ向かって飛び掛る。

「受け取って！」

タイコウはふらつく足で大地を踏みしめて錫杖を振りかざすと、リクスウに向けて足元の雪割りを打ち弾く。

「全く、まーったく、こっちは寝覚めが悪いつてのに……」

低空を飛来する雪割りを蹴り上げたリクスウの手に雪割りが収まる。それと同時に背後に迫る妖魔に向かって、振り向きざま鞘から刃を抜き放った。

一閃。

月光が生んだリクスウと白猿候の影が交錯し、白猿候の姿が二つに割れた。

そして、リクスウは振り向いた瞬間に見た妖魔の姿に確信した。今しがた自分の見た悪夢が夢ではないのだ、と。

雪割りを振り切ったリクスウの後ろで、絶命した白猿候は漆黒の塵となつて霧散した。後に残るは、モウエンの投げつけた小さな頭蓋骨のみ。

「……すまん。迷惑かけた」

一瞬の退治劇に再び村人達が湧き上がり、タイコウとオウメイも改めて安堵の息をつく。そんな中、リクスウはバツが悪そうな顔で誰にとも無く呟いた。

第九章 鎮魂舞踏 参

一夜明け、オウメイは龍神の池のほとりにいた。

龍神の池も周囲の森も穏やかで、時折吹く風に思い出したように小波が立ち枝葉が揺れる程度。いつもどおりといえはいつもどおりの風景。まるで、昨晚の狂気の宴など無かったかのように。

そんないつもどおりの風景の中で、唯一違っていたのは龍神を祀る祠だった。

名を鉄冠子仙人と偽り村人達を惑わせたモウエンによって小さな祠は破壊され、祀り上げる龍を奈落へと貶める祭壇を立てたのだ。

その祭壇も昨夜のうちに破壊された。今あるのは新たに作られた祠。

オウメイは静かに祠の前に跪く。もはやこの村での日課となっている朝の礼拝。

目の前の祠は、元々あった祠よりも遥かに簡素な代物。悪い夢から覚めた村人達が昨晚のうちに作ったものだ。

それでも、オウメイはその祠に満足していた。

奇跡のような舞を見て、龍神様にもお目通りが叶った。その喜びの心を込めて村長を始めとした村人達が総出で作った祠だ。とても大きな思いが詰まった祠だ。少々見栄えが悪いのはご愛嬌というもの。祈りを捧げる事になんの支障もありはしない。

オウメイは穏やかな笑みを浮かべ、目を閉じて祠へ一礼する。

(あーあー、ウチの祠が……一晩で随分と粗末なものになってしまったなあ)

不意にオウメイの胸の内から、彼女のものではない声が響く。祈りへと集中しかけていたオウメイは、その声に眉根を寄せた。

(そんな事言わないでよ、樂葉。せつかくみんなが一生懸命作った祠なのに)

内心抗議の声を上げながらオウメイが目を開けて見据えたのは、この池に住まう龍葉鱗后樂葉を祀る祠ではなく自分の首飾り。彼女の視線の先では、薄緑色の玉が朝陽の中で煌めいていた。

昨晚、我を忘れたトウコウの邪気と、森を覆う瘴気を浄化した鎮魂の舞。滞り無く舞い終えたオウメイの傍らからは樂葉の姿が消え、樂葉布さえも無くなっていった。役目を終えて池の底へと戻ってしまったのかと別れを惜んでいたオウメイの首に、翌朝目覚めた時にかかっていたのがこの龍玉の首飾りだった。

(それを言うなら、元あった祠かて当時の村のモンが一生懸命作った祠なんやで？ ウチが別れを惜しむのもわかるやろ?)

樂葉にそう言われてオウメイが返答に窮する。そんな彼女の困り顔が心の内から見えたのか、樂葉がカラカラと笑う。

(悪かったね、オウメイ。ちょっとばかり意地の悪い事を言うてしまった。これはこれでウチも気に入った。あつたかい思いが、ぎょう

さん詰まつとるんやから……)

からかわれた。何か言い返してやろうと思ったオウメイだが、村人達の祠を褒められて悪い気はしない。気を取り直して祠へと頭を下げる。

(それにしても、昨日はお疲れ様やったね、オウメイ)

そんなオウメイに、樂葉が再び語りかけてきた。

(そんな。アタシ一人の力じゃ何もできなかったと思う。みんながいたから、アタシも頑張れたんだよ)

それは謙遜でもなんでもない。オウメイの正直な気持ちだった。

樂葉がいなければ自分は池の底で死んでいた。目覚めた村人達の手拍子が自分の舞を高めてくれた。リクスウは最後の最後に妖魔を倒して皆を救ってくれた。なにより、タイコウが最後まで諦めずに一緒に戦ってくれた。

どれか一つ欠けても、今の自分は無い。

(特にタイコウにはお礼を言わなきゃ。あんなにフラフラになりながら、何度も立ち上がってくれて……)

(それかて、オウメイのおかげやで。アンタがいんかったら、あの坊は一度たりとも立ち上がれんかったわ)

(そ、そんなことは無いと思うけど)

（大有りや。魅了のお香が見せる夢から坊を起こしたのはオウメイ。モウエンと戦っている最中に気を失った坊を起こしたのもオウメイ。それと、鎮魂の舞を舞う時に坊を起こしたのもオウメイ。な？ 確かにオウメイが一役も二役も買ってるやろ？）

（それは……）

反論しようとして言葉に詰まる。確かに樂葉が言うとおりだ。そして同時に、オウメイはそれだけタイコウに無理強いをしたとも言える。

言い返すことを諦め、再び祈りを捧げようとしたオウメイ。だが、今度は自らの内に湧いた疑問に祈りを中断した。

（私、そんなにタイコウを助けたかしら……？）

モウエンが持っていた香炉の畏からタイコウを救ったのはわかる。魯智を彼に託し、神子唄によって傷も癒した。鎮魂の舞の時も、初めて神子舞を完成させタイコウの気を奮い立たせたのもオウメイだ。

では、先程樂葉が言っていたモウエンとの戦いの最中の事は……？

（そらアンタ。あの坊と口吸いしたやろ。あの時にオウメイの気が坊に注がれたんよ）

（くち……！）

サラリと答える樂葉に、オウメイは驚いて目を見開く。そして見る見る顔を赤らめる。

そういえばあの時オウメイはタイコウと口づけを交わした。今思えば、なんでそんな事をしてしまったのか。

寝顔が可愛かったから、つい……。戯れに。悪戯心で。出来心で。どれも当てはまるようで微妙に噛み合わない。

(それは、その……確かにしたわよ！ したけど！ でも、ちょっとチュッてただけで！ それでタイコウの気力が戻るなんて、聞いたことないわよ！)

(え？ 知らなかったん？)

しどろもどろで弁明するオウメイに、樂葉はさも意外だと言いたげに返す。

(相性とかあるし確実なわけじゃないけど、口移しで気を循環させられるんやで。なんの違和感も無くやっとなったから、ウチはてつきりオウメイが知ってるものやと……)

(聞いてない！ 教わってない！ 実家の口伝にそんな技法は無い！)

力強く否定する。

ふとした思い付きの行動に、それほどの力があつたとは思ひもしなかつた事である。

(そうなん？ いやー、状況が状況とは言え、なかなか大胆な子やなあと感心してたんやけど、違つたん？ それやったら、なんで坊と……)

(あー！ あーあー！ 樂葉、アタシはお祈りがあるので、その話はまた今度！)

勢いだけで強引に話を逸らし、今日何度目かの祈りの姿勢をとるオウメイ。その胸中に樂葉の深い溜息が響いた。

(何がお祈りやの、オウメイ……。形ばっかで氣イ散らしまくってるやないの)

「はい！ お祈りおしまい！」

(早ッ！)

祈り始めて数秒。オウメイは立ち上がると、気恥ずかしい記憶から逃れるように、祠に背を向けた。

「さ、行きましょう。待たせちゃ悪いわ」

心のうちにいる樂葉にそう呼びかけたオウメイは、思い出したように祠へと振り返り深く一礼。そして、オウメイは改めて村に向かって走り出した。

(それで、さっきの坊との口吸いの事やけど……)

「五月蠅い、樂葉！ それと、タイコウを坊と呼ばない！」

樂葉との口論を続けながら……。

「ツクシユン！」

カコ医師の家の一室。旅の荷造りを行っていたタイコウのくしゃみに、リクスウは眉根を寄せた。

「おいおい、今度はお前が病気になったのか？」

「いや、そんな気配は全然無いんだけど」

「勘弁してくれよ。おまえまで寝込んだら、また旅が滞っちゃう」

「昨日まで寝込んでいた人に言われたくないなあ」

言いながら自分の額に手を当ててみるタイコウ。掌に伝わる自分の体温は、別段高くも低くもなし。

「噂でもされていたのかな……」

そんな青年の呟きを、リクスウが耳ざとく聞き逃さなかった。

「何！ まさかりホウちゃんか、この恋泥棒め！」

「誰が噂しているかなんて、わかるわけがないじゃないか！ それと、恋泥棒は誤解だってば！」

隻眼の青年の冗談なのか本気なのかわからない抗議を、タイコウはむきになりながら否定した。

(りホウより、どちらかと言えば……)

そんなタイコウの頭に一瞬誰かの笑顔が浮かんだ瞬間、彼の思考はリクスウによって止められる。

「とりあえず病じゃねえってんならいいさ。早いところ旅路に戻る
う」

リクスウの口から出た言葉に、今度はタイコウが表情を曇らせる。

「リクスウ。まだ、昨日の事を気にしているの？」

タイコウは自分の脳裏に誰がよぎったのかを忘れ、目の前の仲間の様子へと思いを巡らせた。

今は無き部族コウ八族の末裔である彼に取り憑いたトウコウの霊。部族を滅ぼされた恨みを纏い、虎の相を持つコウ八の族長。

妖魔の力を糧に復讐を成さんと暴走するトウコウ。一時的にとは言え、リクスウは彼に意識を乗っ取られた事を悔やんでいた。

「気にすんなってほうが無理だろ、ありゃあ」

苦笑いを浮かべながら言い返すリクスウの横顔は、いつもの覇気にかけている。

意識を失っていたとは言っても、リクスウは夢うつつにトウコウのしでかした事を覚えていた。今回はタイコウとオウメイによってトウコウの霊は落ち着きを取り戻したが、いつまた祖先の恨みに火が点くかわかったものではない。そうなれば、今度こそ傷つける事になるかもしれない。

例えば、今もリクスウを心配そうに見ている仲間タイコウを……。

「……なあ、タイコウ」

リクスウは何度が躊躇った後、意を決するとタイコウに声をかけた。

「何？ どうしたの？」

「俺達、ここで別れるか」

「はあ？」

唐突なリクスウの提案に、タイコウは思わず聞き返してしまう。

「昨日の一件でわかったろ？ 俺に憑いているトウコウは凶暴なんだよ。これから先も、いつ何時コイツが暴れ出すかわからねえ。暴力りゃ、敵も見方も見境無しに傷付ける。下手すりゃ、おまえを殺しちまうかもしれねえんだぞ。俺は……そんなの嫌だ」

早口でまくし立てるように言葉を並べたリクスウは、そこまで言うとうとタイコウから視線を逸らして押し黙った。

黙ったままのリクスウは、タイコウの答えを待つ。

沈黙が部屋を包む。なかなか返ってこないタイコウの言葉に、焦れたリクスウが彼を見る。タイコウもまた、リクスウを黙って見ていた。

その表情はトウコウを恐れるものではなく、虎霊に悩まされる仲間を励ますものでもない。ただただ呆れたと言わんばかりの顔が、リクスウの前にあった。

「何を言い出すかと思えば。リクスウは大事な事を忘れているよ」

目が合ってからもしばらく黙っていたタイコウは、そう言って溜息を吐く。

「リクスウは師匠の雪割りが認めた使用者だ。そして、僕は雪割りを都に運ぶように言われている。一緒に行くのは当然だろう?」

「いや、だからって……」

反論しようとするリクスウを、タイコウが手を上げて制する。

「トウコウが暴れた時は驚いたけど、僕とオウメイはそれを止められた。これからも、何度だって止めて見せるさ」

「しかし……」

なおも食い下がるリクスウだったが、タイコウは話はそれまでだとばかりに視線を荷物へと戻した。

「それに、暴走というなら、僕はリクスウので慣れちゃったよ……」

荷造りを再開しながらタイコウがボソリと呟く。

そんな戯言にリクスウは呆気にとられ、やがて笑い出した。

「アハハハハ、暴れ癖はコウ八族の血筋だつてか！ 全く、まーつたく、言ってくれるじゃねえか、タイコウ！」

「たまには言い返さないと、リクスウとはやっていけないからね」

タイコウは邪気の無い笑顔に笑い返して見せる。

二人して笑いあう部屋の戸が遠慮がちに叩かれた。入室を請う音にタイコウとリクスウ双方が返事をする、医師見習いのハクタ少年がひよっこりと顔を出す。

「いらつしゃいましたよ。お二人とも準備はお済みですか？」

ハクタの言葉にタイコウは魯智を掴んで頷き、リクスウは雪割りを携えて荷袋を担ぎ上げた。

「ヨツシャ、行くかタイコウ」

「そうだね、リクスウ」

二人してカコ医師の家を出る。玄関を抜けた二人を待っていたのも同じく二人。

「すっかり良くなったな」

旅支度を終えたリクスウの姿にカコ医師が告げると、リクスウはニカツと笑って見せる。

「おう、世話になったな」

その血色の良い表情にカコ医師は満足げな笑みを浮かべた。

(カコ先生の笑った顔、初めて見た……)

カコ医師の世話になつてからというもの終始彼の仏頂面を見ていたタイコウは、意外そうな顔で笑い会う二人を見比べる。だが、いつまでもそうしてはいられないと思ひ出し、待っていたもう一人へと顔を向けた。

「ゴメン。お待たせ、オウメイ」

タイコウに声をかけられ、オウメイは慌てて青年へと向き直った。向き直る前の視線はタイコウと同じカコ医師。それも、タイコウと同じような顔で。よほどカコ医師が笑う姿は珍しいらしい。

「大丈夫、待つてないよ。今来たところなんだから」

そう言つてタイコウに笑い返すオウメイ。タイコウは彼女の笑顔とは対照的に、その表情を曇らせた。

「オウメイ。本当にいいの？」

言葉少なな問いかけ。だが、タイコウの質問はオウメイには充分に理解できるものだった。昨晚から幾度と無く彼から問われてきた事だ。オウメイは表情こそ膨れっ面に変わったが、この問いに対する彼女の答えは決して変わりはない。

「もう、しつこいよ、タイコウ。これからはアタシも二人に付いていく。タイコウだって昨日許してくれたじゃないの」

「それは、まあ……」

オウメイに言い返され、タイコウは頭をかいた。

昨晚、龍神の池での騒動が終わってからのこと。オウメイはタイコウとリクスウに同道を願い出てきた。

最初は二人共洗面を作ったものの、何度も頼み込む彼女にまずリクスウが折れ、ついにはタイコウも彼女の熱意に負けたのである。

「うん、そうだった」

そして、オウメイの真剣な顔に見つめられたタイコウは改めて負けた。

「これからもよろしくね、オウメイ」

一度認められた事であり、旅の友が増えるのは嬉しい。それが、決して安全ではない旅になるとしても……。いや、危険だからこそ仲間が存在が心強い。

「うん！」

差し出されたタイコウの手を、オウメイは満面の笑みを浮かべて握り返した。

そして、握手を交わす二人の手の上に、第三者の手がポンと置かれる。驚いて手の主へと目を向けたタイコウとオウメイ。その二人の視線を受けて、リクスウはニヤリと笑みを浮かべてみせた。

「さてさて、御兩人。和んでいるところ悪いが、出発しようじゃねえか」

それが、新たな旅の始まりの合図。

カコ医師とハクタ少年に礼を言つと、三人は村の出口へと歩き出す。

「そついやあ、タイコウ。俺に稽古をつけてくれて言つてたが、どうする？ なんなら今からでもやるか？」

村の出口が見え始めた頃、リクスウが腰に下げた雪割りに手を添えて言い出した。

「今すぐつてのは、ちょっと……」

隣を歩くタイコウが困つたような顔を見せると、リクスウはそれもそうかと思ひ直して歩みを進める。

「しっかしわからねえな、タイコウ。喧嘩沙汰は嫌がつてたくせに、今になって俺に師事を請うとはよ」

「喧嘩はやつぱり嫌だよ。でも、今回の事で思つたんだ。いつまでも魯智にはかり頼つていちゃダメだって。魯智が無くて自分自身を守るようにならなくちゃ」

リクスウの問いに答えるタイコウ。その手に握られていた錫杖魯智が鳴らした金輪の音はタイコウに同意するものか、はたまた否定するものか。

「へえ、そいつは殊勝な心がけだ。全く、まーったく、感心すらあ

「僕は僕として、リクスウも稽古は他人事じゃないでしょ。ちゃんとオウメイに教えてもらわなきゃダメだよ」

からかうように言うリクスウにタイコウが返すと、リクスウはハクタ少年の薬草茶を飲んだような複雑な顔になる。

「うへえ。俺、稽古だの修行だのって、そういうの苦手なんだよなあ」

心底嫌そうにぼやくリクスウ。オウメイは彼のその様子にクスクスと笑みをこぼした。

タイコウがリクスウに戦い方を習う。それは昨夜、オウメイが同道するかどうか話し合った際に出てきた話だった。

そして、同時にリクスウに与えられた課題が、オウメイから気の扱いを学ぶというもの。無論、トウコウの暴走を少しでも抑えられるようにする為である。

「大丈夫よ。慣れてしまえば難しい事じゃない……と、思うから」

最後の言葉に、リクスウの表情に不安の色が増す。

「お手柔らかにたのむぜ、オウメイ先生」

強気なリクスウにしては珍しい気弱な声が洩れ、それを遮るかのようにタイコウがオウメイの前へと進み出た。

「オウメイ、みっちり教えてやって」

「任せて、タイコウ」

「だー！ 二対一とは卑怯だぞ、おまえら！」

悪戯っぽい笑みを浮かべるタイコウとオウメイに、抗議の声を上げるリクスウ。

（やれやれ、賑やかな奴らやなあ……）

そんな呆れた様子の声がオウメイの意識に響く。オウメイはその声に誘われるように、自分の胸元で揺れている龍玉の首飾りを見つめた。

（樂葉、こういう賑やかなのは嫌い？）

（そんなわけあるかいな。陽気はウチの好物や。オウメイの故郷の桃園を見るまでは、この坊達との旅を楽しませてもらおうかね）

樂葉の力カと笑う声がオウメイの内に響き渡る。

これもまた昨晩のうちの事だが、故郷の桃園を見せるといふ約束で樂葉の力を借りたオウメイは、樂葉に故郷への帰還の先延ばしを頼んだのである。

断られるかもしれない。そんなオウメイの心配を樂葉は軽く笑い飛ばした。

（ウチはオウメイが気に入ったし、世情も少しは理解した。オウメ

イ、心配せんでも桃源の約束を守ってくれる限り、ウチはアンタと一緒にやよ。道草も一興やないか)

そう言つて龍の貴人はオウメイの頼みを快諾してくれた。そして、オウメイは改めて盟友に誓つた。いつか必ず故郷の桃園を見せると。

「おーい、オウメイ？ ぼさつとしてると置いてくぞー！」

「どうしたのー？ 忘れ物ー？」

山間の道にリクスウとタイコウの呼び声が木霊し、オウメイはハツとして首飾りから視線を上げる。

樂葉と話すうちに歩みが止まっていたようで、彼等は随分と先に進んでしまっていた。

「ごめーん！ 今行くよー！」

新たにそんな木霊を響かせ、オウメイは慌てて二人に追いつくよつに駆け出す。

旅は道連れ。新たな仲間を加えたタイコウの旅はまだ半ばである。

第九章 鎮魂舞踏 参（後書き）

〜次回予告、リクスウ語り〜

龍の樂葉を盟友にしたオウメイを仲間に加え、俺達の旅はまだまだ続く。

とは言っても、旅つてのも金がかかるもの。

立ち寄った村ゼンギョウでオウメイは野良仕事、タイコウは本職の鍛冶仕事。

そして、俺は……平和な村にや用心棒はいらねえのよ。

オウメイに課せられた鍛錬に勤しむ俺の前に、身の丈もある剣を背負った男が現れ……誰コイツ？

勤勉上等、労働万歳。働かざるは食う無かれ。
暇持て余すはエセ道士、その隻眼が見た者は。
三大道士の一人現る。

次回『第十章 大剣道士』に乞うご期待！

第十章 大剣道士 壺

ホウ大国の中央部よりやや西に位置する村ゼンギヨウ。これといつて目立つた名産品があるわけでもなければ、交通の要所というわけでもない。極々普通の村である。

村の者達は皆温厚にして勤勉。村民の誰しもが、貧しいながらも心豊かに生活を営んでいる。

そんな絵に描いたような農村の昼下がり。穏やかな陽気の下、村人達は春を迎えた田畑を耕していた。

そして、ここにも村人と並んで鋤を振るう者がいる。

「ノンベの父ちゃん、日銭を稼ぎ 稼ぎに稼いで酒に変え、ホ
イ」

オウメイはおどけた調子で歌いながら、拍子に合わせて鋤を振り下ろす。周囲で同様に畑を耕していた村人達が陽気に笑い、彼女の歌に合いの手を入れる。

「母ちゃんのへそくり、壺の中」 父ちゃん知らずに売っ払い、
アラヨット」

(あー、こりゃこりゃ)

樂葉もこっさり合いの手を入れる。龍玉を伝って響く彼女の声に、オウメイは笑みを浮かべた。

葉鱗后樂葉。山村メンサイの池の底に生み出された異世界への門を、長きに渡り封じてきた龍。

村では伝説として祀られているその龍と出会うまで、オウメイは崇拜と共に少なからず恐れてもいた。伝承にあるとおり村に大量の妖魔が湧き出たのなら。それらを退け、門を封じるほどの龍というなら。樂葉はいったいどれほど強暴なのだろうか。

そして、出会ってみて自身の想像力の乏しさに恥じ、心中で詫びた。

（楽しそうね、樂葉）

（言つたやろ、陽気はウチの好物やて）

彼女は確かに強いのだろう。しかし、その力を奢り溺れるような事はなく、力を御するだけの知恵もある。そして、その知恵を扱う気性は明朗で、春の日差しのように温かい。

ただ、知識と言う点では長らく池の底に住んでいたせいかわりが著しいところもある。例えるなら、古典万巻をそらんじる世間知らずのお嬢様。

あ
（ウチが知らん間に、こんな間の抜けた愉快的歌が出来てるとはな

（アタシが生まれた時には歌われていたんだけどなあ。まあ、何百年も池の中にいたんだもの。樂葉が知らないのかもしれないか）

（ホホホ、そうやろうな。長い旅路や。これから先も、いろいろと

見た事のない物珍しいもんに出会えそうやね。楽しみやわー)

嬉しそうに言う盟友の龍に、オウメイは苦笑いを返す。

(別に物見遊山に行くわけじゃないのだけど……)

そうなのである。今でこそ畑を耕しているが、オウメイには……いや、オウメイ達には向かうべき所がある。

首都コウランに現れた妖魔達。その妖魔を討つ者、宝具といった品々をホウ大国王が集めている。

オウメイは盟友となった龍、樂葉と共に妖魔と戦うため。仲間であるリクスウもまた、祖先の霊トウコウの力を用いて妖魔を退治するため。そして、もう一人の仲間タイコウは師匠オウシユウが作り上げた破邪の刀、雪割りを献上するため。三人はコウランへ向かい旅を続けている。

旅の目的からすれば、悠長に畑を耕している場合ではないのだが……。

(長い旅にはそれ相応に路銀もいる、か。そういう世知辛いところは、今も昔も変わらへんもんやわなあ……)

しみじみと呟く樂葉。途端に鋤を握るオウメイの手の力が抜けた。

「もう、そういうこと言わないでよ。やりきれなくなるわ」

「ん？ どうしたね、嬢ちゃん」

思わず口から零れ落ちたオウメイの抗議に反応したのは、樂葉ではなく隣で鍬を振るう村の老人。

「え？ あ、いや、なんでもないですよ。アハハハ」

オウメイは乾いた笑いで誤魔化しつつ、再び鍬を手に土を耕し始めた。

オウメイの畑仕事。早い話が旅費稼ぎである。ただ、悲しいかな貧しい農村であるゼンギヨウで路銀を稼ぐというのは限界がある。どちらかと言えばこの地に滞在する間、食料を分けてもらう代償という色合いが強い。

「それにしても、良く働いてくれてありがたいやねえ」

「そりゃあ、慣れてますから」

感心する老人に、オウメイは朗らかに笑い返す。

オウメイの故郷ワンシユウもこのゼンギヨウと変わらぬ田舎の村。いくら村人から尊ばれる巫女の家系とは言っても、生活に関しては別の話。彼女の家族も田畑を扱う立派な人手として勘定されている。土いじりは幼少から手馴れたものだ。

「いつまでも手伝って欲しいもんだねえ」

「そうしたいところですけど、そうもいかないんですよ」

「あー、仲間と都のコウランへ行くんだったかね。なんでも妖魔が出てくるって？ こんな田舎の村じゃあ、何か出るつつつても畑を

荒らす獣ぐらいのもんでね。そんなもんだから、妖魔と言われてもねえ」

オウメイ達の事情は村の者も知っている。無論、ホウ大國中に出された国王の御触れについてもだ。だが、それでも信じられないと唸る老人。

危機感が薄いと言ってしまえばそれまでかもしれないが、老人の感想もわからなくはない。オウメイ自身も、妖魔と遭遇するまでは妖魔の噂を他人事と思っただけ聞いていた。

「でも、危ないんでないか？ 若い身空で命を粗末にしちゃあいけないねえ」

「そんな。アタシも死に行くつもりじゃないですよ。それに、アタシには頼れる仲間もいますから」

老人の心配にオウメイは笑顔を返す。

一人では危険だが、オウメイにはタイコウやリクスウ、そして樂葉という信頼できる仲間がいる。もちろん、仲間がいても危険ではある。それでも、オウメイには不思議と自信があった。

この仲間達となら生きて事を成し遂げられるという自信。根拠も何も無い、ただの勘にすぎないのだが。

「……どうだね、嬢ちゃん。都に行くのは止めて、うちの孫の嫁に来んかね」

調子良く振られていたオウメイの鍬が、老人の一言で彼女の手か

らすっぱ抜けた。

「な、な、何を急に……！」

（オツホツホ！ これはメデタイ事やないか）

突然の提案に狼狽するオウメイに、すかさず茶化す樂葉。

（か、からかわないでよ、樂葉！ ダメよ。私は……）

（心に決めた人がおる、と。ホホホ、それはそれでオメデタイ）

なおも茶化す樂葉を無視し、オウメイは赤らめた顔を隠すように放り投げた鍬を取りに走る。

「コレ、爺ちゃん。馬鹿な事言うでねえよ。爺ちゃんの孫ったら、まだ三つでないか」

話を聞いていた村人が苦笑いを浮かべながら老人を諷める。

「馬鹿とはなんね。愛があればそんなもん。儂が婆様と知り合った時なんぞ……」

そつと目を閉じた老人が、うつとりとした表情で語り出す。その瞼の裏には老人と老婆が夫婦になる前、出会ったばかりの若い男女の姿が映っているのだろう。

「あーあー、また始まったよ。爺ちゃんの惚気が」

「爺ちゃんの馴れ初めならガキの頃から聞いてんだ。大国演技より

も詳しく知ってらあ」

「オシドリ夫婦もここまで年季が入りや値打ちもんだ、ワハハハ」

老人の様子に、周囲の村人達はまたかといった表情で口々に言う。それでも老人の思い出話は止まらず、在りし日の自分と妻の物語を語る。

鍬を拾ったものの、自分の持ち場では老人を始めとして村人達が会話に夢中になっている。どうやって畑仕事へ戻ったものか思索するオウメイに、近くにいた夫人が謝罪した。

「悪いねえ、お嬢ちゃん」

「え？」

「お嬢ちゃんみたいなら若い娘さんが仕事を手伝ってくれるおかげで、男連中が調子付いちゃってさ」

畑仕事を続ける村の男連中を見やり呆れ顔で言う夫人に、オウメイは恐縮する。

「すみません。ひよつとして、アタシかえってお邪魔してますか？」

村人達からの好奇の視線は時折感じていた。村人達の仕事を手伝うつもりで、彼等の作業の手を疎かにしてしまつては本末転倒だ。

「いやいや、この時期の人手は大助かりだよ。悪いのは男衆のほうさ。気にせず働いておくれ。ああ、お爺ちゃんの惚気話は話半分に聞き流してくれていいから」

(いやいや、ぜひ聞きたいもんやで。あの御年にいたるまで如何に甘くて酸っぱい恋路を歩んだのか……。かー、たまらん！面白そうやわあ)

(樂葉……お願いだから仕事の邪魔はしないでね)

老人の慕情に興味津々の樂葉。そんな彼女に内心言い聞かせながら、オウメイは鍬を担いだ。改めて仕事に戻ろうとするオウメイの背中に、再び夫人が声をかける。

「そうそう、あの鍛冶屋のお兄ちゃんに礼を言っておいておくれ。おかげさまで料理がいつもより一段と美味しくなっただけさ」

振り返ったオウメイに、夫人はにこやかに礼を言う。

鍛冶屋のお兄ちゃんといえば、オウメイの仲間のタイコウのこと。オウメイは夫人の礼の意味にすぐに思い当たると、夫人に会釈を返した。

「ありがとうございます。そう言ってもらえると、タイコウも喜びます」

タイコウがこの話を聞いたら、きっと浮かべるであろう嬉しそうな笑顔で。

第十章 大剣道士 貳

「……うん」

オウメイが村の畑で鍬を振り回している頃、タイコウは鍛冶場の隅で満足げな笑みを浮かべつつ頷いていた。

タイコウが手にしているのは一本の包丁。包丁を握る手首を返して両面の刃波を見たり、刃先を覗き込んだり、日の光にかざしてみたり。あらゆる角度から包丁の仕上がり確かめて、もう一度頷く。

「……上出来」

「上出来ねえ。全く、まーったく、チマチマチマよくそんな仕事ができるな」

タイコウの仕事ぶりを、鍛冶場の窓越しに外から眺めていたリクスウが言う。その口ぶりは感心というよりは、むしろ呆れである。

それもそのはず。このゼンギョウに到着してからというものの、タイコウは鍛冶場にこもり包丁や鎌等を相手にしている。タイコウに武術鍛錬を頼まれていたリクスウとしては、つまらない事この上ない。

「でも、村でお世話になっている以上はお礼の一つもしたいじゃないか。それに、せっかく鍛冶場があるのに使わないのは勿体無いよ」

ぼやくリクスウにタイコウは口を尖らせて返すと、仕事場である鍛冶場を見回した。

長らく使い手を失っていた鍛冶場は閑散としていて冷たく寂しい。所々生えだした雑草は、この鍛冶場の新参者であるタイコウを値踏みしているようだ。

ゼンギヨウへやってきたタイコウ達に、村長が宿泊の地として紹介してくれたのがこの鍛冶場の小屋だった。

元々、この村では一人の老人が鍛冶屋を営んでいたらしい。だが、息子夫婦と妻を流行り病で失い、独り身となった老人も後継者を見出す事無く年老いて亡くなった。

それからというもの、このゼンギヨウは鍛冶屋を失って久しい。一時的にはいえタイコウによって鍛冶場が息を吹き返すのは、村にとってもありがたい話なのである。

「なにより、僕も旅に出てから本業から離れていたから、修練しなおすのにちょうどいい機会なんだよ。これはもう一石二鳥。あ、三鳥か」

「二羽だろ。そいつは、おまえが打ったモンじゃねえんだから」

上機嫌で包丁についた水気を拭うタイコウに、リクスウは不機嫌そうに言う。

リクスウの言うとおり、タイコウの手にしている包丁は彼が打つたものではない。

この鍛冶場にこもってからというもの、タイコウの仕事は打ちではなく研ぎ。

町辺りに出れば鍛冶屋と研ぎ屋は別の店で行っているもののだが、このゼンギョウやタイコウの故郷であるレイホウといった村では鍛冶屋が研ぎ仕事もこなす。

鍛冶屋見習いのタイコウもその類に漏れず、刃の研ぎは師匠オウシユウから教え込まれていた。師匠が鍛冶に専念する間などは彼が一手に研ぎを引き受ける事も多く、若いながらもその腕は熟達している。師匠オウシユウからは研ぎ屋になった方が良いのではないかと言われる程だ。

そして、研ぎの腕もさることながら、純朴でちょっと頼りさそうなところが可愛いと奥様方の井戸端会議で噂されている。

そういつた経緯もあって、畑仕事をこなすオウメイの好評ぶりを越えるほどに、タイコウの研ぎは村の奥様方に大好評である。

もつとも、当のタイコウはそのあたりに鈍く、気付く様子も無いのであるが……。

「これも修練のうちだよ。うーん、亡くなったお爺さんも凄腕だったんだなあ」

研ぎ終えた包丁を眺めながら感心するタイコウ。本来の切れ味を取り戻した包丁は、師には及ばないにしても見習いのタイコウには成しえない出来だ。亡き老人の仕事には見習うべき点が多々あった。

見習いと言えどもタイコウも鍛冶屋。こうして鍛冶場に立ち、良い作品と巡り合っていれば自然と鍛冶屋の気質が疼くもので……。

「材料も残っているみたいだし、僕も打ってみようかな……」

「おいおい、頼まれている以上は村の奴らの分を先に片付けろよ。んで、その後で俺との組み手で勝ってからだな」

手合わせが待ち遠しいと不敵な笑みを浮かべるリクスウ。タイコウは鍛冶場の片隅へ視線を向けて困り顔で頭を掻いた。

山積みになされた鎌、包丁。村中集めたのではないかと聞きたくない量だった。

「うーん、これだけの量を相手にするのは僕も初めてだ」

「そうなのか？ それじゃあ、先に俺と組み手を……」

タイコウの発言を弱気と見てとったリクスウが、ここぞとばかりに組み手をせがむ。

「腕が鳴るなあ」

「そうだろうそうだろう。言っておくが、俺は手加減しねえぞ」

やる気の発言をするタイコウ。だが、彼にはリクスウの声は届いていない。

「やりがいあるよ。さて、どれから片付けようか」

鍛冶屋見習いタイコウ青年は垂れた袖をまくり直し、刃物の山へ挑みかける。

「つて、そつちかよ！」

小屋の外から響くリクスウの叫びに、タイコウは思い出したように振り返った。

「そうだ、リクスウ。雪割りも研ぎたいから鞘から抜いておいてくれないか？」

「そんなのまた今度でいいだろ？ 雪割りの切れは、全く、まーったく問題無しだ」

タイコウに無視されたのが気に入らなかつたらしく、リクスウは彼の申し出を断わった。いつもこうなると先に折れるのはタイコウなのだが、今日のタイコウは一味違う。

「ダメだよ。大事な刀なんだから、ちゃんと手入れしておかないと」

この鍛冶場に入った事で師匠譲りの頑固な鍛冶屋の性分が出ている。師匠の打った唯一の刀だという事も手伝っているのか、全く譲る気はない。

「よっしゃ。雪割りを抜いて欲しかったら、俺と組み手して勝て」

懲りずに組み手に誘ってくるリクスウ。タイコウは呆れ顔で窓から見えるリクスウの元へ歩み寄る。

最初、リクスウに武術鍛錬を申し出たのはタイコウ自身だ。

旅の途中で老師鉄冠子仙人から錫杖の魯智を受け取って以来、彼は魯智の力に頼りきりだった。そして、一時的に魯智を失い自分の

無力さを痛感する事になった。

この先、いつまた魯智を手放す事になるかわからない。この旅を終えればただの鍛冶屋に戻るとしても、旅を続ける間は武術の心得があつたほうが心強い。

タイコウの頼みを快諾したリクスウから提案されたのが組み手だった。強くなりたいと願うタイコウにとって、リクスウが組み手に誘ってくれるのはありがたい。ありがたい事ではあるのだが……。

「もう、さつきから組み手組み手って、オウメイに言われた鍛錬はどうしたの？」

タイコウはそう尋ねてみたものの、答えはわかっている。こうして窓越しに彼と話している時点で、リクスウの修行が進んでいない事は明白。そんなリクスウが、タイコウとの組み手に逃げようとしている事も明白である。

「やってるよ。やっちゃいるけど、暇なんだよ。相手してくれよ、タイコウ」

「そうやって答えている時点で出来てないと思う」

タイコウに冷たく言い放たれ、リクスウは不満顔になる。

タイコウの欲したのが武術鍛錬なら、リクスウが欲したのは精神鍛錬。

先の戦いでリクスウは自分に取り憑いている祖先の霊トウコウの暴走を許し、意識をトウコウに乗っ取られた。リクスウはそれを悔

やみ、トウコウの暴走を抑制する心の強さを求めたのだ。

そして、そのリクスウを受け持つ事になったのが今畑仕事に勤んでいるオウメイであり、彼女がリクスウに与えた課題が立禅だった。

「ずっと立ってると言われてもなあ。簡単にできるかってんだ」

立禅。心を落ち着かせ、ただ直立不動の姿勢を保つ。落ち着きの無いリクスウが音を上げるのも無理は無い。

「そりゃあ鍛錬なんだから、そう簡単にはできないんじゃないかなあ。でも、オウメイも言っていたらう？ 精神集中が大切だって。文句言わないで、ほら立禅」

「へーい、へーい。わかったよ。わかりましたよ。全く、まーったく、やりゃあいいんだらうが……」

タイコウに諭され、リクスウは不貞腐れながら窓に背を向け立禅の姿勢をとった。

「あ、その前に雪割り……」

「タイコウこそ、俺に修行させたいのか邪魔したいのか、どっちだよー！」

リクスウの叫びが青空一杯に響き渡り、その声に驚いた鳥達が枝から飛び立った。

「あわわ、ごめん。とりあえずみんなの分が研ぎ終わったらでいい

から。修行のほう頑張ってね」

タイコウは苛立つリクスウから逃げるように窓から顔を引っ込めた。

「あー、つまんねー」

リクスウもまた不平を口にしながら目を閉じて立禅の姿勢をとる。

（それにしても、何もしねえってのがこんなにキツイとは思わなかったな……）

オウメイから精神鍛錬の一環として立禅を提案された時、リクスウはそんな簡単な事で良いのかと尋ねた。そんなリクスウに対してオウメイは意味深な笑みを浮かべ、やってみればわかると言い残して畑仕事へ向かった。

そして、いざ立禅を始めて間もなくリクスウは思い知った。

リクスウの怒声に驚いて飛び去った鳥達が枝へと戻り、その枝が微風になびき、その微風がリクスウの無造作に束ねた髪を揺らす。小鳥達の囀り、枝葉の打ち合う音、頬を撫でる風、風に揺れる髪、その全てが気になる。リクスウが落ち着こうとすればするほど、自身の五感は過敏なまでに周囲に反応して心に小波を生む。

これは簡単ではなく単純なのだ。そして、その立っているだけという単純な状態を維持する事は、とても簡単な事ではない。肉体的にはどうということもないのだが、精神的な疲労感は凄まじい。

一刻と経たずにリクスウは悲鳴を上げたくなっていた。彼の背後

に居座る先祖靈トウコウの虎の相にも疲弊の色が見えるあたりは、血は争えないという事だろう。

(チキシヨーム、なんで俺だけが鍛錬なんだ……)

この立禅を始めて何度目かの疑問。

その答えはわかっている。それでも疑問として頭をよぎる。棒立ちで動く事のできないリクスウにとって、唯一動かせるのは頭の中だけ。そうして脳を回転させ続けていると、自然とその疑問が廻ってくるのだった。

思考を留めて無心になる事こそがこの行の狙いなのだが、精神鍛錬とは無縁のリクスウが一朝一夕どころか一刻あまりでその域に到達しようというのは無理な話。

(こんな平和な田舎の村じゃあ、用心棒の働き口なんぞねえしなあ……)

タイコウとオウメイが各々村に貢献する中、リクスウだけが直立不動の理由。力はあっても根気が無いリクスウに畑仕事は続けられず、刃物の研ぎ仕事など言わずもがな。早い話が、彼に任せられる仕事が無かったのである。

(熊か虎でも出てこねえかなあ……)

そんな不謹慎なリクスウの願いが叶うはずもない。今日は小春日と呼ぶに相応しい日だ。熊も虎も春の日向でうたた寝の真っ最中だろう。そして、鍛錬中のリクスウ自身も心を蝕まれている。

(眠くなってきたな……)

リクスウは大口を開けてあくびをする。

春の温かい日差しと、時折吹き抜ける微風の涼しさが生み出す絶妙なまでの心地良さ。いつそのこと、鍛錬をやめて草むらに寝転がってしまいたい気分だ。

(全く、まーったく、なんで俺だけが鍛錬……)

そして何度目かの自問。

次から次へと寄せては返す思考の小波。リクスウの修行の終着点はその打ち寄せる波の彼方であり、それは遥か遠く長く果てしない。

「やれやれ。立禅というよりは、寺子屋の立たされ坊主だな」

突如、リクスウの近くで低く太く力強い男の声が響く。自称修行中だったリクスウの暇な耳が、半ば呆れたようなその声を聞き逃すはずも無かった。

リクスウは目を開けると声の主を探す。いや、探すまでも無くその男は彼の目の前にいた。

「んだよ、オッサン。人が集中してるのに余計なケチ付けやがって……」

不機嫌を隠さないリクスウの口調に、男は怯える事も無く平然と彼を見返している。

驚のように鋭い眼光を持つ中年の男だ。身の丈はさほど高くは無
いのだが、威圧するようなその双眸が、長年鍛え抜かれた体躯が、
その体を包む道士独特の装束が彼を一回りも二回りも大きく感じさ
せている。そして何より印象的なのが、彼が背中に帯びた刀。

（デカイ……）

彼の背と変わらない尺の大刀。肉厚にして重厚である事は一目で
わかる。

只者ではない。リクスウに睨まれても動じない豪胆さも、男の装
束や背中の大刀も。

だが、リクスウはそれらに感想を抱く以前に目の男に慄然とし
ていた。

（このオッサン、全然気付かなかった……）

男との距離はリクスウの一足刀の間合いの内。それは当然、それ
以上の刀身を有する大刀を背負っている男の間合いの内。なんとな
れば容易く切り捨てられていた距離。そこまで接近を許しておきな
がら、リクスウはこの道士の気配を微塵も感じられずにいたのだ。

「邪念が多すぎるな。無理に集中しようと思うと泥沼にはまるぞ」

リクスウの驚愕を知ってか知らずか、男はリクスウにそう告げる
とニヤリと笑みを浮かべてみせた。

「己に固執しようとするな。周りがあるがままに受け入れ、自らも
その一部だと心得ろ」

「はあ？」

道士の言葉を理解しきれずに問い返すリクスウ。そんな隻眼の青年の反応に、男はやれやれと肩をすくめる。

「どうやら修行の道は険しいようだな。いや、鍛錬の邪魔をして悪かった」

「え？ あ、ああ……」

少々馬鹿にしたような口ぶりだが、リクスウは気付く事もなく生返事を返す。

それだけ接近を許した事への衝撃が強かった事もあるが、今尚男の技量を測りかねている事がリクスウの気を散らしていた。

実力未知数の道士を前に途惑うリクスウ。値踏みするかのような男の視線を一身に浴びて彼の戸惑いはさらに増す。

「な……なんだよ、オッサン？」

「邪魔ついでに一つ聞きたい。この辺りに腕の立つ鍛冶屋がいると聞いて来たのだが、もしやお主がそうなのか？」

青年を困惑の窮地に追い込んだ道士は、やがてふむと一声唸り彼に問いかける。ここにきてようやく自分を取り戻したリクスウは、その問いに首を振ってみせた。

「あ、いや。俺じゃねえよ」

「そうか。とすると、もう少し先へ行かねばならんのか……」

道士は振り返って近くの森へと続く道を眺めながら唸る。

リクスウの知る限り、この鍛冶場の小屋は村の外れに位置している。この先の道を行けばどこか別の村だ。

リクスウは首を振りながら、背中越しに小屋を指差した。

「場所はここであつてるぞ。鍛冶屋ならこの小屋の中にいるよ。もっとも、オッサンが期待する程の腕かどうかは知らねえが」

男はリクスウの言葉に改めて小屋へと視線を戻すと、安堵の息をついた。

「おお、そうか。それは助かる。まだ歩くのかと辟易していたところだ。案内感謝する。では、鍛錬の続きに励んでくれ」

軽く会釈をした道士は、リクスウの脇を通り過ぎ小屋の入り口へと向かう。

リクスウは、男のその物言いが気に入らなかつたわけではない。言われなくとも修練を続けるつもりだった。だが、リクスウの足は立禅を止めて腰溜めに構え、手は腰に下げた破邪の刀雪割りを掴んでいた。

いつでも誰にでも喧嘩をしかけるわけではない。ましてや、話を聞く限りでは眼前の男はタイコウの客人である。無礼を働いてはタイコウに迷惑だ。ただ、それでも目前の男の計り知れない実力をわ

からないままにしておく事が、リクスウには惜しく感じた。

おそらくは武術の心得では道士の方がリクスウより上。だが、叶わないにしても目前の男に自分がどこまで迫れるか試してみたい衝動が、若いリクスウの心を駆り立てる。

そして、その思いがリクスウを行動に移らせた。背を向ける道士に向かって身構えたリクスウの四肢に力がこもる。

（さあ！ どう出るよ、オッサン！）

元々大して開いていなかった道士との間合いは、大地を穿つようなリクスウの一蹴りで無に返る。同時に彼の手によって雪割りが鞘を走る。

全ては瞬き一つの内の出来事。閉じた瞼が開く時、その眼が双方の技量の差を見極める。

リクスウが踏み込み、雪割りはなおも鞘を駆け上がり……

「喝！」

突如道士の口から発せられた一声。

そして、その一音が一瞬にも満たない戦いの勝敗を決した。

男の声に込められた不可視の力に大気が震え上がり、彼の背後へ迫ったリクスウはその場に縫い止められたかのように身をすくませる。男の首で寸止めされるはずだった雪割りはその刃が抜き放たれる事もなく鞘の半ばで留まり、リクスウの背から身を乗り出した

トウコウさえもその拳動を完全に止めていた。

道士の一喝によってその場の何もかもが、時さえもが静止する。

もちろん、時が止まるはずもない。しかし、リクスウにはそう錯覚するほどの力を道士の声に感じ、同時に自分の完敗をも悟らされた。道士はリクスウの不意打ちに気付きながらも背中の大刀に手をかけず、ただの一喝で制したのである。

リクスウは抜きかけた雪割りをそのままに微動だに出来ず、ただただ呆然と立ち竦む。そんな彼へと振り返った道士は、青年の隻眼を見つめて溜息をついた。

「まだまだ青いな……。満足したかね、未熟者？」

その問いかけにさえ力があるかのように、リクスウは姿勢を崩して尻餅をつく。

したたかに腰を打つたにもかかわらず、その痛みに顔をしかめる事もなく呆然としたまま男を見上げるリクスウ。その様子に男は小さく笑うと背を向けた。

「すまなかつたな。お主はまだ若く見込みもある。ただ今は修練あるのみだ。励めよ、青年」

「お……おっ」

リクスウはかすれた声で、背を向けた男に辛うじて応じてみせる。男はもう一度小さく笑うと、小屋の扉に手をかけた。

第十章 大剣道士 参

「御免、こちらに鍛冶屋がいると聞いてきたのだが……」

扉を開けて中を覗き込む道士。日向にいた彼の目には薄暗い小屋の中はより一層暗く感じられる。男は小さく唸ると目を凝らした。

そして、暗がりには慣れ始めた目で改めて見回した鍛冶場。その中に、リクスウと同様に呆然と男を見る青年の作業着姿があった。

タイコウは研ぎ仕事の姿勢そのままに、来訪者を見上げて固まっていた。

「あ、あの！ いらっしやいませ！」

男と目が合った途端、タイコウが思い出したように声を上げた。

「仕事の邪魔をしてしまったか？ すまなかったな」

「い、いえ、構いません！」

タイコウの手元にあつた砥石と包丁を見て男が詫びると、タイコウは慌ててそれらを片付け出した。だが、彼の急ぐ手元はおぼつかず、抱えた砥石も包丁も悉く手から零れ落ちていく。

タイコウは決して気の強い青年ではないが、だからと言って来客のたびにこうして慌てふためく程に肝が小さいわけではない。彼の慌てようには、それなりの理由があった。

落とした砥石を拾い上げながら、チラリと男を盗み見たタイコウ。

(先生みたいだ……)

リクスウが男を見て慄然としたのが計り知れない技量なら、タイコウが男を見て呆然としたのは遠く離れた故郷への郷愁の念。彼は、男に師匠オウシュウの面影を見ていたのである。

目の前の道士とオウシュウの顔立ちは、さほど似ているわけではない。ただ、彼の持つ雰囲気と、リクスウを退けた一喝がタイコウの中で二人を繋げさせた。そして、二人を繋げたが故に先程の一喝から師に叱られた記憶を思い出し、タイコウの胸中に得も知れぬ落ち着きの無さを生んでいた。

「ほう……これは君が手掛けたのかね？」

タイコウが幾度も取り落としている包丁を拾い上げた男は、興味深げにそれを眺めだす。

「は、はい！ いいえ！ あ、でも、はい！」

「どつちだよ……」

道士に続いて鍛冶場に入ってきたリクスウが、とつちらかるタイコウにツツコむ。

「えーっと、だからこの包丁を打ったのは昔この鍛冶場を営んでいたお爺さんで、でもそれを研ぎ直したのは僕で、でも研ぎ直しと言ってもまだ途中で……」

「まだ研ぎの半ばなのか……」

タイコウの話を要約した男は、改めて手にした包丁を眺めながらフムと唸る。

その唸り声は若い鍛冶屋見習いを賞賛するのか、罵倒するのか。道士の一声一声はまるでオウシユウに自分の仕事を吟味されているようだ。

タイコウに生まれた緊張の糸が、弓弦のようにギリギリと引き絞られていく。

(全く、まーったく、俺まで緊張しちまうじゃねえか……)

包丁をまじまじと見つめる道士と、彼の反応を見守るタイコウ。男の背後から彼等を見守るリクスウも息苦しそうに唾を飲んだ。

男は二人の青年の視線など気にもとめていない様子で、しばらく包丁を眺め続けた。やがて、充分に堪能したとばかりに研ぎ中の包丁をタイコウに差し出す。

「なるほど、どうやら村の噂は的を射ていたようだ。その若さでここまでとはな。いや、なかなかどうして大したものだ」

そう言うと男は口の両端を吊り上げ、タイコウに頷いて見せた。

師匠の面影を持つ男に褒められて悪い気はしない。良い気しかしていない。

「あ、はい！ その、ありがとうございます！」

道士の賞賛に、タイコウは深々と頭を下げた。

(ああああ、顔赤らめちまって……)

名も得体も知れない男に褒められ顔を綻ばせるタイコウに、呆れ気味で苦笑いするリクスウ。だが、その苦い笑いも男が振り返ると同時に引きつる。

男の鋭い眼光に不意に貫かれたリクスウは、所在無さげにその場でたじろいだ。

「ひょっとすると、こちらの仲間の刀も君が打ったのかね？」

改めてタイコウへと向き直り、問いかける道士。その指先が指し示すのはリクスウの腰部。退魔の刀、雪割り。

「あ、いいえ、違います！」

タイコウはすぐさま首と両手を振って否定する。

「それは僕の師匠が打った物で、僕なんかじゃとてもとても……」

青年の答えに、道士は雪割りへ視線を移すと改めて頷いた。

「君の師匠はなかなか凄腕と見える。いや、ホウ大国でも指折りの鍛冶屋だな」

男の言葉に若者二人の反応は別れた。タイコウは満面の笑みを浮かべ、リクスウは不思議そうに首を傾げている。

「オッサン。鞘から抜きもせず、よくもまあそんな事が……」

「やっぱり、凄いつてわかりますか？」

そのどちらの意見に対する答えか、男は小さく肩を揺らし笑った。

「儂も道士の端くれだ。退魔の力の有る無しくらいの見立てはできるさ。ましてや、これだけ強力なものなら尚更と言うものだ。もし大国記の通りに、これほどの腕を持つ刀鍛冶がホウ国の敵に回っていたら、ホウ大国の勝利は危うかったやもしれぬな」

大国記。群雄割拠の時代、小国だったホウ国が次々に領土を広げて大国となるまでを記した歴史書である。初代ホウ王が軍師コウタツやホウセン將軍といった有名どころと共に、小さなホウ国を一大国家へと上げる様を描いたのが大国演技。わかりやすく面白く派手に脚色された大国演技とは違い、大国記は大国成立までを記した正史であり、その戦国の時代そのものを指す事もある。

その大国記の時代にあつたならばホウ国の勝利を覆すほどの武器。そう賞賛されれば、刀鍛冶にとって最上級の褒め言葉とも言える。

もちろんタイコウも師匠をそれほど褒められる事は嬉しい。だが、タイコウが湛えていた満面の笑みは、僅かながらに曇った。

（先生はこの言葉を聞いて喜ぶのだろうか……）

男の褒め言葉に、なぜか頭に浮かんだのは師匠オウシュウの不満と不愉快を混ぜ合わせた顔だった。

オウシユウが打つ物は鋏、包丁、鎌といった生活雑貨ばかり。タイコウの知る限り、師匠が武器となる刀を打つたのはこの雪割りが初めてだ。

「その……ありがとうございます」

師はいかなる思いでこの雪割りを打ったのか。その疑問がタイコウの謝辞にかげりを生んだ。そして、それを見透かしたように道士はまた笑う。

「いや、すまない。君にも君の師匠にも、この贄辞は向かないな。今は忘れてくれ。立身出世や名を上げる事を目論む者に、このよくな澄んだ刃は打てぬさ」

男の謝罪に続いた言葉。それこそが師への贄辞。

「ありがとうございます。師匠もきつと喜び……」

今度こそ満面の笑みを湛えながら、心からの礼を言うタイコウ。だが、またもや謝辞は詰まり、青年の笑顔が凍りついた。

無理も無い。今の今まで和気藹々と話していた相手が、背中に携えた大刀の柄に手をかけたのだから。

男は自分の身の丈ほどもある大刀を軽々と鞘から抜き放った。

「君も君の師匠も気に入った。ぜひとも儂の刀の手入れを頼みたい」
言いながら男は大刀をタイコウに差し出した。

抜かれた巨大な白刃を目の当たりにしてタイコウもリクスウも目を丸くする。

鞘からして大きいのだから、中に納まる刀もそれ相応。わかっていてもその大きさは驚嘆に値する。

幅が広く肉厚な片刃の大刀。僅かに沿った刀の筋に合わせ、凧いだ泉のように真っ直ぐに伸びる刃波。重厚にして繊細で美しい。鍛冶を生業とするタイコウはもちろん、リクスウも鳥肌が立つ思いだ。

「こいつは……」

啞然とするリクスウの口から洩れた言葉。そこで詰まった言葉の続きを見越したかのように、タイコウが口を開いた。

「虎王牙……多くの妖魔を打ち倒してきた、名実共に破邪の刃だよ」

道士や妖魔といった事には疎いタイコウではあるが、刃物の事となれば話は変わる。

男から大刀虎王牙を受け取り、タイコウは唾を飲んだ。

虎王牙。とある道士が携えている大刀。その道士は大刀を小枝のように振り回し、時に巨躯の妖魔を真っ二つにし、時に硬い甲羅に覆われた化け物を突き砕いたと言われる。

その切れ味が道士の技量によるものか、大刀の切れ味によるものかは定かではない。ただ、生きる伝説と化した道士の活躍を語る上で、この虎王牙は欠かす事が出来ない。言わば、その道士の代名詞だ。

「虎王つて、それ、おまえ……」

どうやらリクスウもその名は聞いたことがあるようで、驚きを隠せない顔で大刀とタイコウを見比べ、やがて大刀の持ち主である道士へと顔を向けた。

「オッサン……あんた、まさか！」

若者二人の視線を浴び、男は彼等が思い浮かべた名が正しいとばかりに頷いてみせる。

「お察しのとおりだな。儂の名はデイコウ。道士の末席を汚しておるよ」

道士デイコウ。末席どころの話ではない。国内屈指の実力者であり、愛刀虎王牙と共に大国三大道士の一角を担っている男である。

名乗りを上げたデイコウ。突然の大物を前にタイコウとリクスウは驚き、ただただ啞然とするばかりだった。

第十章 大剣道士 参（後書き）

（次回予告、オウメイ語り）

ゼンギヨウの畑仕事から帰った私を迎えたのは、軒先で拳を交えるタイコウとリクスウ。

私が留守の間にとんでもない来客があったらしく、リクスウがすぐにでも体を動かしたかったそうです。

そして翌日。そんなリクスウにとっては朗報で、村の皆には招かれない報せが村中に広まりました。

何者かによって村の畑が荒らされたのです。

ようやく自分の出番がきたのだと、リクスウは勇んで夜回りを始めるのですが……。

強さを望むは人の性。日々是精進、また精進。

畑荒らしを懲らしめようと、日夜鍛えた腕が鳴る。

人が獣か、相手は誰ぞ。

次回『第十一章 泥棒退治』に乞うご期待

第十一章 泥棒退治 壱

錫杖、魯智。

タイコウがそれを手にしたのは旅に出て間も無い頃。雨の森の中
たまたま立ち寄った廃寺で、老師鉄冠子仙人に半ば押し付けられる
形で受け取った。

鉄冠子から魯智を譲られた当初はタイコウも困惑したが、魯智は
その困惑を吹き飛ばすほどの活躍でタイコウの旅を補佐した。

夜の森の中でタイコウが初めて遭遇した妖魔、樹木子を撃破。カ
リュウの町では突如出没した妖魔の群れを相手に引けを取らず、離
れ離れとなった雪割りを見つけ出す。そして、山村メンサイでは魔
人モウエンと死闘を繰り広げ、龍の姫葉鱗后樂葉やその盟友オウメ
イとともに村人を幻惑から解放。

いつしか魯智は、タイコウにとって無くてはならない旅の共とい
う存在になっていた。

タイコウは視線を逸らし、その錫杖を視界の端に捉える。魯智は
今、鍛冶屋見習い青年の手元にはなく、木の幹に体を預け夕日の朱
色にその身を染めている。

（魯智を手にしていない事が、こんなにも心細いなんて……）

魯智の代わりに手にした身の丈ほどの棍を握り直したタイコウは、
内心の不安を吐き出すように小さく溜息をついた。

「おい、タイコウ。いつまで余所見してんだよ。全く、まーったくやる気が感じられんぞ」

「うあ、ゴメン、リクスウ」

抗議の声に、タイコウは謝りながら慌てて正面を向く。

タイコウが真っ直ぐ前を見た先に立つのは、失われた部族コウハ族の末裔にして旅の仲間であるリクスウ。

(改めて向かい合つと、やっぱり強そうだな……いや、実際強いんだから、そう感じるのは当然か)

不敵な笑みを浮かべるリクスウの前に、タイコウは躊躇いながらも棍を構える。

数刻前の道士デイコウとの思わぬ出会い。ホウ大国でも指折りの実力者である彼との邂逅は、若い青年二人に少なからず影響を与えていた。

タイコウはデイコウの持つ大刀、虎王牙を目の当たりにし、それを自らの手で研ぎ直す機会を得た。

作者不明とはいえ、その大刀はデイコウと共に生きる伝説となっている。そのような武器を手にする事など、生涯辿ってもそうそうありはしない。鍛冶見習いのタイコウにとって、名も知れぬ名工の業を見習い、その技術を盗む絶好の機会だ。

リクスウはデイコウの実力を直接肌で感じた。

直接デイコウと拳を交えたわけではない。背後からの不意打ちを試み、道士のただの一喝で止められた。踏み込んだリクスウが放つはずの次の一手が、彼の考えうる全ての手が、その一喝で無駄だと悟らされた。それほどに力の差を感じてしまった。

しかし、リクスウはそれで強さを諦めるほど潔くは無い。その遙か彼方の武の高みに対し、挑み甲斐があると昂ぶる心に身を震わせた。

道士デイコウに心躍らされた青年二人。

そして、デイコウが去った後の意気込みのありようは、隻眼の青年リクスウに軍配が上がった。体を動かしたくて仕方ないリクスウに、タイコウは組み手という形で付き合わされる事になったのである。もつとも、最初にリクスウに武術の鍛錬を頼んでいたのはタイコウ本人。願ったり叶ったりとも取れる話ではあるが。

「どうしたタイコウ。突っ立ってないで打って来い。こっちは朝から立ちっぱなしで、いい加減ウンザリしてんだぞ」

大刀虎王牙の研ぎを望むタイコウと、鍛錬に励みたいリクスウ。その意地の勝敗を最後に分けたのは、リクスウの立禅で堪った鬱憤かもしれない。

「わかってるよ。わかってるけどさ……」

急かすリクスウに応じるタイコウ。だが、声だけで手元足元に動く気配は無い。

(踏み込む隙が見当たらないんだよなあ……)

棍を構えるタイコウに対し、素手な上に構えさえろくにとらないリクスウ。それでもタイコウは、リクスウが道士テイコウに感じた以上の技量の差を感じさせられていた。

リクスウが相手となれば、錫杖魯智を手にしていても勝てるかどうかは怪しいものだ。それを只の棍一本でどうにかできるとは思えない。

タイコウの出だしを待つリクスウと尻込みするタイコウ。睨み合いを続ける両者の間を吹きぬけた風に落ち葉が舞い、何処かへ飛び去る。

（勝てなくて当然……だよ。玉碎覚悟でやってみるか）

長考の末、ようやく決心を固めたタイコウの手に僅かに力がこもる。だが、それより先に痺れを切らしたリクスウが動いていた。

「来ねえのか？ 来ねえんだな。なら、俺から行くぞ」

「えっ？」

言い終わるかどうかの間際、地を蹴ったリクスウはタイコウが瞬きする間もなく目の前へと迫る。

「うわあっ！」

一瞬でリクスウに間を詰められ、慌ててタイコウが棍を突き出した。だが、棍の先を軽くいなしたリクスウは、あっさりとタイコウの懐に潜り込む。そして……。

「破ッ！」

覇気のある声と共に打ち出されたリクスウの拳打が、タイコウの腹を捉えた。

「…………ツ！」

声にならない悲鳴を上げながら宙を舞うタイコウ。

「この至近距離で突きつてのはどうかねえ。いや、悪いとは言わねえが、そいつは踏み込みと打ち出しの速度があつての話だ。そんな遠慮がちにやってりゃ、当たるもんも当たらねえぜ、タイコウ…………つて、タイコウ？」

拳を突き出したままの姿勢で説教するリクスウ。だが、肝心のタイコウにはその言葉は届いていない。豪快に吹き飛ばされたタイコウは地に腰を打ちつけただけに止まらず、二転三転転がった拳句に魯智がもたれていた木に激突した。衝撃に錫杖は姿勢を保てなくなり、倒れた拍子に金輪が賑やかに音を立てる。

「あ…………スマン。一応加減はしたつもりだったんだけどな…………生きてるか？」

「ウツ…………ゲホッ！　ゴホッ！　死ぬかと…………思ったよ」

拾い上げた棍を杖代わりによろよろと起きながら、何度も咳き込むタイコウ。

彼のあまりの弱りように流石にやり過ぎたと反省するリクスウ。

それに対し、タイコウの放った言葉は彼の予想に反するものだった。

「よし。もう一回だ、リクスウ」

そう言い放つタイコウに、リクスウが驚き目を丸くした。言葉と言つよりは、俯き咳き込むことをやめた彼の顔に、だ。

タイコウの言葉は痩せ我慢ともれるが、リクスウに向けた姿勢は違う。ふらついていたはずの両足はしっかりと大地に踏みしめ、青年の顔から怯えが消えていた。

「一体どうしたんだ？ 急にやる気になったじゃねえか」

喜々とした表情で問うリクスウ。彼を真つ直ぐ見返すタイコウもまた、その表情を崩しリクスウに笑いかける。

「不思議だよ。こう言うつと変に思うかもしれないけど。リクスウに手痛い一撃を食らったおかげで、ようやく覚悟が決まったんだ」

苦笑いしつつ言うタイコウにもう一度驚いた顔を見せたリクスウだったが、やがて堰を切ったように大笑いを始めた。

「や、やっぱり変だよ。ハハハ……」

リクスウの笑い声を嘲笑ととったのか自嘲気味に笑い返すタイコウ。リクスウはそうではないと言いたげに力強く首を振ってみせる。

「いやいや、おかしくねえよ。全く、まーったく、問題無しだ」

「え？」

リクスウの言葉が一瞬理解できずに、タイコウは思わず問い返す。

「迷うな悩むな。そいつは喧嘩の心得の一つだ。中途半端な気分で当たりやあ、動きが鈍って勝てる喧嘩も勝てなくなっちまうもんさ。ならいつその事、一発貰って気持ち吹っ切って覚悟決めちまった方がいい」

「そういうものなの？」

「誰しもがそうだとは俺も思っちゃいねえんだが。まあ、少なくとも今のタイコウからは余分な力が抜けたらしいな」

「そう……なのかな？」

リクスウに言われ、タイコウは自分の体を見回した。生憎タイコウ自身は自覚していないようで、リクスウに向かって自信なさげに首を傾げてみせる。

（あれだけ派手に吹き飛ばされて怯えるところか覚悟ができるとは、タイコウもいい度胸してらあ。なかなかどうして、土壇場で気骨を見せてくれる面白い野郎だな）

一通り笑い終えたリクスウの顔に残ったのは、いつもの不敵な笑み。静かに戦う構えをとるリクスウに合わせ、タイコウもまた棍を構え直した。

「それじゃあ、お望みどおりもう一回だ。ガツンと行くぜえっ！」

「よし来い、リクスウ！」

戦闘再開に吼えるリクスウに、タイコウもその気迫に負けず応じる。そして、同時に飛び出す二人。

一気に拳打の間合いへと詰め寄ろうとするリクスウに向けて、先程と同様に棍を突き出すタイコウ。これまた先程と同様に振り払おうとリクスウが棍に手をかける。

(学習しようぜ、タイコウ……)

リクスウの手が棍を押すその瞬間、一直線だった棍の軌道が歪んだ。いや、自ら軌道を変えていた。

(な……!)

驚くリクスウの手を絡めとるように小さな円を描いたタイコウの棍。一周巡ってリクスウの手の甲を打ち据えた棍が、それを反動にしたかのように今度はリクスウの顔めがけて跳ね上がる。

迫る棍に舌打ちしたリクスウ。次の一撃のために踏み込んでいた足に力を入れて自らの勢いを殺すと、身を仰け反らせて辛うじて棍の射程から外れる。

「ダアッ！」

だが、タイコウの手はそこで終わらない。珍しく気合の入った声を上げたタイコウは手首を返し、振り上げた棍でリクスウの脳天を襲う。そして、それから逃れたリクスウに対して今度は下からすり上げざまの突き。

突きを捌いて再び前進を試みるリクスウだったが、立て続けに突き出される棍に否応無く後退を余儀なくされる。

追い討ちをかけるように踏み込んだタイコウの突き一閃。後ろに大きく飛び退き間合いを開けたリクスウは、驚嘆を込めて口笛を吹いた。

リクスウの言葉通り、覚悟を決めたタイコウは明らかに動きが良くなっている。

だが、覚悟を決めたからと言っても、すぐさま強くなれるわけではない。

魯智と共にいくつかの戦いに赴き、その戦闘の最中でタイコウが魯智から学んだ戦術があればこそ。そして、その体捌きがこなせるタイコウ自身の身体能力があればこそ。今しがたのタイコウの動きは、言うなれば戦う覚悟をした事で引き出された本来の彼。持ちうる戦術と身体能力を全開で活用した本当の実力。

「んだよ、タイコウ。ずいぶんと動けるじゃねえか」

「いやー、ハハハ。自分でも驚いてるよ」

責めるようなリクスウの褒め言葉に、タイコウは笑って応じる。笑ってはいるもののその笑い声は喜びに潤う事無く、どこか乾いていた。

(やっぱり、手加減されているよなあ)

当然と言えば当然の事に、タイコウは内心溜息をついた。

タイコウにはわかる。眼前の青年が、その隻眼で自分の動きを見切っていた事に。自分は全力でも、リクスウには余力がある事に。

(なんだ。そんな事、最初からわかっていた事じゃないか)

実際に打ち合っただけで知った実力差に弱気になりかけたタイコウの心は、落ち込む寸前で止まった。

最初からリクスウに勝とうなどと、思い上がりも甚だしい。彼は強く自分は弱い。弱いからこそ自分より強いリクスウに鍛錬を頼んだのだ。今はまだ弱く勝てなくて当然。彼と打ち合ううちに学び、鍛え、勝てばよい。

タイコウは呼吸を整え、感触を確かめるように棍を一振り。

「よし！ まだまだ行くよ、リクスウ！」

「応ともさ！ かかって来やがれ、タイコウ！」

棍を手に襲い掛かるタイコウに、リクスウもまた迎え撃たんと地を蹴った。

夕日に照らされた青年二人の影が幾度と無く交錯し、倒れ、また起き上がってはぶつかり合う。

空に宵の明星が輝き、それに続けとばかりに星々が瞬き出す頃、せわしなく動き回っていた二つの影がようやくその動きを止めた。

「ふむ、今日のところはここまでか」

動かなくなつた影の内一つ、リクスウは乱れた装束を整えながら満足げに頷いた。対するもう一方の影、タイコウは地面に大の字に寝たまま。呼吸が乱れに乱れ、ただただ肩を上下させる彼はリクスウの言葉に答える余裕も無い。

タイコウは動かない四肢を休ませながら、やけに澄み切つた頭でリクスウとの鍛錬を振り返つた。

何度もリクスウに立ち向かい、殴られ、蹴られ、投げ飛ばされ、打ち倒された数は十まで数えて止めた。打ち倒した数なら数えるまでも無い。一度足りとて叶わなかった。すなわち、立ち向かつた数が打ち倒された数だ。

リクスウの強さを、身をもって味わつた。ここまで負けると悔しいどころか、いっそ清々しい。

「やっぱり……強いや……」

「なんのなんの。上には上がいるってもんだ」

タイコウの賞賛をリクスウは軽く笑い飛ばす。

次第に暗くなる空を見上げるリクスウがその空に描いたのは大屈指の道士デイコウか、はたまた蛮勇の長であつた彼の祖先トウコウか。

リクスウを真似て空を見上げたタイコウだが、リクスウの視線の先は遙かに高過ぎて見る事も叶わない。

(まだ、精進は続くなあ)

苦笑いを浮かべつつ内心ぼやくタイコウ。そんな彼の視界が不意に暗くなる。

「ただいまー、ってどうしたの二人共？」

聞きなれた声にタイコウが視線を下げる。もっとも、未だに大字になったままの彼には見上げている事に変わりが無いが。

タイコウの視界に影をさしたのは彼の仲間オウメイだった。大地に寝そべったままのタイコウと、鍬を担いだまま彼を見下ろすオウメイの目が合う。

「やあ、お帰りオウメイ」

「おう、オウメイ。野良仕事お疲れさん」

オウメイの帰還をタイコウは力無く、リクスウは陽気に迎える。オウメイは二人を見比べ、何があったのかと不思議そうに首を傾げた。

「うん。ただいま、なんだけど……これは一体何事？ 特にタイコウ、大丈夫？」

「ちよつとばかりリクスウから武術を教わって……いやー、勉強になったよ。アハ、アハハハ……」

「これでちよつとお？ 全身傷だらけでボロボロじゃないの！」

弱々しく笑うタイコウは打ち身と擦り傷だらけ。オウメイは歩み寄るリクスウに鍬と手荷物を押し付け、タイコウに回復のまじないをかけるべく彼に手をかざす。

「うわあ、この量はちよつと時間かかるかもね」

「いやー、タイコウもなかなか往生際が悪……負けん気が強くてな。それで、俺もつい力が入っちゃまって、アハハハ……」

笑って誤魔化そうとするリクスウだったが、オウメイの一睨みで沈黙。彼女から精神鍛錬の師事を受け始めてからというもの、どうにもリクスウはオウメイに弱い。

（ホホホ！ 夕焼けに照らされながらドツキ合いの末、拳を交わした者同士の間で芽生える熱く赤く燃え滾る友情。タイコウもリクスウも若いわねえ、男の子やねえ。ホホホ、おばちゃん羨ましいわあ）

改めてタイコウの治療に入ろうとするオウメイ。その精神集中を掻き乱すように絶妙なタイミングで彼女の意識下で響く樂葉の声。

（樂葉も茶化さない！ アタシの邪魔しない！）

オウメイは内心で響く笑い声を怒鳴りつけると、リクスウへと顔を上げた。

「リクスウ、タイコウがこれじゃあ御飯当番は無理だわ。アタシはタイコウの治療があるし……」

そこまで聞いて彼女の言葉の先を悟ったリクスウが嫌そうな表情を作る。

「ゲツ、俺か？」

「そ、よ。夕飯の仕度、よろしくね」

第十一章 泥棒退治 貳

「うあつ、痛ッ！ イタタタタ……」

タイコウは肌寒さと全身を襲う痛みで目が覚めた。

春らしい季節になったとは言っても、夜になれば冷える。持ち主不在で荒れ放題、隙間風の好き勝手な往来を許すような小屋を宿にしているのだから、寒さは尚更の事。

瞼を擦りながら半身を起こす。そんな些細な動きにも体が悲鳴を上げる。痛みの原因など考えるまでも無い。昨日のリクスウとの組み手の影響だ。

タイコウは体中からの動いてくれるなという要求を宥めながら視線を巡らせた。

最初に目に入ったのは、隣で眠るリクスウ。どんな夢を見ているのか、寝言でリホウの名を呼びながらニヤニヤと笑っている。

さらに視線を移せば、部屋の片隅に固められた三人の荷袋。そして、板張りの床に転がる錫杖、魯智。

「あれ？ オウメイ？」

見渡すには狭い部屋の中、タイコウ達とともに眠っていたはずのオウメイの姿が無い。

建てつけの悪い戸の隙間から射す朝日を考えれば、朝食の支度で

も始めているのか。まだ起ききれない頭でそこに思い当たったタイコウは、同時に昨晚の夕飯の仕度をリクスウに代わってもらった事も思い出す。

「今日は僕の番か……」

体中から休ませる眠らせるの音が響いているが、タイコウの痛みは言わば自業自得。ただでさえリクスウに昨晚の食事当番を代わってもらっているのに、オウメイにまで迷惑をかけるわけにはいかない。

タイコウは休養を求める体内の悲鳴に耳を塞ぎながら立ち上がり、ゆっくりと引きずるような足取りで部屋を出た。

目元は痛む身体の味方についたようで、瞼が重く両目の焦点はずれがち。定まらない視界を手探りで補助しながら歩みを進める。

ただ、両耳はタイコウ自身に協力してくれているようで、床を擦るような彼自身の足音はもちろんの事、朝陽の中を飛び回る小鳥の囀りや風の音までしっかり聞き取っていた。

しかし、それには何か一音足りない。台所へと赴いたタイコウの寝惚け頭は、そこでようやく不足していた音に気がついた。

「おはよ……おっ？」

包丁がまな板を打ち鳴らす音や、釜戸の薪が爆ぜる音、鍋が煮立つ音がしていなかったのだ。それもそのはず、台所には誰もいなければ食事の支度もされていない。

見つからないオウメイの所在、朝食準備の義務。双方が乗った天秤がタイコウの心中で揺れ、タイコウはどうしたものかと後ろ頭を掻く。その天秤を傾けたのは台所に設けられた格子窓越しに見えた光景だった。

「オウメイ？」

その姿が見えたわけではないが、紫がかった長い黒髪が風に揺れて見えたのだ。タイコウは揺れ動く黒髪に手招きされているような錯覚を覚え、それに誘われて外へと続く勝手口の戸を開けた。

(う……)

外へ顔を出した途端射し込んできた朝陽に、タイコウの視界は光の衣に覆われて思わず目を細める。

そして、光に目が馴染みだした頃、朝陽の中に立つオウメイの姿をみつけたタイコウは、今度はその目を見開いた。

オウメイは目を閉じて真っ直ぐに立っていた。

その姿にはタイコウも見覚えがある。昨日リクスウが精神修養の為に行っていた立禅の姿勢だ。

ただ、姿勢は同じでも感じる印象は全くの大違い。せわしなく四肢が動き、姿勢も定まらず揺れ動くリクスウに比べ、オウメイは微動だにしていない。

爪先から頭まで一本の芯が入っているような真っ直ぐな姿勢。瞑想するように閉ざされた目を始めとしてその表情はとても穏やかで、

姿勢を維持しようとする余計な力は感じさせない。それでいて悠然とした不動の姿勢は、今にも空高く伸び上がらんとする若木のような力強さを秘めている。風に舞い、朝陽を浴びて紫を強めた彼女の髪は、さながら若木の枝か……。

オウメイの名を呼ぼうとしたタイコウの口は半ば開かれたところで声も出ず、彼女の姿にただただ見惚れるよりなかった。それも、外へと一歩踏み出そうとした足が歩き方を忘れてしまうほどに。

「え？ あれ？ うわあっ！」

両足を絡めて無様に転ぶタイコウの悲鳴と転倒音に、オウメイはビクリと身を震わせ閉じていた目を開けた。

「タイコウ、どうしたの？」

「いや、足がちよっと……」

慌てて駆け寄ったオウメイが地に伏したタイコウへと手を伸ばす。彼女の手を握り返したタイコウは腕に走る痛みを顔をしかめた。

「身体、痛むの？」

その問いかけにタイコウは空いた手で後ろ頭を掻いた。

「動くたびに体中が悲鳴を上げてるよ。オウメイのまじないが無かったら、もつと痛い思いをしていたのかな？」

そう言って自嘲気味に笑うタイコウ。オウメイは彼を助け起こし、少し考える素振りを見せる。

「そうね……少しは違つかも。怪我は昨日のうちに全部治したから」「これで?」

治した当人に問うのは失礼と知りながらも、タイコウは思わずその口走っていた。実際のところ、それほどにタイコウは痛い。痛いゆえの八つ当たりに近い問いだ。

案の定、オウメイはタイコウの問いに少し不満顔を見せた。

「今タイコウが痛がっているのは、ただの筋肉痛だと思うわ。アタシの家に伝わるおまじないは、怪我は治せても身体がより強くなるうと作用している分には効果が薄いから。それでもよければ、もう一回やってみるけど、どうする?」

オウメイの答えと提案にタイコウは少し考える素振りを見せたが、すぐに首を振る。

「せっかくだけど今日一日は大人しく痛がっておくよ」

痛みが引いた時には、今痛がった分だけ強くなる。そう思えば、身体を襲う痛みに耐えるだけの価値があるような気がした。

「なににせよ。今日はリクスウに鍛錬を申し出るのは、やめた方がいいわね」

「研ぎ仕事もまだまだ溜まっているから、今日はそちらに専念するよ。急ぎの大仕事も出来た事だしね」

オウメイの言葉に笑って同意するタイコウ。その言葉に、オウメイも思い当たるところがあったのか頷き返した。

「工房の壁に立ててあったあの特別大きな刀の事よね。あれ見た時は驚きを通り越して呆れたわ。いったいどんな大男が振り回すのかしら」

「身の丈で言えば、オウメイより低いよ」

「え？」

オウメイの驚きにタイコウは思わず笑みをこぼす。

長く肉厚な刀身を目にすれば、誰もが大男が扱うと思うだろう。かく言うタイコウも、実際に持ち主に会うまでは生ける伝説である。道士は大男だと思い込んでいた。

「道士デイコウは知ってるよね」

「ええ。そりゃあ一応、有名な人だし……あれは道士様の？」

もう一度驚きながら問うオウメイに笑って頷いていたタイコウだったが、昨日の道士デイコウの姿を思い出し不意に真顔になる。

「身なりは小さいけど、内から出ている覇気は巨人だったよ。あの虎王牙……大刀も昨日見させてもらったけど、かなり使い込まれている。決して飾りなんかじゃない。もつとも、あの上背で自分の背ほどもある刀を振り回すなんて、想像がつかないけどね」

「はあ……。世の中、凄い人がいたものね」

感慨にふけるオウメイを見ながら、タイコウは苦笑いを浮かべた。タイコウに言わせれば、龍を盟友にしてしまう巫女というのも充分過ぎる程に凄い人だ。

（ホホホ、鉄冠子の爺様から魯智を貰う坊もいれば、気性の荒い虎に憑かれた坊。今度は大国屈指の道士とは……。類は友を呼ぶて言うけど、オウメイの周りは変わり者だらけやねえ）

（葉鱗后様。それは、あなたが一番の変り種だと知った上でおっしゃっているのかしら？）

オウメイは自身の内心から響く樂葉の笑い声に尋ねて返すと、立ち上がってタイコウに手を差し出した。

「さて、と。リクスウもそろそろ起きるだろうし、朝御飯の支度をしなくちゃね」

「ああ、そうだった。僕が支度をする番だ」

そう言っただけでオウメイの手を借り立ち上がったタイコウ。その途端に身体を走り抜けた痛みを顔にしかめ、その様にオウメイが黒紫の髪を揺らして首を振る。

「いいよ、アタシが代わりにやっておくからタイコウは休んでいて」

その言葉に今度はタイコウが首を振った。

「そんな、大丈夫だよ。オウメイこそ休んでいて、今日だって畑の

手伝いがあるんだから」

「でも、今のタイコウに支度を任せたら、いつになるかわからないもの」

「いや、しかし……」

オウメイに言い返されて言葉に窮するタイコウ。だが、しばらく見合っただけでもオウメイの厚意に青年は頷こうとはしない。

(いつもなよよしてる割に強情な坊やなあ……)

二人のにらめっこに最初に根負けしたのは、高みの見物を決め込んでいた樂葉だった。

(もう、タイコウを坊と言わないでっば)

首から下がる龍玉から伝わる呆れた声に流され、オウメイは諦めて溜息をついた。それと時を同じくして、タイコウもまた合わせ鏡のように溜息をつく。

このまま睨み合っただけでも朝御飯は出来ない。

タイコウとオウメイ。双方が同じ考えに辿り着いたのだと悟ると、どちらからともなく笑い出した。

「朝御飯の支度は僕だけど、僕一人ではオウメイが仕事に間に合わないみたいだ。オウメイも手伝ってくれないかな？」

「喜んで、御助勢させていただくわ」

そしてもう一度笑い合う。

(睨み合いの次は笑い合いかいな。仲がええのは結構なことやが、早いこと朝餉の用意せえへんとリクスウが起きるで)

樂葉からもう一度呆れた声上がり、その声に合わせてるように鍛冶場の戸が軋みながら開いた。

「おう、タイコウ、オウメイ、おはようさん」

開いた戸から顔を出したリクスウに、タイコウとオウメイも挨拶を返す。リクスウは寝惚けた顔を正す事も無く、定まらない目で外をぐるりと見回すと一周して二人へ視線を戻した。

「で、飯は？」

「ああ、ごめん。これからすぐに支度するから、もう少し待っていて」

「ん……」

タイコウの答えにリクスウは力無く頷く。そして、もう一度寝直す気なのか、彼は半ば閉じかけた目を瞬かせ大あくびをしながら小屋へと引っ込んだ。

だが、タイコウ達が彼に続こうと歩き出す前に、再び戸口からリクスウがひよっこり顔を出す。

「んん？」

重い臉を無理矢理開けたようなリクスウの半開きの隻眼が見据えたのは、タイコウとオウメイの間。彼等が立つ位置よりもさらに先。タイコウ達も何事かと振り返り、リクスウが見つけたそれが目に留まった。

朝靄の残るゼンギョウの村。村から離れた鍛冶場の小屋は、田畑に挟まれた一本の細い道で村と繋がっている。その小道をこちらに向かつて走る男がいた。

「あの人は……えーと、ホクシユンさんだったっけ？」

距離が遠くはつきりしない輪郭を辛うじて捉えたタイコウの口からつる覚えの名が出ると、隣にいたオウメイが首を振る。

「いえ、あれはグエンさんね。どうしたのかしら？」

「うわぁ……」

オウメイの上げた名前にタイコウが情けない声を上げた。どうしたのかと目で尋ねてくるオウメイに、鍛冶見習いの青年は困り顔で後ろ頭を掻く。

「グエンさんちから頼まれた研ぎは、まだ終わってないんだ……」

溜息の混じる声。今から研ぎだしたところで朝食の支度には間に合わないだろう。

ただ、タイコウよりもいくらか遠目が利くオウメイの目には、ゼ

ンギョウの村人グエンの表情が研いだ包丁を受け取りに来たようには見えないでいた。

(どうしたんだろう?)

慌てた顔で息を切らして駆けてくるグエン。三人の元まで駆け寄った彼は疲れ果てた両足に手をつき、ただただ肩を揺らして息を荒げるばかり。

タイコウ達三人は話す事もままならないグエンを前にして、どうしたものかと顔を見合わせた。

年の頃はタイコウよりも五つか六つほど上、やや痩せてはいるが村の大事な働き手とされるグエン。タイコウとリクスウが彼について知っている事といえば、隣村から嫁を貰い受けたばかりの新婚だと昨晚オウメイから聞いたぐらいであり、その情報はこの早朝に彼等の元にやってくる理由には繋がりにそうにない。

「あの、グエンさん。こんな朝早くにどうしたんです?」

そんなタイコウの問いにもグエンはむせ返るだけで、まともな返事は望めない。

「夫婦喧嘩して逃げてきたとか?」

あくびをかみ殺すリクスウの冗談めかした言葉には、汗を振り飛ばすほどの勢いで首を何度も振って否定。

「そつだ、お水いります?」

オウメイのこの問いにようやくグエンが頭を上げる。疲労感を窺わせる汗まみれの顔が僅かに緩み、力無く頷いてみせた。

オウメイがすぐさま台所の瓶から水を汲んでくると、水を受け取ったグエンはそれを一息に飲み干して深く息をつく。

「はあ、生き返るよ」

「やっぱり夫婦喧嘩で殺されかけて……」

またもふざけた調子で言いかけたリクスウだったが、グエンの刺し殺されかねないほどの視線に慌てて口を閉ざした。

「畑が、荒らされたんだ」

グエンはリクスウを睨むのを止めてなお、苦い顔を和らげる事無く言う。

彼の言葉にオウメイとタイコウは顔を見合わせ、その後ろではリクスウが眠そうだった目を興味深そうに見開いた。

「荒らされたって、猿とか鹿とかですか？」

タイコウの問いに違うと首を振ってみせるグエン。

「この辺りには猿はいねえんだ。猪か鹿ならいるが……畑に残った足跡がなあ」

そこでグエンが言葉を濁し、虚空に指で足跡を描く。その大きさの足跡は猪や鹿よりもさらに大きい。当てはまりそうな動物となる

と……。

「熊か虎か。それとも妖魔か？」

リクスウがタイコウ達を押しつけて前に出る。

「或いは、そうかもしれんね。はっきりとはわかってないんだ」

「なるほどね。熊、虎、妖魔ってんじゃ村の自警団の手にや余るからって、俺達のところの話が回ってきたわけだ」

グエンの返す言葉にタイコウは眉根を寄せ、リクスウはいよいよもって自分向けの話になってきたとばかりに不敵な笑みを浮かべた。

ホウ大国において国境警備、内乱鎮圧から隣家同士の痴話喧嘩まで一切の争い事は軍部が取り仕切っている。とは言うものの、大国各地において軍部の利用目的が異なってくることもあり、兵士達は大きく四つの分野に分けられている。そして、それをさらに細かく部署分けされた部隊を各地に駐屯させていた。

軍部四部は、王室警備の近衛部、戦乱や内乱といった武力衝突が主な武装部、河川や海上警備の水兵部、町の治安維持などを受け持つ警備部の四つ。近年、ホウ大国は大乱に襲われる事無く平和を保っており、必然的に増加しているのが警備部である。

その警備部もまた、ホウ大国全土に均等に分けられているわけではない。都市の規模、治安状況に応じて適量が配備され、平和の上ない地域ともなれば村数箇所を一部隊が受け持つ事になる。その場合、兵士達は村を定期的に巡回して回る形になる。

この平和な村ゼンギョウもその類に漏れず警備隊の定期巡回先の一つであり、兵士不在の間は村長を長とした村の自警団が村内の守る事になる。

自警団の団員は、言うまでもなくその村の者達。日常で起きる些細な喧嘩の仲裁程度ならまだしも、田畑を相手にするのが本職の彼等に武勇を期待するのは酷な事である。ましてや相手が熊や虎ともなればなおの事であり、逃げ出したとて文句は出ない。

「俺達がいるうちに襲われるとは、全く、まーったく、この村もついているのやらついてないのやら……」

「いや、ついているよ。あんた達がいてくれて心強い限りだ」

(ついてないよなあ……)

リクスウの茶化しに笑って答えるゲン。リクスウの影では、タイコウが自分を省みてこっそり溜息をついた。

「あの、それでアタシ達に相談に来たのはわかりますけど、村にはもっと強い方がいらっしやるんじゃないんですか？」

話を聞いていたオウメイが小首を傾げてゲンに問う。

彼女が指しているのは言うまでもなく伝説の道士デイコウの事。

タイコウ達がいくら腕に覚えがあるとは言っても、デイコウ程ではない。早朝からわざわざ村外れの自分達の元にまで走ってこなくても、村の中にもっと頼りになる者に頼った方が良いのではないかというのがオウメイの考えた。

オウメイに尋ねられ、ゲエンは痛いところをつかれたと溜息をついた。

「いや、俺達もそれは考えたんだがよ。村長がどうにもつんと言わなくてなあ」

「村長が？」

納得できないと言いたげに声を上げるオウメイ。そして、その隣ではリクスウが村長の意図に気付いてやれやれと首を振る。

「おおかた後の事が気になってんだらうよ」

リクスウがそう言うと、タイコウも答えに思い当たり「ああ」と声を上げた。ただ、オウメイの方はまだ理解できていないようで、傾げた首をさらに傾ける。

「あと？」

「虎か熊だらうと、はたまた妖魔だらうと、とにかくそいつを退治したあとって事さ。事を収めれば頼んだ側としちゃあ、礼の一つもするもんだら。それが、天下に名を轟かす大道士様ともなれば、ちよつとやさつとの礼じゃすまねえ。村長はその謝礼を渋ったんだよ。全く、まーったく、器の小せえ話だ」

リクスウの言葉はゲエンの思うところに合致しているらしい。ゲエンがもう一度溜息をつきながら頷いた。

村長の処断を鼻で笑うリクスウの影で、タイコウは一人考えこん

でいた。

(確かに、謝礼がどうこう言っている場合じゃないと思うけど……)

心情からすればタイコウもまた、リクスウやグエンと同じ。だが、村長の言い分も決してわからないものではなかった。

村長はデイコウへの謝礼を渋るというよりは、デイコウに力を借りれば返しきれない恩になると見立てている。それほどにデイコウの力を高く評価しているとも言える。ならばデイコウに劣るタイコウ達に先に頼むのも道理だ。

タイコウはそこまで考えると苦笑いを浮かべた。

(問題は、リクスウがそれを快く思わないってところだよなあ……)

畑荒らしが出た事についていないと思いきそすれど、タイコウは世話になっている村への協力を渋る気は無い。オウメイもデイコウの協力の有無を問いたしたが、どちらに転ぼうとも自分も手を貸すつもりだろう。

ただ、リクスウがどう思うかがタイコウを悩ませる。デイコウとの邂逅以来、リクスウはどうにも彼と張り合う節がある。ここでデイコウより安く扱われたとへそを曲げられては、貴重な戦力を損ねてしまう。畑荒らしの正体がわからない状況で、それは避けたい。

「まあ、あのオッサンが出てこなくたって構わねえさ。昼前には三人で村長のところに伺わせてもらうってことで」

リクスウがそう言ったのを聞き、タイコウは思案を止めて彼を見

た。朝食まで寝なおすつもりなのか、踵を返してグエンに背を向けたリクスウと目が合う。

「え？」

思わずタイコウとオウメイが聞き返す。あくびをかみ殺しながらリクスウは、ようやく思い出したように二人を見た。

「ああ、そうか。タイコウは研ぎ仕事が残ってたんだつたよな。じやあ、オウメイと二人……あ、いや、オウメイも畑仕事か。となると……なんだ、暇なのは俺だけかよ」

この言葉に、聞き返したのはそこではないとタイコウが首を振る。

「いや、村長のところには僕も行くよ。でも……リクスウはいいの？」

タイコウの問いにリクスウは不満顔で彼をねめつけた。

「なんだ？ 俺には今日も一日ずっと暇でいるとでも言うのか？」

「アタシとしては、暇しているぐらいなら立禅をしてほしいけど」

タイコウに向けられたリクスウの抗議がオウメイの横槍で怯む。

「その、ごめん、リクスウ。僕はてつきり嫌がるかと……」

「道士様に頼むより安いと思われて気を悪くするだけでも？」

謝罪にかぶせるように出たリクスウの言葉に、タイコウの口が止まる。彼のあまりに正直な反応を、リクスウは軽く笑い飛ばした。

「俺をそんな小さい男だと思っていたとは泣かせてくれるじゃねえか、タイコウ。デイコウのオッサンが出張るかどうかの前に、村の奴等を困らせている畑荒らしをどうするかが大事、だろ？ 夜回りでもなんでもやってやるさ」

ニツと笑ってみせるリクスウ。タイコウはリクスウを見くびっていたと恥じ、笑顔で頷き返した。

「うん、そうだよな」

「そうと決まれば朝飯まで寝なおすわ。おやすみー」

タイコウの肩を軽く叩き、大あくびをしながら今度こそ小屋へと引込むリクスウ。タイコウは嬉しそうに仲間の背中を見送った。

ただ、タイコウは間違いに気付いていない。リクスウを見くびっていたのではなく、見誤っていると言う事に。

寢床に戻ったリクスウは横になるとニヤリと笑みを浮かべていた。

(よっしゃ！ これで今日からあの退屈な修練ともおさらばだ！)

喜びから知らず拳を作りながら……。

(………という思惑やとウチは思うんやけど。どう思うね、オウメイセンセ)

笑顔のタイコウと共にリクスウを見送ったオウメイの中で響く樂葉の声。それは、残念ながらオウメイの見解と一致している。

（まあ、事情が事情なんだし、今回は大目に見ておくわよ）

（お優しいセンセやなあ）

からかうような口調の樂葉の言葉を聞き流しながら、オウメイはタイコウと共に朝食の支度に向かうのだった。

第十一章 泥棒退治 参

平和な村ゼンギヨウの穏やかな朝が、畑荒らしの一報で大騒ぎになったその夜。タイコウは滞在の場として村から与えられた寂れた鍛冶場で、一人熱心に雪割りを研いでいた。

炉が使われる事の無くなった鍛冶場で、唯一の光源であるランプの小さな灯が時折揺らめきながら鍛冶場の中を照らす。

鍛冶場の一角にそびえていた包丁や鎌の山は、今日一日かけてタイコウによって切り崩されていた。研ぎ終えた包丁や釜は床に敷かれた布の上に丁寧に並べられ、ランプの淡い光に艶やかな光沢を放っている。

そして、タイコウに残された研ぎ仕事は残り二つ。今まさに研いでいる最中の雪割り。師匠オウシュウが生み出しリクスウが携える刀。そして、残る一本は三大道士の一人デイコウが所有する大刀、虎王牙。

タイコウは、どのような研ぎだろうと手を抜く気は無い。

だが、この二振りの刀を研ぐ事には村人から預かった包丁や鎌の山以上に気を使う事になる。いかに心を常に保とうとしても、二振りの業物を前にしては鍛冶屋を志す者として気負わずにはいられない。

雪割りを研ぐタイコウの表情は真剣そのもの。

ただ、彼の顔には刃に生じる一転の曇りにも似た焦燥の色が見え

隠れしていた。転じて見れば、その焦燥を取り払う為に研ぎ仕事に集中しているともとれる。

昼間、ゼンギヨウの村長の住まいに訪れたタイコウ達。三人は村長のエンネイから正式に畑の護衛を依頼され、これを引き受けた。

村長との会見の際に見せたやる気の度合いを言うなら、リクスウ、オウメイ、タイコウの順となり、中でもリクスウは飛び抜けていた。もちろん、末尾となったタイコウも世話になっている村の為人並みにやる気を見せて村長を安堵させた。どちらかと言えば、リクスウの不自然なまでの気合の入りようのほうが異常だったのだ。

その時リクスウに感じた違和感が、タイコウの杞憂の一つ。

いつ現れるか、再び現れるのかどうかもわからない畑荒らしに対し、三人は一晩ずつ交代で夜回りをする事にした。そして、最初の今夜の夜回りを買って出たのが、ここでも無駄にやる気を見せたりクスウ。

タイコウは勇むリクスウに急いで雪割りを研ぎ与えようとしたが、リクスウは畑荒らしを生け捕るのに刃物は不要だと豪語し、これを断わった。

そんなリクスウの過信と間に合わなかった雪割りもまた、タイコウの杞憂を生んだ。

タイコウの胸中は、ランプの灯と同様に揺らいでいる。そんな心境にあつて、彼の両手だけは乱れる事無く刃を研ぎ続けているのだから、流石は師も認める研ぎの技術と言えるだろう。

タイコウは作業の手を止めると、軽く溜息をついた。

生来の心配性が仲間の身を案じさせ、焦る気持ちは落ち着く事がない。

(あのやる気が空回りしなければ良いのだけれど……)

研ぎ半ばの雪割りを灯りにかざし、仕上がり確かめる。

ただ、タイコウの目はどこか虚ろで研ぎの按配を確認する事はなく、雪割りを掴む手は微動だにせず彼の眼が仕上がり確かめるのを静かに待っている。

動かないタイコウの影がランプの灯の揺らめきに合わせて右へ左へと僅かに揺れるのみ。

「心ここにあらずという感じね」

「うわぁっ!」

不意に近くで発せられたオウメイの声にタイコウは驚き声を上げ、手にした雪割りを落としそうになる。オウメイもまた彼の声に驚き、こちらは驚きのあまり盆を手にしたまま動けず目を丸くしてタイコウを見ていた。

「オ、オウメイ。あー、驚いた」

「驚いたのはこっちよ。急に大きな声出すんだもの」

高鳴る動悸を抑えようと胸に手を当てるタイコウに、オウメイが

口を尖らせて返す。タイコウは胸に当てた手を後ろ頭にやると、面目無いと頭を掻いた。

「それで、どうしたの、オウメイ？」

そんなタイコウの問いに、オウメイは両手で持っていた盆をヒヨイと掲げてみせる。

盆に載っていたのは湯飲みが二つ。淹れたてであろう湯飲みの中の茶は湯気を上げている。それと、お茶請けであろう漬物が何切れか。こちらはオウメイが昼間畑仕事を手伝った際に村人から貰ったものだ。

「タイコウが夕飯からずっとこっちに入っただま帰ってこないから、様子を見にがてら休憩に誘おうと思って」

そう言われてタイコウは時間が過ぎている事によやく気が付いた。研ぎ仕事に集中するあまり、時の経つのをすっかり忘れていた。

同時に自分の身体が随分と冷えている事にも気付く。半ば開けっ放しに近い鍛冶場で作業を続けていたのだから無理も無い。

「ああ、これはありがたい」

雪割りを脇に置いたタイコウは、オウメイから湯飲みを受け取る。

オウメイから手渡された湯飲みの温かさは、冷えた手には熱くさえある。

「あ、まだ熱いと思うから……」

オウメイが警告する前に茶を啜ったタイコウ。彼の舌がその熱さに悲鳴を上げた。

「アチツ！」

「急いで飲んじゃダメだよ。って、言おうと思ったんだけど……」

オウメイが苦笑いを浮かべながらタイコウの隣に座り、タイコウは舌を扇ぎながら涙目で頷き返した。

そして、改めてゆっくりと啜る。タイコウの口の中へと流れ込んだ茶が、喉を通り身体の中に温かい道を作る。

タイコウはしばし目を閉じて身体から温まる感覚に浸ると、先程よりも温かくなった息を吐いた。

ただ、青年の吐いた息は休憩によって生まれた安息だけではない。その横顔と同様の憂いが籠った溜息だと察したオウメイは、タイコウに感化されたように表情を曇らせた。

「リクスウが心配？」

オウメイに容易く看破され、湯飲みを手にしたタイコウの二口目が止まる。

タイコウは飲みかけた湯飲みから口を離し、小さく頷いた。

「大丈夫だと思う。でも、ね……」

リクスウの強さはタイコウも良く知っている。カリユウの町で雪割りを手に戦う彼の勇姿を間近で見ているのだから。そして、雪割りを手にする前からリクスウが先祖である虎相の霊の力を借りて戦っていた事も知っている。どこの馬の骨とも知れない畑荒らしを相手にする彼を心配しては、かえって失礼だとも思う。

それでも、一人で行かせるべきではなかったのではないかという思いが拭い去れない。

(いつその事、今からでもリクスウの元へ……)

そう思い壁に立てかけた錫杖魯智へ視線を向けたタイコウは、自分の肩に置かれた手の感触に改めてそちらへと振り向いた。

「心配無いつて」

心騒ぐ青年を安心させるようなオウメイの穏やかな笑みに、腰を上げかけたタイコウの動きが止まる。

「そもそも、今日もまた畑荒らしが出ると決まったわけじゃないんだから。そうだったら、明日の夜回りはタイコウでしょ？ 今からそんなに気負っていたら身体がもたないわよ」

オウメイの手に肩を引かれ、タイコウは上げた腰を降ろすと小さく頷いた。

「それは……そうかもしれない」

確かに今夜畑荒らしが出るとは限らない。長期戦になるかもしれないと見たからこそその三人交代だ。

「まあ、出たら出たでリクスウは強いんだし」

(苦戦したならしたで良いお灸になるやろし)

オウメイの言葉に続けるように、樂葉の声がオウメイの心に響く。姿を見せれば、きっと樂葉は意地の悪い笑みを浮かべていることだろう。

しかし、樂葉が戯れ半分に言った事もまたオウメイの本音の一つである。これを機にリクスウが改めて精神鍛錬の必要性を感じるのならば、それも一興。

オウメイの当面の問題は、リクスウが修練逃げたさに夜回りを買って出たという真実をタイコウに話すかどうかである。

理由はどうあれ、リクスウが苦戦する事も織り込んでの一人夜回りとなれば、心配性のタイコウは彼の加勢に向かいかねない。とは言え、このまま黙っているのも忍びない。

どうしたものかと悩むオウメイの内心など、タイコウが知る由も無い。

青年は迷いを吹っ切ったらしく、朗らかな笑みをオウメイに向ける。

「そつだよね。僕達が信じなきゃいけないよね」

「そ、そうよ。私達、仲間なんだから」

思案にふけつていたオウメイは、思わずタイコウの笑顔に笑い返していた。

「うん、仲間だもんね。さて、僕は残りの二本を片付けなきゃ。お茶、御馳走様」

タイコウは朗らかな顔はそのままに、湯飲みを盆に返すと雪割りを手に砥石に向き直る。

「そんなに根を詰めなくても……」

「ううん。なんだか調子が良いんだ。今夜のうちに全部仕上げてみせるさ。オウメイ、先に休んでくれていいから」

オウメイの忠告に笑って返すタイコウ。その手は既に雪割りを研ぎ始めており、オウメイに向けていた顔もすぐに手元へと向けられた。

そして、間近のオウメイの事さえすでに忘れたかのように、タイコウの顔は職人のそれへと変わる。タイコウの真剣な横顔を見ながら、オウメイは何事か発しようとした口をつぐんだ。

(……言えない)

(……やわなあ。ホンマ、この坊とやんちゃな坊と足して割ったら、丁度工工按配なんやろうけど)

内から響く樂葉の深い溜息に合わせるように、オウメイはこっそりと溜息をつき外を見やる。

鍛冶場の格子窓越しに見える夜空では煌々と月が輝き、その月の脇を星が一つ流れた。

「ファックシッ！ エックシッ！」

星々の瞬く夜空で一際堂々と輝く月。それを揺るがさんばかりの声が夜空に響き渡る。

「うう、全く、まーったく……誰か噂してやがるのか？」

月に照らされた夜の田畑の中、リクスウは一人鼻を嚙りながら呟いた。

ゼンギョウの村を囲むようにして広がる田畑は、それらを仕切るように無数のあぜ道が延び、さながら蜘蛛の巣のような姿を形作っている。リクスウは、その小道の一つを一人宛ても無く歩いていた。

「俺の噂となると、やっぱりリホウちゃんかねえ」

そんな自惚れにも似た独り言とともに夜空を見上げるリクスウ。彼の脳裏に浮かんだ行商一家の少女リホウの幼く無邪気な笑顔が、星の瞬く夜空に大きく思い描かれる。

「可愛かったよなあ……」

リクスウの視界にのみ映る少女の微笑み。思わず口元をほころばせ……だらしなく緩める隻眼の青年。その碎けようは、この場に警備隊がいれば不審者と思われても仕方がないほどである。

だが、幸いにも彼の緩みきった顔を見咎める警備隊はいない。いないからこそ、彼が警備隊に代わって夜の田園を一人歩く必要が出てきたわけだが。

「それにしても、春だつてのに冷え込みやがる……」

気まぐれな風に吹き流された雲によつて空に描かれたリホウの笑顔は覆い隠され、妄想から現実へと押し戻されたリクスウは立ち止まり周囲を見回した。

視界に広がる田園風景。昼の最中、穏やかな春の日差しに包まれたそれを見ればのどかと評したくなるだろうが、叢雲越しに射す青く淡い月明かりに照らされたそれは寂しく冷たい印象をリクスウに与えていた。まるで吹き抜ける夜風が、昼に溜めた陽だまりのぬくもりを根こそぎ削り去っていくかのような冷たさを感じさせる。

そして、早春の夜の涼風に感化されたかのように、リクスウの、さらには彼に取り憑くトウコウの感覚もまた氷のように冷たく研ぎ澄まされていた。

(……いやがった)

畑荒らしが出没した昨日の今日では、出現しないのではないかと思い始めた矢先。リクスウは自分以外の気配に感付くと、近くの茂みに身を屈めて様子を窺う。

隻眼の視線の先。日中オウメイや村人達が耕していただろう畑の畝を一つの影が疾走していた。

(小せえな……)

リクスウは走る影を目で追いながら、眉根を寄せた。

獣として種を問わなければ、人ほどの大きさもある影の姿は決して小さくは無い部類だろう。ただ、リクスウがゼンギヨウ村の住人グエンから聞いていた足型を思えば、地を蹴る影の四肢や躍動するその胴は細く小さい。

(畑荒らしでも昨日とは種が違うのか、はたまたアイツはガキで親がいやがんだか……)

リクスウが思考を巡らせる間も影は走る事をやめず、彼の居場所から次第に距離が離れていく。リクスウは潜んでいた茂みから飛び出し、疾駆する影を追った。

日中オウメイや村人達が耕したであろう畑の中をお構い無しに走る影。リクスウもまた、村人達に心中で詫びながら影を追って畑を横断する。

(……にしても、いったい何者だ?)

月が雲に隠れてからというものの闇の色が濃く、影の姿が曖昧。影と距離を置いているリクスウは、未だに影の正体を見抜けないでいた。

虎か熊、否。いくらリクスウが気配を悟られぬよう足音を忍ばせているとは言え、これほど速くは走れない。そもそも影の四肢は虎や熊より長い。それでは鹿か狼、否。あの影が鹿か狼の子で親がいるとしても、その親が村人から聞いた足型を持ってはいない。知っ

ている獣のどれとも合致しない。ならば……。

一つの仮説に行き着いたリクスウが急速に殺気立ち、彼に憑くトウコウもそれに呼応するように牙を剥く。

「ここにも妖魔が出やがったってのかよ、コンチキショー！」

ゼンギョウ村の集落へと真っ直ぐ続く道に出た所で、リクスウが叫び全力で走り出した。

その声が、足音が、影に自分の所在を知らせるのは重々承知。むしろ、相手が妖魔だと言うのなら集落へ入れるわけには行かない。影がリクスウに気付き向かってくる事を願っての行為。

当然の如く、影はリクスウの声をすぐに察知して立ち止まると、背後に迫るリクスウへと振り返る。

「ようし、いい子だ！ 痛くないように一瞬で仕留めてや……あら？」

悪鬼魔霊を切り裂く虎霊の爪を放たんと豪快に腕を振り上げたりクスウ。だが、影に迫るにつれて明らかになるその姿に彼の殺気は霧散していった。それと同時に走る速度も急速に落ち、影の数歩手前でとうとう足が止まる。

「……ガキ？」

目の前に立つ影の正体に、リクスウは振り上げていた腕で困ったように後ろ頭を掻いた。

確かに、ガキ。人間の子供。

手足を地について警戒するようにリクスウを見上げる様は獣のようにも感じられたが、雲が流れ再び射しはじめた月明かりに照らされた姿は少女にしか見えない。

(こいつが畑荒らし……ってのか?)

手入れされた事が無いようなボサボサの赤毛。ぼろ布のような衣服。力強さを感じさせる眼光を持った少女。その特徴のどれもが、リクスウはゼンギョウの村で見聞きした憶えの無いものだ。

リクスウは困り果てたように溜息をついた。

「えーっと……なあ、嬢ちゃん」

「フー！」

リクスウが声をかけ歩み寄ろうとした途端、彼を見ていた少女は毛を逆立て威嚇するように声を上げる。その様にリクスウはもう一度溜息をついた。

(まあ、コイツが畑荒らしだろうと無かるうと、放っとくわけにやいかんわなあ)

そして、リクスウは意を決して少女へと歩み寄る。

「がああああああつー！」

その一步にリクスウを敵と見なしたのか、少女は雄叫びを上げて

リクスウに飛び掛ってくる。

リクスウは半身を逸らし少女の突進を難なくかわすと、通り抜けようとする少女の細い胴をヒョイと担ぎ上げた。

「うがあああああつ！」

途端に胴に巻きついたリクスウの腕から逃れようと騒ぎ暴れる少女。リクスウは三度溜息をつき、少女の胴を担ぐ腕にわずかばかり力を込める。

「ぐ、うぐう……！」

「うつせえぞ、ガキ。全く、まーったく、さっきの走り方と言いつの態度と言いつ、見た目はガキだが中身は獣だったのか？」

締め上げられて幾分大人しくなった少女を抱えなおすと、リクスウは村に向かい歩き出した。

少女が件の畑荒らしと言つには足型が合致しないが、不審者であることには変わらない。身寄りがわからなくては家に追い返す事もできない。ひとまず村長の元に保護して、彼に判断を委ねるのが妥当だろう。

「やれやれ。獣か妖魔かと踏んでいたが、とんでもねえ拾い物しちまったなあ」

空いた手で後ろ頭を掻きつつ村へと続く道を進むリクスウだったが、手元の違和感にふと足を止めた。

違和感は後ろ頭を掻く手ではなく、少女を抱える手。

(……もじゃもじゃする)

リクスウは不審に眉をしかめながら少女へと視線を向ける。

そして、隻眼を見開いた。

「虎あツ?!」

リクスウは一瞬目を疑った。夢でも見ているのではないかとさえ思った。

抱えていた少女の体から頭髪と同じ赤毛が伸び始め、幼い少女の顔も人のそれから虎の相へと形を変えている。

少女の様は、リクスウ自身に取り憑く先祖の霊トウコウと大差無い。違いがあるなら着ている服がコウ八族の装束かポロ布か、大人の虎か子虎かという程度。

「な、なんだコイツ!」

驚き戸惑いこそしたが、少女虎を抱える腕は辛うじて解かずにいる。それは、捕らえた少女を逃がさないという使命感から、というよりは眼前の虎を開放した瞬間飛び掛られるのではないかと本能的に感じたからだろう。

ただ、少女虎はリクスウの危機感に勝っていた。

赤い体毛を逆立て殺気立つ少女虎は、体を屈伸させ強引にリクス

ウの腕を振りほどく。そして着地と同時に両手両足を大地に叩きつけ、リクスウめがけて飛び掛る。

「ガアアアアアッ！」

生え伸びた牙を剥き出しにした少女虎の咆哮。そこには少女の声は無く、完全に虎のもの。そして、振りかぶった前足、もとい手から生えた爪も虎。

「んの、クソガキ！」

襲い掛かる少女虎の爪を紙一重でかわしたリクスウは振り下ろされた少女の腕を掴み上げる。続くもう一方の腕も振り切る前に掴み取り、少女の両腕を持ち上げる。

リクスウの目の高さまで吊り上げられた少女虎。足は宙に浮き、腕はリクスウにしっかりと掴まれ完全に無防備。

だが、少女虎の攻撃はここで止まりはしなかった。

少女は半身を捻り、目一杯開いた口をリクスウの肩口に向ける。

「アグッ！」

「イッテエエエエエエッ！」

少女虎に噛み付かれたリクスウの悲鳴が、星の瞬く夜空に響き渡った。

第十一章 泥棒退治 参（後書き）

（次回予告、タイコウ語り）

畑荒らし騒動から一夜。

僕達はリクスウから追い詰めた少女の話を聞きました。

それは、虎に化けるといふ奇妙な虎娘の話。

不信の色を示す僕達に対し、タイコウは興味を示し、虎娘の搜索を提案します。

提案者の、タイコウ道士、汚名返上に燃えるリクスウ。

当然、僕とオウメイも二人に同行し、村近くの森へと踏み入るのですが……。

三大道士の虎の牙、蛮勇の長の虎の爪。

二人の虎が探したものは、虎に変じる虎娘。

虎、虎、虎の虎三昧。

次回『第十二章 虎相童子』に乞うご期待。

第十二章 虎相童子 壺

リクスウがゼンギョウ村の夜警に出た翌朝。

早朝から何度も木戸を叩く音に眼を覚ましたタイコウとオウメイは、戸を開けた先にいた者達に驚き、青褪めた。

「リクスウ?!」

タイコウとオウメイの声が重なる。オウメイの意識下では樂葉の「坊?!」の声も上がっていたが、オウメイ同様ここは聞き流しておく。

開け放った戸口の先にいたのは、ゼンギョウの村人グエンとホクシユン。そして、二人に両脇を抱えられたリクスウ。

リクスウはタイコウ達に名を呼ばれても何の反応も示さないでいる。

その隻眼を開くことも返事をすることも無い。身動き一つさえ。

沈黙する青年の日に焼けた健康的な肌は今では青白く、無数の傷痕の乾いた血が作る暗い赤がやけに目立つ。身につけているコウハ族の装束は砂埃にまみれ、所々裂けていた。

リクスウを抱える村人二人の苦い顔と、彼らに抱えられた青年を見比べ、オウメイの脳裏に最悪の事態がよぎる。

「まさか……」

その先は言っではいけない気がして、オウメイは口元を覆った。

しかし、そのオウメイのほんの一言だけで隣にいたタイコウの不安は加速し、膨れ上がり、やがて耐え難い重圧となってタイコウの膝を着かせた。

「そんな……いったい……」

力無く呟くタイコウ。

一日の始まりが朝からと言うなら、今日の開始線は底の無い泥沼に引かれたらしい。地に着いた膝がずぶりずぶりと沈んでいくような気がする。眠気など当に晴れた。最悪の目覚めだ。夢なら今すぐ覚めて欲しい。

「朝、村の外れで倒れていたんだ」

驚愕に動けないでいるタイコウとオウメイに、説明するように村人グエンが告げる。

だが、タイコウは虚ろな視線を虚空に漂わせて呆然としたままで、その言葉のほとんど聞いてはいない。いや、目も耳もいつもどおりに機能してはいるものの、肝心の脳がその情報を受け付けていない。

今、彼の心の中では後悔の念と糾弾の声が渦巻き、何度も繰り返して自身を責め立てていた。

昨晚、リクスウ一人で行かせるべきではなかった。夜の内に思い直して彼に加勢すべきだった。リクスウがどう思おうが、村長の機

嫌を損ねようが、道士デイコウに助力を請うべきだった。

そもそも村人達の頼みを断っていれば。村に滞在しなければ。立ち寄らなければ。リクスウと旅を共にしなければ。リクスウに出会わなければ。自分が旅に出なければ。

今更取り返すことなど叶わない過去へと遡りながら、ただひたすら今を悔やむ。

「この兄ちゃんは何で村で休ませてあなた達を呼ぼうとも思っただが、あなた達の所に連れて行ったほうがいいと思って……」

グエンが続いてホクシユンが言う。それとて今のタイコウには上の空の響き。オウメイもタイコウ程では無いにしても、ホクシユンの言葉に相槌を打つ事もできずに動かないリクスウを注視している。

「オウメイ、一昨日に息子の怪我を直してくれだろうか。あれを使えば……」

ホクシユンの言葉にオウメイの顔が曇る。

無茶を言う。オウメイの血族が伝えてきた神子唄は怪我を治し、神子舞は病を治すが、黄泉路に着いた者を常世に呼び戻すなど出来はしない。

「無理です……。アタシ、怪我は治せても……」

そこまで言ってオウメイの表情は苦りきった。

この先に続く言葉をタイコウの前で口にしたいくは無い。言えば、

タイコウはその衝撃に打ちのめされてしまつのではないかと思えてならない。

言い淀むオウメイと今尚呆然とするタイコウの前に、グエンとホクシユンはキョトンとした顔で互いを見合わせる。そして、グエンがオウメイに向き直って不思議そうに首を傾げた。

「いや、だから。オウメイは怪我が治せるんだろう?」

グエンの言葉にオウメイは目を見開き、タイコウの目は焦点を取り戻す。

「それって……」

怪我はしているが、まだ生きている。

タイコウの上げた顔に光が戻る。さながら、今この時が日の出と言わんばかりに。

「そりゃあ、兄ちゃん体中傷だらけだし。医者といつても隣村まで行かなきゃならんし。それならオウメイに治してもらったほうが早いんじゃないかと思っただが……拙かったんかなあ」

「あ、いえ! いや、はい! 大丈夫です! アタシ、怪我治せませす! 治します!」

オウメイは慌てふためきながらリクスウの襟首を掴み、自分の肩に担ぎ上げる。そして、そのままあたふたと小屋の中へと運び入れる。

「ち、力持ちだな」

ホクシユンの感心するような、半ば呆れたような声。タイコウはその言葉に頷きながら、以前オウメイが気絶した自分とリクスウを医者の方に運んだ話を思い出していた。

(あの時もこんな感じだったのだろうか……)

男二人が抱えてきたリクスウを軽々と運ぶオウメイの姿は、普段の彼女からは想像が付かないほどに逞しい。いや、オウメイ本人さえも気が付いていないかもしれない。

火事場のなんとやら……。

夢中であるが故に出ている力なら、今の彼女にそれを指摘するのもかえって危険かもしれない。夢中を出ている故に力の加減が利かないのだし、寝間に敷いた布団にリクスウを寝かせるつもりでうっかり叩きつけてしまったのは御愛嬌としておこう。

「それにしても、二人とも人が悪いなあ。本当に驚きましたよ」

治療のまじないを始めたオウメイから村人二人へと視線を戻したタイコウは、少し恨めしげに彼等を見た。

「リクスウは真っ青だし、お二人は神妙な顔しているんですから。僕はてつきり……」

抗議めいたタイコウの言葉にグエンとホクシユンは顔を合わせ、合点がいったとばかりに笑い合う。

「そりゃあ、春先だったってまだ寒いんだ。外で寝てりゃあ、兄ちゃんの身体も冷えて青白くもなるだろうさ。あれでも少しは村で温め直したんだぞ」

「で、俺達が妙な顔になってたのは、あの兄ちゃんのせいだ」

「リクスウの？」

問い返すタイコウに、グエン達はここまでの道中を思い出したのが再び神妙な顔に戻る。いや、よくよく見れば、神妙というよりウンザリという顔だ。

「リクスウだったか。あの兄ちゃん、もじゃもじゃがどうだとか寝言を言うんだ」

「もじゃ？」

寝言など時として理解不能なもの。そうと思いつつも、タイコウは思わず聞き返していた。それはオウメイにしても同じだったように、タイコウの問いに彼女の声もかぶる。そして、彼女の意中に響いた盟友樂葉の声も同様。

タイコウ達に聞かれて、グエン達は苦笑いを浮かべつつ頷いてみせる。

「もじゃもじゃーもじゃもじゃーと、延々聞かされてたんだ。この小屋に辿り着くまでの道中ずっとだぞ？　なんだか俺達まで身体がもじゃもじゃとむず痒くなっちまってな。あれは堪らんよ」

言いながら小屋までの道中を思い出したのか、村人二人は体を搔

き始めた。

(なんちゅう紛らわしい話や……)

まじないの為精神集中するオウメイの心に波を立てるような樂葉の呆れ声。オウメイも彼女の意見に同感ではあるが、今はリクスウの治療を優先する。

「うう……もじゃもじゃ……」

(これが件のもじゃもじゃやね……)

(そのようね。とりあえず、樂葉。まじないに集中するから話しかけないで頂戴)

オウメイは腕まくりすると改めてリクスウの傷を癒すべく手をかざす。

「もじゃもじゃ……」

(むう、確かに繰り返し聞くと何やら体がむずむずと……)

(話しかけないでっば)

気持ちの乱れを吐き出すように息を吐いたオウメイは、改めてリクスウに向かい……。

「もじゃ……」

「リクスウ、黙ってて!」

その声と同時にリクスウの額がゴスツと音を立てたが、タイコウ達の位置からは何が起きたかは見ることは叶わない。彼女がその一撃に至ったオウメイの内心の苦闘も。

「それにしても、リクスウが怪我だなんて、いったいどんな化け物と戦ったんだろう?」

何やら近付くのも恐れ多いオウメイにリクスウを任せ、タイコウは内心に浮かんだ疑問を口にした。

無論、夜の内に起きた事が村人達にわかるはずもない。

「朝早くに遊びに出た息子があわくつて帰ってきてな。追い立てられるままに行ってみたら、兄ちゃんが一人倒れてたんだ。他には何もいなかったよ」

村人ホクシユンの言葉にタイコウは首を捻り考え込む。

「何か、動物の毛とか、足跡みたいなものは……」

「ちゃんと見たわけじゃねえが、見なかったなあ。道は踏み固められてるくに足跡なんぞ付かないでしょう」

村人から得られる情報は無し。そうなると、当人に聞いてみるのが一番ということになるのだが……。

(もじゃもじゃって、なんのことなんだろう?)

タイコウはオウメイの治療を受けるリクスウへと視線を移す。

まじないの言葉を紡ぐオウメイの声が小屋に響き、彼女のかざした手の辺りから少しずつリクスウの傷が消えていく。傷が見えなくなるに合わせ、リクスウの顔色も心持ち良くなっているようだ。

「……子をあなたは知っていて、子はあなたを知っている」

オウメイの何度目かの治癒のまじない。最後の一節を唱え終えたオウメイは、リクスウにかざした手を引っ込め小さく息をついた。

「終わったの、オウメイ？」

先程リクスウの額が鳴らした重い一音が印象に残るタイコウは、やや遠慮がちにオウメイに尋ねる。対するオウメイは、そんな事などとうに忘れたといった朗らかな笑顔を対抗に向けて頷き返す。

「リクスウの怪我はほとんど治せたと思うわ。今はただ眠っているだけ。あとは、起きてから本人に何があったのか聞けば……」

オウメイが言い切るより早く、当のリクスウがその隻眼をカッと見開いた。

「あの、もじゃ子がああっ！」

目を覚ますなり半身を起こし絶叫するリクスウ。

「もじゃ子……？」

その場にいたリクスウ以外の全員が思わず声を揃えて聞き返す。
無論、樂葉込み。

「おう、タイコウ。ここはどこだ？ 俺はいつたい……」

聞き返す声と一緒に皆の視線も集めたリクスウ。彼は荒く息を吐き出し小屋の中を見回し、啞然とするタイコウを見つけて詰問するように問う。

「僕達が泊めさせてもらっている鍛冶屋の小屋。リクスウはついさつき気を失ったまま運び込まれたんだよ。それで、リクスウ。大丈夫？ どこか痛むところとかは無い？」

「身体は万事快調、問題無し。ピンピンしてらあ」

リクスウはタイコウの問いかけに不敵に笑うと、カゴぶを作つて叩く仕草で健勝ぶりを見せ付ける。

そんなリクスウの脇に座っていたオウメイがもの言いたげに大げさな咳払いをした。

「ピンピンしてるなんて良く言えるわね、リクスウ。あなたの怪我はアタシが治したの。さっきまで傷だらけだったんだから」

オウメイにぴしゃりと言われ、リクスウはしおしおと頂垂れる。

(ことオウメイ師匠にかかつては、弟子のリクスウも形無しやなあ……)

オウメイの内心に響く樂葉の笑い声がカラカラと鳴り響く。オウメイはその笑い声を心中から吐き出すように一つ溜息をつき、自らの手で削り取ったリクスウの笑顔を返すように彼に微笑みかける。

「とにかく、無事で良かったわ。それにしても、傷だらけで倒れていたなんて、昨日の夜は一体何があったの？」

オウメイに問われたリクスウは俯きかけた頭を持ち上げた。

ただ、リクスウが顔を上げる程に元気を取り戻した理由としては、オウメイの微笑みからではなく、昨晚の出来事に対する腹立たしさからという方が勝っている。それを証明するように顔を上げたリクスウの表情はすぐれない。この場にいない誰かを睨みつけるように隻眼を吊り上げていた。

「村の入り口でガキと出くわしたんだよ。つたく、あのガキ、遠慮無しに噛み付きやがって……」

「ガキって、さっきリクスウがもじゃ子ーって叫んでた子のこと？」

タイコウの確認が確認するように問うと、リクスウが正にその通りだと力強く頷く。

「おうよ。赤毛の……ボサボサで肩ほどまでだな。年の頃は十くらいの女の子さ。ただ、目つきと気性は獣の類だ、ありゃあ」

タイコウに言って返すなり、その場にいたゼンギョウ村人二人に隻眼を向けるリクスウ。

赤毛の少女を知らないか？

リクスウの目はそう尋ねている。だが、グエンもホクシユンも思案顔を傾げるだけで色の良い返事は無い。

そもそも、この村に赤毛の者がいない。いや、厳密には一人いるのだが、彼の頭からは何年も前に赤毛が抜け落ち、すっかり禿げ上がってしまったている。第一、赤毛と言っても年老いた爺だ。少女という条件からは性別も年齢もかけ離れてしまっている。

「やっぱゼンギョウ村の者じゃねえのか……」

「とにかく、リクスウはその謎の赤毛の女の子にのされたと……」

「人の子相手に本気が出せるか！ 手加減が過ぎただけだ！」

タイコウの解釈は遺憾だとばかりにリクスウが怒鳴る。

（加減が過ぎた言っても、ただの子供相手に負かされるとはちと頼りないなあ）

樂葉のぼやきにはオウメイも少し頷きたくなった。

戦闘においてリクスウの強みは、彼の背後にいる先祖の霊トウコウの力によるものも大きいが、リクスウ自身も運動能力は人並み以上。武芸と呼べるものは収めていないにしても、実戦で培った身のこなしは確かなものだ。子供一人を相手にして容易く後れを取るものではない。

或いは、リクスウは負けるほどに手を抜く気の優しい男なのか……。否、昨日のタイコウとの組み手からすれば、いくら子供でも不審者相手にそこまで加減するような甘い性格でもない。

「そのもじゃ子ちゃんって、そんなに強かったの？」

「ガキにしちやあ良く動く奴だった。そこいらで同じ年頃集めて喧嘩させたら間違いないく一番だろ。ま、だからと言って俺が負けるもんでもねえがよ……」

リクスウの返答にその場の一同が首を傾げる。

だったら、なんでこの青年は一人倒れていたのだ？ 皆の視線がリクスウにそう尋ねている。

「一度は捕まえたんだよ。そしたら、あのガキが赤毛の虎に変わりやがって……」

「とらあ？」

これまた一同声を揃えて聞き返す。もちろん樂葉も。

第十二章 虎相童子 貳

「虎つて、あの虎？」

「タイコウの言う虎つてのがどれかは知らんが、生憎俺は虎と言われればあの虎しか思い浮かばねえよ」

困り顔で尋ねるタイコウに、リクスウは真顔で答える。

「女の子が……その虎に？」

「オウメイが言う虎つてのがどれかは知らんが、信じ難い事にガキがその虎に化けたんだよ」

信じられないという顔のオウメイに、リクスウは信じてくれと目で訴える。

「でも、虎つて……女の子だったんでしょ？ そんなバカな話が……」

苦笑いするタイコウ。

そして、そんな彼をリクスウは苛立たしげにねめつけた。

「クドイ！ 俺が捕まえた時は、間違いなく赤毛のガキだった！
んで、捕まえている腕がやけにもじゃもじゃするなと思って見たら、
俺の腕の中で赤い毛並みの虎に……」

詳細を説明し出すリクスウ。その講釈が始まるや否や、タイコウ

が一人納得してポンと手を打った。

「ああ、だからもじゃ子……」

「もじゃ子に納得する前に、ガキが虎に化けた事に納得しやがれ！」

がなるリクスウ。それでも旗色が悪い。およそ信じがたい話をするリクスウを囲んだ一同は、どうしたものかと困り顔を寄せ合うばかりだ。

「夢でも見たんじゃないかなあ。人が虎に化けるなんて話は聞いた事が無いよ」

「嘘つけ、タイコウ。お前は俺から聞いたし、その目で見たはずだ」

困り顔集団を代表して口を開いたタイコウに対し、リクスウは自分の背中を指し示して反論する。

タイコウだけでなく、オウメイや村人達もリクスウの指差した位置へ視線を向けるが、何が見えるわけではない。指し示した場所はただの虚空で、その先には木板の並ぶ壁があるだけだ。

ただ、タイコウは彼の言いたい事に察しが付いて口を噤む。

リクスウの背後。魯智を持っていないタイコウにも今は見えないが、そこにはリクスウの先祖であるトウコウの霊がいるのだろう。

「トウコウ……」

そう呟くオウメイにも見えてはいないが、気の扱いを心得ている

だけあってトウコウの霊がそこに居る事は感知できる。トウコウの身なりも聞いている。

確かにトウコウは人でありながら、亡霊となった今では虎の相と赤い毛並みを持っている。だが……。

「それは、生きていた時の気性が虎のようだったから、亡くなってからその気性が顔に出たんじゃないかって言っていたらどう？」

言い返すタイコウにリクスウの顔が引きつる。

確かに、タイコウの言った話は自分自身の口で説明した事だ。これでは虎に化ける少女の存在を証明するには些か効果が薄い。

「そりゃあ、おまえ……。死んで虎になる奴がいるんだから、生きたままで虎になる奴だっけていてもいいじゃねえかよう……」

苦し紛れに言うが、多勢に無勢。疑いの視線を押し返すだけの力は無く、リクスウ自身も昨晚の記憶が揺らぎ始めている。

ひょっとしたら、タイコウの言うように夢でも見たのだろうか？

リクスウがそう思い始めた矢先に、彼に助け舟を出す者が現れた。

「以前立ち寄った村で、虎人と呼ばれる種族の伝承を聞いた事がある。今の話は、あながち夢物語とも言えぬな」

小屋の戸口から響いた低く力強い男の声に、皆一斉にそちらを向いた。

「デイクウさん?!」

突然の来訪者に驚きの声を上げるタイコウ。

大刀虎王牙の使い手。ホウ大国三大道士の一人。生きる伝説。小さな巨人。古ぼけた鍛冶屋の小屋の戸をくぐってきたのは、道士デイクウだった。

彼の登場に驚いたのはタイコウだけではない。オウメイやゲン、ホクシユンも、デイクウに驚き戸惑いを見せる。

ただ、リクスウだけは不機嫌そうに眉根を寄せた。

「んだよ。オツサン、アンタか。何の用だよ……」

「ちょ、兄ちゃん! 道士様になんて口の聞き方してんだ!」

不貞腐れるリクスウを慌ててゲンが嗜める。

「タイコウ君に頼んでおいた虎王牙の研ぎが、そろそろ終わったかと思っただけね。小屋に着いたは良いが、何やら奇妙な話になっていたようで……」

「全く、まーったく、道士様ともあるもんが盗み聞きかよ」

恐れ知らずとも思えるリクスウの言動に村人二人は青褪めた。だが、当のデイクウは青年の物言いに不快を示す事も無い。むしろ、自分に非がある事を素直に認めて小屋の者達に向かって頭を下げる。

「いや、すまない。悪いとは思っただが、どうにも気になったも

のでな。つい、立ち聞きしてしまった」

デイコウを前に、オウメイは愕然とした。

噂に聞く偉人が容易く頭を下げた。という事に対してではない。どうやら、そういう意味での驚きはグエンとホクシユンが担当しているらしいが、とにかくオウメイは違う。

(樂葉……)

(いや、驚いた。全然気いつかへんかったわ……)

いくら話に夢中だったとは言え、オウメイはおるか樂葉さえデイコウの存在に気付いていなかった。流石は三大道士といったところか。

「あの……いつから？」

オウメイは恐る恐るといった様子でデイコウに尋ねる。

「もじゃ、がどうとか……」

いつの『もじゃ』だ。

「んで、オツサン。さっきの伝承の事だが、そりゃホントか？」

助け舟の出所に不満があるものの、それでもリクスウは確かめるようにデイコウに尋ねる。デイコウは僅かだが、はっきりと頷いてみせた。

「儂自身が目にした事は無いが、実在したらしい。もつとも、遙か昔にその種族の血は途絶えたとも聞いたがね」

リクスウは救いの手に突き飛ばされたような錯覚を覚えた。

せつかくの噂も過去の事ではトウコウの話と大差無い。

「それ、やっぱりいないって事じゃねえのか？」

淡い期待を裏切られて不機嫌さを増すリクスウに睨まれたが、デイコウは萎縮する事もなくヒョイと自分の掌を開いて見せた。

「先程、立ち聞きしている間に見つけたものだ」

そう言われ、タイコウ達は彼の手の上に乗るものを凝視する。一見、何も無いかに見えたデイコウの掌にあったものは一本の髪の毛。

タイコウやグエン達よりも長く、さりとしてオウメイほどではない。長さだけならリクスウの髪に近いが、そもそも色が明らかに違う。デイコウが拾ったという髪の毛は、朝の日差しの中で鮮やかな赤い色を帯びていた。

「この村に住む者の髪とは違う。おそらく彼の装束に付いていたものが落ちたのだろう」

「赤毛の女の子は間違いなくいたわけか……」

目を細めてデイコウの手元を見ていたタイコウの呟きに、リクスウは大げさに溜息をついた。

「全く、まーったく、ようやくガキがいた事を認めたか、タイコウ」

「うん。その、疑ってゴメンね、リクスウ」

「なーに、いいってことよ」

肩を落とし頭を垂れるタイコウに、そう言っただけで立ち上がるリクスウ。彼は先程まで気を失っていた事を忘れたように、力強い足取りで戸口に向かって歩き出す。

タイコウは慌ててリクスウの進路を塞ぐように彼の前へと立った。

「リクスウ、いったいどこへ？」

「ガキはいた。夢じゃなかったんだ。なら、後はそのガキを捕まえて、虎に化けるかどうか確かめりゃいい。そうだろ？」

「それは、そうだけど……」

名案だろうと自慢げに言うリクスウだが、対するタイコウの顔色は優れない。

確かに赤毛の少女の話が本当なら、虎に変わる事も本当かもしれない。ただ、リクスウと共に虎に化ける女の子を探すとして、どこを探せばよいのか？

「確かに、少女を探し出すのが一番だな。二日続けて村の近辺に姿を現しているとなれば、そう遠くに潜んでいるわけでもない。興味深い話だ。儂も手伝わせてもらおう」

悩むタイコウを他所に、リクスウの提案に一番に乗ったのはタイコウだった。

「でも、タイコウさん。探すと言っても、どこを探すんですか？」

タイコウと同様の問題で行き詰っていたオウメイの問いに、タイコウは手にした髪の毛を摘んで見せた。

「手がかりはある。失せ物探しも道士の生業の一つなのでな」

言いながら懐から出した布切れで髪の毛をくるむ。

「なる、流石に本職の道士だ。便利なものを持ってやがらあ」

タイコウの作業を見守る一同の中で、いち早く彼の所作の意味を知ったリクスウがニヤリと笑みを浮かべる。

「どづいこと？」

「指南車とかいう奴だろ、オッサン？」

その不遜な物言いが出るたびに顔色を青くするゲンとホクシユンをよそに、リクスウは無遠慮にタイコウが再び手を入れた懐を指差して問う。

「詳しいな……」

タイコウは感心したようにリクスウを見て笑みを浮かべると、改めて懐から手を出して見せた。

デイコウの分厚く硬い手にあつたのは掌に収まるほどの小さな台座と、親指ほどの小さな人形。

琥珀色の石を細かく削り込んだその人形の姿は、世に出回る大國演技の書を目にした事がある者なら察しが付く姿をしていた。大國演技の作中に挿絵としてよく描かれているホウ大國成立の立役者、軍師コウタツ。彼を模した人形であり、挿絵の姿と寸分違わず戦の勝利を導き示すように手にした鞭を眼前へと振りかざしている。

手にした台座に布でくるんだ髪を置いたデイコウは、さらにその上へ重石のように人形を乗せた。そして、彼はその太い指からは想像できない素早い所作で二つ三つと印を結んでいく。

「山海の標。砂塵の跡。天星の記憶。流れ流るるは古よりの理。なれば問う、彼の流れは何処に在りや。なれば請う、我が導き手とならん事を」

低く太く響くデイコウの重い声に一同が息を呑み、そして彼の手元を見て目を見開いた。

手にした鞭で彼方を指し示していた人形がゆらりとその身を揺らし、やがて台座からふわりと浮き上がる。

「これは、たまげた……」

啞然として開いたままのグエンの口から声がもれる。台座の上でゆらゆらと揺れ動いていたコウタツを模した人形は、ゆっくりと旋回し手にした鞭でグエンを指し示した。

人形の所作に自然と一同の眼がグエンへと向く。

「……え？ 俺が何か？」

古の天才軍師コウタツに指され、周囲の視線を一身に浴びたグエンは、さも居心地が悪そうに皆の顔を見回した。落ち着かない顔の彼に、道士デイコウと道士まがいのリクスウがそうではないと首を振ってみせる。

「いいかい、旦那。指南車ってのは持ち主によって形は異なるが、用途は総じて一つ。人や物が持つ気を手繰り、そいつの行方を探る道具なんだ」

グエンというよりは、この場にいる者全てに向けて説明するリクスウ。もつとも、当のリクスウもデイコウの手にした人形と台座、指南車を見るのは初めて。当然、指南車が動くのを目の当たりにするのも初めてだ。

「オッサンは指南車を使って、赤髪の持ち主であるもじゃ子がどこにいるかを探そうって腹なんだよ」

（指南車いうんは、基本的には印と呪詛だけでも発動できるんやけどね。まあ、媒介があったほうが気は探りやすいから、その分早く見つけられるんよ）

リクスウの講義を大人しく聴いていたオウメイの意識下で、樂葉が注釈を入れてくる。

（樂葉、知ってたの？）

（知らないでか。ウチがメンサイ村の池の底を封じるより前から仙道

はあったんやで。それにしても、仙道の術は昔とそう変わってないんやねえ)

しみじみと語る樂葉の声を聞きながら、オウメイは再び指南車へと視線を移す。

グエンが一同の視線から逃れるように立ち位置を変え、それでも指南車は元々彼のいた方角を向いたままだ。

「この先と言うと、山裾の森の中にも隠れてんのかねえ」

「まあ、あの森なら隠れるところには事欠かねえものなあ」

指南車の指す方角。小屋の壁のその先を思い描いたホクシユンとグエンの声にリクスウはタイコウに向き直り、タイコウはリクスウが何事か言おうとする前に諦めの溜息をついた。

「雪割りの研ぎなら、もう終わってるよ」

「よっしやー!」

タイコウの言葉にリクスウは力強く頷き、そのまま鍛冶場へと走り出す。その背中を眺めながら、タイコウはもう一度溜息をついた。

リクスウがタイコウに言おうとしたのは、きっと今すぐ少女探しに出発しようという提案だっただろう。そして、それはタイコウが止めても聞き入れられない程にリクスウの中で決定していた事だ。その無鉄砲とも思える迅速な行動力と決断力は、感心もすれば呆れもする。溜息の一つも出るといふものだ。

（そもそも、畑荒らしの一件は僕達三人で請け負った事なのだし、リクスウ一人に任せちゃったら悪いよね）

リクスウ、デイコウと共に森に向かうと決めたタイコウ。オウメイに視線を向けてみれば、リクスウの先走りに苦い笑いを浮かべながらタイコウに頷いて返してくる。

「デイコウさん。僕とオウメイも一緒に行つて構いませんか？」

「それは構わぬよ。ところで、虎王牙のだが……」

「っと、そうだった。虎王牙の研ぎも終わっていますから取ってきますね。それとグエンさんとホクシユンさんから頼まれた分も」

デイコウがこの小屋に来た本来の理由を思い出し、タイコウは慌てて鍛冶場へと駆け出した。

第十二章 虎相童子 参

グエンとホクシユンに見送られたタイコウ達は、デイコウの手に乗る指南車に導かれて村はずれの森へと踏み入っていた。

「そつか。昨日のうちにそのような騒ぎになっていたのか。どうも村長達がよそよそしいとは思っていたのだが……」

唸るように呟いたのは指南車を手に一団の先頭を歩くデイコウ。

そのような騒ぎとは昨日、一昨日と続いた畑荒らし騒動の話。道士デイコウは村の中に滞在していたにも関わらず、その一切を知らされていなかったのである。

「オッサンを使うにや代償がデカイと思っただらうさ。おかげでこっちに話が回ってきたってわけだ」

これまでの顛末を話し終えたリクスウがそう締めくくると、デイコウが深く息をつく。

「やれやれ、腕を高く買われるのは光栄な事だが、器量は随分と小さく見積もられていたようだな」

「名が知れるってのも時には厄介なもんだな、オッサン」

彼の隣を歩くリクスウは、高名な大道士その溜息をからからと笑い飛ばした。物怖じしない隻眼の青年に、彼等の後ろを歩くタイコウとオウメイがやれやれと首を振った。

(怖いもの知らずの坊やなあ)

オウメイの心中でも龍の姫が呆れた声を上げている。デイコウは、その声が聞こえたのかと問いたくなるようなタイミングでオウメイへと振り返った。

「儂に言わせれば、君達三人の技量とて使うには代価は大きいものだ。例えば、オウメイ君。君からは強い龍の気を感じる。それに、リクスウに立禅の行を命じたのも君だろう？ つまるところ君自身が気脈を読み、操る心得が有るといふ事。如何なる縁で龍の気を纏う事になったかは知れないが、オウメイ君にとって力強い味方だ」

デイコウに言われてオウメイはドキリとした。

隠すつもりも無かったが、デイコウはもちろんゼンギョウの村人達にも樂葉の話はしていない。

(むう、ウチに気付くとは、流石は天下に名を轟かせとる道士やな)

オウメイの内にある自らの存在を容易く看破され、樂葉が感心して唸る。

「タイコウ君もまた然り。君自身は争い事を好まず、縁も薄い。だが、長い旅路では危険も多かるう。君の手に行っている錫杖は深い歴史を旅し、多くの知識をその肌に刻みつけている。戦いに不慣れな君に襲い掛かる困難を、名参謀として勝利に導いてくれているのではないかな？」

オウメイに続いてタイコウの持つ錫杖魯智に見たデイコウは、その力を評する。タイコウは手にした魯智を改めて眺める。

「魯智って、やっぱりすごいんだ……」

「魯智？」

青年の呟きに鸚鵡返しに問うテイコウ。

「ええ、この錫杖の名前なんです。旅に出てすぐ、立ち寄った廃寺で鉄冠子という仙人のおじいさんにいただいたんですよ」

テイコウは問い返す小柄な道士にそう答え、魯智を軽く振ってみせた。錫杖の先に付いた金輪がシャンと澄んだ音を響かせ、テイコウはその音色に興味深そうに唸る。

「ふむ、仙人の鉄冠子か……」

「テイコウさんは鉄冠子仙人を御存知なんですか？」

そう問うのはオウメイ。鉄冠子と言えば、その昔、盟友樂葉が共に妖魔と戦ったという仙人。オウメイとしても気になる存在だ。

しかし、オウメイの問いにテイコウは困り顔で髭を撫でた。

「生憎と直接の面識どころか、話にしか聞いたことも無いのだよ。その話も古くからの伝承に幾度か登場する程度で、残念ながら鉄冠子自身については詳しく語られてはおらぬな。わかることと言えば、仙境の中でもかなりの格の持ち主というぐらいだろう」

(ホンマ、あんまり自分の事を言わん御人やったからなあ……)

デイコウの返答と樂葉の呟きにオウメイは僅かに落胆を見せる。

魯智の評を終わらせたデイコウは、隣を歩くリクスウへと視線を向けた。

「さて、残るリクスウだが……」

「応よ！」

待つてましたとばかりに強気的笑みを浮かべて返事をするリクスウに対し、デイコウは鉄冠子の話の時と同様、髭を撫でる。

「君はこの三人の中で一番危ういな」

「なぬ？」

思わぬ評価にリクスウは隻眼を見開き、小柄な道士を見下ろす。

「おい、オツサン。それどういうことだよ」

幼少より喧嘩に明け暮れたリクスウにしてみれば、タイコウやオウメイより強いと評されて当然と思っていた。そんな彼にとって、デイコウの言葉は些か納得のいかない話だ。

威圧するようなリクスウの鋭い眼光。魯智を手にするタイコウの目には、リクスウの背後でデイコウを威嚇するように牙を剥くトウコウの虎相が映る。

だが、相手が悪い。気の弱い者なら竦むような視線を向けられても、デイコウは動じることなくリクスウを見返した。

「確かに君は強い。君の背に取り憑いている靈魂も同じく。どちらも、さながら猛る虎のような強さを感じる」

「そうだろう。そうだろうともさ」

色の良いデイコウの答えを聞いた途端、リクスウは元の勝気な顔を取り戻した。しかし、それもデイコウの続けた言葉でまた濁る事になる。

「だが、どちらも総じて波が激しい。調子次第では、タイコウ君やオウメイ君にも劣る。逆に気が昂ぶり猛り狂えば、儂が今まで相手をした妖魔達に勝るほどに強力な力を発揮するだろう。そして、その力はあまりにも強く、時として自身をも滅ぼしかねない。故に、君は危うい。立禅の行によって気を操れるようにしようとおウメイ君が命じた理由もよくわかる。もっとも、リクスウの気性には多少不向きなようだが……」

デイコウに言われてギクリとするリクスウ。さしもの虎靈トウコウの暴走を危惧されては、返す言葉が無い。

押し黙るリクスウ。その青年の目のうちに何を見てとったのか、デイコウは満足げに頷いた。

「リクスウ。幸いにも君は若く、まだまだ修練の余地もある。そして、君を助ける仲間もあり、仲間を傷付けぬように自らの力を高めようという気持ちもあるらしい。そうだな。もし良ければ、この件が一段落した時にも儂が……」

リクスウに向けてそう言いかけたデイコウが不意に言葉を止め、

手に乗せた指南車を凝視する。

道士の掌で右へ左へと細かく揺れ出す指南車。

いや、デイコウだけではない。タイコウの手にした魯智が、リクスウに憑くトウコウが、オウメイの内の樂葉が各々の繰り手に警告し、若者三人も会話を止めて周囲を警戒した。

(オウメイ……)

(……うん。わかってる、樂葉)

「土集い山を紡ぎ、水流れ河を紡ぎ、風巻き雲を紡ぎ。汝のその手は何を紡ぐか。我のこの手は何を紡ぐか。汝の桃花、我が碧玉、契り紡ぐは盟友の証……」

樂葉に促されてオウメイは囁くように言葉を紡ぐと、途端にオウメイの首に下がる龍玉が仄かな緑光を放ち、光は薄緑の羽衣となって彼女を包む。

葉鱗后樂葉との盟友の証、樂葉布。それを纏い鋭さを増したオウメイの感覚が、気配の一つを捉えた。

動植物の豊かな森の中にあつて、それらとは種の異なる気配。

虎娘近し。

オウメイがそれを感じた瞬間、デイコウの指南車がぐるりと反転した。

「タイコウ、後ろ！」

指南車の変動と同じくして声を上げるオウメイに、タイコウは慌てて後ろを振り返る。

果たして、オウメイと指南車の指摘は当たっていた。ただ、タイコウが背後の草むらから飛び出した少女を視認する頃には、少女はタイコウの足元まで駆け寄っていた。

「がああああっ！」

「うわあっ！」

飛び掛る少女を、悲鳴を上げながら辛うじて錫杖で受け流すタイコウ。奇襲を凌いだものの、少女の勢いに押し負けたタイコウは姿勢を崩して尻餅をついた。少女は全身で跳ねるようにして四人との距離をとる。

「この子が例のもじゃ子ちゃん？」

歳は十くらいの赤毛。野性味溢れる鋭い目。獣の如く四肢を地に着けた姿勢でボロ布を纏った少女。

オウメイはリクスウに確認するように問いながら、リクスウの答えを聞くまでもなく彼女が噂の虎娘だと確信していた。

「その通り、ガキだからと油断してつと痛い目を見るぞ」

自身の失態を思い出したのか、リクスウは警告しながら憎らしげに隻眼で少女を睨みつける。その少女もまた、四人の中にいるリク

スウから一行を敵と見なしたらしく、全身を振るわせた。

「そら出た。あれがもじゃ子の本性だ」

リクスウが告げる間にも少女の変化は起きていた。少女の全身を赤毛が覆い、体軀は膨れ上がった筋肉で一回り大きくなり、少女の顔が虎へと変じていく。

「な……！」

立ち上がったタイコウは、人の姿から赤毛の虎へと変化していく様を目の当たりにして、再び腰を抜かして倒れそうになる。

リクスウから話を聞いていたものの、それでも実際にその変貌を見ては驚愕を禁じえない。

「なるほど、この少女は途絶えたと言われる虎人の血筋か……」

タイコウとオウメイがただただ驚く中、デイコウは納得するようになり頷き呟く。その隣でリクスウは腰に下げた雪割りに手をかけた。

「ああなると手加減する余裕もねえ。ガキだからって容赦してつとこつちが落つ死んじまう」

経験から周りに警告するように、虎に変じたとは言え少女に刃を向ける事になる自分に言い聞かせるように。リクスウは静かに、力強く言い放ち腰に下げた雪割りの柄を握る手に力を込めた。しかし、雪割りを抜こうとする青年の動きをデイコウの手が制する。

「……オッサン、邪魔する気か？」

デイコウと接したこれまでで一番の眼光で睨みつけるリクスウ。対するデイコウは、それを自身の眼力で正面から押し返すと、虎と化した眼前の少女を手にかけてはならないと小さく首を振った。

「ここは儂に任せてもらおう……」

「お、おう……」

リクスウは威圧するはずのデイコウに押し負けた形で返事を返す。その様子を見ていたタイコウ達にもデイコウを止められるはずも無い。

(デイコウさん、どうする気なんだろう?)

錫杖魯智を構えて赤毛の虎と対峙していたタイコウは、不安そうに横目でチラリと道士の様子を窺う。

大地を振るわせるような低い唸り声を上げて威嚇を続ける赤虎。威嚇だけではない。地面すれすれにまで身を伏せた赤毛は、いつでも獲物に飛びかかれるだけの力が込められている。

そんな虎の娘を前に、デイコウは一步二歩と歩み寄る。

その様に最初に慌てたのはタイコウ。彼の焦燥は小心の性格もさることながら、タイコウは自身が研いだ大刀虎王牙の長さをよく知っていたことも起因する。その間合いの広さは雪割りを遙かに勝っている。デイコウ自身の踏み込みも考えれば、それこそ歩き出す最初の立ち位置からでも切りかけれそうなもの。

虎王牙を用いる素振りも見せず、ただ歩み寄るデイコウ。

その姿に続いて慌て出したのはオウメイとリクスウ。デイコウは小柄ではあるが、道士服に隠れた身体は強靱な筋力がある。リクスウに雪割りを抜く事を禁じておいて、自らが愛刀を抜く事もないだろうが、その脚力を発揮すれば赤虎の飛び掛りうる間合いの外から虎の懐に飛び込むことも敵うだろう。

しかし、歩み寄るデイコウからは、攻勢に出る殺気からして欠片も見られない。

タイコウ達が焦り慌てる中、道士は赤虎の間合いさえも何の躊躇いも見せずに踏み超えた。

「ガアアアアアアアアッ！」

一飛びに襲い掛かる事のできる位置に獲物から踏み込んできて、赤虎が何もしない道理は無い。赤虎は雄叫びを上げて飛び掛る中、デイコウはようやく立ち止まった。そして……。

(な、正気か?!)

樂葉の驚く声がオウメイの内に響く。オウメイも同感だ。

デイコウは何もしなかったのだ。

直立不動。赤虎の振りかざした爪を胸に受け、肩に牙を突き立てられようともしなく微動だにせず、直立の姿勢を保ったまま何もしていない。

三人は、任せるとデイコウに言われてこれまで様子を見ていたが、その彼が何をするでもなく虎の餌食になると思えば黙ってはいただけない。

リクスウは再び雪割りの柄に手をかけ、タイコウは魯智を手に呪文を唱え出し、オウメイも樂葉布を翻す。

「手出し無用！」

だが、しかし背後で動くタイコウ達の気配を察したデイコウの一喝によって、三人はその動きを止められた。

「オッサン、イカしてんのか！ 何を意地になってやがんだよ！」

「気を散じるな、リクスウ」

度々の制止に苛立つリクスウの声にデイコウは振り返る事も無く静かに返し、自身に喰らいつく赤虎を抱き上げた。

「君達も気付いているはずだ、己の刃向ける先が他にあるのではないか？」

デイコウに諭され、オウメイは彼に背を向けると再び周囲の気配を探りだす。タイコウも苦い表情を浮かべながら、道士の指摘を受け入れオウメイ同様背を向けた。

「全く、まーったく、好き勝手に指図しやがって……」

リクスウは大きく溜息をつくとき、デイコウに背を向け今度こそ雪割りを抜き放つ。

(此の童子は敵に非ず、真に敵と見なす者は彼方に在り。あの道士殿は、なんもかんも見通した上で、あのお嬢の子守を引き受けおつたわけや)

デイコウの指南車が揺れだした時、虎娘の気配に気付いたのは樂葉布を纏ったオウメイのみ。樂葉や魯智、トウコウが発した警告は別の危険の接近であり、デイコウもまた指南車が示さない脅威に感付いていたのだ。感付いた上で、デイコウはその危険の排除を三人に任せ、虎娘の捕獲を選んだのである。

(そこまでされちゃ、アタシ達もアタシ達の仕事をしなきゃ悪いわね)

(そういうこっちゃ。ほな、始めよかね、オウメイ)

間近にまで迫っていた殺気が急速に膨れ上がり、オウメイが戦闘開始を悟る。そして、第一撃を放ったのはリクスウ。

「そこか！」

リクスウが横薙ぎに振りかざした腕から虎霊の爪が飛び、不可視の刃となって草木を薙ぎ切る。倒れ行く木々の陰にあった殺気は間一髪跳躍して虎爪をかわし、高々と飛び上がったその姿をタイコウ達にさらした。

多少異形ながらもその容姿は蜘蛛のそれだが、その大きさは熊や虎より大きい。

(蜘蛛……鬼蜘蛛。口から糸状の唾を吐いて獲物を絡め捕り、硬い

顎で食い干切る)

術の呪文を唱えるタイコウの脳裏に魯智からの情報が流れ込む。

魯智の教え通り、跳躍した鬼蜘蛛は眼下のタイコウ達めがけて唾を吹いた。鬼蜘蛛の唾は投網のように広がり、空中で蜘蛛の巣の形となって降りかかる。

(うえ。ばつちいなあ……)

樂葉の嘆きに心底頷きたいところだが、オウメイに同意している暇は無い。

「疾ッ！」

上空の蜘蛛の巣に向かってオウメイが樂葉布を翻し叫ぶと、樂葉布から吹いた薄緑の疾風が鬼蜘蛛の糸を吹き散らす。

蜘蛛の巣の脅威を免れたタイコウは、落ちてくる鬼蜘蛛めがけて走り出した。

「……巡る汝は今何処。流れる汝は今何処。我が言の葉に、応えよ、吼えよ……」

タイコウは走りながら詠唱を完了させると、着地した鬼蜘蛛が次の糸を吐くより早く魯智をその口に突きつける。

「活！」

力ある一声に、鬼蜘蛛の頭は吐きかけた糸もろともに半ばまで弾

け飛び、タイコウもまた衝撃の反動で姿勢を崩し、二歩三歩とたたらを踏む。その彼に代わってリクスウが鬼蜘蛛の前に躍り出る。

(頭半分は吹き飛ばしたけど、こいつの弱点は……)

「胴だ、リクスウ！」

タイコウは自分と鬼蜘蛛の間に割って入ったリクスウに叫ぶ。

「ヨツシャアアアアアツ！」

すでに初太刀で鬼蜘蛛の頭を落としていたリクスウはタイコウの声に身を捻り、鬼蜘蛛の胴に深々と雪割りを突き刺す。

鬼蜘蛛はビクリと全身を震わせ、やがて自身を支える力を失いその身を地面に倒した。

リクスウは鬼蜘蛛の亡骸から雪割りを引き抜き、刀身に付いた血肉を振り払う。

「一丁上がり、だ」

雪割りを鞘に収め、勝気な笑みを浮かべてタイコウとオウメイに振り返るリクスウ。

「うむ、お見事な腕前だな」

そんな彼に賛辞を送ったのは二人ではなく、彼等の背後にいたデイコウだった。

「って、何がうむだ、オッサン！ まだ噛まれっぱなしじゃねえか！」

リクスウの怒鳴り声にタイコウ達が慌てて振り返る。

デイコウは相変わらず肩を噛まれたまま、赤虎を抱えている。

急いで虎を引き剥がそうとするタイコウをデイコウは押し留めた。

「この子もようやく眠りについたところだ。あまり騒ぎ立てるとまた起きてしまう」

「でも、デイコウさん。大丈夫なんですか？」

「うむむ、いくら儂でも噛まれれば痛いことは痛いのだが……まあ、こうでもしないと術が効かないと思ったのでなあ」

心配げに問いかけるオウメイに、デイコウは髭を撫でながら苦笑いを浮かべて返す。

その彼の肩に突き立っていた牙が抜け、次第に小さくなっていく。牙だけではない。全身を覆っていた赤毛も抜け落ち、虎の相も人へと変わり少女の穏やかな寝顔へと変わっていった。

「術とは、この子を人に戻す術ですか？」

タイコウの問いに頷くデイコウ。

「大きく言えばその通りだが、虎人という種族柄この娘が虎に変じる体質は変わるまい。儂の術はこの娘を人に戻すきっかけのような

ものだな。長らく獣として生きてせい、この娘は人の性が薄い。少々危険な術なのだが、上手くいけばこの娘も人として生まれ変われよう。ああ、オウメイ君。すまないがこの子を頼まれてくれないか」

デイコウの肩に深々と突いた牙の痕。これを治そうと近寄ったオウメイに、デイコウは抱えていた少女を引き渡した。

「え？ あ、いや、それはそれとして、傷の手当を……」

少女を受け取りつつも困惑するオウメイに、デイコウは心配無いと首を振る。

「道士の術には自身の怪我を癒す術もあるのだよ。それより、急ぎ確かめたい事があるので……」

そう言つて懐から指南車を取り出したデイコウは、少女を探した時のように掌にこれに乗せる。

「山海の標。砂塵の跡。天星の記憶。流れ流るるは古よりの理。なれば問う、彼の流れは何処に在りや。なれば請う、我が導き手とならん事を」

指南車の台座の上には少女の髪は無い。ともなれば、指南車が示す道はデイコウの念じるものの在処を示す。

台座の上に浮き上がった人形は、ゆらゆらと揺れながらも一定の方向を指し示した。デイコウは指南車が指す方角を見据え、眉根を寄せる。

「ふむ、やはり在るか……。すまないが、皆はここで待っていてはくれまいか」

「え？ でも……」

デイコウに言われて困り顔を見合わせるタイコウとオウメイ。そんな二人を置いて、すでにデイコウは森の奥に向かい歩き始めている。

「下手に歩き回って娘の眠りを妨げるのも忍びない。さりとて、娘一人置いて皆で森に行くのも無用心というもの。儂が帰ってくるまで、その娘と一緒にいてやって欲しい」

そう言い残してとうとう姿を消すデイコウ。思慮深そうなデイコウ道士にしては珍しい強引な押しに、タイコウ達は呆気にとられて見送るよりなかった。

そして、もう一人。

「ここで待ちぼうけしてるより、オッサン追いかけたほうが面白そうだな。ってわけで、子守よろしくな、お二人さん」

ちゃっかり少女の守りを任せてデイコウの元へと走るリクスウ。

「え？ あ、ちょっと……」

「もう、リクスウ！」

タイコウ達が抗議の声を上げるものの、その逃げ足は速くリクスウの姿は森の木々に消えていた。

「うーん。リクスウはさておき、デイコウさん、どうしちゃったんだろう?」

急ぎ足で森の奥へと分け入っていった道士の姿が腑に落ちず、オウメイは首を傾げる。

「何か難しい顔をしていたみたいだけど……」

この疑問はもちろんタイコウも同様だ。ただ、少女の面倒を頼まれた手前、勝手に彼を追いかけるのも気が引ける。

「何か理由があるのだろうか、僕達はデイコウさんを待っていたほうがいいかなあ」

「この子を寝かせておいてくれって言うてたし。ねー」

後ろ頭を掻きながら思案するタイコウに、オウメイはそう言うて抱いている少女を覗き込む。彼女につられてタイコウもまた少女を見る。

かつて出会った行商の娘リホウよりは年上に見えても、少女もまだ子供だ。タイコウは少女のあどけない寝顔を見るうちに思案顔をやめて微笑んだ。

「こっつて見ると、さっき僕達に襲い掛かってきたなんて思えないね」

「この子からしてみれば、アタシ達が自分を苛めに来た悪い奴に見えていただけじゃないかしら。ホントは、きつといい子なのよ」

タイコウの言葉に笑顔で頷くオウメイ。そんなオウメイの胸中で
樂葉の忍び笑う声が響き、オウメイは首を傾げた。

(どうかしたの、樂葉?)

(フフツ。いや、なに、こうしてお嬢の顔を覗とるオウメイらがな。
なんや、我が子の寝姿を見守る夫婦みたいで……ウフフツ。ホンマ
に微笑ましいやら可愛らしいやら、フフフツ)

「……ッ！」

急速に紅潮し発熱し始めるオウメイの顔。彼女は慌ててタイコウ
に背を向けて俯いた。

「ん？ どうしたの、オウメイ？」

突然の行動の真意を図りかね、首を傾げるタイコウ。オウメイは
黒髪を大きく揺らしながら何度も首を振ってみせる。

「な、なんでもない……です」

心の中ではついに堪えかねた樂葉が龍の貴人らしからぬ声でゲラ
ゲラと笑っていたりもするが、今のオウメイにはそれを止める余裕
も無かった。

第十二章 虎相童子 肆

「タ、タイコウ。立ったままというのも疲れるし、どこかに座ろうか」

「それもそうだね。なら、そこは？ さっきリクスウが切っちゃった木」

返事する間もあればこそ。オウメイは足早に倒木に進むと、その端に俯いたまま座り込む。

「オウメイ、なんだかおかしいけど、大丈夫？ お腹痛いの？ その子、重いなら代わるうか？」

心配そうに歩み寄るタイコウ。

オウメイの中で、腹がよじれると苦しみながら樂葉が笑っている。タイコウの様がまるで妻の身を案じる夫のようで、樂葉のつばに完全にはまったらしい。

オウメイは未だに火照ったままの頬を少しでも冷やそうと、力いっぱい首を振った。

「大丈夫、ホントに大丈夫だから」

実際のところは大丈夫ではない。樂葉の笑い声が騒々しくて仕方がない。そして、その原因はタイコウだ。などとは、オウメイの口から洩れることもない。

タイコウが歩み寄るたびに、オウメイはずるずると倒木に座ったまま逃げていく。

「そう？ ならいいんだけど」

いまいち腑に落ちていないという具合で一応は納得してみせるタイコウ。息をつき心を落ち着かせると、オウメイは心中で未だに笑い転げている樂葉へと意識を向ける。

（まったく、もう！ 妙な事言わないでよ、樂葉！）

まだ、落ち着かせきれていないとは思うが、とにかくオウメイは樂葉に抗議した。

（せや言つたかて、ウチが陽気が好きなんは知ってるやろ？ 親子の寝顔見て顔綻ばせる姿。まさに天下泰平、幸福絶頂、家族愛万々歳。大いに結構な事やないの。おばちゃん、こういうのも大好きなんやわあ）

（はいはい、それは良うございましたね。樂葉の陽気好きはわかったから、これ以上アタシの心を混ぜっ返すのは止めてね）

（どうやろう。それは約束しきる自信は、ウチには無いなあ）

（自信持って。お願い）

（ところで、あんまりウチにばっか気を取られるのはあかんで。ほれ、旦那様がまた心配そうな顔して……）

「五月蠅い、樂葉！」

怒鳴つてからオウメイは樂葉の言葉を思い出し、タイコウへと振り向いた。視線の先には急な怒声に目を白黒させるタイコウ。

「あ、その、ごめんなさい。ちょっといろいろとあったものだから」

「僕こそ、ごめん。でも、その子が……」

萎縮しながら彼女と彼女が抱いたままの少女を見比べるタイコウに、オウメイは少女へと視線を落とした。

「う……ううん……」

どうやら樂葉と話しているうちにオウメイの腕にも力が入ってしまつたらしく、胸元に押し付けられる形になつた少女が苦しそうに呻く。

慌てて力を緩めるオウメイ。だが、先程の一声に少女は確実に目覚め始めていた。

（あいやー、起こしてしもうたか）

（誰のせいよ、誰の）

（そりゃあ、もちろん。どこの娘さんの大きい声で……）

再び樂葉との不毛な口論を起こしそうになりながらも、オウメイはその気持ちを抑えて少女の様子を見ることへ集中する。

タイコウとオウメイが覗き込む中、赤毛の少女はうっすらと瞼を

動かす。そして、彼等の存在を認識した途端、バチリと目を見開いた。

「え……？」

オウメイが声を上げる間もなし。少女はオウメイの腕を振りほどいて跳ね起きると、大きく跳ね飛んで二人と距離をとった。

「おまえ、誰！」

明らかな警戒の色を見せて声を張る少女を前に、タイコウとオウメイは啞然としたまま動けないでいた。二度三度と瞬きをすると、互いの顔を見合わせる。

二人が驚いたのは少女の並外れた運動能力でも、起床と同時に機敏な動きを見せる少女の寝起きの良さでもない。驚くべきは、見た目は人の子とはいえ遭遇した時は獣のような反応をしていた少女が片言でも喋った事だ。

「これって……」

「デイコウさんの仕掛けた術の、影響……かしら？」

驚いたまま警戒をすることもせずにいるタイコウ達の態度に焦れたのか、少女は二人を睨みつけさらに声を上げる。

「おまえ、アタシ、いじめる、悪者！」

「ま、待って、待って。アタシ達はあなたをいじめたりするつもりはないの」

少女の言葉に慌てて弁明を試みるオウメイ。

「悪者、違うか？」

「悪者じゃないの。あなたと仲良くなりたいのよ」

「仲良く？」

少女の問いかけにタイコウが小さく溜息をついた。未だに警戒の色は濃いだが、どうやら少女が問答無用で飛び掛ってくる事はないらしい。

「そうね、まずは自己紹介をするわ。アタシはオウメイ。こっちはタイコウ。あなたのお名前は？」

穏やかに微笑んでそう告げると、少女はどうしたものかと悩みながらも口を開く。

「……フロウ」

「フロウ。君はこの村の子じゃないようだけど、いったいどこから来たの？ 歳はいくつ？ お父さんやお母さんは一緒じゃないの？ ここで何をしていたの？」

少女が名乗った。話をする気があると知ったタイコウは、気になっていた事柄を次々と尋ねる。

しかし、赤毛の少女フロウはしかめっ面をしたまま小さく唸るばかりで、何一つ答えようとはしない。沈黙するフロウを前に、タイ

コウは困り顔で頭を掻く。

「えーっと……フロウ？」

「タイコウ。そんなにいつぺんに聞いても答えきれないわよ。そうね、フロウは誰かと一緒なの？」

聞き手交代。解答に逸るタイコウを下がらせ、オウメイが代わって尋ねる。フロウは少し寂しげに、俯くようにして頷いた。

「アタシ、寝てた。起きた。お父、お母、友達、全部、誰も、いない」

フロウの言葉にタイコウとオウメイは再び顔を見合わせ、互いに表情を曇らせた。

（目え覚ましたら一人で誰もいんかった。そう言いたいんか？）

樂葉が確かめるように問う。解釈を同じくするオウメイは内心頷く。

それから、タイコウ達は少しずつフロウの事を尋ねようと試みた。

ただ、二人の問いかけに対する少女の答えは首を振って「わからない」「覚えてない」のどちらかだけ。親の名、出身、歳、仲間の行方、自分が今いる場所の事もわからない。唯一の知り得た情報は、フロウはお腹が空いているという事だけだ。

いや、収穫がもう一つ。懇々と尋ねるオウメイの姿にフロウの警戒が次第に薄まり、タイコウの差し出した御握りで完全に陥落した。

(氣い付いたら嬢ちゃん一人。孤独のまま彷徨って、飢えを凌ぐために偶然見つけたゼンギョウの畑を襲ったちゅうわけか。畑荒らしとはいえ、なんやチィと不憫な話やなあ)

無心で御握りにかぶりつくフロウを見守るオウメイ。その胸中で樂葉の溜息混じりの声が響く。

「畑荒らしの一件。被害もそう大きくはないし、事情がわかれば村長も大目に見てくれるんじゃないかな」

樂葉の言葉にか、タイコウの言葉にか。オウメイは頷いてフロウの赤毛を撫でた。フロウはオウメイの手を気にすることもなく御握りを平らげ、掌についた米粒を舐め取っている。

少女の様子を見るうちに、タイコウの心中にふと疑問が湧いた。疑問はすぐに膨れ上がり、その重みに負けるように対抗は首を傾げる。

「それにしても、フロウってデイコウさんの言ってた虎人なのかな」
「あ」

「うーん、確かに虎には化けたけど……。でも、虎人の血筋は遙か昔に途絶えたとも言っていたし……」

虎に化ける少女。途絶えた虎人の血。矛盾する情報から導き出される新たな可能性。その一つとして二人の頭によぎったのは、人や虎に化ける妖魔。だが……。

「美味かった。もう無いか？」

そう言って無邪気に笑う少女の顔を見ては、それを疑う気にはとてもなれない。

「虎人以外にも、そういった種族が残っていたんじゃないかな？」

「いや、虎人は他に類を見ない特異な種族だ。その娘は虎人で間違いないだろう」

タイコウの考察をきっぱりと否定するデイコウの声。タイコウとオウメイは声のしたほうへと振り返り、フロウは再び警戒の意思を露にする。

フロウの警戒も無理は無い。彼等の元に戻ってきたデイコウの背後に、昨晚闘ったリクスウの姿を認めたのだ。

リクスウに対する敵意ともとれる警戒色の視線の線上にしながら、デイコウは大して気にもしていない様子でフロウを観察する。

「ふむ。思ったよりも目覚めが早かったな……」

呟くデイコウ。それを誤魔化すかのように、少女の目覚め促進に一役買ってしまったオウメイが道士の先の発言に反論した。

「でも、デイコウさんの話では、虎人の種族は滅んでしまったと……」

確かに、虎人は滅んだとデイコウ自身が言ったのだ。フロウがその虎人だとするなら、滅んだと思われていたが生き延びていたということがあるのか。

そして、デイコウは虎人の消滅を認めて頷き返す。

「或いは、虎人の血が混じったものは少なからずいるかもしれないが、純粋な虎人の血統でなければ虎に化ける事はない。そういう意味では虎人は滅んだと言っつていいだろうな」

赤毛の少女フロウは虎人。その虎人の種族は滅びている。

矛盾するデイコウの返答にタイコウとオウメイは眉をひそめ、帰還の道中にデイコウから話を聞いていたリクスウは複雑な表情を作った。

「滅びている。転じて、かつては存在したということ。娘は存在した時代からの来訪者なのだよ」

およそ信じられない事をさらりと言うデイコウに対し、その突飛な発想を言葉の上では理解しつつも納得はできないとタイコウ、オウメイは首を傾げる。

「そんな滅茶苦茶な……」

苦笑いとともにそう呟いたのは、果たしてどちらだったのか。どちらにしても、彼、もしくは彼女の仲間であるリクスウによって否定されることになる。

「俺もおよそ信じ難い話ではあるんだがよ。ありえねえ話じゃねえらしいんだわ、これが」

その口ぶりから、リクスウ自身納得しきっているわけではないら

しい。しかし、二人ほど否定的でもない。

それは、デイコウと同行し、行き着いた先で目の当たりにした光景ゆえに。

「ふむ。どこから説明したものかな……」

未だ不信感から脱していないタイコウ達の様子に、デイコウはそう言って髭を撫でた。

デイコウがホウ大国三大道士の一人にされたのは、実力もさる事ながらホウ大国中で妖魔を退治しているというその実績からだ。その彼がホウ大国を漫遊する中、妖魔出没の噂を聞きつけ退治に向いた先で、妖魔出没と前後して周辺住民が神隠しにあったという別の噂を耳にすることがあった。

普通の者ならば、人生に一度あるかないか。一度遭遇したらそこで人生の終演を迎えかねない妖魔出没という現象を、その実力ゆえに数多く経験したデイコウは当然神隠しの噂を聞く機会も増えた。

そして、行き着いたのが異界の妖魔が辿る道の存在である。

妖魔は異界もしくは魔界と呼ばれる異世界から、異界の門と呼ばれる時空の歪みをくぐってこのホウ大国が存在する世界へ到達する。

異界の門が如何にして発生するものかは判明していないが、それはある日突然起きる現象。その規模もさまざまであり、門の大きさによって出没する妖魔も変わっていく。

通り雨のような僅かな時間。小雨のような小規模な門の発生なら

ば、妖魔が訪れることもなく、誰も知らないうちに発生から消失までの工程を終わらせる事もある。だが、雨季の長雨、雷を纏う大嵐のような規模となれば、妖魔の数も増えて強力な者の来訪も起きやすい。

そんな異界の門を妖魔が異界からくぐってくるように、この世界のものがこちらから門をくぐるとどうなるか。

鍛冶場で聞いた見慣れない少女の存在に違和感を覚えたデイコウは、妖魔鬼蜘蛛の出没によってその仮説を確かめる好機を得た。そして、指南車を頼りに森を捜し歩いた結果発見したのが静まりつつある時空の綻び、異界の門の発見だった。

「異界の門が消える瞬間に、その門にいた者がどうなるか。その娘、フロウの様子からすれば、門の消失とともにこの世界が持つ時間の概念の外の存在となるらしいな」

一人納得顔のデイコウを前に、タイコウが待ったをかける。

「っ、つまりですよ。フロウは遙か昔に発生した異界の門と一緒に消えて、この数日のうちに発生した異界の門と一緒にこの世界に帰ってきた、と?」

「虎人の滅亡から数百年。異界の門が再現されるまでの間、この世界の時間から外れていたからこそ、フロウが少女の姿を保っていたのであるうな。でなければ異界の門の中で天寿をまっとうしているはずだ」

デイコウが頷き返す中、一同の目が話題の中心人物フロウへと向く。

「どうやらフロウにはデイコウの説明が難し過ぎたらしく、話についていけずにただただ退屈そうに大口を開けて欠伸をしている。」

「出来ることなら、元の時代に戻してあげたいけど……」

「いたたまれない気持ちに洩れ出たオウメイの言葉に、良い返事が出来る者はいない。」

「もじゃ子の時間は異界の門と一緒に消えることで微塵も動きはしなかったかもしれねえが、それは逆戻しに動く事もねえからなあ」

「アタシ、もじゃ子、違う。フロウだ」

「今ばかりは困り顔で言うリクスウに、フロウが牙を剥いて返す。タイコウ達に打ち解けつつあるフロウだが、どうにもリクスウとは反りが合わないらしい。」

「とにかく、フロウは保護しよう」

「言ってデイコウはフロウの頭を撫でる。」

「村の子として育てるなら、それも良い。いや、もし村長が許してくれるようなら……」

リクスウといがみ合っていたフロウは僅かに驚き目を見開いた。だが、頭に触れる道士の大きな手に最早会う事も叶わない父のそれを思い出したのか、抗いもせず心地良さそうに喉を鳴らす。

「そんな少女の様子にデイコウは頷き、途切れさせていた言葉を続

けた。

「フロウを儂の娘として育てようと思うのだ」

太く渋い声で放たれたデイコウの提案。

今日一番の衝撃に呆然とするタイコウ達の脇を、一陣の風が過ぎ
ていった。

空は青く、漂う綿雲はたなびく風によって少しずつその姿を変え
ていく。リクスウは、ただただぼんやりと空を見ていた。

いつもと変わらない平穩そのものの天気。心が荒んでいる者なら
ば空一面に広がる青に心洗われ清々しくなるか、でなければその晴
天さえも気に入らないと心を暗雲に曇らせるだろう。

頭を上げる事も無く空を見ているリクスウ。見上げなくても見え
る。そう、彼は大地にその身を大の字にして寝かせていた。

「立てるかね？」

リクスウにそう尋ねてきたのは、ホウ大国三大道士デイコウ。

蒼天へと向けられた視線を遮るようにして覗き込むデイコウに、
リクスウは力無く笑い返した。

「問題ねえと言いてえところなんだが……。こいつはちよいとばか
り当たり所が悪かったなー。全く、まーったく、足に力が入らねえ

よ
「

その言葉に偽りは無い。全身に受けた痛みにも四肢が痺れ、感覚こそあるものの脳から伝わっているはずの「動け」の指令に従おうともしない。

リクスウに痛みを与えたのは、眼前のデイコウ。

赤毛の虎人フロウを保護した翌日、彼等は早朝から組み手を行っていた。リクスウがオウメイに立禅を命じられた経緯を知ったデイコウが提案したのだ。

曰く、リクスウの気を集中させるなら立禅の静の中よりも健闘の動の中に身を置いたほうが成長が早そう。

どちらから開始を告げるでもなく始まった組み手は一方的な展開だった。飛び掛るリクスウに対してデイコウが殴る、蹴る、投げ飛ばす、デコピン等々、対処こそ違えどもリクスウが返り討ちにあうという結果は総じて同じ。

数日前、タイコウと組み手をしていた時と同じ立場になった今のリクスウに、空の青がやけに高く遠く思える。数日前のリクスウの立ち位置にあたるデイコウが空を見上げる姿を視界の端に捉え、リクスウはもう一度力無く笑った。

上には上がいる。リクスウは今、それを文字通り痛感している。地に寝そべるタイコウに対して空を見上げ言った自身の言葉が、空から振り落ちてきたようだ。

そして、リクスウが強いと認めたデイコウでさえ、まだ上を見上

げている。

(全く、まーったく、武の高みってのは呆れるほどに高えなあ……)

青年の顔に、空を映す隻眼に、道士は何を見たのか。デイコウは休憩を告げるでも無くリクスウの隣に座り込み、息をついた。

「儂もまだまだ青いな。若さを目の当たりにして、つい加減を忘れた」

「手加減無し、か。ありがてえ。それでこそ価値もあるってんだ」

二人がしばしの休息に入る中、その輪の中に入るものがいた。

軋む木戸の音にリクスウ達が目をやると、そこからのそりと顔を出したのはタイコウ。

タイコウは晴天を眩しそうに見上げたあと、足元に転がっているリクスウの姿にぎよっとする。

「タイコウ、大丈夫？」

「おまえの面ほどじゃねえよ」

心配そうに覗き込むタイコウに言って返すリクスウ。

タイコウの顔はさほど悪いものではない。凜々しいとは言えないが、年の割には幼さが見える整った顔立ち。少なくともゼンギョウ村の主婦達が総じて可愛いと評するぐらいは良い。

ただ、弱々しく笑う今のタイコウは目の下にくまを作り、いくら
か見た目が悪くなっていた。

「さすがに徹夜で研ぎばかりだったから、ちよつと疲れたかなあ」

ゼンギヨウの村人達から追加で頼まれた研ぎの依頼を、彼は一晚
中かけて仕上げていたのである。

タイコウも何も普段から無茶な依頼のこなし方をしたりはしない。
ひとえに、間近となった旅の再開の為だ。

「顔洗ってこいよ。少しは目も覚めるだろ」

リクスウの進言にタイコウは素直に頷き、ぼんやりとしたまま小
屋裏の井戸へと歩いていく。

「あれもまた、若さか……」

髭を撫でながら呟くデイコウの横で、リクスウはようやく体の自
由を取り戻した半身を起こした。

「全く、まーったく、あいつもおつとりしてるかと思えば、たまに
無茶をしゃがる。いや、無茶と言えばオッサンもだ。あのもじゃ子
を養子にするとはな」

「虎人は勇猛な一族と伝えられている。フロウも類に洩れぬ。この
ゼンギヨウ村の娘として平穩に過ごしてもらいたいところだが、い
ずれは平穩に耐えられず村を飛び出すだろう。ならば、いっそ儂と
ともに国を巡りながら生きる術を学ばせるべきだと思ったのだ」

デイコウにとって、フロウは養子でもあり弟子でもある。三大道士に才を認められた虎娘の将来を思ったリクスウは、ニヤリと笑みを浮かべた。

フロウが大国に名を馳せた時、ホウ大国に四道士ありと呼ばれるのか。それとも、次世代の三大としてデイコウの座に代わって君臨するのか。

「もじゃ子の成長が楽しみだ」

「それこそ親の醍醐味というものだろう？」

休憩終了とばかりに言葉を交わし、二人は再び立ち上がり構える。

張り詰められていく弓のように、リクスウとデイコウの間で空気が張り詰めていく。

「そう言えば、噂のもじゃ子はまだ寝てんのかい？」

「いや、フロウならオウメイ君と一緒にだ。森で暮らすうちに随分と体が汚れてしまっているのな。一緒に行水をすると言って二人で裏の井戸へ……」

デイコウの言葉が詰まり、張り詰められていた空気が一気に弛緩した。

「しくつた！」

「これはいかん！」

二人が顔を引きつらせるのと同時に、小屋の裏からオウメイの悲鳴が上がった。

第十二章 虎相童子 肆（後書き）

〈次回予告、オウメイ語り〉

旅を続けるアタシ達に立ちふさがる大河。
ホウ大国最大の河川、紫髭しじを前にして、アタシ達は足止めにあう事になりました。

渡河しようにも船はある人物の一言で、出航を禁じられてしまっているのです。

その者の名はメイケイ。

アタシと同じ巫女であり、紫龍を崇める拝紫教の教主。

お偉い巫女の御信託。河を渡るは相成らぬ。

神が怒つちや敵わぬと、大河を前に立ち往生。
信じる者は救われる？

次回『第十三章 神龍教主』に乞うご期待

第十三章 神龍教主 壺

ホウ大国に限らず国は多くの集落が集まって形を成している。それらは規模により、村や町と呼ばれ、さらに人が集まり栄えれば都市となる。そして、その町を繋ぐ道もまた大小様々であり、広く長く整備された街道もあれば、轍の深く残る馬車道、村々を繋ぐ小道、山野へ延びて途切れる細道などが国中に伸びている。

そんな道の一本。春芽吹き季節とばかりに、草が花開く草原に伸びる街道に馬車の一団があった。

穏やかな陽の光は草原にも道にも馬車にも等しく射し、草花を揺らしながら早足に駆ける風はのんびりと進む馬車達を追い越していく。

そして、気まぐれに幌の中へと吹き込んだ一陣の微風が、中にいた者達から掠め取った音を草むらの兎の耳に投げてよこす。

ピクリと動いた兎の耳が聞き取ったのは、二胡と月琴の調べ。

のどかというなら、この調べもまた陽射しや微風と同じくのどかな曲調だ。それを証明するかのように、幌の中にいたある者は微笑みながら曲に聞き入り、ある者はこれが自分の安息の表現だとばかりに大あくびをしている。

その平穩の二胡と月琴を奏でているのは、若い娘と老婆。

手にした二胡をせわしない手つきで演奏する若い娘の顔は、奏でる事を楽しむ笑顔半分、残る半分は失敗しそうになって慌てて冷や

汗苦笑い。

一方、老婆の月琴は娘とは違い、淀み無く落ち着いていた。老婆は微笑みと共に細めた眼で、自分の孫か曾孫ほどの年頃の娘の悪戦苦闘している様を温かく見守っている。

同じ音調でありながら全く対照的な演奏は、そのまま年季、熟練の差と言えるだろう。

少なくとも二胡の奏者、オウメイはそう思う。

(なんや、危なっかしゅうて見ちゃおれん、もとい、聞いちゃいられへんなあ)

オウメイの演奏する様を見守るといふのなら彼女の内にいる樂葉も月琴の老婆と同じだが、悪戯心という点では大きく違う。

(黙っててよ、樂葉。今その危なっかしいトコなんだから……)

オウメイは内心に響く茶化す声に手短に返す。その間も彼女の手は相変わらず大わらわである。

そんな最中、馬車は街道に転がる石に乗り上げ幌が大きく揺れ、その拍子に姿勢を崩したオウメイの手から二胡の弓が零れ落ちた。

「あ、ご、ごめんなさい」

「ホホホ、謝るほどのことじゃない。躓くなんて生きてりゃよくあるもんだ」

慌てて弓を拾おうとするオウメイに限界を見て取った老婆は月琴を手放し、陽気に笑いながら手を打ち鳴らした。その拍手は周囲の者に演奏の終了を悟らせ、耳を傾けていた者も些か残念そうにしながら各々手を叩いて二人の演奏を賞賛する。

「凄いね、オウメイ。とても楽しかったよ」

拍手する者の一人、タイコウはそう言っつて弓を拾い上げるとオウメイに差し出した。

「アハハ、久しぶりだと随分忘れてるわね」

楽しかった。

笑顔でそう言うタイコウに、てんやわんやで必死に演奏する様がさぞや滑稽に見えたのだらうと問い質したくなったオウメイだが、それを口にする事もなく笑って誤魔化する。

共に旅をしてまだ長くないとは言っても、タイコウがそのような皮肉を言えるような男ではないことぐらいは心得ている。目の前の青年は、どこぞの龍の貴人と違って素直な笑顔の持ち主なのである。

（なあ、オウメイ。今ウチに無礼な事を思わへんかったか？）

（気のせいでしょうか、葉鱗后様）

そう、気のせいである。

「いやいや、謙遜することあねえって。堪能させてもらった」

タイコウの背にのしかかるようにしてオウメイに笑って見せたのは、もう一人の旅の共リクスウ。押し潰されてはかなわないとタイコウは、胸をそらして押し返す。

「良く言うよ、リクスウ。大あくびしたかと思ったら、うたた寝までしてたじゃないか」

「何言ってやがんだ、タイコウ。暖かい陽射し、涼しい風、のどかな風景に心地良い音楽となりゃあ、こいつあもう寝てくれと言ってるようなもんだぞ。あれが俺流の音楽の楽しみ方ってもんだ」

などと二人で言い合ううちに轍を乗り上げた馬車が大きく揺れ、姿勢を保てなくなったタイコウとリクスウは二人して悲鳴を上げながら床に転がる。

オウメイはやれやれと溜息をついた。

「すみません。騒がしくて……」

「いやいや、愉快的旅になっていいじゃないか」

謝るオウメイに老婆は笑って応じる。いや、オウメイと倒れている二人を除けば、幌の中にいる者達は総じて楽しげに笑っていた。

「妖魔に襲われて震え上がっちゃってところを助けてくれて、今じゃこうして皆で笑っていられる。それもこれもお嬢ちゃん達のおかげさ。礼を言う事はあっても文句は言うような事は何一つありゃしない。あんた達、ありがとうよ」

恐縮するオウメイに、そして床に転がっているタイコウとリクス

ウに向かつて深々と頭を下げる老婆。タイコウは未だに上に乗っているリクスウを無造作に押しつけ、居住まいを正すと老婆に向き直った。

「そんな、お礼は馬車に乗せてもらった僕達が言つほつです。どうか頭を上げてください、デンシユクさん」

タイコウに名を呼ばれ、老婆デンシユクは見事なまでの白髪頭を上げて苦い笑みを浮かべる。

「そのデンシユクさんつてのはよしとくれ。一座の連中にやいつもデン婆つて呼ばれてんだ。今更ちゃんと名前で呼ばれると、どうにも他人のようがしてねえ」

デン婆ことデンシユクが言った一座とは、彼女が所属する旅芸人の集まり。タイコウ達三人を除けば、馬車に乗る皆がそれになる。

大道芸は行商人の客引きの一つとして古くから用いられていたが、やがて物を売るよりも芸をしてみせる事が主に代わる者が現れた。そんな者達が集まったのが今のデンシユク達のような芸人一座で、行商人と同様に各地へと興行に回るようになった。

そんな旅の一座の中でデンシユクは一番の古株であり、一座の責任者でもある。

「もつとも、デン婆が浸透しちまったおかげで、座長と呼んでくれる奴もいないんだけどね」

そう言いながらカラカラと笑うデンシユク。座長と呼ばれるよりも慣れ親しんだ愛称で呼ばれる方が気が楽と見えて、一座の者達を

責める気は全く無いらしい。

このデンシユク一座にタイコウ達が出会ったのは幸運な偶然だった。

道中馬車を止めて休息を取っていた一座の前に妖魔達が現れ、またま道を同じくしていたタイコウ達が通りかかってそれを一掃してのけたのだ。

命の恩人で同じ町へと向かう者として、タイコウ達三人は快く馬車への同乗を許された。

「それにしてもお嬢ちゃん……オウメイだったね。妖魔を相手にするかと思えば、二胡を引いて見せたり、なかなか芸達者だねえ」

空いた手で二胡を引く素振りを見せるデンシユク。

妖魔襲来の後、一座の者達の表情は揃って暗いものだった。危うく妖魔の手にかかり命を落とすところだったのだから無理も無い。

沈黙の行軍を始める一座の馬車の中で、オウメイは意気消沈する彼等を励ますべく一座の持ち物である二胡を借りた。

オウメイは幼い頃から巫女として舞踊を学ぶ傍ら、祭事に用いる楽器の扱いもかじっていた。もっとも、楽器の伴奏の中で舞う側のオウメイの腕前はあくまで嗜む程度で、決して得意というわけではない。

オウメイの心意を見抜いたのか、彼女のつたない演奏に座長のデンシユクが乗り、オウメイも途中で止めるわけにはいかなかった。

「その道の達人を前に、とんだお耳汚しを」

「そんなに卑下するほど酷くはなかったさ。何より、オウメイは音楽の使いどころを心得てる。それが一番つてえもんだ」

そう言つてデンシユクは月琴を爪弾きだす。

それは、先程オウメイと共に奏でたよりもゆっくりとした拍子。老婆の皴だらけの指が奏でる拍子は、穏やかな中にどこか哀愁を感じさせた。

不意に演奏を再開したデンシユク。その選曲に何事が問いかけようとしたタイコウだったが、それより先に当のデンシユクが口を開く。

「それにしても、私も妖魔と出くわしたのはこれで四度目だ。それをこつして生き延びていられるつてんだから、なかなかどうして悪運だねえ」

ぼそりと零れた呟きに床に寝そべっていたリクスウが隻眼を見開き顔を上げる。

「四度つて……婆さん、そりゃ難儀だな」

リクスウ達のように望んで妖魔の元へ向かつていくならいざ知らず、まっとうに生きていれば妖魔に出会う事は一生に一度あるかないかと言われている。戦う術を持たないデンシユクが四度の妖魔との遭遇も驚きなら、そこから生き延びた事も驚き。

「まあ、あちこちと旅して回ってりゃあ、そんなこともあるだろうさ。この一座の者の大半は家族を妖魔に襲われて失ってんだよ」

月琴の調べの中、ポツリポツリと語られるデンシユクの過去。

一座の座長の娘として生まれたデンシユクは十の頃に初めて妖魔と遭遇し、そこで両親を失う。親代わりとなって自分を育ててくれた次の座長も、二十の頃に同じく妖魔に。結婚して子を授かったものの、その夫と子供も同様。

だが、そんな不運を体験しながら彼女はタイコウ達に向かって笑ってみせた。

「どうにもやりきれない辛い別れだよ。どうして私だけと自分を呪ったこともあったさ。でもね。生きながらえてみればこうして良い出会いにも巡り合うもんさね」

皺だらけの笑顔の下で、途絶えることなく爪弾かれる月琴の音は鎮魂の調べか。

「あんた達、コウランに行くんだらう？」

デンシユクの問いに、タイコウ達三人は誰からともなく頷いた。

妖かしを退治せし者、退治する品を広く募るといふ王からの報せが大国中に伝えられる御時世。妖魔に抗う術を持つ者が旅をしているとなれば、容易に察しは付くだろう。

「因果なもんだよ。親や先代の座長、旦那と息子を亡くした時は、妖魔騒ぎなんて他所じゃ全く聞かなかつたんだ。おふれが出回った

当時は首都のコウランだけだった。それが今じゃどうだい。ホウ大
国のどこに行っても妖魔の噂を耳にしちまう。今もどこかで私達と
同じ思いをする者がいる。いや、思う間もなく逝っちまう者もいる
んだらうね」

話を進めるにつれ神妙な顔立ちになるデンシユクに、タイコウ達
も自然と表情が硬くなる。

「私にや剣を振る事も弓を引く事もできやしない。こうして弦を弾
くだけが精一杯。あんた達に重荷を背負わせちまうが、どうかこの
国を救っておくれよ」

デンシユクはそう締めくくり月琴を爪弾く手を止めると、深々と
頭を下げた。

勝気な笑みを浮かべて任せると言っリクスウ。

静かに、しかししっかりと頷いて返すオウメイ。

その二人の傍らで、タイコウは複雑な顔で曖昧に頷いた。

タイコウは自身が戦う事を望まれる度に、戦いに身を投じる度に、
違和感を抱いていた。

鍛冶屋見習いの青年タイコウの本来の旅立ちの理由は、師匠オウ
シユウがうった刀雪割りを献上するため。それが、鉄冠子から錫杖
魯智を譲り受け、リクスウやオウメイと旅を続けるうちに、旅の目
的がぶれてきていた。

気が弱く小さいタイコウが、妖魔と対峙して死の影に怯えなかつ

た事など一度たりとてありはしない。何度妖魔と戦おうとも、決して慣れるものではない。雪割りをリクスウに託して、故郷のレイホウに帰ってしまったおうかと思つた事など一度や二度ではない。

魯智を手放してしまえば、タイコウもまたデンシユク達と同じ立場になる者だ。

(鉄冠子は、なぜ僕に魯智を譲つたのだろうか……)

旅を続ける間、幾度となく脳裏をよぎつた疑問が再びタイコウの中に湧いて出る。

だが、手にした錫杖はこの問いに答える事はない。ただただ、タイコウの手に揺られて金輪がしゃらりと音を立てるのみ。

魯智を手に物思いにふけていたタイコウは、突然かき鳴らされた月琴の音にびくりと体を震わせた。

「余計な事を言つてごめんよ、あんた達。歳のせいか、つい説教じみた事を言つて白けさせちまつたね」

謝りながらもデンシユクの手は止まらない。湿っていた幌の中の空気を吹き飛ばすような小気味良い陽気な調子で、月琴の音が踊る。

「町まではあと少し。オウメイ、もう一曲一緒にどうだい？」

デンシユクの問いかける間もなく、オウメイは再び二胡を構えていた。

彼女を無謀と言つなかれ。デンシユクの引き始めた曲は、オウメ

イも良く知る曲たればこそ。神官の家系であるオウメイには馴染み深い、奉納の舞に使われる一曲。

「オウメイは紫龍様の巫女さんだったね。なら、アングンの名も知っているだろう？」

「ええ、もちろん。実際に行ってみるのは初めてですけど」

慣れ親しんだ曲の演奏なだけあって、オウメイもデンシユクの問題に受け答える程度には余裕があった。

大陸最大の河川、紫髭しげの川辺にある交易都市アングン。大河を用いた交易と漁業で栄える都市として知られているが、オウメイのような者達には別の要素で良く知られていた。

紫龍を祀る者達、拝紫教と呼ばれる信仰者達にとって、否、旅する者達ならば一見の価値ありと呼ばれる名所。拝紫教屈指と称される巨大で豪華な社を保有する、交易都市アングン。

タイコウは再び眠りにつこうとするリクスウの隣に座りなおすと、まだ見えぬアングンの方角へと目を向けた。デンシユクとオウメイの演奏に一座の者達が各々の楽器を手に加わっていく中、手拍子で参加しながら。

(どうか、アングンでは何事も起きませんように)

果たして、心からそう願うタイコウの祈りは届いたのか。届いたとして、その先にいたのは龍神紫龍なのか、はたまた……。

一座の先頭に行く馬車からアングン到着を知らせる声が上がった

のは、余裕ぶっていたオウメイが再び悲鳴を上げなくなった頃だっ
た。

第十三章 神龍教主 貳

タイコウは馬車の幌から顔を出すと、間近に迫るアンガンを眺めて目を丸くした。

「はあ、さすがに国内屈指の町だけあらあ。人がウジャウジャいやる」

タイコウが驚嘆の声を上げるより早く。彼の頭を肘掛よろしくのしかかったリクスウが声を上げ、タイコウが悲鳴を上げる。リクスウもまたその隻眼でアンガンの様子を捉えていた。

幌から出した頭を縦に並べた青年二人。その視線の先にある交易都市アンガンは、山村レイホウで長らく暮らしていたタイコウには榮えて見えた。

古代史大国記の遙か昔よりアンガンは流通の要とされていた為、その繁栄の時は長い。

ただ、流れていったものは物品だけとは限らない。ホウ大国統一以前の戦乱の最中ともなれば交易の要所から軍需物資の輸送拠点という立場に変わり、それゆえに周辺国による奪い合いも繰り返されてきた。

この町を囲う分厚く高い外壁は、古より繰り返された戦乱の名残。また、外壁の外へと溢れるように広がる市街地は、ホウ王を旗印とした軍師コウタツ達による大国統一後の平穏と発展の現われ。

「あれまあ、こいつは祭りでもあるのかねえ」

タイコウ達を乗せる馬車群、旅芸人一座の長デンシユクもまた、幌からひよっこりと顔を出して驚きの声を上げた。

アングンを初めて訪れるタイコウ達と違って、老婆デンシユクは幾度かこの町に立ち寄った事がある。そんな彼女が驚いたのは外壁の外へ広がる市街地のさらに外へと展開された行人達の露店や天蓋によって、普段よりも町が一回り大きくなっていたからだ。

（お祭りなんてこの時期にあつたかしら？）

デンシユクの言葉にオウメイは一人首を傾げた。

オウメイの知る限り、アングンで祭事と言えば拝紫教の崇拜対象である紫龍への奉納際と古よりの戦乱で失われた命に対する鎮魂祭の二つ。そして、アングンに巨大な社が作られたきつかけとも言えるこの二大祭は、双方共に行われるには時期が合わない。もっとも、拝紫教とは全く無関係の行事となれば、オウメイが知らないのも当然なのだが……。

心中で考えを巡らせていたオウメイだったが、不意にデンシユクに声をかけられて思案を中断させる。

「ところで、三人は泊まる宿に当てはあるのかい？」

デンシユクの問いに幌から頭を出していた男二人が首を引っ込め、オウメイと顔を見合わせる。

タイコウ、リクスウ、オウメイ、三人が三人ともアングンは初めてであり、市内に知人がいるわけでもなければ誰かの紹介があるわ

けでもない。故に、当てなどありはしない。

「全く、まーったく無いな。でも、こんだけデケエ町なんだから泊まる宿の一つや二つあるだろ」

「これだけ人がいるのだし、部屋が空いているか心配だなあ」

リクスウの樂觀視とタイコウの心配性。デンシユクへの答えは、二人の性格の違いをくつきり表す形になった。

「良かったら私等のトコにおいで。ちょいと狭いがアンタ達なら歓迎するよ」

そんなデンシユクの提案に最初に賛同したのは、三人のうちの誰でもなくオウメイの内にある龍の姫樂葉。

（大賛成や！ 旅芸人の一座と寝食をともしるなんて経験はそうそうあらへんで。面白そうやないか。なあ、ええやる、オウメイ？）

やたらと乗り気な龍の盟友の反応に、オウメイは彼女の真意を見抜いて軽く溜息をついた。陽気が好物と公言する樂葉の事、あわよくば芸人達の稽古見物なりを堪能しようという腹だろう。

「ですが、デンお婆さん達にそこまでお世話になるわけには……」

「命を助けてくれて楽しい演奏をしてくれた者への礼が、馬車に乗せただけで済ませられるかい」

タイコウの遠慮はデンシユクに軽く笑い飛ばされた。こうなれば元々宿が取れない事を懸念していたタイコウに断わる理由は無い。

樂葉に言われたからというわけではないが、オウメイも旅芸人の一座との生活に異論は無い。野宿上等、夜露が凌げれば問題無しのリクスウは言わずもがな。

「決まったようだね」

三人の表情を賛成と見たデンシユクは皺を深くして微笑み、御者に馬車を止めるように指示する。

一座の馬車群が止まったのは都市アングンの外周。町から溢れ出た行商人達が店を並べているすぐ近く。

デンシユクは馬車を降りると、別の馬車から降りてきた一座の者と二言三言言葉を交わした。そして、何かと様子を見るタイコウ達に向き直る。

「ひとまず今日はここいらで一泊。運が良けりゃあ、明日には町の広場さね」

行商人にしても旅芸人にしても、町で活動をするにはその町の役所に話をつける必要がある。役所では業種や営業期間、取り扱う商品等を吟味され、町での営業の可否を判断される。役所から認可を受ければ、営業する場所の指定を受けて初めて営業開始となる。

大抵の行商人は大通りの一角が宛がわれ、旅芸人ならば広場を活動の場として選ばれるのだが、アングンのような都市となると営業の申請が重なって用地確保が困難になる事も稀に発生する。そうなる諦めて他の町に移るか、目の前の行商人達のように町外れへと追いやられるか。デンシユクが、運が良ければと言ったのはここにあった。

タイコウ達がデンシユクを追うようにして馬車を降りると、共を連れて歩き出していたデンシユクは思い出したように振り返る。

「まあ、役所の手続きやらは私等の仕事だ。アンタ達に付き合せるもんでもないさね。せつかくアンガンに来たんだから、ちよいと見物でもしてきちゃあどうだい？」

行ってみたい所があるのだろうか？

三人に、と言うよりはオウメイに向けられた老婆の目はそう語っていた。

「ええ、せつかくですし……」

オウメイはそう言いながら、タイコウとリクスウに同意を求めるように目を向ける。

「ここでジツとしてんのも性に合わねえし、そうさせてもらおうじやねえの」

「だね。紫髭を渡る船便の事も調べておきたいし」

(うわー、なんや楽しみやわあ。面白いもんがあるかいなあ)

樂葉を含めて異論無し。

タイコウ達は野営の仕度を始める一座の者達に断わってアンガンの町並みへと踏み入った。

民族色の強い工芸品、艶やかな装飾品、見慣れない飲食物、露台の上に所狭しと商品を並べた行商人達が競うように客引きの声を上げる。

そんな中、タイコウは物珍しそうに視線を巡らせる。そうして見る方へ意識が向けば、自然と足元の動きも鈍るもので……。

「おい、タイコウ。ぼさつとしてると置いてくぞ」

リクスウの声にびくりと身を震わせたタイコウ。そこでようやく自分の歩みが二人より鈍っていた事に気付き、足早に近寄った。

「うあ、ごめん」

「全く、まーったく、きよろきよると……田舎者丸出しだな」

「うう、どうせ田舎者だよ」

からかうようにそう言って笑うリクスウに、タイコウは気恥ずかしそうに返す。そんな仲間二人のやり取りを聞いていたオウメイは、意識を自分の内へと向けた。

(……だそうよ、樂葉)

内心そう呟いた意識の先にいるのは、先程から露店の前を通るたびに「なあ、あれは何や？」だの「オウメイ、これ見てみい！」だの「そつち行ってみいへんか？」などと騒々しかった盟友の樂葉。

(田舎者の坊と一緒にせんといてえな。ウチは見聞を広め深めようとしとるだけやないか)

顔が見えるなら不満を露にしているだろう口調で反論する樂葉に、オウメイは溜息をつく。オウメイの目からすれば、樂葉のはしゃぎようはタイコウの上を行っていた。

何百年もの間メンサイ村近くの池の底に留まり、楽しみと言えば村の者が行う祭りぐらいのものだった彼女にとっては、見聞きするもののほとんどが興味の対象となるのも無理も無い話。

はしゃぐ樂葉に感化されたわけではないが、平穏な村で暮らしてきたオウメイにもアングンの賑やかさは新鮮なもの。決して興味が無いわけではないが……。

(ごめん、樂葉。お店の見物は後でちゃんとするから)

そう樂葉に言つと、オウメイは振り返ってタイコウとリクスウを見る。

「ねえ、二人とも。アタシ行つてみたい所があるのだけど……」

彼女の提案に目的地を察した青年二人の反応は対照的だった。

「ああ、デンお婆さんが言っていたアングンの社だね。僕もお供するよ」

笑って快諾するタイコウに対して、リクスウはあからさまに苦い顔をしてみせる。

「俺は遠慮してえなあ。礼拝だの何だのって、そういう敵かな雰囲気は小せえ頃からどうにも苦手だな。トウコウが憑いてから尚更な

んだ」

トウコウが憑いて苦手意識が倍加するあたりは血の繋がりが故か。

リクスウの断りにタイコウとオウメイは少しがっかりとした表情で顔を見合わせる。リクスウは交渉の余地無しといったふうに、彼等を追い払うようにヒラヒラと手を振った。

「俺はいいから、おまえらだけで行ってこいって。その間に港で船便の事は調べておいてやつから」

(とかなんとか言つて、オウメイとタイコウを二人つきりにしたろうって魂胆か。かー、あの坊も心憎い事を思いつきよんなあ)

(普通に参拝が面倒で嫌って顔してたわよ。今のは……)

一人歩き出すリクスウの背中に向けられた樂葉の邪推。オウメイは軽く息をつき、タイコウを促すように歩き出す。

交易都市アンガン名物の拝紫教の社も紫髭を渡る船便も、まずは都市を覆う外壁の中に入ってからの話。そこまではリクスウもタイコウ達も道は同じだ。三人は揃って町の中心へと繋がる外壁に向かって進む。

行商人達の露店が並ぶ町の大外を抜け、市街地へ入ると喧騒は幾分落ち着きを見せて人通りも減る。もつとも、それでさえタイコウ達の暮らした村から比べれば遙かに多く、寺子屋の帰りらしき子供達が人混みを縫うようにしながら元気良く路地を駆け抜けていく。

(いつでもどこでも童は元気なもんやなあ)

オウメイの眼を通して子供達の姿を見る樂葉の声がオウメイの心中に響き、オウメイも内心頷いて返す。

「ゴラアツ、ガキ共！ ちゃんと前見て走れ！ 今度ぶつかったら喰っちまうぞ！」

走る子供がリクスウにぶつかったらしい。リクスウの声に、子供たちがきゃっきゃと笑いながら逃げていく。

(…………あの坊も元気なもんやなあ)

これもオウメイの耳を通して聞いたらしい樂葉の声。苦笑いしつつ頷くオウメイに、樂葉は「それにひきかえ…………」と言葉を続けた。

樂葉の意識に促されるように視線を向けたオウメイ。隣を歩いていたタイコウの顔色が優れない。

「ちよっ、どうしたの、タイコウ？」

「う…………人の多さに…………酔った…………」

破邪の錫杖魯智に体を預けるようにして歩くタイコウ。生気の抜けたような青白い顔で弱々しく返答するのがやっとならしい。

(なんや、時々この坊がとことん頼りなあ見えるなあ…………)

慌てて肩を貸すオウメイの心中で樂葉が溜息混じりに呟いた。

第十三章 神龍教主 参

アングンの外壁をくぐり、船着場へと向かうリクスウと途中で別れたタイコウとオウメイ。彼等が目的地に辿り着いたのは、ようやくタイコウが人混みに慣れ始めた頃だった。

「うわぁ……」

辿り着いた拝紫教アングンの宮の前に、そんな言葉が洩れたのはタイコウの口からか、はたまたオウメイか。その言葉が豪華な造りの社に驚嘆してか、溢れるほどの人混みに唾然としてか。二人のうちどちらが、何に対して、そのどれもが該当している。

(うわぁ……)

樂葉も該当している。

多くの信者を見下ろす朱塗りの門をくぐれば境内には大小の社が建ち、重厚にして緻密な細工が施された石灯籠がそれぞれの社を結ぶ道を作る。境内に隙間無く敷かれた石畳が灯籠の道に沿って磨り減っているのは、絶え間無い参拝者の歩みによるもの。

どこを取っても豪華と呼びたくなる。その中でも一際目を引くのが最奥の紫龍の社だ。門から真っ直ぐに伸びた灯籠道の先にあるその社は、敷地の中で最大にして最も絢爛な造りをしている。石段の上建てられている事もあり、門からでも良く見えるのはもちろん境内のどこからでも見えるのだらう。それを示すように、社に向かって両手を組み頭を垂れる者が敷地中で見られる。

多くの参拝者がそうしているように、オウメイもまた門に立って紫龍の社を目の当たりにした瞬間、自然と一礼をしていた。

彼女の隣で同じく頭を下げるタイコウ……は、ただ単に参拝者の数に人混み酔いがぶり返して俯いただけらしい。豪華な社と人の多さにオウメイも目が眩みそうになっているのだ。タイコウがそうなるのも必然というもの。

「付き合わせてごめんね、タイコウ。もう帰ろうか？」

「いや……まだ、大丈夫……だから……」

力無く笑うタイコウを心配するオウメイ。その内心に樂葉の溜息が響いた。

（まあ無理しくさってからに。ホンマ健気な坊やなあ）

からかい半分の言葉を叱責しようとしたオウメイだったが、当の樂葉に促されるようにして再び社へと目を向けた。

（それにしても、母様を拝みに来たんか、この豪勢な御社を拝みに来たんか……）

（あら、葉鱗后様。それは紫龍様を僻んでおられるのかしら？）

いつも茶化してくる樂葉へのお返しとばかりに内心で呟くオウメイ。

片や都市の中央に建てられた豪華な社。片や田舎村の外れの小さな祠。樂葉の言葉をオウメイがそう捉えたのも無理は無い。

ただ、樂葉はそれをきっぱりと否定した。

(紫龍母様は紛れも無く神格を持った龍。ウチは確かに龍神の母様の身から生まれた子やけど、ただの龍にすぎへん。比べるようなもんやないし、母様を憐むなんてこれっぽっちもあらへんわ。何より、もしウチがこんなギラギラした所に祀られて毎日毎日仰山の人が拝みに来る思ったら、三日と経たずに龍神辞めたあなるで)

彼女の言葉はおそらく本心そのものだろう。

樂葉もまたタイコウやオウメイと同じく田舎暮らしが長い為なのか、いくら陽気が好きだと言っても喧騒が続いては胸焼けしてしまっらしい。

(うーん、こないな落ち着かん所で辛抱していられるとは、母様は偉大やねえ……)

(樂葉、感心するところちょっとずれてると思っわよ)

そんなオウメイと樂葉の内心のやりとりの隣では、タイコウが弱々しく息を吐く。

(魯智のチカラが裏目に出ているなあ)

タイコウはさすがのように掴んだ錫杖をチラリと見る。

人の多さに酔っタイコウを支えている錫杖魯智だが、彼を悪酔いさせている要因としてこの魯智が一役買っていた。

鉄冠子仙人に託された魯智の持つ能力は、タイコウと意識を共有する事で起きる魯智自身の記憶情報の提供。砕破や活といった自身の内にある気力を打ち出す術の行使。それらもさることながら争いに疎いタイコウに欠かせない能力が、靈気を捉える靈感の覚醒及び五感の鋭敏化。

タイコウは魯智によって身体能力を底上げされているからこそ、妖魔との戦闘において世の武道家と同程度の運動が可能になっている。

ただ、今の状況にあつてはそれが逆効果だった。

敏感な感覚が周囲の人混みを細かく察知してしまうため、タイコウの脳が感覚情報を処理しきれないのだ。

タイコウは最も負担になっている視覚情報を遮断すべく目を塞ぐと、処理しきれなかった情報を吐き出すように二度三度と深呼吸を繰り返す。

「タイコウ、本当に大丈夫？」

隣からオウメイが発する心配の声と視線。タイコウは僅かに落ちて着いた感覚でそれを捉え、うつすらと目を開けて笑い返す。

「うん、少し落ち着いたよ。でも、気を抜くとどうにかなっちゃいそうだよ。早いところ紫龍の社へ」

顔色を見る限りタイコウが決して大丈夫ではない事はオウメイにもわかる。ただ、当人はここで引き返すつもりは毛頭無いらしい。

社への道行きを急かすタイコウが心配ではあったが、目の前の参拝者達を前に圧倒されているオウメイとしては連れ合いがいるのは心強い。

（さて、坊が動けんようになってまう前に母様のお姿を拝見してこか）

「うん、行こう」

タイコウと樂葉に頷いて返したのを合図に、オウメイとタイコウはアンガン宮の境内へと踏み入る。

「やっぱりホウ大国屈指の拝紫教の社だけあって、熱心な信者が一杯来てるんだね」

人混みを掻き分けるようにして進む事しばらく、タイコウは周囲を見ながら呟いた。

あまり凝視して悪酔いが悪化しないよう伏し目がちにチラチラと視線を飛ばすだけでも、その視線の当たった先のほとんどは紫龍の社に向かって目を伏せ祈りの言葉を囁いている。

そして、タイコウは社へと視線を移し、息を飲んだ。

「……凄い」

人混み酔いの事も忘れて啞然とするタイコウの口から、小さく言葉が洩れる。

アンガンの社の最奥にある紫龍の社。その社の奥で鎮座し、信者

達の祈りを一身に受けている木像の龍。生憎とタイコウはその龍の彫り手が誰なのかは知らない。ただ、その掘り出された紫龍の像が見事である事は、十二分に感じ取る事ができる。

社の奥で壁一杯に身をくねらせる紫龍の姿は、躍動感があり力強い。だが、穏やかな風貌がそれを恐れさせない。緻密且つ繊細に一片ずつ彫られた全身の鱗は、社の中そこかしこに置かれた蝋燭の灯が揺れるたびに影が揺らぎ、本当に生きているのではないかと錯覚さえしてしまう。天井から吊るされた幾重もの天幕をまとう姿は、さながら天空で白雲を引き連れて飛翔しているかの如く。

総じて、紫龍の社全体が龍神と呼ばれるに相応しい神々しい雰囲気を生み出していた。

鍛冶と彫刻。職種が異なるとは言え、一職人としてタイコウは龍の彫り手に心から敬服した。同時に、いずれは自分もこれほど人を感動させる物を生み出したいという羨望を抱いた。

「うん、凄く綺麗……」

社の直前まで歩み寄ったオウメイは、タイコウの言葉に頷き呟く。

オウメイもまたタイコウと同様、眼前に龍の偶像にあるはずのない生命力を感じ取っている。ただ、それは彫り手の技術だけに限ったものではなく、長い歲月ここに龍神として祀られ、多くの崇拜によって蓄えてきた信仰の力が宿ってこそここまで強く美しくなったのではないかとも思えた。

(ホンマ、国内屈指の評は伊達やないねえ……)

オウメイの意識下で響いた樂葉の声も、二人の感想をませつかえず事無く素直に感心している。

三者三様、アンガンの社が噂に違わぬ地だと感じる中、オウメイの内心で樂葉が「ただ……」と言葉を続ける。

（なんや、周りで拝んどるもんの顔色が優れんねえ）

樂葉の言葉に、オウメイも周囲の参拝者の表情を窺い眉根を寄せた。

タイコウ達のように眼前の紫龍の姿に感動し祈りを捧げる者も少なくはないのだが、その多くは熱心に祈るというには些か過ぎた顔つきをしている。切実、必死、切羽詰っているという印象だ。

（ホウ大国の現状を憂いている……という事かしら？）

（それだけ、とも思えへんのやけどねえ。何かあつたんやるか？）

小首を傾げるオウメイの推察に、樂葉が鈍く唸り声を返した。

「船が出ないだあ？」

リクスウがそう声を上げたのは、彼が紫髭の船便の出航時間を調べべくやってきた船着場……ではなく、その道中にあつた酒場。

リクスウの言葉を借りれば「出航時間を調べるだけの為に、わざ

わざと船着場まで行く必要ねえだろ。ここなら他の情報も集められて効率的つてもんだ。んで、酒場という特殊な場所から、情報を得ようとすんなら酒を頼むというのがここ特有の情報料の支払い方つてもんだ。だから、決して俺が酒を飲みたかつたとか、そういう個人的な願望は関係ねえ。全く、まーったく関係ねえ」となる。

「紫髭の船便が出ないって、いつまでだ？」

「さあてなあ。紫龍様の御機嫌が良くなるまで無理だろうさ」

杯を傾けながら尋ねるリクスウに、酒場の店主は肩をすくめてみせる。店主の答えに、リクスウはさらに首と杯とを傾ける。

逃げた賊の捕縛等の名目で一時的に船の出入りが禁じられる事は無い話ではない。とは言っても、ここアンガンが交易都市である以上は紫髭の船便は取引の要である。賊が捕まればもちろん賊が捕まっていなくても一定時期を過ぎれば規制緩和されて船便は再開するのが常だ。

その船便が今回に限っては再開する気配を見せない。その理由が……。

「紫龍の機嫌ってどういうことだ？」

「紫髭が荒れているのさ。いや、今じゃ見た目は大人しいから、荒れていた、というべきか。まあ、年中を通せばたまにはある話なんだがね」

空の徳利を振るリクスウの前に新たな徳利を出しながら言う店主。リクスウは、今度は徳利と首とを傾ける。

「もう大人しくなってるってんなら、問題無いじゃねえのか？」

「それがそうでもないのさ。メイケイ様の御信託じゃあ、いつまた荒れるかわからない危険な状態だそうだ」

「メイケイさま？」

聞き覚えの無い名前にリクスウが眉根を寄せると、店主は何も知らないのか？ といった風に見開いて少し驚いた素振りをみせる。

「いくら旦那でも、拝紫教は知ってるよな？」

「親父、今俺の事バカにしてんだろ？」

店主の言葉に隻眼を僅かに吊り上げるリクスウ。

「いや、すまない。この町にいれば嫌でも拝紫教につながる話題は日常茶飯事なんだな。つい、そのつもりで話をしちゃった」

慌てて謝る店主にリクスウはふむと唸る。

「……つてえと、メイケイって奴は拝紫教に関係す、モゴゴッ！」

呟くりクスウの口が勢い良く店主に塞がれ、リクスウは突然の事に目を白黒させた。

「旦那、メイケイ様を呼び捨てにしちゃならねえよ。つい先月拝紫教の教主になられた大そう徳の高い巫女様なんだ。気安くしちゃあ

「バチが当たつちまう」

そう説教する店主の真剣な顔からすれば、恐らくは彼もまた拝紫教の熱心な信者なのだろう。リクスウは驚きながらも店主に向かって素直に頷いてみせる。

「このアンガンも拝紫教の信仰が厚い町だからね。メイケイ様がこの町の社に御挨拶に来てくださったのさ」

ありがたい事だと恍惚の表情を見せる店主。

「それで、そのメイケイ……様の御信託で船を出さないってのかい？」

「そうなんだ。調度メイケイ様が来た頃に紫髭が荒れていてね。町の信者達の嘆願を受けてメイケイ様が紫髭を鎮めるようお祈りしてください。そうしたら、どうだい。船をひっくり返すほどの大波が揺れていた水辺があれよあれよと言う間に収まっちゃったんだ」

当時の事がよほど驚きだったのか、或いは信心の成せる業か、教主メイケイの活躍を熱く語る店主。対するリクスウは宗教事に興味が薄く、話半分に聞きながら再び杯を傾ける。

「メイケイ様が起こされた奇跡に、皆が喝采を上げて船出の準備をしたもんだ。でもね、その当のメイケイ様がこれをお止めになられたんだよ」

「さつき、いつまた荒れるかわからないって言ってたな」

「そう、それだよ。なんでも、今の紫龍様は酷く心が荒んでいらっ

しやる。しかもメイケイ様はその理由を尋ねようと御祈祷しても答えて下さらないらしいんだ。町の者の中には、メイケイ様の言葉を信じずに船を出した不貞の輩もいたんだが、そいつらはとうとう帰ってこなかったよ」

「そいつは全く、まったーく、紫龍様は随分とへそを曲げておいでだな」

「全くだ。メイケイ様はなんとか紫龍様の御機嫌を良くしようと今も御祈祷を続けて下さっているんだが、これがいつ終わるやら」

困ったものだと言いつつ店主。

「それで紫髭を渡ろうとしていた行商やら旅人やらは、この町で立ち往生してわけか。しかしあれだな。親父の酒場は立ち往生の客で繁盛するんじゃないか？」

不謹慎と言えば不謹慎なりクスウの言葉に、店主は苦笑みを浮かべる。

「そうでもないさ。確かに立ち往生の間を繋ごうとウチに来てくれる旅人さんもそりゃあいるが……言い換えれば、迷惑な客もこの町に居座りっぱなしってことだからなあ」

溜息混じりの店主の返答を証明するように客同士の喧嘩が始まった。たらしく、リクスウの背後で食器や酒瓶が割れる音と怒声とが響いた。

酒場に轟々と響く男達の怒鳴り声。その内容を聞く限り、腕に覚えがある旅人同士の腕自慢やら武勇伝やらがいつしか罵り合いに変

わつたらしい。

杯を傾けながら何食わぬ顔で話を聞いていたリクスウは、やれやれと首を振った。

(全く、まーったく、どんぐりが小せえ背を並べてグダグダと……)

そんな彼の内心の声が聞こえてしまったのか。喧嘩中の客が食器を投げ合い、そのうちの皿が一枚、流れ矢となって彼の後頭部めがけて飛来する。

「だ、旦那、伏せて！」

「まあ、旅が遅々として進まねえってんじゃ、荒れたくもなるだろうがよ……」

間一髪。

慌ててリクスウを庇おうとする酒場の店主が割って入る間も無く、リクスウは飛んできた皿を見もせず容易く掴み取る。

「なんとまあ、これはお見事」

驚嘆する店主にリクスウは不敵に笑い返す。そして、リクスウは皿と空の杯を店主へ手渡して席を立った。

「親父、ちよいと奴等を止めてくる。酒のお代わり出しといってくれ」

あわよくば、店内での騒ぎを鎮めた礼として酒代が浮く、などと算盤を弾きながら。

（さて、旅が進まねえってのは俺達も同じか……参ったね。タイコウ達に事の次第を話してこの町で船便再開を待つか、はたまた別の道で進むか……）

リクスウは旅の行程を思案しつつ、喧嘩を続ける男達へと歩み寄る。

喧嘩を続行中の男達はすでに伸びている者も入れて総勢八名。単純に四対四だったと推測もしてみるが、酔った勢いなのか旅仲間同士士の私怨なのか誰彼構わず殴り合う混戦大乱闘の様相では判別もつかない。

（ま、一番元気に動いている奴を抑えりや、残りの奴等もちつとはこっちの話を聞き易かるうさ）

リクスウはそう結論付けると酔っ払いの一人に狙いを定め、その肩を鷲掴みにした。

「他の客の迷惑になるんでな。縁も恨みもねえが、まずはアンタから大人しく……」

組み伏せるなり気絶させるなりしようと、強引に男の肩を手前へ引き寄せたリクスウ。

しかし、リクスウは男の顔を見るなり、思わず遠慮無く殴り飛ばした。

「テメエら！ カリュウウの町じゃあ、よくも逃げやがったなド畜生！」

そのリクスウの怒声に反応し彼へと振り向いた男は三人。今殴つた者も含めて、どれもリクスウの見覚えがある顔。

タイコウと初めて出会ったカリユウの町の飯店。その出会いの席で、タイコウに因縁をつけ、同時に彼を庇ったリクスウと乱闘騒ぎを起こした男達である。ついでに言うなら、リクスウ達が町の警備隊に捕まっている間に被害者面をしてすっかり逃げた男達でもある。縁も恨みもある男達である。

「げえっ！ テメエはあの時の！」

男達もリクスウの事を覚えていたらしく、顔を引きつらせて急速に逃げ腰になっていく。男達を相手にしていた別の旅の一団も、彼等の豹変ぶりに驚き喧嘩の手を止めている。

喧嘩の仲裁というならば、この時点でリクスウは事を成し終えたと言っている。ただ、問題はこれ以降リクスウ自身が喧嘩の中心人物へと移行してしまう事にある。

「テメエら、今度こそ喧嘩騒ぎ起こした本人としてお縄についてもらうぞ！」

そう叫びながらリクスウが最初に選んだ標的は、一番に逃げようとした男。

リクスウは床を蹴りつけるように跳躍し一気に間を詰めると、男の襟首を掴んで引き戻す。そして、男が悲壮な表情を浮かべて振り返るのに合わせて、渾身の右拳を……。

「……どこのどいつか知らねえが、邪魔しねえでくれるかい？」

隻眼は憎き男の顔を捉えたまま、リクスウは振り上げた拳を掴んでいる者に言い捨てた。

「そもいかないだろう」

乱闘騒ぎに熱くなる酒場の中にあつて涼しげな落ち着いた口調で返す青年の声。リクスウは、背中越しに響く声の主に戦慄を覚えた。

(こいつ……。何者か知らんが、全然気配が感じられねえ……)

カリユウの町での乱闘騒ぎで虎霊トウコウに対する誤解からタイコウと対決する事になった折、不覚にも警備隊の介入を許して取り押えられる事になった。怒りに任せて警戒を怠り、気付くのが遅れたのが一番の要因。

それもあつて今回は乱闘騒ぎが発生してからというもの、酒場内の気配は探っていたはずだった。それにも関わらず、今回も青年の接近を許し、あまつさえ拳を捕られるまで全く気付く事も無かった。リクスウはもちろん、彼に取り憑く虎霊トウコウでさえだ。

「見た限り決着は付いている。これ以上は弱者をいたぶっているだけにしか見えない。直に警備隊が来る。今ここでその者を放し、この拳を下ろすのならば、此度の喧嘩は貴公に詰め所で一晩反省してもらつ程度に済ませるよう私からも進言するが、いかがか？」

「つて、ちよつと待てー！」

背後の青年に言われたからではない。いや、勧められたからでは

ない。彼の勧めには納得していないが、その言いようが我慢ならずに、リクスウは男の襟首を掴んだ手を放して振り上げていた拳も下ろして背後の青年へと向き直った。

「黙って聞いてりゃ、それじゃあ俺がこの喧嘩の首謀者みたいじゃねえか！」

一応言いたい事は言った上で、リクスウは青年の姿に隻眼を見開く。

背格好も髪型もリクスウと大差無い青年。

リクスウが目を見開いた理由の一つは、その装束。厚手の外套に身を包んだその下の衣服には、枷のような鎖が幾つも巻き付けられている。おまけに目元をしっかりと覆い隠すように巻き付けられた深紅の布。

(コイツ、目が……)

青年の目が見えていないというなら、青年は先程リクスウの気配だけでその手を掴んでのけたと言う事になる。少なくともリクスウには成し得ない芸当で、一体どれほどの鍛錬をすればその域に到達できるものかは計り知れない。

そして、青年に手を掴まれて以来感じていた違和感は、対面してみる事で改めて感じる事になった。

リクスウの眼前の青年からは、殺気や闘気はもちろん、人でなくとも生物ならば発するであろう生氣、靈気さえ感じ取る事が出来ない。トウコウの力をもってしても、欠片も感じられない。それ故か、

青年はリクスウの前に立ちながら、そこにいないのではないかとリクスウに錯覚させていた。

そんなリクスウの困惑に気付いているのかどうか。青年はふむと唸る。

「違うのか？」

「違う！ 全く、まーったくもって違う！ ったく、横からしゃしやり出しておいて勘違いとは、お前は一体何様だ！」

得体の知れない青年を怒鳴りつけるリクスウ。その周囲の席から「おい、あそこ、レイザン様だ……」「レイザン様がいらっしやっっているぞ……」「あの男、レイザン様に向かってなんて無礼な……」と御丁寧な青年の名を囁く声が聞こえてくる。

(こいつも『様』付きか。全く、まーったく、人が多いといろんな輩がいやがる……)

レイザンと呼ばれる青年の正体を測りかねて溜息を洩らすリクスウ。

「む、私か？ 私はレイザンと申す者。拝紫教教主メイケイ様の……」

鎖男レイザンが名乗りを上げる中、先程までリクスウに捕まっていた男が好機とばかりに逃げ出す。

「あ、テメエ！ 誰が逃げていいと……！」

不意を衝かれて慌てて男を追うリクスウ。いくら出遅れたと言えども、脚力で勝るリクスウが追いつけないものではない。

だが……。

「人の名乗りも聞かず。あまつさえ喧嘩の再開とはな……。先程警告はしておいたぞ」

またもや気配も無く背後に立ったレイザンによって、リクスウは酒樽に向けて放り投げられた。

第十三章 神龍教主 参（後書き）

（次回予告、リクスウ語り）

ついてねえ。全く、まーったくついてねえ。

不覚にもレイザンとかいう野郎に捕まった俺は、詰め所の牢屋で野郎の正体を知った。

そして、牢屋に訪れたレイザンから教主メイケイに力を貸せと頼まれる。

うーん、俺だつて河を渡れねえのは困るしなあ。

タイコウ達や困ってる旅人、行商人の為にも、俺が一肌脱ぐしかねえか。

またもや陰気な牢の中、突如出された救いの手。

紫髭の乱れを正せる者は、隻眼道士ただ一人。

俺がやらずに誰がやる！

次回『第十四章 紫髭開放』に乞うご期待！

第十四章 紫髭開放 壱

タイコウは居心地悪そうに椅子に座りなおし、小さく唸り声を上げた。

「なんだか、こうしているとカリユウの町を思い出すね」

タイコウがリクスウの向かいの席に座ってしばらく。双方の間に溜まっていく沈黙の重みに耐えかねたタイコウが呟くと、リクスウはその言葉にやれやれと首を振る。

「あーあ、ついてねえ。全く、まーったく、ついてねえ。よもや、また格子挟んでタイコウと話をする事になるとはよお」

弱り顔のタイコウを前にして、リクスウは自嘲の笑みを浮かべてぼやく。格子窓を挟んで向かい合うタイコウもまた、リクスウにつられるように弱々しく笑った。

鍛冶屋見習いのタイコウと偽道士のリクスウ。二人が互いを旅の仲間として認め合ったのは、カリユウの警備隊詰め所の牢屋でのこと。

そして、今彼等がいるのはアンガン警備隊詰め所の牢屋の一角に設けられた牢人ととの面会室。

「リクスウも、あの時の一件で懲りてると思っていたのだけれど…」

「懲りてるよ。できる事なら御免こうむりてえよ。全く、まーった

く、誰が好き好んで牢屋に入るかってんだよ」

呆れたとばかりに言うタイコウにリクスウが間髪入れずに言い返す。

ならば尚更……。

「それが、どうしてまた牢屋に入れられるような事になったの？」

このアンガンで再び牢屋に放り込まれたリクスウに対し、タイコウがこの疑問を抱くのは当然の話。

「そりゃあ、おまえ。喧嘩の仲裁のつもりでだな……」

「なんだか、どこかで聞いたような話だね」

どこかでも何も、タイコウとリクスウの出会いのきっかけそのものである。

「おうよ。聞いて驚け、カリユウの町の飯店でタイコウに難癖付けてきた奴等が今度はこの町の酒場で喧嘩を始めやがってな。これはちよいと懲らしめてやること……」

「酒場？」

リクスウの話から耳ざとくその言葉を聞き取ったタイコウが眉を寄せ、同時にリクスウの表情が曇る。

「リクスウ、船便の時間を調べに船着場に行ったんじゃないの？」

「それは、だって……別に船着場に行かなくなつて、船便の話くらい酒場で集まるだろうからよう……」

「それで、喧嘩して、捕まって、牢屋に入れられたの？」

「ぐ……むう……」

タイコウの糾弾の言葉と視線と溜息とを一身に受け、リクスウは居心地が悪そうに呻き声を上げる。だが、リクスウは酒場での話を思い出し、ニヤリといつもの勝気な笑みを浮かべて見せる。

「心配すんなつて、タイコウ。ちゃんと船便の話は仕入れてあるんだからよ」

得意満面な顔をして胸をそらすリクスウ。ただ、そんな彼に対してタイコウの反応はやはり冷たいものであつた。

「大神紫龍荒ぶりて気脈を乱し、紫髭の氾濫を招きたり。魂鎮める事叶わねば、波収める事もままならず……。船便は欠航したまま、いつ復旧するかは未定なんですよ？」

「お、おまえ、どこでそれを？」

リクスウがまさに口にしようとしていた話そのものをタイコウに言われ、リクスウの開いた口から発する言葉は報告から質問へと変わる。

「紫髭の氾濫が話題になつているのは酒場だけじゃないってこと。拝紫教の社に行った時に聞いたんだ」

あつさりと返されて言葉を失うリクスウ。

紫髭の船便での流通が主となる都市アンガンで復旧未定の欠航ともなれば、町中の話題となるのは必然。しかも、船便再開を待つ旅人や商人が多くいる町の状態ならば、情報入手が早くなるのも尚更の事。

「社へ御参りに来ていた人も、早く紫龍様の機嫌が直って紫髭を渡れるようにとお願いしにきている人ばかりだったんだよ。それにメイケイ様って拝紫教の教主もいらして御祈祷しているんだって」

「メイケイの話なら俺も聞いたさ。全く、まーったく、よってたかって御苦労なこった」

やれやれと首を振るリクスウに対し、タイコウは深く長い溜息をついてみせた。

「そんなに暢気に構えないですよ。このままじゃ、僕達の旅路も止まってしまうんだから。いや、ここは諦めて首都コウランまでは大回り……」

独り言のように呟くタイコウに、今度はリクスウが溜息をついて返す。

「タイコウ、それとだけ大回りになると思ってたんだよ」

呆れて言うリクスウ。タイコウ自身も、これは上策では言い難いと気付く。

無理も無い。紫髭はホウ大国を大きく蛇行しながら横断している。これを避けて通る経路を取れば、その距離は倍以上に膨れ上がる。

「うーん」

「まあ、ここで焦ってみたところでどうなるもんでもねえ。紫髭を渡る手立てはじっくり考えようじゃねえか」

苦悩の声を上げるタイコウに、明るく笑い飛ばすリクスウ。その楽天的な気質がわずかばかりタイコウにも移ったのか、タイコウもまた軽く息をつくと笑ってみせた。

「そうだね。オウメイとも相談してみよう」

タイコウはそう言って話を切り、席を立つ。そのまま振り返り面会室を出ようと振り返る彼を、リクスウは驚いたように呼び止めた。

「お、おい、タイコウ。俺は……？」

リクスウの声にタイコウは立ち止まって振り返る。

牢屋から出してくれるんじゃないの？ そう問いたげなリクスウの視線を前に、タイコウはふむと短く声を上げる。

「まあ、今すぐ紫髭を渡れるようになるわけじゃないし、一晩反省すれば出てこられるわけだし。僕としても、リクスウのそのすぐに喧嘩になっちゃう体質は少しは反省して欲しいし……」

「な、なにいつ?!」

「今日は一晩ここで反省してね。明日迎えに来るから」

不服の声を上げるリクスウとは対照的に、タイコウは朗らかに笑って見せると再び彼に背を向ける。

「ちよ、それはねえだろ。仲間だろ。出してくれよ、タイコウ。待って、待って、いや、待ってください、タイコウさん。って、まず人の話を聞け、タイコウ。この薄情者ー！」

面会室を半分に隔てている格子を掴むリクスウの遠吠え。

しかし、タイコウは二度と振り返る事無く面会室を出て行った。

「……全く、まーったく、ヒデエ奴だ。心細い仲間を一人残して行っちゃうとは……」

面会室に一人取り残されたリクスウは去っていった仲間に向けてブツブツと文句を垂れつつ、自身も部屋を出ようと席を立つ。

そして、リクスウは踵を返しタイコウが出ていった扉とは正反対の、牢屋へと続く扉へ進む。

「今度あいつが稽古を頼んできたら、問答無用で叩き潰し……お？」

牢への扉まで数歩手前。相変わらず愚痴を並べていたリクスウの歩みを監視役で付いていた警備兵が押し留めた。

「まだだ。席へ戻れ」

「んあ？」

警備兵の端的な言葉にリクスウが問い返す。ただ、警備兵が彼の問いに答える必要は無かった。

警備兵と向き合うリクスウの背後で、タイコウが出ていった扉が再びゆっくりと開かれる。

二人目の面会者の手によってギシギシと音を立てる木製の扉。その耳障りな音と気配を背後に感じながら、リクスウは二人目の来訪者が誰なのかをすぐに悟った。

正しくは、背後に迫りながらも全く感じ取れない来訪者の気配によつて。

「全く、まーったく、どの面下げて俺に会いに来ただか……」

さも面倒くさそうに後ろ頭を掻きながら振り返ったリクスウは、隻眼を吊り上げて来訪者を睨みつけた。

全身に巻きつけた鎖を厚手の外套で覆い、双眸を深紅の布で隠した男。酒場でリクスウを投げ飛ばし、警備隊に突き出した男。

二人目の面会者。名はレイザン。

レイザンを前にリクスウは内心唸った。

(目の前にいるってのに、そこいると思えねえ……)

改めて対峙して尚、レイザンからは殺気、怒気はもちろん、生氣、靈気さえ毛ほども捉えられない。

数多の戦歴によって研鑽されてきた気配の察知と虎霊トウコウによる靈気の感知は、リクスウにとっては失われた片目の代わり。その感覚が機能しないレイザンは、リクスウには相性の悪い。それも彼がレイザンを毛嫌いする要因の一つだろう。

「牢へ放り込んだ相手を眺めに來るとは悪趣味な野郎だな」

「その減らず口では反省の色は見られぬようだな」

こうして話をしなければ、眼前の男が幻ではないかとさえ思えてくる。

リクスウは不機嫌さを隠す事無く、どかりと椅子に座った。そんな彼の態度に臆する事無く、レイザンもまた格子を挟んだ対面に静かに座る。

リクスウは、レイザンのその一連の所作に眉を寄せた。

「なあ、アンタ。その目元の布っ切れは目隠しだと思っただが……」

面会室への入室から着席まで。それだけに限らない。酒場で見せたレイザンの行動。リクスウの背後に立った事も、彼の振り上げた拳を掴み取った事も、もちろん彼を放り投げた事も、見もせずにする事ではない。いや、見えていても容易い事ではない。

「ああ、確かに見えておらぬさ。少しばかり道士の心得があつてな。万物の気を読み取っている」

（こっちは見えず、こいつからは丸見えか……デイコウのオッサン

程では無いにしても、ここにも化け物が一人)

レイザンは少しばかりと言ったが、並みの道士でも万物の気を把握する事は用意では無い。その域に達していないリクスウからすれば、自身を放り投げた体術を含めて三大道士デイコウと同様に高みの存在と言えるだろう。

内心唸るリクスウ。或いは、それさえもレイザンには見えているのかもしれない。

「改めて名乗っておこう。私は名をレイザンと申す。縁あって拝紫教教主メイケイ様の護衛を任されている者だ」

レイザンの名乗りに口笛を吹くリクスウ。

酒場で出会った際に名前こそ聞いていたが、レイザンの生業は始めて聞くところ。そして、リクスウはその仕事を聞いて彼の優秀さに納得した。

「それはそれは大層な御方だな。俺はリクスウ。アンタに放り投げられた男だ」

「そう卑下するものではない。虚を突いたからこそ出来た事。貴公と正面からぶつかれば勝負は知れないだろうさ」

レイザンの言葉にリクスウの眉と口元が不愉快とばかりに歪む。

リクスウを弁護するように言ったのだろうが、当のリクスウからすればそれさえもレイザンの余裕に見えて気に入らない。

「で、アンタは、アンタに負けて打ちひしがれてる俺を励ましに来てくれたのかい？」

喧嘩腰のリクスウが放つ射るような視線を浴び、レイザンはやれやれと首を振る。

「どうやら余談は不要のようだな。単刀直入に申すでしょう。私と共に来て欲しい」

「はあっ?!」

レイザンの唐突な言葉に、リクスウは思わず声を大きくして問い返した。

「ふむ、流石に簡潔過ぎたか……。リクスウ、紫髭の現状は知っているな？」

「まあ、噂程度だけだな。アンタが護ってる教主様もお祈りしてるんだろ？」

リクスウの返事にレイザンはそれで十分と頷く。

「メイケイ様を始めとして多くの信者達が祈りを捧げている。しかし、紫龍様をお鎮めするには至らないでいる。世間的にはそういう事になっている」

「世間的には……か。何か裏があるわけだ」

「ここでもう一つ問おう。貴公ならばホウ大国の現状もわかっているだろっ?」

その問いにリクスウは不機嫌を取り戻した顔で眉根を寄せた。

「妖魔出没の話ってんなら、馬鹿にすんなって程に……って、まさか！」

リクスウは言い返しながら事の真意を悟り、別の意味で表情を陰しくさせる。彼の反応が深紅の布越しに見えているかのようになり、レイザンは満足げに頷いた。

「此度の紫髭の氾濫が紫龍様とは無関係ならば、いくら紫龍様が気をお鎮めなさるうとも河が収まらないは道理だ」

妖魔出没の鍵となる異界の門。もし、それが紫髭に発生しているとしたら、紫龍に願っても紫髭の氾濫は収まらない。そして、長らく続いている紫髭の氾濫からすれば、異界の門の発生期間はかなりの長期にわたる。必然的に妖魔出没の機会も増加していく。

ここまで話してレイザンが面会に来た理由に察しの付かないリクスウではない。

「なるほどな。全く、まーったく、龍神様の御機嫌伺いじゃ俺の出る幕は無いと思ってたんだが、なにやら俺向きな話になってきたじやねえか」

納得顔で二度三度と頷くリクスウ。彼の反応に手応えを感じたのか、レイザンが僅かに椅子から身乗り出した。

「現在メイケイ様が祈祷の傍ら、紫髭の気脈を探っておられる。氾濫の元となっている地を発見次第、我々はその地に赴くつもりだ。」

リクスウ、貴公の技量を我々にお貸し願いたい。もし承諾してもらえるのなら、今すぐにも貴公をここから出すようにメイケイ様からも口添えして頂く心積もりだ。いかがか？」

この問いに、リクスウは今日一番の不敵な笑みを浮かべて見せた。

第十四章 紫髭開放 式

(いやー、堪能堪能。やっぱりこの旅芸人の一座と一緒にしたのは正解やったわあ)

賑やかな幕舎を出たオウメイは、内心に響く龍の貴人樂葉の声に少し疲れた笑みを浮かべた。

オウメイ達と一緒にアングンを訪れたデン婆ことデンシユク座長が率いる大道芸の一座。デンシユク達一座の者達はアングンの町外れに幕舎を築くと、明日からの営業活動に備えて熱心に芸を磨きだした。そこへ町から幕舎へと帰ってきたオウメイの……いや、彼女の意識下に存在する樂葉の好奇心に火が点いた。

華麗な剣舞。百発百中の投擲。綱の上で玉乗りもすれば、火も吐く、剣も飲む。芸人達の多彩な芸に樂葉はハラハラドキドキ、成功すればやんやの大喝采。そのたびにオウメイの中では樂葉から右を見る、左を向け、奥の者だ、いやいや前だと指示が飛び、終いにはオウメイ自身もやってみせるとせがむ始末。

(まあ、樂葉に楽しんでもらえたのなら何よりだわ)

樂葉相手に猿廻しでもさせられたかのような疲労感こそあったが、オウメイも芸人達の稽古風景は楽しかったのは確かだ。

(ホンマに眼福やわあ。そうや、オウメイ！ 今度メンサイに戻ったら村の者にこの一座を呼んでもらうように頼んでみてくれへんか？ 今度のウチの鎮魂の祭事には、この大道芸を奉納してもらおうやないか！)

(ほっほう。それはつまり、アタシや母様がやってきた奉納の舞は見飽きたとおっしゃりたいのかしら?)

聞き捨てならないとばかりに、内心樂葉に言い返すオウメイ。

(何を言うてんの、この子は！ あれはあれで見たいんや！)

オウメイの発言こそ聞き捨てならないとばかりに、間髪入れずに答える樂葉。彼女の姿が目に映るなら、カ一杯首を横に振っているところだろう。

(せやから、ここはどっちも一緒にしてどどーんと盛大に……)

「贅沢な龍神様だなあ」

樂葉の提案に、オウメイはクスクスと笑みをこぼしながら幕舎を背に歩き出した。

幕舎の中では未だに一座の者達が稽古に励んでいる。オウメイが練習半ばで外に出る際に樂葉から不満の声が出たが、これは却下された。正しくは、最初はオウメイが折れて稽古鑑賞を続けていたのだが、何度か同じやり取りを続けるうちにとつとつオウメイが首を縦に振らなくなった。

「あーあ、すっかり長居しちゃったわね」

星が瞬き始める夜空を見上げて一人気まずそうに呟くオウメイ。

彼女はデンシユク一座の夕飯の支度を手伝う心積もりでいた。一

座の者に頼まれていたわけではないが、一座の元に泊めてもらう身の上としては何もせずにただただ客人扱いされるといっても気分が落ち着かない。

夕飯の支度をしている幕舎の裏手に向かって足早に歩むオウメイ。だが……。

(一足遅かったようやねえ)

そんな声がオウメイの内心に響く。

樂葉の言うとおり、幕舎の裏からは香辛料の効いた香ばしい匂いが漂ってきていた。

(もう、誰のせいよ、誰の。せめて盛り付けくらいは手伝わないと) 予定の遅れを取り戻すように、或いは美味しそうな匂いに誘われるように、オウメイが足を速める。

(若いのに感心なこっちなあ)

(働かざる者食うべからずが、うちの家訓なんでね)

そう言い返しながら歩き続けるオウメイは、不意に影から姿にぶつかりそうになって慌てて足を止めた。

「デーン婆さん！」

驚いたのも束の間、オウメイは影の正体に気が付くとその名を呼ぶ。

「ああ、オウメイかい。ビックリしたよ。どうかしたのかい？」

デンシユクもまた飛び出してきたオウメイに驚いたようだが、すぐに柔らかな表情を取り戻して尋ねてきた。

「いえ、夕御飯の支度を手伝おうと思ひまして……」

「なあんだ。そんな事はウチの者達がやるよ。あんた達は私達の命の恩人なんだから、そんなに気を使わないでおくれよ」

「でも、ただお世話になるだけではなんだか落ち着かなくて……」

「本当に気にしなくていいんだよ。ここで遠慮無く食べて寝てくればかまわないし、私達の芸が見たいなら思う存分見せてあげるとも、それでも、どうしても料理がしたいって言うなら、手伝ってもらえるのはそりゃありがたい話だけだね」

オウメイはデンシユクの言葉に便乗して稽古見物の再開を要請してきた樂葉の意識を押さえ込み、料理の手伝いを願い出ようとする。

だが、オウメイよりも早く、デンシユクが「もつとも……」と話を続けた。

「今日の夕飯の仕度つてのは、あの子が先に取っちゃったけどねえ」

「あの子つて？」

思わずそう問い返してしまったものの、デンシユクが誰の事を言っているのかはオウメイにも容易に想像がついた。

(まあ、当然あの子の事やわなあ……)

樂葉もまたオウメイに尋ねるまでもなく青年の名に思い当たる。

オウメイはデンシユク越しに炊事場を覗き、自分と樂葉の推測が間違っていない事と確信した。

オウメイの視線の先、一座の者が作つたらしい簡易の釜戸に乗せられた大鍋。先程から食をそそる香りを放っているのはその大鍋の中身で間違いは無いだらう。そして、その大鍋を暢気にかき回している青年は、旅の道中ですっかり見慣れた顔だ。

「タイコウ！ いつの間に帰ってきていたの？」

オウメイと呼ばれ、タイコウは煮立つ大鍋から視線を上げたニコリと笑った。

「ああ、ただいまオウメイ。結構前に帰っていたのだけれど、料理の仕込みを始めたらつい手が離せなくなっちゃって……」

挨拶を交わしながらも大鍋をかき混ぜる手は休めないタイコウ。彼が相手に行っている大鍋の中をチラリと見たオウメイは内心溜息をついた。

肉と野菜をふんだんに入れられコトコトと煮立つ汁物。その煮え具合とタイコウの額に浮かぶ汗からすれば、随分と時間をかけて丹念に煮込んでいる。そして、逆にそこに一度も出くわさなかったという事は、オウメイはそれだけ長い間幕舎から出ずに樂葉の稽古鑑賞に付き合っていたという事だ。

（一応言うつくけどね、稽古見物はオウメイも楽しんどったんやらね。夕餉の仕度に遅れたんをウチのせいだけにせんといてや）

オウメイの脳裏によぎった思いをいち早く察知した樂葉が、先手を打って自身を弁護する。

そんなオウメイの内心に気付いた様子も無いタイコウは、ニコニコと微笑みながら大鍋の煮汁を小皿にとると、オウメイに向かって差し出した。

オウメイは促されるがままに小皿を手に取り味見してみる。

「あ、美味し」

煮汁を口にした途端、調理場に辿り着くまでにすでに味わっていた香辛料の香りが口の中に広がり舌をピリリと刺激する。さりとてそれは長く舌を痛めつける事も無く、肉や野菜から出た旨みが広がっていく。

「ほう、こいつはいいねえ。きつとうちの連中も気に入るよ。この味付けは故郷の料理なのかい？」

オウメイに続いて味見をしたデンシユクからも賛辞を受けて気を良くしたタイコウは、満面の笑みを浮かべながら首を振る。

「いえ、僕も作るのは初めて、というか作り方を聞いたのも今日という代物で……。実はリクスウの面会の帰り道で露店の通りに迷い込んでしまいました……」

そう話を切り出したタイコウ。その出だしでオウメイと樂葉はその後の様子がなんとなく頭に浮かんだ。

タイコウ曰く、露店通りで野菜売りの男に帰り道を尋ねているうちに、気付けば何故か売り物の話が変わってしまった、あれよあれよといううちに彼の目の前に野菜が並び、どうしたものかと悩んでいたら、隣の露店の女が食材を上手く料理する方法を教えてくれたのだが、その女に調度良い調味料を扱っていると数種類の香辛料を渡され、さらに隣の店の男からその料理ならこの肉がつきものだと言った。

あまりにも予想通りなタイコウの話に、オウメイは苦い笑みを浮かべた。

「オウメイ、今度タイコウが町に行く時は付いてってあげなね」

デンシユクは隣にいたオウメイに呆れ顔を向けて言う。この調子で露店通りを通り続ければ、タイコウは毎度格好のカモになってしまうだろう。

「まあ、経緯はなんだがこの料理のおかげで明日からの興行も一段と力が入るってもんさ。ありがとうよ、タイコウ」

まだ呆れ顔が抜けないデンシユクの礼に、オウメイは思い出したように手を打つ。

「そういえば、デン婆さんの方はどうでした？」

どう、とはデンシユク一座の明日からの興行について。デンシユクは座長として明日からの興行のため、市街地の敷地確保のために

アングンの役場に出向いていたのだ。

オウメイがタイコウと共に拝紫教アングンの宮からデンシユク一座の元に返ってきたのが昼過ぎの事。その後リクスウ捕縛の報せを受けてタイコウが面会に向かつてからというもの、オウメイは樂葉に促されて一座の稽古見物を続けていた。タイコウやリクスウの動向はもちろん、デンシユク一座の話も全く聞いていない。

朗報を期待するオウメイの視線を浴びて、デンシユクは呆れ顔を弱り顔に変える。

「紫髭が渡れなくなってるってえ話は、あんた達も町に行ったのなら耳にしたろう？」

デンシユクの問いにタイコウもオウメイも揃って頷き返す。

「そのおかげで行商人や旅人の往来も滞っている。もちろん私達のような旅芸人もさ。おかげで一座の間で場所の取り合いになっちゃってたんだ。中には客の集まりが良い場所をほかの一座に高値で譲るような連中もいるってたんだから、困ったもんだよ」

芸人なら芸で稼がなくてどうするとぼやくデンシユク。彼女の様子では市街地での興行は無理だったらしい。

「それじゃあ、明日からは……」

「何もせずに次の町に移りたくもないしね。明日からもここに幕舎を張って営業さ。なあと、見る目のあるお客は町外れだろうと来てくれるもんだ」

タイコウの問いにデンシユクは努めて笑顔で返す。

「とは言っても、他の一座とやる事が同じじゃあ拙いねえ。ここは古典の演劇でもやってみせようか……」

そう呟くデンシユクの顔は経営者のそれへと変わっている。

「演劇。演目は大国演技とかですか？」

「ああ、大国演技は老若男女を問わず昔から人気があるからねえ。旦那が生きていた頃はよくやったもんさ。ホウセンの役をやらせたらなかなかのものだったんだよ。惚気を言えば、私は旦那の演技に心底惚れちまってね」

惚気話と聞いて不意に聞き耳を立てる樂葉はさておき、オウメイはホウセンの名を頭に浮かべた。

ホウセン。大国記の時代、軍師コウタツと共に数々の戦いを勝利に導いたホウ国屈指の名将。将としての指揮能力はもちろんの事、彼個人の武勇も凄まじく軍師コウタツをして「彼無くして我が策無し」と言わしめた程の傑物だ。いざ戦となれば猛々しいが普段は寡黙な大男であり、大柄な男性に対する褒め言葉として「ホウセン將軍のようだ」と言ったりもする。

「演劇か……。よし、明日からの催しは演劇にしようじゃないか。そうと決まれば、舞台の用意と演技の見直しと……」

言うが早いか早速一座の者達に報せに行こうとするデンシユクをタイコウが呼び止める。

「あーっと、待って下さいデンお婆さん。その前に皆で夕飯……」

大鍋の中も十分に仕上がっている。オウメイやデンシユクの反応を見れば味付けも上々。長らく稽古を続けていた一座の者達も喜んでくれそうだ。

ただ、デンシユクにかけた声はその途中で途切れた。

何事かとタイコウを見るオウメイ。

タイコウの顔はオウメイやデンシユクに向けられているものの、その目は彼女達を見ていない。視線は二人の間を通り過ぎてオウメイ達の背後へ。

オウメイはタイコウの視線を辿り、自身の背後へと振り返り、ようやく彼が何を見たのか把握し、同時に驚愕した。

オウメイ達の後ろに立っていたのは一人の男。背丈や髪型はリクスウと変わらないが、大きく違うのは装束。厚手の外套と、そこから見え隠れしている手足に枷のように巻き付けられた鎖。何より目に付くのが、目元をしっかりと覆い隠す深紅の布。

酒場でリクスウが始めて彼を見た時と同様、オウメイにも男の気配を感じ取る事ができないでいた。

(嘘……)

愕然とした表情を隠すことも出来ずにいるオウメイ。物心付いた時から気配を探る事を自然に行っていた巫女の彼女ならばこそ、眼前の男の気配の無さは尚更不自然に思えるのだらう。そして、男の

姿を視認して尚、生気も靈気も感じ取れないその存在は違和感を禁じえない。

(こいつ……なんの気配も見せへんとは、なんとも気色悪い奴つちやなあ)

オウメイの中で唸るように呟く樂葉の声。オウメイより遙かに気を読むことに長けている樂葉でさえ、背後に立っている男の気配に気付いていなかったらしい。

デンシユクも、知らないうちに背後に立っていた男に驚きこそしたが、元々気配を探るといった行いに縁遠いだけあって立ち直りも早い。男の身なりに思い当たるところがあっただけで小さく「ああ」と声を上げた。

「貴方様は、拝紫教教主メイケイ様の護衛をしているというレイザン道士様であらせられますね」

「いかにも。御老体はこの一座の座長デンシユク殿でよろしいか？」
頷き問い返してくるレイザンに対し、デンシユクが恭しく礼をし
てみせる。

「ええ、確かに私がデンシユクに御座います。それにしても、教主様にお仕えなさる道士様が一体どういった御用件でこちらに？ 物見遊山なれば私もお客様として歓迎いたしますが、生憎と我が一座の興行は明日からで御座いまして……」

突然デンシユクの口振りが変わった事にオウメイは少しばかり驚いたが、レイザンと呼ばれた男の立場を知ってすぐに納得した。

道士と呼ばれる職種は元来尊ばれることが多い。ましてや、拝紫教の教主に仕える者ともなれば、敬われるのも無理は無い。

「いや、あなた方の芸事も大変興味深くはあるのだが、今回こちらに窺ったのは別の用件でな。こちらの一座にタイコウとオウメイという旅の者が同行していると聞いて参った次第だ」

レイザンの言葉にタイコウと小首を傾げ、オウメイは眉根を寄せた。

第十四章 紫髭開放 参

夕暮れの朱から夜の黒へと空が色を変える間際。濃紺の空に瞬き始める星々では、家路を急ぐ者達の往来するアングンの街路は照らしきれない。ましてや、建物の中ともなれば夜中と呼んで差し支えない。

ランプの揺らめく灯火に照らされたほの暗い部屋の中で、リクスウは陰鬱な気持ちを吐き出すように溜息をついた。

「全く、まーったく、これじゃあ牢屋の中と変わらねえってんだ」

拝紫教の新たな教主に仕えているという道士レイザン。リクスウは、彼とその主である教主メイケイの口添えによってアングン警備隊詰め所の牢屋から開放された。

解放の条件は教主メイケイに従って紫髭を乱す根源を絶つ事。この条件を飲んだリクスウがレイザンに連れて来られたのが、今彼がいる部屋。

拝紫教アングンの宮の一角にある宮司や巫女の詰め所の一室。とは言ったものの、部屋は物置として使っているようで半分以上が祭事の道具などが片付けられた葛籠の山が占領している。それ以外には目立ったものも見当たらない味気無い部屋。紫龍の社を間近にしながら、部屋にある小さな窓からは脇道を挟んだ向かいの外壁しか見えない。

メイケイの依頼は余計な混乱を招かないよう内密に実行するように。すなわち、依頼に関わるリクスウはなるべく目立たないように

部屋からの外出を控えるように。そうレイザンからは言われているものの……。

「むしろ、話し相手がいねえとあっちゃあ、コソ泥のいた牢屋のほうがマシってもんだ」

リクスウは石造りの壁によりかかると、もう一度深い溜息をついた。

そう。彼は今、途方も無いほどに退屈していた。

蛮勇と呼ばれたコウ八族を統べた族長トウコウの血が成せるものか。トウコウの末裔であるリクスウは、生来血気盛んにして束縛される事を嫌う男である。そんな彼が物置同然の部屋で一人、大人しくしているはずもない。

リクスウは壁から背を離すと、その隻眼で部屋唯一の出入り口である木戸を見据えた。

「要は目立たなけりゃいいんだよな」

そう呟きながら戸の前まで躊躇い鳴く歩みを進める。

レイザンの大人しくしているという言葉を、リクスウが都合良く自己解釈して口にしたところで部屋に彼一人ではそれを訂正するものもない。今の彼に唯一諫言できるとするならばリクスウに取り憑く虎霊トウコウ。だが、トウコウもリクスウと似通った気性となれば、リクスウの言葉に賛同こそすれども戸にかけた手を止めはしない。

（まあ、なんだ。酒瓶の一つも見つけりゃあ、しばらくはこの部屋に大人しく居座ってやってもいいんだがよ……）

リクスウはこの場にいないレイザンに胸中でそう断わり、そっと戸を開けて顔を出した。

夕暮れ過ぎの廊下は既に闇の支配下に落ちてはいるが、廊下の先から洩れ出る別室の明かりが辛うじて足元を照らしている。いや、むしろ今のリクスウには、別室の明かりが廊下の闇を越えてこいと招いているようにさえ感じる。

リクスウはさして距離も無い廊下を突き進み、別室に辿り着くとひよっこりと顔を覗かせた。

廊下へ明かりをこぼしていた別室は、先程までリクスウが押し込められていた部屋より幾分広い。円卓と椅子がいくつか散りばめられた食堂のような部屋だ。

リクスウは壁沿いに立つ棚にお目当ての酒瓶を見つけるよりも早く、室内にいた先客三人へと視線を向けた。

「あぁん？」

そう声を上げたのはリクスウではなく、彼が部屋を覗くと同時に目ざとくそれを見つけた先客の一人の方。

円卓を囲むように並べた椅子三脚。それに各々座っている先客の三人。

まず、荒い声を上げてリクスウをギロリと睨みつけたのは、調度

リクスウと対面する位置に座っていた太った男。太った男の声に反応し、隣に座っていた筋肉質の男が横目でチラリとリクスウを見る。その男達の対面、リクスウに背を向けた白髪の男は二人の反応に興味を抱いた様子もなく煙管を燻らせている。三人とも似たような道士の装束をしてはいるが、以前リクスウが見た三大道士デイコウの装束とは些か趣が違ってみえた。

生憎とリクスウは拝紫教について疎いが、部屋の中にいた男三人がこのアングンの社に参拝に来ているようにはとても見えなかった。少なくとも、宮の奥にあるこの詰め所に立ち入るような宮司には、男達が醸し出しているガラの悪さは無いはずだ。

おそらくは、未だに睨みをきかせている太った男や、リクスウを一瞥した筋肉質の男も、リクスウに対して同じ思いを抱いているのだろう。

なればこそ、お互い合点がいく結論もある。

「おう。あんたらもレイザンに連れてこられたのかい？」

殺伐とした雰囲気を感じさせる三人に対し、リクスウは努めて明るく声をかけた。

「おい兄ちゃん、あんたらってのは俺達の事を言ってるのか？」

ただ、リクスウの言葉の一節が気に入らなかつたらしい。

「んだよ、そりゃあこの部屋にはあんたらしかいねえだろう」

「またあんたらと言いやがったな。俺達が紫髭中岸の三狼士だと知

「つてて言ってるのか？」

怒気をはらんだ太った男の声にリクスウは困り顔で腕を組み、大仰に首を傾げてみせる。

「知らん。全くの初耳だな。なんだ、あんたらも偉い奴なのか？」

大袈裟な仕草で答えるリクスウ。真面目に答えてこそいるが、リクスウのその素振りにはむしろ喧嘩を売っているというべきだろう。現に、リクスウの態度をそれと断定したものがいる。

「この野郎……」

太った男が荒々しく席を立ち、リクスウの前へと威圧するように進み出る。それを迎えるリクスウの口元が一瞬だけニヤリと歪んだあたりは、リクスウ自身もそれを狙っていたのだろう。

一触即発、嵐の前の静けさ。そんな危うい静寂が占める室内に木を打ち鳴らす甲高い音が木霊し、太った男はビクリと身を震わせる。

リクスウの視界を占める太った男の背後。リクスウに背を向けていた白髪の男の手が、今しがたの音を発した煙管を玩んでいる。

「エン兄……？」

太った男のリクスウへ向けていた怒気は煙管の一音で消し飛んでいた。男は親に悪戯を咎められた童子のような情け無い表情を浮かべて、先程まで自分が座っていた卓へと振り返る。

「所構わず因縁付けおってからに……。ハンよお、おめえの気の短

さは死ななきや治んねえのかねえ」

「ぐっ……すいやせん」

苛立つように繰り返し煙管を打つ白髪男の指に、呆れたように深く吐かれた白髪男の溜息に、ハンと呼ばれた太った男は息を詰まらせながら詫びる。

（はっはあ、つまりは太つちよがこの三人組の下っ端で、白髪が親玉と……）

そのリクスウ仮説の親玉が振り返り、頭を下げていた下っ端ハンの頭越しにリクスウと白髪男の視線が合った。

「いやあ悪かったなあ、兄さん。こいつも悪い奴じゃねえんだが、なにしろ見ての通りの短気者だよ」

笑顔で謝罪する白髪男の男。

短く刈り込んだ白髪とは対照的に、肌は日に良く焼けている。肌に彫りこまれた皺からすれば初老と呼んでいいだろう。口元と顎先に伸びるひよろりとした白い髭が印象的で、気さくに笑っている姿を見る限りでは好々爺とも見えるのだが……。

「まあ、知らない者同士なんだ。そんなこともあるさ」

（堅気じゃねえわなあ。目の奥が笑ってねえってんだよ、爺さん）

笑顔の裏で値踏みするように観察されている事に気付き、リクスウは形ばかりの愛想笑いを返す。

「で、さっきの兄さんの質問だが。お察しの通り、儂等もレイザンの旦那に連れてこられたくちだ。用件とやらが片付くまでお互い仲良くやるうや。そう言いたいところではあるんだが……」

手にした煙管を揺ら揺らと遊びながら言う白髪男。リクスウの観察が済んだのか、上辺だけの笑顔は徐々に薄れ、鋭い眼光が次第に表に現れていく。

「初対面の兄さんに説教するのなんだがね。ハンの気の短さに気付いていながら、それでもちよっかい出そつって魂胆はいかがなもんかねえ。絡んだのはハンだとしても、あれじゃあどっちが喧嘩を売っていたんだかわかりゃしない」

白髪男の手元で揺れていた煙管が止まり、ゆっくりとその先がリクスウへと向けられる。

「儂等も中岸の三狼士なんて呼ばれて、この一帯じゃ知れた者だ。兄さんが期限付きのお仲間だと言っても、このままコケにされたままってんじゃあ収まりが付かねえ。いや、それを抜きにしても、命を預ける事になるかもしれねえ以上は、期限が付こうが付くまいがどっちが格上かはお互いに知っておきてえじゃねえか」

白髪男の声に含まれた殺気に呼応するように、沈黙を守っていた筋肉質の男が席を立ち、太った男も両手に拳を作る。リクスウもまた、三狼士を名乗る男達の気に感化されて自身の気が昂ぶっていく事を感じていた。

(やれやれ、一時は煮え切らないまま終わるのかと思っただが……。全く、まーったく、いい暇潰しが出来ちまったなあ)

白髪男とリクスウ、同時に口元を歪めて不敵な笑みを作る。

「兄さんも、最初からそれをお望みだったんじゃないかねえのかい？」

「さあて、どうだったかなあ……」

古くより交易都市アンガンを守ってきた外壁。その外壁の外へと広がる市街地のさらに外へ行商人達が天蓋を並べた一角。

旅芸人デンシユク一座の幕舎裏に作られた釜戸を挟んで、タイコウとオウメイは急な来客に戸惑い顔を見合わせた。

「あの……」

「初めまして、レイザンさん。アタシがオウメイです。用件と仰いました、一体何事でしょうか？」

オウメイは何事か話そうとするタイコウを後ろ手で制し、幾分険しい目付きでレイザンに名乗る。

そのオウメイの手がタイコウを制していなければ、タイコウはレイザンに名乗るより早くオウメイの変化を問うていただろう。

(どうしたんだろう……?)

オウメイの声が硬い。

オウメイは紫龍に仕える拝紫教の巫女。その拝紫教教主に仕える道士を相手にすれば、その口上が硬くなる事はタイコウにも頷ける。だが、声が強張るのはなぜだ？

或いは、相手が相手だけに緊張しているとも取れるが、それにしでは度が過ぎていようようにタイコウには思えてならない。緊張や萎縮というよりは、ただ怯えているようにさえ感じられる。

この場にリクスウがいれば、またタイコウの心配性が出たと茶化されるかもしれないが、今回に限ってはタイコウの不信感は的中していた。

(この人……)

彼女は盲目の道士に警戒心を抱いていた。

何故、自分やタイコウの名を知っているのか。彼から全く気配がしないのは何故か。

いや、それらのほとんどが説明できないものでもない。例えば、オウメイ達の名前を知り得た理由として有力なのが……。

「おお、貴方がそうだったのか。突然の来訪、失礼した。用件というのは他にもない、貴方の仲間であるリクスウの事で話しておかねばならないと思い、こうして馳せ参じた」

レイザンが口にしたリクスウの名。そこから名が知れる事もあるだろう。ただ、その一切に説明が付けられたとしても、最後に唯一警戒心を生み出すものが残る。

具体的な印象でレイザンの何が悪いわけでもない。むしろ、拝紫
教教主の護衛となれば同じ拝紫教の巫女として敬意を払い、友好的
に応対もできるはずだ。それに、リクスウ絡みならば、レイザンこ
そ迷惑をこうむった被害者として同情すべきかもしれない。

それにもかかわらず、オウメイの心の奥底にふつつつと湧く不安。

(なんか嫌……)

(なんかて…… オウメイ、あんななあ)

樂葉の呆れた声が内心に響く。確かにオウメイ自身も勝手な事だ
と理解している。なんとなく嫌われるレイザンを不憫にさえ思う。
それでも、オウメイにはその最後の不信感だけは拭い去る事ができ
ないでいた。

言うなれば、女の感か。

「オウメイ、貴方も話に聞き及んでいるとは思いますが、リクスウは酒
場で乱闘騒ぎを起こして警備隊の詰め所に拘留されている。かく言
う私が彼を捕らえたのだが、周囲の者達に被害が及ばぬようにと思
つてした事だ。どうか貴方の仲間に手荒な真似をした事は、ご容赦
願いたい」

頭を下げるレイザンを前に、オウメイは内に抱いた警戒心はさて
おいて慌てて彼を押し留める。

「ああ、そんな謝らないで下さい、レイザンさん。話は聞いてます。
アタシ達のほうこそリクスウが迷惑かけちゃって謝らなくちゃいけ

ないのに。ホントすみませんでした」

オウメイの背後では、タイコウが即座に名乗り出て謝りたい衝動とオウメイに押し留められている手前口も出せないという狭間で葛藤している。そんな彼に代わって平謝りのオウメイ。

「いやいや、リクスウの事では貴方に重ねて謝らねばならない事があるのだ。どうか頭を上げてはくれまいか」

「……と言いますと？」

顔をあげて問うオウメイに、レイザンはここからが本題だとばかりに咳払いをした。

「私はリクスウの才覚を買い、彼にある案件に協力してもらった。私にされた。わけ有って案件については話す事ができぬが、リクスウはこれを快諾してくれた。しばらくの間リクスウは貴方達と別れ、我々と行動を取る事になる。今日はそれを伝えに来たのだ。無理も勝手も承知の上ではあるが、どうかご理解いただきたい」

(そんな……！)

もしオウメイに制されていないければ、タイコウはその言葉を声に発し、レイザンに食ってかかっていただろう。そして、その思いはオウメイも同じ。

「納得し難い話ですね、レイザンさん。仮にもアタシ達は共に旅をしてきた仲間です。どのような案件かも知らされずに、急に別行動だと言われても納得できるはずないじゃないですか。せめて、リクスウの口からそれを聞かせて下さい」

オウメイの言葉にレイザンは僅かに唸り考え込んだ後、諦めたように「この話は他言無用に願いたい」と前置きして話し出した。

「で、どちらが格上か身を持って知った上で、だ」

リクスウは殴られた頬を片手で擦りながら、倒れた椅子を引き起こして座り込む。

リクスウの眼前にある円卓には、彼がこの部屋に入る最初の目的だった酒瓶と、割れずに残った湯飲み。そして、円卓の脇で折り重なるように倒れているのが……。

「下の太いのがリハン。真ん中のダンマリのがライシン。上の白髪の爺さんがチョウエン。三人合わせて紫髭中岸に名を馳せる三狼士様。これでいいんだよな？」

「へ、へえ。その通りで……」

湯飲みに酒を注ぎながら尋ねるリクスウに、三人重ねの上段でひっくり返っているチョウエンが答える。

チョウエン達の顔は青痣、擦り傷、こぶ、鼻血等々。つい今しがたまでのリクスウとの激闘の結果を物語っていた。

「それにしても御見それしやしたぜ、兄貴。流石にレイザンの旦那が見つけてきただけの事はありますあ。お名前をお聞かせ下さいや」

「兄貴言つな。俺はリクスウだ。仲間とコウランまで旅の途中だったんが、紫髭の一件でこの町で足止めくらつてな。レイザンの話に乗ったつてわけだ。あんたらも見つた限りじゃ道士っぽいが、ひよつとして俺達と同じかい？」

チヨウエンは未だに目を回しているリハンとライシンの上で起き上がると、短く刈られた白髪頭を掻いた。

「いやあ、俺はしがない道士崩れ。それにシンもハンも格好こそ道士だが、欠片も道術の心得は無え。コウランの応募に名乗り出るのはちよいと荷が重い話で……。それに何より、俺等は兄貴ほどじゃねえが腕っ節を買われてこのアングンの揉め事を取り仕切つてましてね。おいそれとアングンを離れるわけにやいかねえんでさあ」

チヨウエンの話にリクスウは納得した。三狼士はその立場と実績から、見込みありとしてレイザンに勧誘されたのだろう。

「それにしても、レイザンも酔狂な奴だな。あいつの主人のメイケイはお偉い教主様なんだろ？ 技量はあるつたつて、こんなゴロツキ集めることは無かつたんじゃねえの？」

酒の入った湯飲み片手にやれやれと首を振るリクスウに、チヨウエンはニタリと笑みを浮かべる。

「そいつは兄貴も含めた話ですかい？」

「兄貴言つな」

リクスウが一気に飲み干して放り投げた湯飲みは、チヨウエンの額でスコンと小気味良い音を立てた。

第十四章 紫髭開放 肆

(紫龍母様には毛ほども興味を持つとらんかったあの坊が、なんで拝紫教お抱えの道士とつるむんかと思つとつたが……。得心いつたわ)

(全ては紫髭の氾濫を鎮めるためってわけね)

レイザンからリクスウについて一通り話を聞き、胸中で響く樂葉の声にオウメイは内心頷いて返す。

そんな彼女の背後で、タイコウは止め処ない不安に脂汗を浮かべていた。

(リクスウ……教主様に無礼を働いていなければいいのだけど……)

オウメイを納得させ、タイコウを不安へと落とし込んだ当人レイザンは、話はこれまでとばかりに踵を返す。

「繰り返し念を押すが、町の者に不安が広がる事は避けたい。くれぐれも内密に願う。それでは、私はこれで失礼する」

「待つて下さい！ その一件、アタシもお連れ下さい！」

帰路へ踏み出そうとするレイザン。その背中に向けられたオウメイの言葉に、タイコウの額に浮かばせていた脂汗が驚きのあまりに吹き飛んだ。

「な……！」

何を言い出すのか。

そう問い質そうとするタイコウの口上は、下ろされる事のないオウメイの制止の手によって舌先から僅かに零れるのみに留まる。そして、そのまま口から出る事の無かった言葉の数々が胸のうちへと流れ戻っていく。

なぜオウメイがレイザンへの同行を願いだした？ いや、リクスウの身を案じるならばそれも良いが、ならば自分も共に行っても良いのではないか？ それが、なぜ未だに口を閉ざすように指示を送り続け、この場にタイコウはいないかのように振舞っている？ タイコウが話に加わるには役不足だと思われるのか？ ひよっとすると、オウメイはかざしている手の事を忘れてしまっているのか？

再びタイコウの口からそれらの疑問が飛び出すより早く、レイザンが僅かに振り返り口を開く。

「オウメイ、貴方が拝紫教の巫女であることはリクスウからも聞いている。私が貴方にこの話を拒んだ理由の一つもそこにある。或いは、こうして願い出てくるのではないかと」

レイザンは小さく溜息をついてそう話すと、改めてオウメイに向き直る。

「我々がこれから赴くのは巡礼地への拝礼とはわけが違う。魑魅魍魎の類を相手にする事になるやもしれぬ危険な話だ。リクスウに助力を願ったのは、腕に見込みがあると思っただが故のこと。貴方を連れて行くわけにはいかんだ」

発言の機先を取られ、再び口を噤むタイコウ。

再び胸中へと数々の思いが小波となつて返り、三度口元を目指す頃には複雑に絡み合った思いの塊となつて喉元で詰まり舌先に達する事は無かつた。

「……！」

何を言つべきか、何を言おうとしていたのか、困惑し青褪めるタイコウ。

そんな青年の様子を横目に見ていた老婆デンシユクが、おずおずとオウメイとレイザンの間に割つて入る。

「恐れながら申し上げます、レイザン道士様。確かにオウメイは道士様のおっしゃる通りに拝紫教の巫女。なれど、オウメイは件のホウ王様の御触れに心じて、リクスウ、タイコウと共に首都コウランへと参じようとする者にございます。オウメイの技量は道を同じくするリクスウ等に引けを取らぬもの。かく言つ我等一座も道中妖魔に襲われ死にかけたところを助けられております。オウメイの腕をお疑いになるのでしたら、レイザン道士様の道術をもって我等一座が生者か死人かをお改め下さいませ」

デンシユクの声は凜として老齡を感じさせず、うちに秘める気迫にタイコウは喉元に詰まらせた言葉の数々を唾と共に飲み込む。オウメイも些か驚いた風で目を丸くし、そのうちに住まう樂葉の気配は老婆の堂々とした口上に感嘆の声を上げる。

デンシユクを前にしたレイザンもまた、立て続けに並べられた言葉に返す手を打てずに「しかし……」と言つたきり断りの入れられ

ず

「如何にレイザン道士様と言えども、オウメイ同道の意思は変えられぬものと見ました。ならばいつそオウメイを教主メイケイ様にお引き合わせ下さってはいかがでしょうか？　メイケイ様に解きほぐされれば、或いはオウメイも諦めるやもしれませぬ。メイケイ様が同行をお許しになられるなら、このオウメイも巫女としてメイケイ様の御身の為に十分な働きをすることでしょう」

レイザンが何事か断りの言葉を発する間も無く、デンシユクが畳み掛ける。

返答に窮するレイザンを真つ直ぐに見据えるデンシユク。まるでレイザンの布に覆われた双眸が自身を見ているとした上で、見返しているように。

事実、レイザンは目には見えなくても長けた道士の力によって、デンシユクの気配を見ていたし、デンシユクが自分を真つ直ぐに見返している事は感じていた。その感じ様はデンシユクの眼光に潜む気を眼前に置いていている分、この場にいる誰よりもレイザンが勝っている事だろう。

「……よろしい。メイケイ様にお引き合わせするという事で、如何か？」

レイザンとデンシユクが睨み合う事数秒、負けを認めたレイザンは軽く息をつくとオウメイにそう声をかけた。

安堵の息をつくオウメイと、してやったりと笑みを浮かべるデンシユク。二人の後ろではタイコウが複雑な表情を浮かべている。

「ありがとうございます」

深々と頭を下げるオウメイに対し、レイザンはひらひらと手を振ってみせる。

「いや、私はメイケイ様へのお目通りを許しただけのこと。その先は貴方次第だ。さて、リクスウの事を伝えるだけのつもりが、些か長居が過ぎた。私は急ぎ戻るつもりゆえ、同行するなら急いで仕度をしてもらえるか、オウメイ」

「あ、大丈夫です。すぐに出られますから」

今度こそ背を向けて歩み出そうとするレイザンを追ってオウメイが走り出し、二、三步進んだところで彼女は慌てて振り返った。

「っと、タイ……タイシユン君。タイコウに、いつでも出られるように支度をしておいてって伝えておいてね」

そうオウメイが言付けたのはタイシユンならぬタイコウ。

「うえ？ あ、うん。はい」

タイコウは一瞬戸惑ったものの素直に返事を返し、オウメイは満腹に頷いて再びレイザンに付き従うべく振り返る。

そのオウメイを教主メイケイの元へ連れて行くレイザンなのだが……。

「あの……レイザンさん？」

急ぐはずの帰路で立ち止まったままのレイザンを不審に思い、オウメイが問いかける。

レイザンは何度が鼻をひくつかせると、不意にタイコウへと振り返った。

「少年……タイシユンだったかな？」

「あ、はい。なんでしょう……？」

タイコウの存在を全く気に留める素振りを見せなかったレイザン。タイコウはここにきて初めて彼に声をかけられてドギマギとしながら問い返し、ここまでタイコウの素性を隠していたオウメイは内心舌打ちする。

(タイコウってバレたのかしら?)

タイコウとオウメイがレイザンの反応を窺う中、当のレイザンはもう一度鼻をひくつかせてからタイコウを指差した。

「なにやら焦げ臭いのだが、大丈夫かね？」

訂正。レイザンはタイコウの目の前にあつた大鍋を指差した。

「へ？ あ！ うわあっ！」

慌てて休めていた手を働かせ大鍋の中身をかき混ぜる。

……ちよっと遅かったらしい。

「遅い！ レイザンはまだ帰らぬのですか！」

部屋に響いた女の甲高い声に、リクスウとチヨウエン達三狼士は揃って声のした方へと目を向けた。

部屋の入り口……リクスウの入ってきた場所とは別の、恐らくはアングンの社に通じるであろう出入り口に立つ女を見て、リクスウは訝しげな表情を浮かべる。

歳は四十ほどだろうが、厚く塗りたくった化粧のせいではつきりとは分からない。ただ、どんなに厚化粧をしても内面から出る性格は隠しきれるものでもないらしく、女からは冷酷ともとれる冷やかな雰囲気も漂っている。この場にタイコウがいれば、一目見て竦みあがっているかもしれないほどに。

(この女……もしや、こいつが?)

女の表情や雰囲気はさておき、リクスウは彼女の着ている服装で彼女の正体に検討をつけた。

拝紫教などの宗教事に疎いリクスウではあるが、女の着ている服が拝紫教関係者の着るものである事は知っている。それも、高位の者がなんらかの儀式を行う時などに身に付ける正装だ。

このリクスウの読みは当たっているらしく、チヨウエンを始めリハンとライシンも女に向かって慌しくも深々と礼をする。

「へ、へえ、メイケイ様。レイザンの旦那は町の外にいる旅芸人の一座の元に向かわれまして……」

「そんな事はわかっています！ 私はレイザンがその使いから帰っていないのかと申したのです！」

礼の姿勢をとったまま答えるチョウエンの白髪に向かって、頭ごなしに言い放つ女。チョウエンの話からすれば彼女が拝紫教の教主メイケイその人というわけなのだ……。

リクスウはメイケイとチョウエンのやりとりを見ながら、あからさまに苦い顔をした。

(これが教主様ってか?)

先代の教主が亡くなり、天啓を受けて新たな教主になったという徳の高い巫女様とは誰からの情報だったか。

リクスウが面識のある拝紫教の巫女はオウメイ一人であり、巫女と問われればオウメイのような年頃という印象が強かった。目の前にいる教主メイケイとオウメイでは歳の差は親子ほどもあるだろう。リクスウが感じた違和感はまずその年齢差にあった。

いや、年齢に関してはリクスウの認識不足でもあるのだが、それ以上に彼をげんなりとさせたのは、メイケイの気性。

気が強いというよりは短気。そして冷たい印象。今もチョウエンに当り散らしているメイケイを見ては、とても教主として崇められる人物とは思えない。ひよっとすると今の顔が素で、教徒の前では穏やかで慈悲に満ちた教主様の顔を作っているのかもしれないが、

そうだとするなら……。

(女つてのは怖えなあ……)

しみじみとそんな事を思うリクスウ。平謝りのチヨウエンを怒鳴りつけていたメイケイが、今存在に気が付いたかのようにリクスウへと冷たく鋭い視線を向ける。

「見ない顔ですわね。何かおっしゃりたいようですけど、私に何か御用かしら？」

「……いや、別に。なんでもねえよ」

気に入らない視線ではあるが、だからといって喧嘩を売る気にもなれず。リクスウはそつと視線をそらしながら返した。

そのリクスウの横顔。昔争った妖魔に受けた傷によって縫い止められたリクスウの右目を見たメイケイは、なるほどと納得顔で頷く。

「あなたがレイザンの言っていたリクスウですわね。確かに、腕はともかく礼儀はご存じないようですよ」

(この女……！)

さらりと毒を吐くメイケイにムツとして何か言い返してやろうとするリクスウ。だが、メイケイはそれよりも早くチヨウエン達へと話題をそらしていた。

「あなた達！ 出立の準備は済んだのですか？」

「へ、へえ、ぼちぼち……」

「出立は今夜ですよ！ 既に準備万端整えておくものでしょう！ さあ、今やりなさい！ 今すぐです！」

メイケイにぴしゃりと言い放たれ、中岸の三狼士は蜘蛛の子を散らすようにあたふたと走り回る。

そんな彼等の様子を他人事のように傍観していた……正しくはメイケイの横暴ぶりに呆れていたリクスウ。どちらにしても、メイケイがそれを見逃すはずもない。

「リクスウ、あなたもです！ 新参だからといって容赦は……いえ、新入りなら新入りらしく率先して雑務に碎身なさい！」

「お、おう……」

メイケイの剣幕に押し切られ、リクスウも三狼士の仲間へと加わる。

「おい、チヨウエン。あれ、ホントに教主様なのか？」

リクスウは木箱を抱えて走るチヨウエンに近寄りボソリと問う。
チヨウエンは苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。

「兄貴の言いたい事は、よくわかります。あれで外面はすごいぶる良いんでさあ。その慈悲深そうな顔に、教徒の者はすっかり騙されちまってる」

「俺達も初めて会った時はお優しい方だと思ったもんだが、本性を

見慣れちまった今となつちやあ……」

チヨウエンの囁く声の隣で、リハンがやれやれと首を振ってみせる。

「……怖い」

さらにリハンの隣に付いたライシンが、伏せ目がちに呟く。

「あなた達！ 何をこそこそと話し込んでいるの！ 話す暇があったら手を動かさない！ 急げと言っているのがわからないの！」

『へ、へい！』

背後から飛ぶメイケイの怒声に再び散開するリクスウと三狼士。

さながら夜逃げの準備のように、メイケイの指示によって次々と片付けられていく荷物。

「違う、リクスウ！ それはそちらの葛籠に入れなさい！」

リクスウは、本来の職務を終える前からタイコウ達の元に帰りたくなっていた。

オウメイがレイザンと共にアングンの市街地へ向かってからしばらく、夕食を終えたデンシユク一座はそれぞれにくつろいでいた。

その一座の幕舎の裏。簡素な炊事場で一人呑気に鍋を磨くタイコ

ウ。

タイコウが夕食にと作った大鍋一杯の料理。作り過ぎたのではないか？ 少し焦げたが大丈夫か？ といった青年の心配を他所に、一座の者には至極好評で大鍋が空になるにはさしたる時間はかからなかった。

「ふう、さすがにこれだけ大きいと洗い甲斐があるなあ」

大鍋から手を放し一息つくタイコウの声が、幾分明るいのは一座の満足げな顔あつての事だろう。

「おや、タイコウ。洗い物とは、すっかりウチの者が世話になっちまってるねえ」

一人大鍋と格闘するタイコウの様子を見てやってきた座長のデンシユクがそう言うと、タイコウは笑って返す。

「一座のみんなには明日からの公演に向けて鋭気を養ってもらいたいですから。お役に立てて僕も嬉しいです」

「だからって、あまり甘やかさないでくれよ。一座の者達が付け上がると後が大変だ」

タイコウの返答に苦笑いするデンシユク。

「それに、忙しいのはタイコウも一緒だろう？ オウメイが言っていた支度は済んだのかい？」

「え？ ああ、旅の支度ならこれを洗い終わらしますよ。旅支度

と言っても、元々いつでも出られるようにまとまっていますし」

笑顔はそのままに返すタイコウだったが、対するデンシユクからは笑みが消える。

「妙だね。なら、なんでオウメイはタイコウに支度しておくように言っただい？」

訝しげな顔をしたデンシユクの指摘をきっかけにタイコウの手が止まり、代わってタイコウの思考が急速に早められていく。

レイザンと対した時のオウメイの様子。終始タイコウがいないものとして進められた会話。去り際のオウメイの伝言。

いつでも出られるように支度をしておいて

伝言の際、オウメイは旅支度とは言っていない。代わりにいつでも出られるようにと言っている。オウメイの指示通りに支度をするとして、タイコウがする事といえば何か？

(しまった!)

タイコウは内心舌打ちしつつ立ち上がると、大鍋を放り投げて走り出した。

「え？　ちょ、ちょっと、タイコウ！　どうしたんだい！」

背後からデンシユクの驚き慌てる声や大鍋が落ちた派手な金属音がしているが、タイコウはかまわず走る。自身の察しの悪さを呪いながら。

タイコウはデンシユク一座の幕舎脇に設けられた小さな天幕へと飛び込んだ。

そこはタイコウ達のために用意された一座の天幕であり、それを証明するように天幕の中にはタイコウ達の荷物が置いてある。

タイコウは迷う事無く自分の持ち物である錫杖魯智を掴む。

炊事場から天幕まで、僅かな距離だが内心から湧き出した焦燥が手伝ったのか息が荒い。

タイコウは目を閉じて二度三度と深呼吸をすると、両手で掴んだ魯智に向かって念じた。

(オウメイ……！)

魯智の持つ力の一つ靈感の覚醒と五感の鋭敏化。それによる気配の感知。交易都市カリユウで行方知れずになった雪割りを探した時に使った手段だ。

オウメイはタイコウに魯智を使って自分を追跡するよう仕向けたのではないか？ そう思っ手にした魯智だったが……。

「まったく、急にどうしちまったんだい、タイコウ」

遅れて天幕にやってきたデンシユクがタイコウに尋ねる。

だが、タイコウはデンシユクの問いかけに対する答えるは無い。

タイコウは不意に目を見開くと、蒼白の顔で口元をわななかせ力無く膝を付いた。

「オウメイの気配が……無い……です……」

第十四章 紫髭開放 肆（後書き）

～次回予告、タイコウ語り～

忽然と消えたオウメイの気配。

僕はリクスウを頼るべくメイケイ教主率いる紫髭解放の一団を指します。

そして、リクスウ達は紫髭解放のため、アンガンの沿岸にある洞窟へと向かっていました。

僕、リクスウ、メイケイ教主、レイザン道士、三狼士、そしてオウメイ。

全ては奇岩の洞窟へと結ばれていくのです。

龍神の巫女は闇に消え、隻眼道士は街の外。

錫杖片手に向かった先は、鬼岩が大口開く中。

紫髭にはびこる悪鬼成敗！

次回『第十五章 鬼岩結界』に乞うご期待。

第十五章 鬼岩結界 壱

拝紫教アンガンの宮の裏手に置かれた三台の馬車。その荷台に最後の積荷を乗せ終えたリクスウは溜息をついた。

「やれやれ。全く、まーったく、人使いの荒い教主様だよなあ」

リクスウと中岸の三狼士ことチョウエン、ライシン、リハンは、教主メイケイに仕える拝紫教の者達と共に延々と馬車へと荷物を運ばされていたのである。宮の一室に軟禁されて退屈していたとはいえ、登場と同時にあれやこれやと指示を飛ばすメイケイにリクスウは閉口していた。愚痴の一つも言いたくなる。

そんな彼のぼやきに、共に荷を積んでいた中岸三狼士の末弟リハンは頷く。

「初めてあの教主様の本性を見た時や、シン兄なんぞ半泣きになってたツスからねえ」

そんなリハンの言葉にリクスウは苦笑いを浮かべた。

シン兄ことライシンは三狼士の次兄。リクスウよりも背が高く筋肉質、無口な仏頂面と、外見こそ強面なのだが、実際に話してみればその性格は温厚。むしろ、タイコウに通じる気弱さをリクスウに感じさせ、そんな性格でよく長兄であるチョウエンやリハんと三狼士にくくられたものだと思うほど。

そんなライシンは義兄チョウエン共々、拝紫教教主メイケイの御小言の真つ最中。流石に慣れてきたのか泣きこそしていないが、耳

障りな金切り声を上げる教主を前にして肅々としている。

「見てりゃ見てるほど、ホントに徳の高い御仁とは思えなくなっ
くんなあ」

いつ終わるとも知れないメイケイの説教を遠巻きに眺めつつリク
スウが呟き、それに同意するようにリハンが腕組みしてしみじみと
頷いた。

「まったくで。まあ、あの御大の手綱を捌けるのはレイザンの旦那
ぐらいなもんで……」

「やれやれ、我が主は随分な言われようだな」

リクスウとリハンは突如背後から洩れ出た声に飛び上がって驚き、
二人して振り返る。

その声と全く感じさせない気配の主レイザンは、驚く二人を前に
して困ったように眉根を寄せていた。

積荷を乗せた馬車の周囲には、リクスウ達以外にも十人あまりの
拝紫教の教徒達がいる。そんな中で教主を悪いように言われては、
教主の守り手であるレイザンとしてはたまらないのだろう。

「だ、旦那！ いるなら一言言ってくださいや」

「驚かせた事は謝ろう。だが、今のような話は控えてもらいたいも
のだな」

抗議するリハンに切り返して抗議するレイザン。リクスウはその

傍らで苦い顔で帰還した道士を見た。

(やっぱ微塵も気配を感じさせねえ……)

レイザンの気配を捉えられないのは己の未熟さゆえなのか。或いは、自分より気を読むに長けたオウメイならばレイザンの気配を掴めるのか。

そんな思いがふとリクスウの脳裏をよぎり、それを自身で否定する。

レイザンの気配の無さは異常だ。おそらくはオウメイでも捉える事はできない類の代物。そう思えてならない。

(妖魔だって気配の一つも見せるってのに……)

相変わらず掴み所の無いレイザンの存在にリクスウが齒噛みし、当のレイザンはリクスウの視線を気にした様子も無く主であるメイケイの元へと歩み出した。

「メイケイ様、いかがなさいましたか？」

レイザンの声に、メイケイは険しい顔をそのままに視線を三狼士からレイザンへと視線を移す。

「大した事ではありません。この者達の不手際を少し諫めたです」

(あれで少しか？)

内心思いこそすれ、リクスウの口からそれが出る事は無かった。

これで余計な事を言えば次に矢面に立つ羽目になるのは間違いない。

メイケイに目の敵にされるのは誰しもが勘弁というところだろう。いつ終わるとも知れないメイケイの有り難い説法からレイザン登場でようやく解放されたチヨウエンとライシンも、メイケイの後ろで目立たないように深い溜息をついていた。

「で、有り難くも教主様直々の指揮の元、何やら色々荷物運ばされたわけだが……。よもや夜逃げつてわけでもねえんだろ、レイザン？」

冗談めかした問いにメイケイが何か言いたそうにリクスウを見たが、それより早くレイザンがリクスウに振り返つて頷いて見せた。

「無論だ。これより先こそが貴公等の本領を發揮する場となる」

静かに、だが確かに宣言したレイザン。

その言葉が放つ戦いの臭いを嗅ぎ付けたリクスウと三狼士達が目の色を変える。鋭く、冷たく、視線そのものが敵を断つ刃であるかのような刃の眼光。

そして、変貌は彼等を見ていたメイケイもまた同様だった。感情の一切を消したような彼女の顔は、穏やかなようで憂いているようでもある。言うなれば見た者の心象を移す水鏡のような無限の表情を秘めた面。

リクスウや三狼士、レイザン。そして、メイケイの雰囲気の変化に他の教徒達も何かしら感じ取つたらしく、皆揃つてメイケイの元へと急ぎ足で集まっていくな。

メイケイは周囲の者達によって張り詰められていく空気の中を一陣の風の如くふらりと歩み、教徒達の前で立ち止まる。

「我が同胞よ。今宵我々は長らくアンガンを、ひいては紫髭流域を苦しめてきた諸悪の根源を断ちます」

人が入れ替わったのではないかと思うほどの落ち着き払ったメイケイの言葉に、リクスウは驚き息を呑む。

「紫髭の水面が朝日に煌くか、はたまた曇り澱むか……全ては私達の働き一つ」

リクスウと三狼士を除けばこの場にいるのは拝紫教の熱心な信者であり、彼等にとっては教主メイケイの演説は心を振るわせるに足りることだろう。

「ですが、私は信じています。紫龍様の導きと貴方達の雄志により我等が勝利すると」

メイケイが周囲を見回し諭すように話しかけると、教徒達は競うように跪いて教主に頭を垂れた。

レイザンはメイケイの脇に進み出ると、信者達の様が見えているかのようにそれを見回して満足げに頷く。

「さあ、参ろう。我々の手で平穩を掴むのだ」

澄んだ夜の空気に一際響いたレイザンの声。教徒達は黙礼をもちてこれに応え、各々馬車へと乗り込んだ。

時は僅かに遡る。

夜空に浮かぶ月が煌く星々を道標に天の頂へと昇ろうとする中、
オウメイはレイザンに付いてアンガンの町を歩いていった。

アンガンの町並みは、繁華街を中心として昼間とは少し違った賑
わいを見せている。

（こんな時やなかったら、ウチもあっちへ顔を出したいところなん
やけど……）

オウメイの内心に響く樂葉の意識は、飯店で陽気に笑いながら酒
を酌み交わす酔っ払い達へと向いていた。

（こんな時じゃなかったら、夜中にアンガンの外門は開けてもらえ
なかったでしょうよ）

オウメイは樂葉の呟きに答えながら先を行くレイザンの後を追う。

交易都市アンガンは古来より流通の要であり、町を形作る外壁を
越えて繁栄していった。その発展はホウ大国建国によって訪れた平
穩によってさらに加速し、今では町を守るはずの外壁が壁の内外の
交通の利便性を損ないもしている。

だが、この町を治める者達の口から壁を崩すという案が出た事は
一度も無い。それは戦乱の世ともなれば必須となる防壁だと心得て
いる為であり、ホウ大国が収めるより以前には軍事拠点として幾度

と無くアンガンが襲われた歴史がある事も要因である。

そして、外壁に設けられた門は、かつての戦乱に怯えるように毎夜閉ざされ、次の朝が来るまで開かない。アンガンに関わる有力者の口添えでもあれば、話は別だが……。

（開かへん門を開けさせるうちゅうんやから、流石は母様んトコの使い走りやねえ）

（メイケイ様の護衛を仰せつかっている人を使い走りとか言わないの）

オウメイが樂葉との対話に意識を取られているうちにも、レイザンは道を先へと進んでいる。オウメイは自分の遅れに気付くと、慌ててレイザンを追いかけた。

生まれた家柄もあって万物の気を読むことが日常的な事だったオウメイにとっては、気配の読めないレイザンに付いて歩くのは手を焼く話だ。

常にレイザンを視界に収めておけばいい。普通の者にはそれが普通な事なのだろうが、なまじ無意識に気配を探る習慣が身に付いてしまっているオウメイにとっては疲れる事。樂葉の横槍という要素も加わって、尚更骨が折れる。周囲の者より背が高く、その装束が特徴的なレイザンが相手でなければ、すでに見失っているかもしれない。

「レイザンさん、メイケイ様やリクスウはどこに？」

「貴方もここアンガンの拝紫教の宮は存じているだろう？ その

紫龍様の御社の奥に社務所がある。メイケイ様とそれに仕える者達は皆そちらにいるのだ。無論、リクスウもそこだな」

早足で追いついてきたオウメイの問いにレイザンが答える。彼の答えに、オウメイの内では樂葉がやれやれと安堵の息をつく。

（あのお宮さんなら昼にも行ったし道順はわかるわ。ほんなら、もしレイザンを見失ってもリクスウントコには行けるわけやね）

（樂葉、宮の門も閉められてるわよ……）

（レイザンから目え離しなや、オウメイ）

だったら、いちいち声をかけてレイザン追跡の邪魔をしないで欲しいものだ。樂葉の言葉に今度はオウメイが溜息をついた。

樂葉の樂觀視ではないが、道順さえわかれば目的地さえわかればレイザンが次に進む道も予測しやすい。何より、繁華街を抜けてしまえば出入りの止められたアンガンの街中は人通りが極端に減り、レイザンを見失う機会も格段に減る。

夜の街中に行くオウメイは道中でレイザンを見失う事も無く、やがて彼と共に拝紫教アンガンの宮へと辿り着いた。

案の定オウメイの指摘通り宮の門は閉ざされていたものの、レイザンが門の番をしている宮司の一人に何事か話しかけると容易に門は開かれる。

（はあ、昼間とはまた随分と雰囲気が変わるもんやねえ）

オウメイは樂葉の声に頷いた。

門が閉ざされて参拝者のいない夜の境内。斜めに射す月光が社を照らし、遮る者のいない境内に大きな影を作り出している。人氣は無いが、昼間訪れた参拝者の意識の残り香のような氣配がオウメイの感覚を刺激する。氣配の無いレイザンを追っていた今のオウメイには尚更色濃く感じられた。

いや、視線を巡らせたオウメイが紫龍の社脇にいる人の氣配を捉える。

「あれは……？」

社の影になつてはつきりとした姿が見えない。

オウメイが目凝らし影の姿を確かめようとしているうちに、影もオウメイとレイザンの存在に氣付いたらしく門に向かって歩き出した。

「これは、探す手間が省けましたな」

オウメイの隣にいたレイザンがぼそりと言う。

そうしているうちにも少しずつ近付いてくる影の者。社の影から月明かりの中へと踏み入った姿にオウメイは息を呑んだ。

レイザンが探す手間が省けたと言った相手。それはリクスウではなく、目前の者を指して言った言葉だ。

その者が誰だったかと思ひ出すよりも早く、目にした者の姿がオ

ウメイに答えを導き出させていた。

「レイザン、やっと戻りましたか」

そう言つて隣のレイザンを出迎えた女性。彼女の装束は拝紫教の高位の者がなんらかの儀式を行う際に身に付ける正装であり、その装飾や衣に記された文様は高位の者達が着る装束の中でも唯一無二のもの。拝紫教最高位である教主のものだ。

そして、それに思い至つた瞬間、オウメイと樂葉は揃つて彼女の気配からもう一つの答えを導き出していた。

（オウメイ、こいつ！）

「この人……！」

オウメイの口から何事か出ようとした途端に、レイザンが動いた。

目の前の女性に意識が向いていたオウメイは、いや、そうでなかったとしても彼女の視界から外れていたレイザンの行動に、オウメイが反応する暇は無かった。

レイザンの外套の下から伸ばした片腕からいくつもの鎖がざらりと飛び出し、蛇のようにオウメイに絡みつく。

突然の事に動揺したオウメイの意識が抵抗へと変わるより早く、レイザンは片手で印を組んだ。

「禁」

「きゃっ！」

短くも力持つレイザンの一声で、鎖がオウメイを締め上げる。

（オウメイ、何をやられとんねん！ 樂葉布や！）

樂葉の叱咤に、彼女との盟友の証である龍の衣を紡ぎ出そうとするオウメイ。

だが、オウメイはすぐさま愕然とした表情を浮かべ、体中を締め上げる鎖の痛みで倒れ伏した。

（ちよっ、オウメイ！ ウチの話を聞いとんのか！）

（……出てこないのよ）

オウメイは、意識下で尚も激を飛ばす樂葉に悔しげにそう言い返す。

「ふむ。あの座長殿に押し切られた時点で覚悟はしていたが……。メイケイ様の本性に気付いた上に、どうやら何かしらの力も隠し持っていたようだ。流石は、あのリクスウと共に旅をする拝紫教の巫女といったところか……」

オウメイの言葉の真意を問いたださそうとした樂葉だったが、地に伏した彼女を見下ろすレイザンの言葉に全てを悟る。

（こいつ……。ウチの力を封じてくるとは、なかなかやってくれないか）

憎々しげに呟く樂葉。もちろん、オウメイの中でのみ響くその声
がレイザンに届くはずも無い。

樂葉のそんな気持ちを代弁するように、オウメイはレイザンを睨
みつけるべく顔を上げる。

オウメイの見上げた視線の先、手にした鎌を振り上げたレイザン
が満足そうに頷いた。

「これはなかなか力良い気迫。ここで絶つには惜しい程だ」

その言葉が本心なのかどうかは定かでは無い。例え本当に惜しん
でいるとしても、レイザンは手にした鎌を振り下ろす事は止めない
だろう。

緩む事の無い鎖に締め上げられながら、オウメイは現状を打破す
べく考えを巡らせる。

タイコウに後を追ってくるように言い含めたつもりだったが、外
門で止められてしまったのだろうか。レイザンの名を出せば或いは
門も通れるかもしれないが、そこまで機転が利かないかもしれない。

リクスウは確かに宮の奥にその気配があつたように思えたが、今
となつては全く感じ取る事ができない。リクスウだけではない。レ
イザンは元より、眼前の女性からも気配を感じ取れなくなつてしま
っている。

(ああ、なるほど……)

オウメイは僅かに身をよじり、レイザンから自身にまわり付く

鎖へ視線をそらした。

どうやらレイザンから全く気配が読み取れなかったのは彼自身の問題ではなく、彼が身に付け、オウメイが絡め捕られた鎖に呪がかけられている為らしい。その呪の影響で周囲との気の循環を遮断されて気配が読めず、オウメイの樂葉布も紡ぎ出せなくなっているのだ。

(もつとも、今更気が付いても遅いで、それ……)

樂葉に言われてもう一度レイザンへ視線を戻すオウメイ。

レイザンの振り上げた鎌の刃が月光を受けて三日月のように煌いている。

オウメイはしたくもない死の覚悟を強制され、その事実を拒むように硬く目を閉じる。

「確かに、その娘は殺すには惜しいですわね。それに、ここで流血沙汰を起こしては色々と面倒も増えますわよ」

「御意」

閉ざした両目とは違い、閉ざす事を許されないオウメイの耳がレイザンと女性のやり取りを聞き取る。

女がオウメイの何を惜しんだのかに疑問を持つ間も無く。殺されずに済むと安堵する間も無く。オウメイの意識はレイザンの振り下ろした鎌によって刈り取られた。

第十五章 鬼岩結界 貳

「で・す・か・ら！ 少し前に入ったはずなんですよ！ 僕は彼女の仲間なんです！」

珍しい事に、タイコウが周囲の木々を振るわせんばかりに声を張り上げている。

そんなタイコウの剣幕に、彼を目の前にした門番の警備兵二人は困ったように顔を見合わせた。

「だからと言って、この門を開けるわけにはいかんだ。中に入ったというのなら、明日の開門時間まで待ちなさい。それからその娘を探せば良いだろう？」

「そんな悠長な事を言っている場合じゃないんです！ 一刻を争う事態なんですよ！」

宥め諭すように語りかける警備兵達に、尚も食ってかかるタイコウ。一向に折れる様子を見せない青年に些か機嫌を悪くしたのか、警備兵の一人がタイコウを睨みつける。

「いいかげんにしろ！ キミがなんと言おうと、この門は明朝まで開く事は無いんだ！」

「でも！ レイザン道士とオウメイが先程門をくぐるのを見たと言っ人もいます！」

声を荒げる警備兵に一瞬ひるみかけたタイコウだが、すぐに持ち

直して尚も吠えて返す。その声にか、或いはその声が上げた事実にか、タイコウと正面立って怒鳴りあっていた警備兵の背後で、相棒の警備兵がビクリと身をすくませた。

そんな警備兵の姿を視界の隅に捉え、タイコウは確信する。

(やっぱり、オウメイ達は市街地に入ったんだ。なんとか見つけないと……)

タイコウと向かい合っていた警備兵も、背後に起きた相棒の雰囲気の変化を感じて全てを悟ったらしく、痛いところを突かれたとばかりに溜息をついた。

「なるほどな……確かにキミの仲間とやらは街の中へ入ったかもしれないようだ」

「だったら僕も」

「だが、もしそうだとすれば、それはこの街の上役から話が回ったからこそ、やむなく開門したに過ぎん。それとキミが門を入っているかどうかは別の話だ。或いは、キミは町に害を成そうとしているかもしれない。たまたまレイザン道士と同行の娘が門をくぐった事を知って、これ幸いとばかりに口実に使っただけかもしれない」

残念ながら警備兵のこの言葉は真実であり、事実狂言を用いて町に入り盗みを働く者はいらる。そういった被害は古今東西各地の町で発生しており、警戒厳重と言われるここアンガンでさえ過去に被害歴がある。そして、仲間が先に入ってしまったからという口実で街中に入るうとする手口は、むしろ盗賊達が使ひ古し過ぎて使わなくなつた程に定番なのである。

盗賊被害の経歴からして、タイコウの説得だけで警備兵を懐柔する事は不可能と行っていいだろう。

そのタイコウでも、その気になれば門を通れるかもしれない手段というものが全く無いわけではない。

手段その一。一番手っ取り早く、各地で最も多用されており、盗賊被害が無くならない原因とされているもので、言ってみれば袖の下をチラつかせるというものなのだが……。

「僕はそんな事はしません！」

声高に叫ぶタイコウは、そこまで悪知恵が回る男ではない。

ちなみに、前述の手段は相手をアンガンの警備兵に限定すると確実に捕縛される。これはアンガンの警備兵が誠実な者が多い事とは別に、盗賊を通した事が発覚した際の罰則が他の町より厳しいという事も理由だろう。

「キミはそれをどうやって証明するつもりなんだ？ 出来ないのなら、大人しく明日まで待つことだな」

(わからず屋だなあ……)

冷たく言い捨てる警備兵を前にタイコウは俯いて歯軋りする。

手段その二。病人、怪我人を装う事で傍目から見ても緊急事態だと思わせるといふものだが、生憎と今までの問答で自分の健在ぶりを発揮しているタイコウには難題である。ましてや、旅芸人デンシ

ユク一座のような演技力を持たないタイコウには敷居が高い手段。しかも、アンガンは外門が閉められている時の事も考慮して、門外で開業している医者はいる。もし兵士達が仮病を信じてくれたとしても、そちらへ運ばれるのが関の山だ。

(どうやって入れば……)

未だ捉えることの出来ないオウメイの気配と、外門で足止めされている事への焦燥でタイコウの手に力が入り、錫杖魯智の金輪が細かく音を立てる。

手段その三。強行突破。

「さあ、我々も忙しいんだ。もう諦めて帰ってくれ」

もう言い合いは勘弁してくれと言いたげな警備兵の言葉を前に、タイコウは魯智を握り締めたまま目を見開いた。

(この気配……！)

魯智が感知した覚えのある気配に、タイコウは弾かれたように走り出す。

タイコウの突然の行動に警備兵達は驚きこそしたが、不審がって呼び止めるような真似はせず、ただただ走り去るタイコウの後姿を見送った。

タイコウのただならぬ雰囲気に今更ながら気圧されたのか、はたまた粘るタイコウがようやく諦めたと安堵したのか。新たな望みにかけて外壁に沿って走るタイコウに、その真意を知る由も無い。

タイコウが魯智から読み取った気配は、悪鬼の類が持つ虎霊トウコウの紅蓮の気と破邪の力持つオウシユウの雪割りの蒼白の気。それらを併せ持つもう一人の仲間リクスウの気配は、市街地を出て西に向かっていた。レイザンに呼ばれて拝紫教の宮へ出向いていたはずのリクスウが何故外壁の外にいるのかは知れないが、彼に会えば消えたオウメイの手がかりが掴めるかもしれない。

そのリクスウの気配は、魯智で探った限り思いのほか速く動いている。

（走ってる……違う。馬……かな？）

肯。

息を切らせて走り続けるタイコウの考えに魯智が同意する。

そして、同様にオウメイの無事を尋ねたタイコウへの魯智の答えは、沈黙。否定も肯定も無い。

（今はリクスウの所に行ってみるしかない……か。リクスウ、間に合って！）

リクスウに追いつけるか、魯智に問う間も惜しむようにタイコウはもう一度両足に力を込めて走り出した。

「エックシッ！」

タイコウの走る遙か先、アンガン外壁の町並みを抜けた街道を走る馬車の中でリクスウは盛大なクシャミを飛ばす。景気付けに彼と共に杯を傾けていた中岸三狼士の面々は、揃って嫌そうな顔をリクスウに向けた。

「汚えなあ、兄貴」

「うえ、唾こつち飛んできたツスよ」

「うるせえよ。出ちまったもんはしょうがないだろう」

チヨウエンとリハンに言い返しながら、リクスウは物言いたげにしているライシンへと視線を向けた。

「引き始めが怖いんすよ。暖かくして安静に……」

「風邪じゃねえって、誰かが俺の噂でもしたんだろうよ。ああ、たぶんリホウちゃんあたりが……」

リクスウの口から零れ出た名に、三狼士が酒の肴とばかりに食いつく。

「ほっほう！ 兄貴も隅に置けねえ。リホウってのは、どんな女ですかい？」

「リハン、リホウちゃんを呼び捨てにすんな。行商人の娘なんだが、これが器量良しで可愛くてな。ホウ大国広しと言えども、あんな子はそうそつお目にかかれないうな」

「アイヤー。兄貴の方が惚れこんじまってるとは、そりゃあ大した

美人さんでしようなあ」

「その子を心配させないためにも、暖かくして安静に……」

「だから、風邪じゃねえっての」

「兄貴もそんな良い子を置いてきたんじゃあ心配でしょう。どごぞの悪い虫でも付きやしねえかって」

「まあなあ。だからって、一緒にいればいたで心配だけでもよ」

「そりゃあ、商売柄、時には危ない橋も平気な顔して渡んなきゃならせんしね」

納得顔で何度も頷くチヨウエンに、リクスウはそうではないと首を振ってみせる。

「いや、それはそれで心配なんだが。俺の仲間のタイコウが……」

「まさか、リホウって子を横取りするつもりってんですかい？」

「なんとまあ。そのタイコウってのは、いくら兄貴の仲間つっても酷え奴だ」

曲解甚だしいのだが、悲しいかな。この場にタイコウを弁護できる者がいない。

「兄貴、俺達は断然兄貴を応援しやすぜ。そんな恋泥棒に兄貴が負けるわけねえや」

「その恋泥棒のためにも、暖かくして安静に……」

「だから、風邪じゃねえっての。ライシン、もう酔ってんのか？」

「おい、ハンよお。シンに飲ませすぎたんじゃねえか？ こいつが仕事前に使い物にならなくなったらどうすんでえ」

「待つてくさいや、エン兄。俺はまだシン兄には注いでなかったんすよ」

兄貴分のチヨウエンの説教に言いがかりだと抗議するリハン。その脇でリクスウは手元で空になっている酒瓶を見て一人頷いた。

「ああ、俺か」

「ちょ、兄貴い。シン兄は酒強くないんすから……」

「強い弱いは抜きにして、これからが本番なのだ。いくらなんでも酔って騒ぐのは少々控えてもらえるかね」

やいのやいのと騒ぐリクスウと三狼士に水を差したのはレイザンの声。教主メイケイの乗る馬車の護衛をしていたレイザンは、自身の乗る馬をリクスウ達の馬車の横へ着ける。

「ああ、悪い。ちょいと喧しかったか？ しかし、いつ戦いが始まるかと緊張しっぱなしじゃあ気が参っちゃうからなあ」

「リクスウの言い分もわからぬではないが、些か度が過ぎたな。それに、そろそろ気を張ってもらっていても良い頃合だ」

そうレイザンが言うと、それまでほろ酔い気分だった男達の表情が一変する。その変化は表情だけではない。リクスウ達から肌を刺すような殺気を感じたレイザンは、満足げに頷いた。

「失礼、度が過ぎていたわけではなかったのだな」

「いんや、放っておいたら過ぎてただろうさ」

そう軽口を返しながらリクスウが勝気な笑みを浮かべる。

「今の話じゃ大分近いみたいだが、あとどれくらいなんだ？」

「半刻もかかるまい。先遣として現場に向かうつもりなのだが、リクスウは馬に乗れるか？」

レイザンの問いはリクスウの乗馬経験の有無と合わせて、先遣隊に同行するかも聞いてきている。リクスウはそのどちらにも同意して頷いた。

「馬上で逆立ちするぐらいならできるぞ。さすがに、古の名将ホウセン相手に早駆け勝負しろとか言われたら敵わねえかもしれねえが……」

ホウ国建国の立役者軍師コウタツも認める猛将として知れるホウセン將軍は馬術でも特化しており、駄馬も名馬の如く操ってみせたと言われている。同時に、彼との早駆け勝負を技量の例えに上げる者は、その勝敗を問わず乗馬に自信有りとは自負している表れである。

「よろしい。それで十分だ」

リクスウの答えにレイザンは従えていた教徒を手招きし、空いている馬を連れてこさせた。

「レイザンの旦那。僕等も行きますかい？」

チヨウエンの問いかけにはレイザンは軽く首を振って返す。

「貴公等までこちらを離れては守りが手薄になろう。私達が不在の間、メイケイ様や教徒達のことを頼む」

「心配しなくてもきつちり露払いしてきてやるよ。おまえらは精々酔い潰れてろ」

返答するレイザンに続けてリクスウが言い加え、リクスウは馬車から用意された馬へと飛び乗る。荒々しい動きに乗り移られた馬が驚いて嘶き暴れたが、リクスウは容易く捌き抑え込んだ。

「おし。行こうぜ、レイザン」

リクスウの合図にレイザンは頷き、二騎は馬車に先立って走り出す。二頭の馬は風を切って夜道を駆け抜け、すぐに背後の馬車は見えなくなった。

夜と呼ぶには星も月も無い漆黒の空。いや、今見上げているのが空かどうかもわからない。オウメイがその視線の先を空、もしくは天上と解釈したのは、その対称となる大地を思わせるものが眼下に存在するからだ。

オウメイは見上げていた顔を戻すと、周囲一面に広がる桃花を見渡した。

見渡す限り桃花が咲き乱れる桃園。この風景が故郷ワンシユウのものであることは、オウメイにはすぐにわかった。今自分が座り込んでいる甲壁と呼ばれる岩山が何よりの証。オウメイが幼い頃からお気に入り場所であり、盟友となった樂葉に見せてあげたいという場所。

そう、今オウメイがいるのは樂葉と初めて対面した場所だった。

「お目覚めのようやね、オウメイ」

桃園を懐かしむように見渡すオウメイの隣で樂葉の声がした。

「え？ あ、樂葉」

「あ、樂葉。やあらへんで……」

オウメイの隣で呆れて溜息をつく樂葉の姿は、初めて出会った時と同様の薄緑の髪をした女性の姿。

「この光景って、ひょっとしてアタシまた死んじゃったの？」

オウメイは記憶を辿りながら龍の麗人に問いかける。

確か、前に樂葉とここで出会った時は、妖魔の術で腹を打ちぬかれて龍神の池に落ちた時だ。

だが、オウメイの問いに樂葉はもう一度溜息をついて返した。

「またも何も、前の時も死にかけたところを助けたんやから、厳密にはいつぺんも死んでへんわ」

「じゃあ、今のアタシは死にかけていたってこと？」

「それも違うなあ」

そう言いながら三度溜息をつく樂葉。ただ、今回のそれはオウメイに向けたものではない。むしろ、自分の失態を嘆くものだった。

「心配せんでも、アンタは氣い失っただけや。あのわけのわからん鎖の力で、ウチの力が封じられてしもた。ここに辿り着いたのはその余波みたいなもんやろな」

彼女の言葉にオウメイもこれまでの経緯を思い出す。

レイザンに拝紫教の宮へと連れられたオウメイは教主メイケイの正体に気付き、それゆえにレイザンの手によって樂葉の力を封じられた上に氣絶させられたのだ。

「そうか、樂葉布も使えなくされちゃったんだっ たね」

「堪忍な、オウメイ。紫龍母様の縁者やと思つてウチも油断しotta」

面目無いと頭を下げる樂葉。その神妙な顔に、オウメイは堪らず不意に吹き出した。

「な！ 笑うところ違うやろ、オウメイ！ ここは慰めるとか、励

ますとかしてくれるところやん！」

「え？ あ、ごめんなさい。樂葉でもそんな顔するんだって思ったら、なんだか可笑しくって……」

笑いを堪えようと口元を抑えるオウメイを見て、樂葉の頬がぷつくりと膨れる。

「アンタなあ、ウチをなんやと思てんの。傷付くでホンマ」

「ごめんごめん。でも、そうやって怒っていても元気な顔の方が樂葉らしくていいね」

「……オウメイ、アンタはウチをわざとからかったんか？」

「さあて、どうでしょ」

小首を傾げて尋ねる樂葉をはぐらかしてオウメイは桃園へ視線を向ける。

「樂葉の力を封じるなんて、あのレイザンって人凄いんだね」

「あの道士がすごいんじゃない。あの鎖が奇妙なだけや」

「そうなの？」

「そつや」

問い返すオウメイにはつきりと言って返す樂葉。その言葉が負け惜しみなのか真実なのかは定かでは無いが、彼女の言葉にオウメイ

は安堵するように息をついた。

「じゃあ、あの二人ならなんとかなるかも」

「二人で、あの坊二人かいな？」

「タイコウとリクスウを坊と叫ばないの」

樂葉の呼び方を訂正するものの、オウメイは二人の事だと肯定してみせる。

「オウメイ、随分とあの二人を買ってるんやね」

「そりゃあ、仲間ですもの。アタシが信じなきゃ誰が信じるつてのよ」

あっさりと言うオウメイに、樂葉は呆れを通り越して吹き出す。

「ホホホ。さつきウチを茶化したモンが言う言葉とは思えんわ」

笑いながら樂葉は、袖を伸ばしオウメイの頭をそつと撫でた。

「ほな、手詰まりのウチ等は助けが来るまで、ちよつとの間休ませてもらおか」

優しく撫でる樂葉の袖が仄かな光を放ち、オウメイの心が和らいでいく。樂葉に成すがままにされていたオウメイは、心の落ち着きと共にゆっくりと眠りに落ちていった。

「ホンマ、気丈な巫女さんやで、オウメイ」

ことりと糸が切れた人形のように樂葉に頭をもたれて眠るオウメイの寝顔に、樂葉は柔らかく微笑んだ。

「アンタとウチは意識が繋がつとるて言つたやないか……それ以前に、手え震えてるん見逃すほど目え悪うないつちゆうねん」

故に見えていた。樂葉をからかう彼女の心中も。

返事をする事も無く穏やかに眠るオウメイの前髪をさらりと撫で、樂葉は彼女を守るように抱きかかえる。

そして、樂葉はオウメイがそうしていたように、漆黒の闇を見上げた。

「タイコウ、リクスウ、この子を助けんかったら、承知せえへんで……」

その闇を二人が切り開く事を願いながら。

風に流れる雲が煌々と夜空に浮かぶ月に照らされ、地上に影を作っている。その中を一陣の風となって走るリクスウとレイザンの馬二頭。

リクスウは吹き付ける風に一気に酔いが冷めていくように感じながら、隣を走るレイザンの様に口笛を吹く。

「大した手綱捌きだ。道士様は多芸だな」

「以心伝心は道士の心得の一つなのでな。褒めるならこの馬の脚を褒めてやってくれ」

褒め言葉をサラリといなすレイザンに、リクスウは内心舌打ちする。

(気配の一つも見せない男が以心伝心とは、よく言う……)

そんなやりとりさえもその場に置いていくように速度を上げる二騎。元より目的地に近付きつつあった馬車から矢のように駆け出した二人の馬が、そこに辿り着くには大した時間は必要としなかった。

街道を外れて紫髭の沿岸を走る中、レイザンが目的地を指し示す。

「リクスウ。岩が立ち並ぶ一帯、洞窟が見えるか？」

そちらこそ、どうして見えもしない洞窟が指差せるなどとは聞かない。リクスウはレイザンに促されるままに視線を延ばし、レイザンの言う奇岩の密集する中から洞窟らしき穴を見つける。

「全く、まーったく、妖魔の一体も出てくるかと思っていたが、随分とあつけない御到着じゃねえか」

「それはせめて件の洞窟に入ってから言ってもらいたいな。油断は禁物だぞ」

「わかってるって」

目前に迫る洞窟に向け、リクスウは勝気な笑みを浮かべて馬の脚

を速めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4819i/>

宝剣道中

2012年1月1日00時55分発行